宮本武蔵（二）

吉川英治文庫

タケゾウから武蔵へ――。沢庵のあたたかい計らいで、武蔵は剣の修行に専念することを得た。可憐なお通を突き放してまで彼が求めた剣の道とは……。だが、京畿に剣名高い吉岡一門の腐敗ぶり。大和の宝蔵院で味わった敗北感、剣の王城・柳生の庄で身に沁みた挫折感。武蔵の行く手は厳しい。一方、竹馬の友・又八は堕ちるところまで堕ちた感じで、友・又に入れた印可目録から佐々木小次郎を友・又、一流の武芸者になった良い気分……。

定価480円

SBN4-06-142049-6 C0193 ¥480E (1)

昭和50年6月1日　第1刷発行
昭和59年1月20日　第23刷発行

吉川英治文庫49
宮本武蔵(二)
定価480円

著　者　吉　川　英　治
編　集　株式会社 六興出版内
　　　　吉川英治文庫刊行会
発行者　加　藤　勝　久
発行所　株式会社 講 談 社
東京都文京区音羽2—12—21
振替東京8—3930
電話東京03(945)1111(大代表)
印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

Printed in Japan

(文2)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-142049-6(1)

吉川英治文庫

49

宮本武蔵（二）

講談社

目次

さしえ　矢野橋村

宮本武蔵
(二)

水の巻（つづき）

奈良の宿

一

「敗けた。おれは敗れた」
暗い杉林の中の小道を、武蔵はこう独り呟きながら帰って行く。
時折、杉の木蔭を、迅い影が横に跳ぶ。彼の跫音におどろいて駈ける鹿の群だった。
「強いことにおいておれは勝っている。——しかし敗けたような気持を負って宝蔵院の門を出てきた。——形では勝ったが敗けている証拠ではないか」
甘んじられない容子なのである。むしろ無念らしく、未熟者未熟者と、自分を罵りながら歩いているかのように、うつつに歩いていた。
「あ」
何か思い出したのであろう、立ちどまって振向いた。宝蔵院の灯は、まだ後ろに見えていた。

駈け戻って、今出て来た玄関に立ち、
「ただ今の、宮本でござるが」
「ほう」
と、玄関坊が顔を出し、
「なんぞお忘れ物か」
「明日か明後日あたり、私をたずねて、当院へ聞きに参る者があるはずですが、もしその者が見えたときは、宮本は当所の猿沢の池のあたりにわらじを解いているゆえ、あの辺の旅籠の軒を見て歩け、とお伝えを願いたいのです」
「ああ、左様か」
うわの空な返辞なので、武蔵は心もとなく思い、
「ここへ後から尋ねて来る者は、城太郎と申して、まだ年端のゆかぬ少年ですから、どうぞ慥と、お伝え願いまする」
いいおいて、元の道をまた大股に引き返しながら、武蔵はつぶやいた。
「やはり、敗けているのだ。——城太郎の言伝てをいい忘れて出て来ただけでも、おれはあの老僧の日観に敗けを負わされて戻っている！」
どうしたら天下無敵の剣になれるか。武蔵は、寝ても醒めても、病のように取り憑かれているのである。
この剣、この一剣。
勝って帰る宝蔵院から、どうして、この苦い自分の未熟さが、こびりついて来るのだろう。

何としても、楽しめない気持らしい。
怏々と、惑いながら、彼の脚はもう猿沢の池畔へ出ていた。
この池を中心に、狭井川の下流へかけて、天正ごろから殖えた新しい民家が乱雑に建てこんでいた。つい近年、徳川家の手代大久保長安が、奈良奉行所を設けた一廓も近くであるし、中華の帰化人で林和靖の後裔だという者が店をひらいた宗因饅頭もよく売れるとみえ、池へ向って店をひろげている。
そこらのまばらな宵の燈を見ると、武蔵は足をとめて、どこに泊ったものか、旅籠に迷った。旅籠はいくらもあるらしいが、路銀の都合もあるし、そうかといって、あまり場末や路地の木賃では、後から捜して来る城太郎にわかりにくかろう。
今し方、宝蔵院で接待にあずかって来たばかりであるが、宗因饅頭の前を通ると、武蔵は食慾をおぼえた。
腰かけへ立ち寄って、饅頭を一盆とってみる。饅頭の皮には「林」の字が焼いてあった。ここで食べる饅頭の味は、宝蔵院で食べた瓜漬の味のように舌にわからないことはなかった。
「旦那さま、今夜はどちらへお泊りでございますか」
そこの茶汲み女に話しかけられたのを幸いに、わけを話して計ってみると、それなら店の身寄りの者が内職に宿屋をしているちょうどよい家があります、ぜひそこへ泊っていただきたい、ただ今主人を呼んで参りますからと、まだ武蔵が泊るとも何ともいわないうちに、もう奥へ走って、青眉の若女房を呼び出して来た。

二

宗因饅頭の店からそう遠くもない、しかも静かな小路の素人家。
案内して来た青眉の女房は、小門の戸をほとほとたたいて、中の答えを聞いて後、武蔵を振り向いて、静かにいう。
「わたくしの姉の家でございますから、お心づけなども、ご心配なく」
小女が出て来て、女房と何か囁いていたが、すべて心得ているらしく武蔵を先へ二階へ通し、女房はすぐ、
「では、御ゆるり遊ばせ」
と帰ってしまった。
旅籠にしては、部屋も調度も上等すぎる、武蔵はかえって落着かなかった。
食事はすんでいるので、風呂に入ると、寝るよりほかはない。そう生活に困るでもないらしいこの家構えを持って、何で旅人などを泊めるのか、武蔵は、寝るにも気がかりであった。
小女にわけを訊いても、笑っていて答えないのである。
翌日になって、
「後から連れが尋ねて来るはずゆえ、もう一両日泊めてもらいたいが」
というと、
「どうぞ」
小女が階下の主に告げたのであろう、やがて、その女主人があいさつに見えた。三十ぐらいな

肌目のよい美人である。武蔵がさっそく不審をただすと、その美人が笑って話すにはこうであった。

実は自分は、観世なにがしと呼ぶ能楽師の後家であるが、この奈良には今、素姓の知れない牢人がたくさん住んでいて、風紀の悪いことはお話にならない。

そうした牢人たちのために、木辻あたりには、いかがわしい飲食店や白粉の女が急激にふえているが、不逞な牢人たちは、そんなところではほんとに娯まない。土地の若い者などを語らって、毎晩のように「後家見舞」と称して、男気のない家を襲ってあるくことが流行っている。

関ヶ原以後は、すこし戦がやんでいる形にあるが、年々の合戦で、どこの地方にも、浮浪人の数がおびただしく増している。そこで、諸国の城下に、悪い夜遊びが流行ったり窃盗沙汰だの強請者が横行している。こんな悪風は、朝鮮役後からの現象で、太閤様が生んだものだと恨んでいる声もあるとか。とにかく、全国的に今は悪い風紀が漲っている。——それと関ヶ原牢人のくずれが入り込んで来たため、この奈良の町でも、新任の奉行などでは取締りようもない有様だというのである。

「ははあ、それで拙者のような旅人を、魔除けにお泊めなさるわけだな」

「男気がないものですから」

と、美人の後家が笑った、武蔵も苦笑がやまない。

「そんなわけですから、どうぞ幾日でも」

「心得た、拙者のいるうちは、安心なさるがよい。しかし連れの者が、追ッつけここへ捜して来ることになっている。門口へ、何か目印を出してもらいたいが」

「よろしゅうございます」
後家は魔除け札のように、
宮本様お泊
と紙片れに書いて外へ貼った。
その日も、城太郎は来なかった。すると次の日である。
「宮本先生に拝顔したい」
と三名づれの武芸者が入って来た。断ってもただ帰りそうもない風態だというので、ともかく上げて会ってみると、それは宝蔵院で武蔵が阿巌を仆した折に、溜りの中にいて見物していた者達で、
「やあ」
と、旧知のように馴々しく、彼を囲んで坐りこんだ。

三

「いやどうも、なんとも驚き入ったわけです」
坐るとすぐ、その三名は、誇張したもののいい方で、武蔵をおだて抜くのであった。
「おそらく、宝蔵院を訪れた者で、あそこの七足と呼ぶ高弟を一撃で仆したなどという記録は、今までにないことでござろう。殊に、あの傲岸な阿巌が、うんと呻ったきり、血瀝れを出して参ってしまうなどは、近ごろ愉快きわまることだ」
「吾々のうちでも、えらい評にのぼっておる。一体、宮本武蔵とは何者であろうなど、当地の牢

人仲間では、寄るとさわると、貴公のうわさであるし、同時に、宝蔵院もすっかり看板へ味噌をつけてしまったというておる」
「まず、尊公のごときは、天下無双といってもさしつかえあるまい」
「年ばえもまだお若いしな」
「伸びる将来性は、多分に持っておられるし」
「失礼ながら、それほどな実力を持ちながら、牢人しておらるるなどとは、勿体ない」
茶が来れば茶をガブ飲みにし、菓子がくれば菓子の屑を膝にこぼしてボリボリむさぼる。
そして、賞められている当人の武蔵が顔のやり場に困るほど、口を極めて称揚するのである。
おかしくも、擽ぐッたくもないような顔をして、武蔵は相手が黙るまで喋舌らせておいたが、果てしがないので、
「して各〻は？」
姓名を訊ねると初めて、
「そうそう、これは失礼をしておった。それがしは、もと蒲生殿の家人で、山添団八」
「此方は大友伴立と申し、卜伝流を究め、いささか大志を抱いて、時勢にのぞまんとする野望もある者でござる」
「また、てまえは、野洲川安兵衛といい織田殿以来、牢人の子の牢人者で。……はははは」
これで一通り素姓は分ったが、何のために自分の貴重な時間をつぶして他人の貴重な時間を邪魔しに来たのか、それも武蔵の方から聞かないうちは埒があかないので、
「時に、御用向きは何であるか」

話のすきを見ていうと、

「そうそう」

と、それも今さら気がついたように、実は、折入っての相談でやって来たのだがと、遽に、膝をすすめていう。

——ほかでもないが、この奈良の春日の下で、自分たちで今、興行をもくろんでいる。興行というと能芝居や人寄せの見世物とお考えになるだろうが、さにあらず、大いに民衆のうちへ武術を理解させるための賭試合である。

今、小屋を掛けさせつつある所だが、前人気はなかなかよい。だが、三人では実はすこし手が足りない気がするし、いかなる豪の者が出て来て、折角の利益を一勝負でさらわれてしまわないとも限らないので——実は、其許に一枚入ってもらえまいかと、談合にやって来たわけである。承知してくれれば、利益は勿論山分け、その間の食費、宿料も一切こっちで持とう。ひと儲けして、次の旅へ向われる路銀をおこしらえになってはいかが？

——頻りとすすめるのを、武蔵はにやにや聞いていたが、もう飽々したという態で、

「いや、そういう御用なら、長座は無用、御めんをこうむる」

あっさり断ると、三名の方では、むしろ意外とするらしく、

「なぜで？」

とたたみかけて来る。

そこまで至ると、武蔵はすこし憤かついて来て、青年の一徹を示し、昂然といった。

「拙者は、ばくち打ちではない。また、飯は箸で食う男で、木剣では食わん男だ」

「なに、なんだと」
「わからんか、宮本は痩せても枯れても、剣人をもって任じておるのだ、馬鹿、帰れっ」

四

ふふんと、一人は冷笑を唇の辺にながし、一人は赤い怒気を顔にふき出して、
「忘れるな」
それが、捨て科白だった。
自分たちが束になっても、勝ち目のないことをその三名はよく心得ている。かなり苦い顔つきと、腹の中のものを抑えて、ただ跫音と態度にだけ、
(これだけで帰るのでないぞ)
の意思を示し、どやどや外へ出て行ったのである。
この頃は毎晩が肌ぬるいおぼろ夜だった。階下の若い御寮人は、武蔵が泊っているうちは安心だといって一方ならない馳走をするのであった。きのうも今宵も、武蔵は階下でもてなされて、快く酔ったからだを長々と、灯りのない二階の一間に横たえて、思うさま若い手脚をのばしていた。
「残念だ」
又しても、奥蔵院の日観のことばが頭にうかぶ。
自分の剣で打負かした者はみな、たとえそれが半死にさせた者でも、武蔵は次々に泡沫のように頭からその人間を忘れてしまうのであったが、少しでも、自分よりは優れた者――自分が圧倒

を感じた者——そういう他人に対しては、いつまでも執着を断つことができない。生き霊のように、その相手に勝つことを忘れることが出来ないのである。
「残念だ」
寝まろびたまま、髪の毛をぎゅっと掴む。どうしたら日観のうえに立つことが出来るか、あの不気味なひとみから何の圧伏も感じない自分になれるだろうか。
きのうも今日も、悶々と、彼はそれから離れる事が出来なかった。残念という呟きは、自分へ向っていう呻きであって、人を呪うため息ではない。
時々、彼は又、
（おれは駄目かな？）
と、自己の才分を疑わざるを得なかった。日観のような人間に出あうと、あれまで行けるかどうかが自分で疑われて来るのである。元々、自分の剣というものは、師について、法則的な修業を受けたものでないだけに、彼には、自分の力がどの程度のものか、自分ではよく分っていなかった。
それに、日観は、
（強すぎる、もうすこし、弱くなるがよい）
といった。
あの言葉なども、武蔵には、どうもまだよく呑みこめないのだ。兵法者である以上、強いという事は、絶対の優越であるべきであるのに、なぜ、それが欠点になるのか。
待てよ、あの猫背の老僧が、何をいうか、それも疑問だ。こっちを若年者と見て、真理でもな

いことを、真らしく説いて、煙に巻いて帰してやったなどと、後で笑っているという手もないとは限らない――

（書なども、読むがいいか悪いか知れたものではない）

武蔵は、近ごろになって、時々それを考える。どうもあの姫路城の一室で三年間も書を読んだ後の自分というものは、前とちがって、何かにつけ、物事を理で解こうとする癖がついているようだ。自己の理智をとおして頷ける事でないと、心から承認することが出来ない人間になっている。剣の事ばかりでなく、社会の観方、人間の観方、すべてが一変していることは慥かである。

そのために、自分の勇猛というものは、少年時代から見れば、ずっと弱まっていると考えられるのに、あの日観は、まだ強すぎるというのだ。それは腕の強さをいうのではなく、自分の天分にある野性と争気を指していっていることだけは、武蔵にもわかっている。

「兵法者に、書物などは要らない智恵だ。生半可、ひとの心や気もちのうごきに敏感になったから、かえって、こっちの手が怯れるのだ。日観なども、眼をとじて一撃を揮り落せば、実は脆い土偶みたいなものかも知れないのだ」

誰かここへ上がって来るらしく、その時、彼の手枕に、梯子だんの跫音が伝わって来た。

五

階下の小女が顔を出し、その後からすぐ城太郎が上がって来たのである。城太郎の黒い顔は、旅の垢でよけいに黒くなり、河っ童のような髪の毛は埃で白くなっていた。

「おう、来たか。よく分ったな」

武蔵が、胸をひろげて迎えてやると、城太郎はその前に、汚れた足を投げ出して坐った。
「ああくたびれた」
「探したか」
「探したとも。とッても、探しちまッたい」
「宝蔵院で訊ねたであろうが」
「ところが、あそこの坊さんに訊いても知らないというんだもの。おじさん、忘れていたのだろう」
「いや、くれぐれも、頼んでおいたのだが。――まあよいわ、ご苦労だった」
「これは吉岡道場の返辞」
と城太郎は、首にかけて来た竹筒から、返書を出して武蔵にわたし、
「――それから、も一つのほうの使い、本位田又八という人には、会えなかったから、そこの家の者に、おじさんの言伝てだけをよく頼んで帰って来たよ」
「大儀大儀。――さあ風呂へでも入れ、そして階下で御飯を食べてこい」
「ここは宿屋？」
「む。宿屋のようなものだ」
城太郎が降りて行った後で、武蔵は、吉岡清十郎からの返書を開いて見た。――再度の試合は当方の望むところである。もし約束の冬まで来訪がない時は、臆病風にふかれて踪跡をくらましたものと見なし、貴公の卑劣を天下に笑ってやることにするから、そのつもりで居られたい。
代筆とみえ、文辞も拙く、ただこんなふうに気負った言葉が書きつらねてある。武蔵は手紙を

裂くと、それを燭にかざして焼いてしまった。
蝶の黒焼みたいな灰がふわふわと畳にこぼれてうごいている。試合とはいえ、この手紙のやり取りは、果し合いの約束に近い。この冬、この手紙から、誰がこういう灰になるのか。
武蔵は、兵法者の生命というものが、朝に生れて夕には分らないものであるという覚悟だけは、常に持っていた。――しかしそれは心がまえだけで、ほんとに今年の冬までしかない生命であるとしたら、彼の精神は、決して穏かでいられなかった。
（為たいことがたくさんある！　兵法の修行もそうだが、人間としてやりたいことを、おれはまだ何もやっていない）
卜伝や上泉伊勢守のように、一度は多くの従者に鷹をすえさせ、駒をひかせて、天下の往来も歩いて見たい。
また、恥かしくない門戸のうちに、よき妻をもち、郎党や家の子を養って、自分には幼少から恵まれないところの家庭というものの温かさのうちに、よい主人ともなってみたい。
いや。
そういう人生の型に入る前には、ひそと、世の女性にも触れてみたいのだ。――今日までは明けても暮れても、念々兵法のほかに頭が外れないので、不自然なく童貞をたもって来ているが、このごろ時折、往来を歩いていても、京都や奈良の女性がはっと美しく眼に――というよりは肉感にひびいて来る時がある。
そんな時、彼はいつも、
（お通）

をふと思い出すのであった。

遠い過去の人であるような気がしながら、実は常に近くむすばれているような気のするお通。

——武蔵はただ漠然と、彼女を考えることだけで、時にはさびしい孤独と流浪を、どれ程、自分でも無意識の間に、慰められているか知れないのであった。

いつの間にか、そこへ戻って来ていた城太郎は、風呂に入り、腹を満たし、そして自分の使いも果した安心とで、すっかり草臥れが出たのであろう、小さいあぐらを組んで、両手を膝の間に突っこんだまま、涎をながして心地よげに居眠りしていた。

六

朝——

城太郎はもう雀の声といっしょに刎ね起きている。武蔵も、今朝は早く奈良を立つつもりと、階下の女主人へも告げてあるので、旅装いにかかっていると、

「まあ、お急ぎですこと」

能楽師の若い後家は、すこし恨めしげに、抱えて来た一かさねの小袖をそこへ出して、

「失礼でございますが、これは私が、お餞別のつもりで一昨日から縫いあげた小袖と羽織、お気に入りますすまいが、お召しになってくださいませ」

「え、これを」

武蔵は、眼をみはった。

旅籠の餞別に、こんな物をもらう理由がない。

断ると、後家は、
「いいえ、そんな大した品ではございません、宅には、古びた能衣裳やら男物の古い小袖が、役にも立たず押しこんであるので、せめて、あなたのような御修行中の若いお方に着ていただければと思って、丹精してみたのでございます。折角、おからだに合せて縫ったのに、着ていただけないと無駄な物になってしまいますから、どうぞ……」
うしろへ廻って、いやおうなく武蔵の体へ、着せかけてくれる。
迷惑なほど、それは贅沢な品だった。わけても袖無羽織は、舶載の織物らしく、豪華な模様に金襴の裾べりを縫い、裏には羽二重をつけ、紐にまで細かい気をつけて、葡萄染めの革がつかってある。
「ようお似あいになります」
後家と共に、城太郎も見惚れていたが、無遠慮に、
「おばさん、おらには、何をくれるの」
「ホホホ。だって、あなたはお供でしょう、お供はそれでいいじゃありませんか」
「着物なんか欲しくねえさ」
「何か望みがあるんですか」
「これをくれないか」
次の間の壁に掛けてあった仮面をいきなり外して来て、もうゆうべ一目見た時から欲しくてならなかったもののように、
「これを、おくれ」

と自分の頬へ、仮面の頬をすりつけていった。

武蔵は、城太郎の眼のするどさに驚いた。実は彼も、ここに寝た晩から心をひかれていた仮面なのである。誰の作かわからないが、時代は室町ではない、少なくも鎌倉期の作品であって、やはり能につかわれた物らしく、鬼女の顔が、すごいほど鑿の先で彫り出されている。

それだけなら、まだそう心を奪われもすまいが、この仮面には、他のありふれた能仮面とちがって、不思議な表現が打ちこめてある。ふつうの鬼女の仮面は、およそ青隈で塗られた奇怪なものだが、この仮面の鬼女は、甚だ端麗であり、色白で上品な顔をしてどう眺めても美人なことである。

ただ、その美人が、おそろしい鬼女に見える点は、笑っている唇元だけにあった。三日月形に顔の左の方へ向ってキュッと鋭く彫りあげている唇の線が、どんな名匠の瞑想から生れたものか、何ともいえない凄味をふくんでいるのだった。明らかにこれはほんとに生きていた狂女の笑いを写し取ったものに違いない。――武蔵もそういう考えを下して見ていた品である。

「あっ、それはいけない」

此家の若い後家にとっても、それは大事な物とみえ、あわてて彼の手から奪り上げようとすると、城太郎は、頭の上に仮面をかざし、

「いいじゃないか、こんな物、いやだといっても、おいらは貰ッたアと！」

踊りながら逃げ廻って、何といっても返さない。

七

調子にのると子どもは止まりがない。武蔵が、後家の迷惑を察して、

「これっ、なぜそんなことを」

と叱っても、城太郎は浮かれ調子をやめないで、こんどは仮面をふところに入れ、

「いいね、おばさん。おいらにおくれね、いいだろ、おばさん」

梯子を降りて階下へ逃げてしまう。

若い後家は、

「いけない、いけない」

といいつつ、子供のする振舞なので、怒れもせず、笑いながら追いかけて行ったが、そのまましばらく階下から上がって来ないがと思っていると、やがて城太郎だけが、みしみしと、梯子段をのろく上がって来る様子。

来たら叱ってやろう。――武蔵がそう考えて、上がり口のほうに向って厳しい膝を向けて坐っていると、そこから不意に、

「――ばあア！」

鬼女の笑い仮面が、伸びた体の、先っぽに見えた。

びくっと、武蔵は筋肉をひきしめ、膝がすこし動いたくらいだった。何でそんな衝撃をうけたか、かれにもわからない。――しかしながら薄ぐらい梯子段の口元に手をついている笑い仮面を眺めてすぐ解けた。それは仮面にこもっている名匠の気魄である。白い顎の上から左の耳へかけてきゅっと笑っている三日月形の唇元にただよっている妖美にかくれているものだった。

「さ、おじさん、出かけましょう」

と城太郎はそこでいう。
武蔵は起たず、
「まだお返しせぬか。左様なもの、欲しがってはならん」
「だって、いいといったんだよ、もう、くれたんだよ」
「よいとはいわぬ。階下のお方へおもどしして来い」
「ううん、階下で返すといったら、こんどは、あのおばさんの方から、そんなに欲しければ上げる、その代りに大事に持ってくれますかというから、きっと大事に持っていると約束して、ほんとに貰ったんだ」
「困った奴」
この家にとり、大事そうな仮面やら小袖まで、こうして理由なく貰って立つことが、武蔵は何となく気がすまない。
何か気持だけでも礼をのこしてゆきたいと思う。しかし金銭には困らない家らしいし、代りに与える品とても持っていないので、階下へ降りて、改めて、城太郎のぶしつけな強請みを詫びて、それを戻させようとすると、若い後家は、
「いいえ、考え直してみますと、あの仮面は、却って私の家にないほうが、私の気が楽々するかも知れません。それに、あのように欲しがるものゆえ、どうぞ叱らないでくださいませ」
そういう言葉を聞けば、よけいにあの仮面には何か歴史のある物らしく思われるので、武蔵はなお固辞したが、城太郎はもう大得意の態で、草鞋を穿いて、先に門の外へ出て待ちかまえている。

仮面よりも、若い後家は、武蔵に対してほのかに名残りを惜しみながら、この奈良へ来た時は、ぜひまた幾日でも泊ってもらいたいと繰返していう。
「では」
と、ついに何もかも先の好意に甘えて、武蔵が草鞋の緒をむすびかけていると、
「おう、お客さま、まだいらっしゃいましたか」
此家の親戚という宗因饅頭の女房が息をきって門へ入って来た。そして武蔵と、自分の姉になる後家の主へむかい、
「だめですよ、お客さま、お立ちどころではありません、たいへんです、とにかくもう一度二階へおもどりなさいませ」
何か怖しい事に、背を脅かされてでもいるように、歯の根の合わない声音でいうのであった。

八

武蔵は、草鞋の緒を、両足ともに結んでしまってから、静かに顔をあげた。
「何ですか、大変とは」
「あなたが、今朝ここを立つのを知って、宝蔵院のお坊さま達が、槍を持って、十人余も連れ立ち、般若坂のほうへ行きました」
「ほ」
「その中には、院主の宝蔵院の二代様も見え、町の衆の眼をそばだたせました。何か、よほどな事が起ったのであろうと、宅の主が、その中の懇意なお坊さまをとらえて訊いてみると、おまえ

の親戚（みより）の者の家に四、五日前から泊っている宮本という男が、きょう奈良を離れるらしいから、途中で待ちうけるのだと申すではございませんか」

宗因饅頭の女房は、青眉のあとを顫（わなな）かせて、今朝奈良を立つことは、生命（いのち）をすてに立つようなものであるから、二階へかくれて、夜を待って、抜け出したほうがよいと、こうしている間も、気の縮むように告げるのであった。

「ははあ」

武蔵は、そこの上がり框（がまち）に腰を掛けたまま、門へ出ようともせず、二階へ戻ろうともしない。

「般若坂で、拙者を待ちうけるのだろうと、いっていましたか」

「場所はよう分りませぬが、その方角へ行きました。宅の主（あるじ）もびっくりして、町の衆がいううわさを問い糺（ただ）してみると、宝蔵院のお坊さまばかりでなく、所々の辻口に、奈良の牢人衆がかたまって、きょうは宮本という男を捕まえて、宝蔵院へ渡すのだといっているそうです。――何かあなたは、宝蔵院の悪口をいって歩きましたか」

「そんな覚えはない」

「でも、宝蔵院のほうでは、あなたが人をつかって、奈良の辻々に落首を書いて貼らせたと、ひどく怒っているそうです」

「知らんな、人違いだろう」

「ですから、そんなことで、お命を落しては、つまらないではございませんか」

「…………」

答えるのを忘れて、武蔵は軒ごしに空を見ていた。思いあたるところがある。きのうだったか

一昨日だったか、彼の頭にはもう遠いことみたいに忘れていたが、春日下で賭試合の興行をやるから仲間に入らないかとすすめに来た牢人者の三名連れ。
たしか一人は山添団八といい、後二人は野洲川安兵衛に大友伴立とかいった。
察するところ、あの折、いやに凄みをふくんだ表情で帰って行ったのは、後にこのことをもって、思い知らしてやるという肚黒い考えであったかも知れない。
自分には覚えのない宝蔵院の悪口をいいふらしたとか、落首を書いて辻々にはったとかいう所為も、彼らの仕業と思えないことはない。
「行こう」
武蔵は立って、旅づつみの端を胸の前で結び、笠を持って、宗因饅頭の女房と、観世の若い後家へ向い、くれぐれ好意を謝して、門を踏みだした。
「どうしても」
観世の後家は、涙ぐんでいるかのような眼で、外まで従いて来た。
「夜を待っていれば、必ずお宅に禍いがかかります。ご親切をうけたり、迷惑をかけたりしては申しわけがない」
「かまいません、私のほうは」
「いや、立ちましょう。——城太郎、お礼をいわんか」
「おばさん」
と、呼んで、城太郎は頭を下げた。にわかに彼も元気がない。それは別れを惜しむためとは見えないのである。思うに城太郎はまだ武蔵の本当を知らないし、京都にいたころから弱い武者修

行と聞かされているので、自分の師匠の行く先に、音に聞えた宝蔵院衆が、槍をつらねて待っていると聞き、子供心にも、一抹の不安を覚えて、悲壮になっているのであろう。

般若野

一

「城太郎」
足を止めて、武蔵が振向く。
「はい」
城太郎は眉をぴりっとさせた。
奈良の町はもう後ろだった。東大寺ともかけ離れている。月ケ瀬街道は杉木立のあいだを通って、その杉の樹の縞のあいだから見えるものは、やがて近い般若坂にかかるなだらかな春野の傾斜と、それを裾にして右手の空にふくらんで乳房を持っているような三笠山の胸のあたりがここからは近い感じである。
「なんですか」
ここまで、七町あまり、ニコともしないで、黙々と尾いて来た城太郎であった。一歩一歩が、冥途とやらへ近くなる気持なのだ。さっき、湿々として、うす暗い東大寺の横を通って来た時、

襟元にポタリと落ちた雫にも、きゃっと思わずいってしまいそうな驚きをしたし、人間の跫音に怖がらない鴉の群れにも、いやな気持がして、そのたび武蔵のうしろ姿も影がうすく見える。
山の中へでも、お寺の内へでも、隠れようとすれば隠れ込めないことはない、逃げようと思えば逃げられないことはない。それを何でこうして、宝蔵院衆が行ったという般若野のほうへ、自分から足を向けてしまうのだろうか。
城太郎には、考えられない。
(行って、謝る気かしら?)
その程度の想像はしてみる。謝るなら、自分も、一緒になって、宝蔵院衆に謝ろうと思う。
どっちがいいとか悪いとかなどは、問題でない。
そこへ武蔵が足を止め——城太郎——こう呼んだので彼はわけもなくドキッとしたのだった。
しかし、自分の顔いろは、きっと蒼くなっているだろうにと考え、それを武蔵に見られまいとするらしく陽を仰いだ。
武蔵も上を仰いでいる。心ぼそいものが世の中のこう二人みたいに、城太郎の気持をつつんだ。
案外、次に出た武蔵の言葉は、ふだんの調子とちっとも変っていない。こういうのだ。
「いいなあ、これからの山旅は、まるで鶯の声を踏んで歩いて行くようじゃないか」
「え?　なんですか」
「鶯がさ」
「あ。そうですね」

うつつである。朱くない少年の唇でも、武蔵にはそれが分った。かわいそうな子だと思うのであった。ことによれば、これきりで別れになるかも知れないと考えるからである。

「般若野がもう近いな」

「え、奈良坂も過ぎましたよ」

「ところで」

「………」

あたりに啼きぬく鶯が、ただ寒々しいものに城太郎の耳を通ってゆく。城太郎の眼は、硝子玉のように曇って、武蔵の顔をぼうと見上げている。今朝、鬼女の笑い仮面を両手にあげて、嬉々と逃げまわっていた子供の眼と一つものとは思えないほど静かな瞼である。

「もうそろそろだ、わしとここでわかれるのだぞ」

「………」

「わしから離れろ。――でないと側杖を食う、お前が怪我をする理由はちっともない」

ポロポロと眼が溶けて頬に白いすじを描いてながれる。ふたつの手の甲が、そうっと睫毛へ行ったと思うと、肩がしゅくっと泣いて、それからしゃっくりのように、体じゅうですすり上げた。

「何を泣く、兵法者の弟子じゃないか。わしが万一、血路をひらいて走ったら走ったほうへおまえも逃げろ。また、わしが突き殺されたら、元の京都の居酒屋へ帰って奉公せい。――それを、ずっと離れた小高い所でおまえは見ているのだ。いいか、これ……」

二

「なぜ泣く」
武蔵がいうと、城太郎は、濡れた顔を振り上げて、武蔵の袂を引っぱった。
「おじさん、逃げよう」
「逃げられないのが侍というものだ。おまえは、その侍になるのじゃないか」
「恐い。死ぬのが恐い」
城太郎は戦慄しながら、武蔵の袂を、懸命にうしろへ引いて、
「おらが可哀そうだと思って、逃げてよう、逃げてよう」
「ああ、それをいわれるとおれも逃げたい。おれも幼少から骨肉に恵まれなかったが、おまえもおれに劣らない親の縁にうすい奴だ。逃げてやりたいが――」
「さ、さ、今のうちに」
「おれは侍、おまえも侍の子じゃないか」
力が尽きて、城太郎はそこへ坐ってしまった。手でこする顔から黒い水がぽたぽた落ちた。
「だが、心配するな。おれは負けないつもりだ。いやきっと勝つ。勝てばよかろう」
そう慰めても、城太郎は信じない。先に待ち伏せている宝蔵院衆は十人以上だと聞かされているからだった。弱い自分の師匠には、その一人と一人との勝負でも、勝てるわけはないと思っているのである。
きょうの死地へ当ってゆくには、そこで生きるも死ぬも十分な心構えが要る。いやすでにその

心構えの中に立っているのだ。武蔵は、城太郎を愛しもするし不愍にも思ってはいるが、面倒になった、焦れったくなった。
　ふいに激越な声で叱ったのである。彼を突き離すとともに、自分へ弾力を持って、
「だめだッ、貴様のような奴、武士にはなれん、居酒屋へ帰れ」
　強い侮辱をあびせられたように少年のたましいはその声に泣きじゃくりを止めた。はっとした顔いろをもって、城太郎は起ち、そして、もう大股に彼方へ歩いてゆく武蔵のうしろ姿へ、
（――おじさアん）
　叫びそうにしたが、それを怺えて、そばの杉の樹へしがみつき、両手の中に顔を埋めた。
　武蔵は振り向かなかった。しかし、城太郎の泣きじゃくりがいつまでも耳にこびりついていて、もう頼り人のない薄命な少年のおろおろした姿が背中に見える気がしてならない。
（よしなき者を連れて歩いて――）
　と、彼は心に悔いを噛むのであった。
　未熟な自分の身一つさえ持てあましているものを――孤剣を抱いて明日のことさえ知れない身であるものを。――思えば、修行中の兵法者に道づれは要らないものだった。
「おうーい。武蔵どの」
　いつか杉林を通りぬけて、ひろい野へ出ていた。野というよりは、斜めに起伏を落している山裾である。彼を呼んだ男は、三笠山の山道のほうからその裾野へ出て来たらしく、
「何処へお出でか」
　二度目のことばをかけながら駈けて来て、馴々しく肩をならべた。

いつぞや泊り先の観世の後家の家へやって来た三名の牢人者のうちで、山添団八と名乗ったあの男なのである。

――来たな。

武蔵はすぐ看破した。

だが、さあらぬ顔して、

「おう、先日は」

「いや過日は失礼を」

あわてて挨拶をし直したその礼儀ぶりが、いやに叮嚀である。上目づかいに武蔵の顔いろを窺っていった。

「その節の事は、どうか水にながして、お聞き捨てのほどを」

三

このあいだ宝蔵院で、目に見た武蔵の実力には、大いに怖れを抱いている山添団八であるが、それかといって年はまだ二十一、二歳の田舎武士にすこし鰭がついて世間へ泳ぎ出した程度にしか見えない武蔵に対して、肚から兜を脱いではいない。

「武蔵どの。これから、旅はどちらの方面へ」

「伊賀を越え、伊勢路へ参ろうと思う。――貴公は」

「それがしは、ちと用事があって、月ケ瀬まで」

「柳生谷は、あの近傍ではありませんか」

「これから四里ほどして大柳生、また一里ほど行くと小柳生」
「有名な柳生殿の城は」
「笠置寺から遠くないところじゃ。あれへもぜひ立ち寄って行かれたがよいな。もっとも今、大祖宗巌公は、もう茶人同様に別荘のほうへ引き籠られ、御子息の但馬守宗矩どのは、徳川家に召されて、江戸に行っているが」
「われらのような一介の遍歴の者にでも、授業して下さろうか」
「たれかの紹介状でもあればなおよろしいが。――そうそう月ケ瀬に此方の懇意にしている鎧師で柳生家へも出入りしている老人がある、なんなら頼んであげてもよいが」
団八は、武蔵の左へ左へと、特に意識して並んで歩いていた。所々に、杉や槇などの樹がぽつねんと孤立しているほか、野の視野は何里となく広かった。ただ大きな起伏が低い丘を描き、そこを縫う道に多少のゆるい登りや降りがあるだけである。
般若坂に近いころであった。その一つの丘の彼方から、誰か、焚火でもしているらしく茶褐色のけむりが見える。
武蔵は、足を止め、
「はてな?」
「何が」
「あの煙」
「それがどうしたのでござる」
団八は、ぴったり寄り添っている。そして武蔵の顔いろを見る彼の顔いろが、やや硬ばる。

武蔵は指さして、
「どうもあの煙には妖気があるように思う。貴公の眼には、どう見えるな」
「妖気というと？」
「たとえば」
と、煙へさしていた指を、こんどは団八の顔の真ン中へさして、
「汝のひとみに漂っているようなものをいう！」
「えっ」
「見せてやるっ、このことだっ！」
突然、春野のうららかな静寂をやぶッて、キェッ――という異な悲鳴が走ったと思うと、団八のからだも向うへ飛び退き、武蔵の体もうしろへ刎ね返っていた。
何処かで、
「あっ――」
と驚いていう者があった。
それは二人が越えて来た丘のうえにチラと今、影を見せて此方を見ていた人間である、それも二人連れであった。
「やられたっ！」
というような意味の大声をあげて、その者たちは、手を振り上げながら何処かへ走ってゆく。
――武蔵の手には、低く持った刃がキラキラと陽の光を刎ねている。そして、飛び上がって仆れたなり山添団八はもう起たないのである。

鎬の血を、垂直にこぼしながら、武蔵はまたしずかに歩み出した。野の花を踏みながら焚火のけむりが立つ次の丘の肩へ。

四

女の手で撫でられるように鬢をなぶる春の微風がある。武蔵は、しかし自分の髪の毛がみな逆立っているかと思う。

一歩、一歩、彼のからだは鉄みたいに肉が緊まった。

丘に立つ。――下を見る。

なだらかな野の沢がひろく見渡された。焚火は、そこの沢で焚いているのだ。

「来たっ――」

さけんだのは、その焚火を囲んでいた大勢の者ではなくて、武蔵の位置をずっと離れて、そこへ駈け足で迂回して行った二人の男だった。

今、武蔵の足もとで、一太刀に斬りすてられた山添団八の仲間の者――野洲川安兵衛と、大友伴立という牢人であることはもう明らかに分るほどな距離である。

来たっという声に対して、

「え、来たっ？」

おうむ返しにいって、焚火のまわりの者は、いっせいに大地から腰を刎ね上げ、また、そこから離れて、思い思いに陽なたに屯していた者達も、すべて、総立ちになった。

人数はというと、およそ三十名近い。

そのうち約半数は僧であり、あと半数ほどは雑多な牢人者の群れなのである。丘の肩を越えてこの野の沢から般若坂へぬけてゆく道の、その丘の上に、今、武蔵の姿が現われたのを認めると、

（うむ！）

声としては出ない一種の殺伐な動揺めきが、その群れの上に漲りわたった。

しかも、武蔵の手には、すでに血を塗った剣が提げられている。戦闘は、お互いのすがたを見ぬ前から口火を切ってしまったのだ。それも、待ち伏せていた多勢のほうからではなく、計られて来たはずの武蔵のほうから宣戦しているのだ。

野洲川、大友の二人は、

「――山添が、山添が」

と早口にいって、仲間の一人が、すでに武蔵の刃にかかって仆れたことを、大仰な手つきで告げているらしく見える。

牢人たちは、歯がみをし、宝蔵院の僧たちは、

「小癪な」

と、陣容を作って、武蔵のほうを睨めつけた。

宝蔵院衆の十数名は、みな槍だった。片鎌の槍、ささ穂の槍、思い思いの一槍をかいこんで、黒衣のたもとを背にむすび、

「――おのれ、今日こそ」

と、院の名誉と、高足阿巌の無念を、ここでそそごうとする宿意が、もう面も向けられない。

ちょうど、地獄の邏卒が列を作っているのと変りはない。
牢人たちは、牢人たちのみで、一団にかたまって、武蔵が逃げないように包囲しながら見物しようという計画らしく、中には、げらげら笑っている者がある。
けれど、その手数は不要だった。彼らは、居どころに立ったまま、自然な鶴翼の陣形を作っていればそれでよかった。敵の武蔵に、すこしも、逃げたり、狼狽したりする様子がないからである。
武蔵は歩いている。
それも極めて、一足一足、粘る土でも踏んでいるように、やわらかな若草の崖を、少しずつ、しかし――いつ鷲のごとく飛ぶかも知れない姿勢をもちながら、眼にあまる人数の前へ――というよりは死地へ――近づいて来るのであった。

五

――来るぞっ。
もう口に出していう者はない。
けれど、徐々に、片手に剣をさげた武蔵の姿が、沛雨をつつんだ一朶の黒雲のように、敵の心へ、やがて降りかかるものを、恐怖させていたことは慥かである。
「………」
不気味な一瞬の静けさは、双方が死を考える瞬間であるのだ。武蔵の顔はまったく蒼白になっている。死神の眼が、彼の顔を借りて、

（――どれから先に）
と、窺っているかのような光になっている。
牢人の群れも、宝蔵院衆の列も、その一人の敵に対して、圧倒的な多数を擁してはいるが、彼ほど、蒼白になっている顔は一つもなかった。
（――多寡が）
と、衆を恃んでいる気持が、どこかに楽天的なものを湛え、ただ死神の眼に真っ先につかまることを、お互いが警戒しているだけに過ぎない。
――と。
槍をつらねている宝蔵院衆の列の端にいた一人の僧が、合図を下したかのように見えた時である、十数名の黒衣の槍仕は一斉に、わっと、喚きながら、その列をくずさずに、武蔵の右がわへ、駈け廻った。
「武蔵――ッ」
と、その僧がさけんだ。
「聞くところによれば、汝、いささかの腕を誇って、この胤舜が留守中に、門下の阿巌を仆し、またそれに増長して、宝蔵院のことを、悪しざまに世間へいいふらしたのみか、辻々へ、落首など貼らせて、吾々を嘲笑したと申すことであるが、確とそうか」
「ちがう！」
武蔵の答えは、簡明だった。
「よく物事は、眼で見、耳できくばかりでなく、肚で観ろ、坊主ともある者が」

「なにッ」
　薪へ油である。
　胤舜をさし措いて、ほかの僧たちが口々に、
「問答無用っ」
　といった。
　すると、挾撃の形をとって、武蔵の左がわにむらがっていた牢人たちが、
「そうだっ」
「むだ口を叩かすなっ」
　がやがやと罵り出して、自分たちの抜いている刃を振り、宝蔵院衆が手を下すのを煽動した。
　武蔵は、そこの牢人達のかたまりが、口ばかりで、質も結束も脆いことを、見抜いたらしく、
「よしっ、問答に及ぶまい。——誰だっ、相手は」
　彼の眼が、きっと、自分たちへかかったので、牢人たちは、思わず足を退いてくずれ、中の二、三名だけが、
「おれだっ」
　けなげに、大刀を中段にかまえると、武蔵はいきなりその一人に向って、軍鶏のような飛躍を見せた。
　どぼッと、栓の飛んだような音がして、血しおが宙を染めた。同時にぶつけ合う生命と生命の響きだった。単なる気合いでもない、また言葉でもない、異様な喚きが人間の喉から発するのである。正しくそれは人間の会話でも表現でもなく原始林でする獣の吼える声に近いものであった。

ずずんっ、ずしいんっ、と武蔵の手にある刃鉄が、つよい震動を、自己の心臓へ送るたびに、彼の剣は人間の骨を斬っているのだった。一颯ごとに、その鋩子から虹のように血を噴き、血は脳漿を撒き、指のかけらを飛ばし、生大根のように人間の腕を草むらへ抛り出した。

六

初めから、牢人たちの側には、弥次気分と楽天的な気ぶりが、多分に漂っていて、

(――闘うのは宝蔵院衆、おれたちは、人殺しの見物)

と考えていたらしいのである。

武蔵が、そこの群を、脆弱と観て、いきなり彼等の一団へ衝いて行ったのは戦法としても当然だ。

だが、彼らも、あわてはしなかった。彼等の頭には、宝蔵院の槍仕たちが控えているという絶対的な恃みがある。

ところが。

すでに戦闘はひらかれ、自分たちの仲間が二人仆れ、五人、六人と、武蔵の太刀にかかっているのに、宝蔵院側は、槍を横に並べて傍観しているのみで、一人も武蔵へ対して、突いて来ないではないか。

くそっ、くそっ――

やっちまえ、早く。

うわうッ。

だッ……だッ……

こなくそっ。

ぎゃんっ！

あらゆる音響が刃の中から発し、奇怪なる宝蔵院衆の不戦的態度に、業をにやし、不平をさけび、助勢を求め抜くのだったが、槍の整列は、いッこう動かない。声援もしない。まるで水のごとき列である。かくてみすみす武蔵のため、斬りまくられている彼等には、

（これでは、約束がちがう、この敵はそっちのもので、おれたちは第三者だ、これではあべこべではないか）

と、いう苦情を言葉でいう遑すらないのだ。

酒に酔った泥鰌のように、彼等は、血にあたまが眩んでしまった。仲間の刃が仲間を撲り、人の顔が、自分の顔みたいに見え、そのくせ敵の武蔵の影は、確と認めることができないため、ふり廻す彼等の刀は、従って、味方同士の危険であるばかりであった。

もっとも武蔵自身もまた、自分が何を行動しているか、一切無自覚であった。ただ彼の生命を構成している肉体の全機能が、その一瞬に、三尺に足らない刀身に凝りかたまって、まだ五歳か六歳の幼少から、きびしい父の手でたたきこまれたものだの、その後、関ケ原の戦で体験したものだの、また、独り山の中へ入って樹を相手に自得したもの、更に、諸国をあるいて諸所の道場で理論的にふだん考えていたものだの、およそ今日まで経て来たすべての鍛錬が、意識なく、五体から火花となって発しているに過ぎないのである。――そして、その五体は、蹴ちらす土や草とも同化して、完全に、人間を解脱した風の相となっている。

——死生一如。
どっちへ帰することも頭にない人間のある時の相。
それが、今、白刃のなかを駈けまわっている武蔵の姿だった。
（斬られては損）
（死にたくない）
（なるべく他人に当らせて——）
というような雑念の傍らに刃物をふり廻している牢人たちが、歯ぎしりしても、一人の武蔵を斬り仆し得ないのみか、却って、その死にたくない奴が、盲目中たりに真っ向から割りつけられたりしてしまうのも皮肉ではあるが、是非もない。
槍をならべている宝蔵院衆の中の一人が、それを眺めながら、自分の呼吸をかぞえていると、その時間は、呼吸のかずにして約十五か、二十をかぞえるに足らない寸秒の間であった。
武蔵の全身も血。
残っている十人ほどの牢人もみな血まみれ。あたりの大地、あたりの草、すべてが朱く泥んこになって、吐き気を催すような血腥さいものが漲ると、それまで支えていた牢人たちも、とうとう恃む助勢を待ちきれなくなって、
「わあっ——」
と迅く——或る者は——ひょろひょろと、八方へ逃げ足を散らかした。
それまでは、満を持して、白い穂先をつらねていた宝蔵院の槍仕たちが、どっと、一斉にうごいたのは、それからであった。

七

「神さま！」
掌をあわせて、城太郎は、大空を拝んでいた。
「――神さま、加勢してください。わたくしのお師匠様は今、この下の沢で、あんな大勢の敵と、ただ独りで闘おうとしているんです。わたくしのお師匠様は、弱いけれど、悪い人間ではありません」
武蔵に捨てられても、その武蔵から離れられないで、遠く見まもりながら、彼は今般若野の沢の上にあたるところへ来て、ぺたっと坐っている。
仮面も笠もそばへ置いて、
「――八幡さま、金毘羅さま、春日の宮の神さま達！　あれあれ、お師匠様はだんだん敵の前へ歩いてゆきます。正気の沙汰ではありません。かわいそうに、ふだん弱いものですから、今朝からすこし気が変になってしまったんです。さもなければ、あんな大勢の前へ、一人で向ってゆくはずはありません。どうか神さま達！　一人のほうへ助太刀して下さい」
百拝、千拝、その城太郎こそ気が変になったように、しまいには声を揚げて繰返すのであった。
「――この国に神様はいないんでしょうか。もし卑怯な大勢が勝って、正しい一人のほうが斬られたり、正義でない者が存分なまねをして、正しい者がなぶり殺しになったりしたら、むかしからの云い伝えはみな嘘ッぱちだといわれても仕方がありますまい。イヤ、おいらは、もしそうな

ったら神さま達に唾してやるぞ！」
理窟は幼稚であっても、彼の眸は血ばしっていて、むしろもっと深い理窟のある大人のさけびよりも、天をしてその権まくに驚かしめるものがあった。
それだけには止まらない。やがて、城太郎は、彼方のひくい芝地の沢に見える一かたまりの人数が、ただ一人の武蔵を、刃の中に取り囲んで、針をつつんで吹く旋風のような光景を描き出すと、
「——畜生っ」
ふたつの拳と共に飛び上がり、
「卑怯だっ」
と、絶叫し、
「ええ、おいら大人ならば……」
と、地だんだ踏んで泣き出し、
「馬鹿っ、馬鹿っ」
と、そこらじゅうを駈けあるき、
「——おじさアん！　おじさアん！　おいらは、ここにいるよッ」
しまいには彼自身が、完全なる神さまと成り切って、
「——獣っ、獣っ、お師匠様を殺すと、おれが承知しないぞっ！」
ありッたけな声で、さけんでいたものである。
そして、そこからの遠目にも、彼方の真っ黒な斬り合いの渦中から、ぱッ、ぱッ、と血しぶき

が立ち、一つ仆れ二つ仆れ、死骸が野にころがるのを見ると、
「ヤッ！　おじさんが斬ったっ。――お師匠様はつよいぞっ」
こんな多量な血しおを撒いて、人間同士が獣性の上に乱舞する実際を、この少年は、生れて初めて目撃したにちがいない。
いつか城太郎は、自分も彼方の渦中にあって、体じゅうを血で塗っているかのように酔ってしまい、その異様な興奮は、彼の心臓にもんどり打たせた。
「――ざま見ろッ、どんなもんだい。おたんちん！　ひょッとこ！　おいらのお師匠様は、こんなもンだ。カアカア鴉の宝蔵院め、ざまあ見さらせ！　槍ばかり並べてやがって、手も出まい、足も出まい！」
だが、やがて彼方の形勢が一変して、それまで静観していた宝蔵院衆の槍が、俄然うごき出すと、
「あっ、いけない、総攻めだっ」
武蔵の危機！　今が最期と彼にも分った。城太郎はついに身のほども忘れてしまい、その小さい体を火の玉のように憤らせて、丘の上から一箇の岩でも転がるかのように駈け下りていた。

八

宝蔵院初代の槍法をうけて、隠れもない達人といわれる二代胤舜は、
「よしッ、やれっ」
その時、すさまじい声をもって、さっきから静観の槍先を横たえたまま、撓め切っていた十数

名の門下の坊主たちへ、号令したのである。
ぴゅうーっと、白い光はその途端に、蜂を放ったように八方へ走った。坊主あたまというものには、一種特別な剛毅と野蛮性がある。
くだ槍、片鎌、ささほ、十文字、おのおのがつかい馴れた一槍を横たえて、そのカンカチ頭とともに、血に飢えて躍ったのだ。
——ありゃあっ。
——えおうっ。
野彦を揚げて、もうその槍先の幾つかは血を塗っている。きょうこそ又とない、実地の稽古日のように。
——武蔵は、咄嗟に、
（新手！）
と感じて飛び退っていた。
（見事に死のう！）
もう疲れて霞んでいる脳裏でふとそう考え、血糊でねばる刀の柄を両手でぎゅっと持ったまま、汗と血でふさがれた眼膜をじっと瞠っていたが、彼に向って来る槍は一つもなかった。
「……や？」
どう考えてもあり得ない光景が展開されていた。茫然と、彼は、その不可思議な事実を見まわしてしまった。
なぜならば、坊主あたまの槍仕たちが、われがちに獲物を争う猟家の犬みたいに、追いまわし

てズブズブ突き刺しているのは、彼等とは、味方であるはずの牢人たちへ向ってであった。
からくも、武蔵の太刀先から逃げ退いて、ほっとしかけていた連中までが、
「待てっ」
と、呼ばれたので、まさかと思って待っていると、
「蛆虫めら」
と不意の槍先に突っかけられて、宙へ刎ね飛ばされたりした。
「やいっ、やいっ、何するんだっ、気が狂ったか。馬鹿坊主め、相手を見ろっ、相手が違うっ」
と叫んだり転げたりする者の尻を狙って、撲る者があるし、突く者があるし、また、左の頰から右の頰へ槍を突きとおして、槍を咥えられたと思い、
「離せっ」
と目刺魚みたいに振廻しているのもある。
おそろしい屠殺の行われたその瞬間の後、何ともいえないしんとした影が野を掩った。面を向けるに堪えないように、太陽にも雲がかかっていた。
みな殺しだった。あれだけいた牢人者を、一人としてこの般若野の沢から外へ洩らさなかったのである。
武蔵は、自分の眼が信じられなかった。太刀を構えていた手も、張りつめていた気も、茫然とはなりながら、弛めることができなかった。
（――何で？　彼等同士が）
まったく判断がつかないのである。いくら今、武蔵自身の人間性が、人間を離脱した血の奪い

あいに、夜叉と獣のたましいを一つに持つような体熱からまだ醒めきれないでいるにしても——余りに思いきった殺戮に眼がくらむ心地がする。

いやそう感じたのは、他人のする虐殺を見せられて、途端に、彼は本来の人間に回ってしまった証拠といえる。

同時に彼は、地中へふかく突っ込んでいるように力で硬くなっている自分の脚に、——又、自分の両手にしがみついて、オイオイ泣いている城太郎にも、ふと気がついた。

九

「初めてお目にかかる。——宮本殿といわるるか」

つかつかと歩み寄って来て、こういんぎんに礼儀をする長身白皙の僧を、目の前に見て、

「オ……」

武蔵は、われに帰って、刃を下げた。

「お見知りおき下さい。わたくしが宝蔵院の胤舜です」

「む。あなたが」

「過日は、せっかくお訪ね下された由ですが、不在の折で、残念なことをしました。——なお、そのせつは門下の阿巌が、醜しい態をお目にかけ、彼の師として胤舜も恥じ入っております」

「…………」

はてな？

武蔵は、相手のことばを、耳を洗って聞き直すように、しばらくだまっていた。

この人の言語や、言語にふさわしい立派な態度を、こちらも、礼儀をもって受け容れるには、武蔵はまず、自分の頭の中に混雑しているものから先に整えて聞かなければならなかった。

それにはまず宝蔵院衆が、何が故に、自分に向けてくるはずの槍を、遽かに逆さにして味方と信じて油断していた牢人どもを、みなごろしに刺殺してしまったのか？

その理由が、武蔵には解きようもない。意外な結果に、ただあきれているのだ。自分の生命の健在にさえあきれているのだ。

「血糊のよごれでもお洗いになって、ご休息なされい。――さ、こちらで」

胤舜は、先に歩いて、焚火のそばへ武蔵を誘ってゆく。

城太郎は、彼のたもとを離れなかった。

用意して来た奈良晒布を一反も裂いて、坊主たちは、槍を拭いていた。その坊主たちも、武蔵と胤舜が、焚火に向って膝をならべている姿を見て、すこしも不審としていない。当然のように、自分たちも、やがて打ち混じって、雑談を始めるのだった。

「――見ろ、あんなに」

一人が空を指さし、

「もう鴉のやつが、血を嗅ぎつけて、この野にあるたくさんの死骸に喉を鳴らしてやって来た」

「――降りて来ないな」

「おれたちが去れば、争って死骸へたかる」

そんな暢気な話題さえ出る。武蔵の不審は、武蔵から質問しなければ誰も語ってくれそうもない。

胤舜に向い、
「実は、拙者はあなた方こそ、今日の敵と思い、一人でもよけいに冥途へお連れ申そうと、深く覚悟していたのですが、それが却って拙者にお味方下さるのみか、どうしてかようにおもてなし賜わるのか、不審でならぬが」
すると胤舜は、笑って、
「いや貴公にお味方した覚えはない。ただすこし手荒ではござったが、奈良の大掃除をしただけのことです」
「大掃除とは」
その時、胤舜は、指を彼方へさして、
「そのことは、てまえからお話しするより、あなたをよく知っている先輩の日観師が、お目にかかって親しくお話し申すでしょう。――御覧なさい。野末のほうから、豆つぶ程な人馬の影が一群れ見えて来たでしょう。あれが、日観師と、そのほかの人々に違いありません」

十

「――老師、迅いの」
「そちらが遅いのじゃ」
「馬より迅い」
「あたりまえ」
猫背の老僧日観だけ、駒の足をしり目にかけて、自分の足で歩いていた。

般若野の煙をあてに。
その日観と前後して、五人の騎馬の役人が、かつかつと野の石ころを蹴って行く。
近づくのを見て、此方では、
「老師、老師」
と、囁きあう。
坊主たちはずっと退がって、厳かな寺院の儀式の時のように、一列に並んで、その人と、騎馬役人とを迎えた。
「片づいたかい？」
日観が、そこへ来ての最初のことばだった。
「はっ、仰せのように」
と、胤舜は師礼を執っていう。
そして、騎馬役人へ向い、
「御検視、ご苦労です」
役人たちは、順々に、鞍つぼから飛び降り、
「なんの、ご苦労なのは、其許たちの方さ。どれ一応——」
と、彼方此方に横たわっている十幾つかの死骸を見て、一寸覚えを書き留める程度の事務を執って、
「取片づけは、役所からさせる。後の事、捨ておいて、退去してよろしい」
いい渡すと、役人らは馬上へ返って、ふたたび野末へ駈け去った。

「おまえ達も戻れ」
日観が命令を下すと、槍を並べている僧列は、黙礼して野を歩みだした。それを連れて、胤舜も、師と武蔵へ、あいさつを残して帰って行った。
人が減ると、
ぎゃあアぎゃあア！
鴉の群れは、急に厚顔(あつか)ましく地上へ降りて来て、死骸へたかり、梅酢(うめず)を浴びたようになって、驚喜の翼を搏(う)っている。
「うるさい奴」
日観はつぶやきながら、武蔵のそばへ来て、気軽にいった。
「いつぞやは失礼」
「あっ、その折は……」
あわてて彼は両手をつかえた。そうせずにはいられなかった。
「お手をお上げ。野原の中で、そう慇懃(いんぎん)なのもおかしい」
「はい」
「どうじゃな、今はすこし、勉強になったか」
「仔細、お聞かせ下さいませ。どうして、こういうお計らいを？」
「もっともだ。実はの」
と、日観が話すには――
「今帰った役人たちは、奈良奉行大久保長安の与力衆でな、まだ奉行も新任、あの衆も土地に馴

れん。そこをつけ込んで、悪い牢人どもが、押し借り、強盗賭試合、ゆすり、女隠し、後家見舞、ろくなことはせん。奉行も手をやいていたものだ。——山添団八、野洲川安兵衛など、あの連中十四、五がそのグレ牢人の中心と目されていた」

「ははあ……」

「その山添、野洲川などが、おぬしに怒りを抱いた事があろう。だが、おぬしの実力を知っているので、その復讐を、宝蔵院の手でさせてやろう、こう、うまい事を彼奴らは考えた。そこで仲間を語らい、宝蔵院の悪口をいいふらし、落首など貼りちらして、それを皆、宮本の所為だと、いちいち、こっちへ告げ口に来たものだ。——わしを盲目と思うてな」

聞いている武蔵の眼は、微笑してきた。

「——よい機、この機に一つ。奈良の町の大掃除をしてくれよう。こう考えて、胤舜に策を授けたのじゃ。イヤ、よろこんだのは、門下の坊主どもと、奈良の奉行所。それからこの野原の鴉じゃった。アハハハハハ」

十一

いや欣んだのは鴉のほかにもう一人いる。日観の話をそばで聞いていた城太郎だ。これですっかり彼の疑いも危惧も一掃された。そこで、この少年は、雀躍りの羽をひろげ、彼方へ駈けて行ったと思うと、

大掃除っ

大掃除っ

と、途方もない声で唄い出したものである。

その声に、武蔵と日観が振向いてみると、城太郎は例の笑い仮面(めん)を顔にかぶり、腰なる木剣を抜いて手にかざし、そこらに算をみだしてころがっている死骸と、その死骸へむらがっている鴉の群を蹴ちらしながら乱舞している。

　なア鴉
　奈良ばかりじゃないぜ
　大掃除は時々必要だよ
　自然の理だよ
　万物が革(あらた)まるために
　生々とその下から春が来る
　落葉を焚き
　野を焼くんだ
　時々、大雪が欲しいように
　時々、大掃除もあっていいよ
　なア鴉
　おまえ達にも饗宴だ
　人間の眼玉のお吸物
　紅(あか)いどろどろのお酒
　喰べすぎて酔ッぱらうな

「おい子供っ」
日観が呼ぶと、彼は、
「はいっ」
乱舞を止めて、振向いた。
「そんな気狂いじみた真似をしておらんで石を拾え、ここへ石を拾って来い」
「こんな石でいいんですか」
「もっと沢山――」
「はい、はい」
城太郎が拾い集めて来ると、日観は、その小石の一つ一つへ南無妙法蓮華経の題目を書いて、
「さあ、これを死骸へ、撒いておやり」
といった。
城太郎は石を取って野の四方へ投げた。
その間、日観は、法衣の袖をあわせて誦経していたが、
「さあ、それでよろしい。――ではお前さん達も先へ出立するがよい。わしも奈良へ戻るとしよう」
飄然と猫背の後ろ姿を向け、もう風のように彼方へ歩み去って行く――
礼をいう遑もないし、再会の約束もいい出せなかった。何という淡々とした姿だろう。――武蔵は、そのうしろ姿を、じっと見つめていたが、何思ったかいきなり驀しぐらに追い駈けて行って、

「老師っ、お忘れ物っ」
と、刀の柄をたたいた。
日観は、足を止め、
「忘れ物とは？」
「会い難いこの世の御縁に、せっかくこうしてお目にかかったのです。どうか一手の御指南を」
すると、歯のない彼の口から、からからと枯れた人間の笑い声がひびいた。
「――まだ分らんのか。お前さんに教えることといえば、強過ぎるということしかないよ。だが、その強さを自負してゆくと、お前さんは三十歳までは生きられまい。すでに、今日生命がなかったところだ。そんなことで、自分という人間を、どう持ってゆくんじゃ」
「…………」
「きょうの働きなども、まるで成っておらぬ。若いからまアまアせんないが、強いが兵法などと考えたら大間違い。わしなど、そういう点で、まだ兵法を談じる資格はないのじゃよ。――左様、わしの先輩柳生石舟斎様、そのまた先輩の上泉伊勢守殿――そういう人たちの歩いた通りを、これから、お身もちと、歩いてみるとわかる」
「…………」
武蔵は俯向いていた。ふと、日観の声がしなくなったがと思い、顔を上げてみると、もうその人の影はなかった。

この一国

一

ここは笠置山の中にあるが、笠置村とはいわない。神戸の庄柳生谷といっている。

その柳生谷は、山村とよぶには、どこか人智の光があり、家居風俗にも整いがあった。といって、町と見るには、戸数が少なくて、浮華な色がちっともない。中国の蜀へ通う途中にでもありそうな「山市」といった趣の土地である。

この山市のまん中に、土民が「お館」と仰ぐ大きな住居があって、ここの文化も、領民の安心も、すべての中心が、その古い砦の形式を持った石垣の家にあった。そして領民は千年の昔から住み、領主も、平の将門が乱をなした大昔の頃からここに住んで、微かながら土民の上に文化を布き、弓矢の蔵を持っていた土豪である。

そしてこの地方四箇の庄を、祖先の地、自分たちの郷土として血をもって愛護していた。どんな戦禍があっても、領主と民とが迷子にはならなかった。

関ケ原の戦後、すぐ近い奈良の町は、あのとおり浮浪人に占領され、浮浪人の運びこんだ悪文化に風靡されて、七堂伽藍の法燈も荒れわびてしまったが、この柳生谷から笠置地方には、そんな不逞分子はさがしても入り込んで来ていない。

その一例を見ても、いかにこの辺の郷土がそんな不純を入れない気風と制度を持っているかが窺えるのである。

領主がよくて領民がよいばかりではない、朝夕の笠置の山はきれいだし、水は茶に汲んで飲むと甘味い。――それからまた梅花の月ケ瀬が近くにあるので、鶯の音は雪の解けない頃から、雷鳴の多い季節まで絶えることはなく、その音色はまた、この山の水よりも清い。

詩人は、――英雄生ル所山河清シ、といったが、こんな郷土から、もし一人の偉人でも生まれなかったら、詩人は嘘つきといってよいし、ここの山河は、ただ美しいのみで不産女の風景といってもいい。でなければ郷土の血液がよほど頑愚か、どっちかであるが、やはりここには人傑が出ていた。領主の柳生家の血が証拠だてている。また、畑から出て、軍のたびに功を立て、よい家臣となって随身している家中にも、優れた人物がすくなくない。それはみなこの柳生谷の山河と鶯の音が産んだ英雄といえるのである。

今はその「石垣のお館」には、隠居された柳生新左衛門尉宗厳が、名も石舟斎と簡素に改めてしまって、城からすこし奥の小やかな山荘にかくれ、政務を執る表のほうには、誰が今、家督の任に当っているのか分らないが、石舟斎には、いい子どもや孫がたくさんにあるし、家臣にも頼み甲斐ある者が多いから、石舟斎が民を見ていた時代となんの変りもなかった。

「ふしぎだ」

武蔵が、ここの地を踏んだのは般若野のことがあってから十日ほど後であった。附近の笠置寺とか浄瑠璃寺とか、建武の遺跡などを探って、宿も、どこかへ取り、充分に心身の静養もして、その宿から散歩のていで出かけて来たものらしく、ほんの着流しであり、いつもの如く腰に取ッ

ついている城太郎も、藁草履を穿いていた。
民家の生活を見、畑の作物をながめ、また往きあう者の風俗に注意し、そのたびに、武蔵が、
「ふしぎだ」
何度も呟くので、
「おじさん、何がふしぎ？」
と、城太郎はむしろ武蔵の呟きこそ、不思議として、こう訊ねた。

二

「中国を出て、摂津、河内、和泉と諸国を見て来たが、おれはまだこんな国のあることを知らなかった。――そこで不思議といったのだよ」
「おじさん、どこがそんなに違っているの」
「山に樹が多い」
城太郎は、武蔵のことばに、吹き出して、
「樹なんか、どこにだって沢山生えているぜ」
「その樹が違う。この柳生谷四箇の庄の山は、みな樹齢が経っている。これはこの国が、兵火にかかっていない証拠だ。敵の濫伐をうけていない証だ。また、領主や民が、飢えたことのない歴史をも物語っている」
「それから」
「畑が青い。麦の根がよく踏んである。戸毎には、糸をつむぐ音がするし、百姓は、道をゆく他

国の者の贅沢な身装（みなり）を見ても、さもしい眼をして、仕事の手を休めたりしない」
「それだけ？」
「まだある。ほかの国とちがって、畑に若い娘が多く見える。――畑に紅い帯が多く見えるのはこの国の若い女が、他国へ流れ出ていない証拠だろう。だからこの国は、経済にも豊かで、子供はすこやかに育てられ、老人は尊敬され、若い男女は、どんなことがあっても他国へ走って、浮いた生活をしようとは思わない。従って、ここの領主の内福なことも分るし、武器の庫（くら）には、槍鉄砲がいつでも研（みが）きぬいてあるだろうという想像もつく」
「なんだ、なにを感心しているのかと思ったら、そんなつまらないことか」
「おまえには面白くあるまいな」
「だって、おじさんは、柳生家の者と試合をするために、この柳生谷へ来たんじゃないか」
「武者修行というものは、何も試合をして歩くだけが能じゃない。一宿一飯にありつきながら、木刀をかついで、叩き合いばかりして歩いているのは、あれは武者修行でなくて、渡り者という輩（やから）、ほんとの武者修行と申すのは、そういう武技よりは心の修行をすることだ。また、諸国の地理水利を測り、土民の人情や気風をおぼえ、領主と民のあいだがどう行っているか、城下から城内の奥まで見きわめる用意をもって、海内隈（くま）なく脚で踏んで心で観（み）て歩くのが、武者修行というものだよ」
まだ幼稚な者に向って、説いても無益と思いながら、武蔵には、少年に対しても、よいほどにものを誤魔化（ごまか）しておくということができない。
城太郎の諄（くど）いような質問にも、面倒な顔もせず頻りと、噛んで含めるように答えてやりながら

歩いていた。——すると二人の背後へいつの間にか近づいていた馬蹄の音があって、その馬上から恰幅のよい四十がらみの侍が、
「傍へ。傍へ」
声をかけて、通り越した。
ひょいと、その鞍の上を仰いで城太郎は、
「あっ、庄田さんだ」
と、口走った。
その侍の顔が、熊のようなあご髯を持っているので、城太郎は忘れていなかった。——宇治橋へかかる大和路の途中で、紛失したと思った手紙の竹筒を拾ってくれたあの人なのだ。彼の声に、馬上の庄田喜左衛門も気がついたとみえ、振顧って、
「おう、小僧か」
ニコと笑ったが、そのまま駒をすすめ、柳生家の石垣の内へかくれてしまった。

三

「城太郎、今、馬の上からお前を見て笑ったお人、あれは誰だ」
「庄田さんて——柳生様の家来だって」
「どうして知っているのか」
「いつか、奈良へ来る途中、いろいろ親切にしてくれたから」
「ふム」

「ほかに、何とかいう女の人とも道連れになって、木津川渡舟までおらと三人、一しょに歩いて来たのさ」

小柳生城の外形と、柳生谷の土地がらを一巡見て歩いて、武蔵はやがて、

「帰ろう」

と、元の方角へ足を向ける。

旅籠は、たった一軒だが、大きなのがあった。伊賀街道に当っているし、浄瑠璃寺や笠置寺へゆく人たちも泊るので、夕方になると、そこの入口の立樹や、廂の下には、必ず十頭くらいの荷駄馬がつながれ、夥しい米を炊ぐため、米の磨ぎ水が前の流れを白く濁していた。

「旦那はん、どこへ行きなされた?」

部屋へ入ると、紺の筒袖に、山袴を穿き、帯だけが赤いので、これは女の子だと分る女の子が、突っ立ったままで、

「すぐ風呂に入りなされ」

という。

城太郎は、ちょうどよい年頃の友達を見つけたように、

「おめえ、何てえ名だい」

「知らんが」

「阿呆、自分の名を」

「小茶ってんだよ」

「変な名」

「大きにお世話」
小茶が、打つと、
「打ったな」
武蔵は廊下から振向いて、
「おい、小茶ちゃん、風呂場はどこだ。――先の右側か、よしよしわかる」
板の間の棚に、三人分の衣服が脱いであった。武蔵のを加えて四人分になる。戸をあけて、湯気の中へ入ってみると、先に入っていた客たちは、何か陽気に話していたが、彼の逞しい裸体を仰いで、異分子を見るように、口をつぐんだ。
「むーム」
武蔵の六尺に近い体を沈め込むと、湯槽の湯は、外で細い脛を洗っている三名を浮かして流すほど、溢れ出した。
「？……」
一人が、武蔵のほうを振り向いた。武蔵は湯槽のふちを枕にして、眼をつむっている。
そこで、すこし安心したのか、三名は途絶えていた話のつづきに入って――
「なんといったかな、先程参った柳生家の用人は」
「庄田喜左衛門だろう」
「そうか。――柳生も用人を使いに立てて試合を断るようでは、名ほどのこともないと見えるぞ」
「誰に対しても、近頃は、あの用人がいったように、石舟斎は隠居、但馬守儀は、江戸表へ出府

中につき――という口上で、試合を謝絶しているのだろうか」
「いや、そうじゃあるまい。こちらが、吉岡家の次男と聞いて、大事を取り、敬遠したに相違ないさ」
「御旅中のお慰(なぐさ)みにと菓子など持たせて寄こしたところは、柳生もなかなか如才ないではないか」
背中の色が白い。筋肉がやわらかい。皆、都会人とみえ、洗煉された会話の遣り取りのうちに、理智があり、冗戯があり、細かい神経も働いている。
(……吉岡？)
ふと耳に入ったので、武蔵は何気なく湯槽(ゆぶね)から首を曲げた。

四

吉岡の次男といえば、清十郎の弟伝七郎のことだが？
(それかな)
と、武蔵は注意していた。
自分が四条道場を訪ねた時、門人か誰かが御舎弟の伝七郎どのは、友人と伊勢参宮へ参って留守であるといっていた。――この旅の戻り途(みち)とすれば、あるいは、こう三名の者が、その伝七郎と友人の一行かも知れない。
(おれは湯槽がよく祟(たた)る)
武蔵は心のうちで戒(いまし)めていた。――郷里の宮本村ではかつて本位田又八の母のお杉隠居に計ら

れて、浴室で敵につつまれたことがあるし、今はまた、宿怨ただならぬ仲の吉岡拳法の一子と、偶然にも、素裸で会う機会につかまってしまった。
旅に出ていたとはいえ、おそらくは、京都の四条道場での自分とのいきさつを、耳にしているに相違ない。——ここで自分を宮本と知ったら、すぐ板戸一枚向うにある刀を取って物をいい出すだろう。
武蔵は一応そう考えたのだ。しかし、三名のほうには一向そういう気ぶりはない。得意になって話している様子から察すると、何でもこの土地へ着くと早速、柳生家へ書面を持たせてやったものらしい。吉岡といえば、足利公方からの名門ではあり、今の石舟斎が宗厳といっていた頃から、先代の拳法とは多少の交わりもあったらしいので、柳生家でも捨ててもおけず、用人庄田喜左衛門に旅の見舞を持たせて、この旅籠へあいさつによこしたものと思われる。
その礼儀に対して、この若い都会人たちは、
（柳生も、如才ない）
とか、
（怖れをなして敬遠した）
とか、
（大した人物もいないらしい）
とかいう風に、自己満足な解釈を下して、得々と、旅の垢を洗っている——
今し方、親しく足で踏んで、小柳生城の外廓から、土俗人情を実地に見て来ている武蔵にとっては、彼等のそうした得意さと勝手な受け取り方が、笑止でならなかった。

井の中の蛙という諺があるが、ここにいる都の小せがれどもは、大海の都会に住んでいて、移りゆく時勢を広く見ているくせに、却って、井の中の蛙が誰も知らないうちに涵養していた力の深さや偉大さを少しも考えてみない。中央の勢力と、その盛衰から離れて、深い井泉の底に、何十年も、月を映し、落葉を浮かべ、変哲もない田舎暮らしの芋食い武士と思っているまに、この柳生家という古井戸からは、近世になって、兵法の大祖として石舟斎宗厳を出し、その子には、家康に認められた但馬守宗矩を生み、その兄たちには、勇猛の聞え高い五郎左衛門や厳勝などを出し、また孫には、加藤清正に懇望されて肥後へ高禄でよばれて行った麒麟児の兵庫利厳などという「偉大なる蛙」をたくさんに時勢の中へ送っている。

兵法の家として、吉岡家と柳生家とでは、比べものにならないほど吉岡家のほうが格式が高かったものである。けれど、それは昨日までのことだった。――それをまだ、ここにいる伝七郎や他の手合は気がつかない。

武蔵は、彼等の得意さが、おかしくもあり、気の毒にも思えた。

で――つい苦笑が顔にのぼりかける。彼はそれに困って、浴室の隅にある筧の下にゆき、髪の元結を解いて、一塊の粘土を毛の根にこすり、久しぶりで、ざぶざぶと髪を洗いほぐした。

その間に、

「ああいい気持」

「旅ごこちは、湯上がりの、この一刻にあるな」

「女の酌で、晩に飲むのは」

「なおいい」

などと三名は、体を拭いて、先へ上がって行った。

五

洗った濡れ髪を手拭で縛って、部屋に帰ってみると、男みたいな女の子の小茶ちゃんが隅で泣いているので、武蔵は、
「おや、どうした？」
「旦那はん、あの子が、あたいをこんなに撲ったの」
「嘘だい！」
と、向うの隅から城太郎が異議をいって膨れる。
「なぜ女などを打つ」
武蔵が叱ると、
「だって、そのおたんこ茄子が、おじさんのことを、弱いっていったからさ」
「嘘、嘘」
「いったじゃないか」
「旦那はんのことを弱いって、誰もいいはしないよ。おまえが、おらのお師匠様は日本一の兵法家で般若野で何十人も牢人を斬ったなんて、あんまり自慢して威張るから、日本一の剣術の先生は、ここの御領主様のほかにないよといったら、何をって、あたいの頬を撲ったんじゃないか」
武蔵は、笑って、
「そうか、悪い奴だ。後で叱っておくから、小茶ちゃん、勘弁してやれ」

城太郎は、不服らしい。
「おい」
「はい」
「湯に入ってこい」
「お湯はきらいだ」
「おれと似ているな。だが、汗くさくていかん」
「明日、河へ行って泳ぐ」
日が経って馴れるにつれ、この少年の生れつきにある強情な性格は、だんだん芽を伸ばしていた。
だが、武蔵は、そこも好きだった。
膳につく。
まだ膨れている。
盆を持って給仕している小茶も口もきかない。睨めっこなのだ。
武蔵も、この数日は、思うことがあって、とかく心がそれに囚われている。彼の胸にある宿題は、一介の放浪者としては少し大望であり過ぎた。しかし、不可能でないと彼は信じるのだ。そのためにこうして一つ旅籠に逗留をかさねているのでもあった。
望みというのは、
（柳生家の大祖、石舟斎宗厳と会ってみたい）
と、いうことである。

なお烈しくいえば――彼の若い野望の燃ゆるままを言葉に移していうならば――
（どうせ打つかるなら大敵に当れである。大柳生の名を仆すか、自分の剣名に黒点をつけられるか、死を賭してもよい、柳生宗厳に面接して、一太刀打ち込まねば、刀を把る道に志したかいもない）
もし第三者があって、彼のこういう志望を聞いたら、無謀といって笑うだろう。武蔵自身も、その程度の常識はないことは決してない。
小さくても、先は一城の主である。その子息は、江戸幕府の兵法師範であり、一族はみな典型的な武人であるのみでなく、どことなく新しい時代の潮にのり出している旺んなる家運が、柳生家というものの上には今、輝いているのだ。
（――凡は打つかれない）
武蔵も、それだけの準備は心でしていた。飯を噛む間もしているのである。

芍薬の使者

一

鶴のような老人である。もう八十歳にかかっているが、品位は年と共について、高士の風をそなえているし、歯も達者、眼も御自慢なのだ。

「百歳までは生きる」
と、常にいっている。
それというのも、この石舟斎には、
「柳生家は代々が長寿じゃ。二十歳だい、三十だいで死んだのは、みな戦場で終ったものばかり。畳の上ではどの先祖も、五十や六十で死んだのはない」
という信念があるからだ。
いや、そういう血統でないにしても、石舟斎のような処世と老後を心がければ、百歳くらい生きるのは当りまえにも思われる。
享禄、天文、弘治、永禄、元亀、天正、文禄、慶長――とこう長い乱世の中を生きて来て、殊に四十七歳までの壮年期は、三好党の乱だの、足利氏の没落だの、松永氏や織田氏の興亡だのに、この地方にあっても、弓矢を措く遑はなかったのであるが、自分でも、
「ふしぎと死ななかった」と、いっている。
四十七歳からは、何に感じたのか、一切弓矢を取らず、たとえば足利将軍の義昭が、好餌をもって誘っても、信長がしきりと招いても、豊臣氏が赫々と覇威を四海にあまねくしても、その大坂、京都のつい鼻の先にいながら、この人物は、
(わしは、つんぼでござる、唖でござる)
というように、世の中から韜晦して、穴熊のように、この山間の三千石を後生大事に守って出なかった。
後に、人に語って、

「よく持って来たものじゃ。朝あって夕のわからぬ治乱興亡の間を、こんな小城一つが、ぽつねんと、今日まで無事にあるということは、戦国の奇蹟じゃないか――」

と、石舟斎はよくいった。

なるほど――

聞く者は、彼の達見にみな感服した。足利義昭についていれば信長に討たれたろうし、信長に従っていれば秀吉との間はどうなったか知れず、秀吉の恩顧をうけていれば、当然、その後の関ケ原には、家康にしてやられている。

また、その興亡の波を、うまく切りぬけて、無事に家系を支えようとするには、恥も外聞もなく、きょうは彼の味方と見せて、明日は彼を裏切り、節操なく、意地もなく、或る場合には、一族や血縁にすら、弓も引こう血も見よう、というくらいな武士道以外なつよさも持たなければ不可能なのである。

「わしには、それが出来ん」

と、石舟斎がいうのは、ほんとであろう。

そこで、彼が居間には、

　世をわたる業のなきゆゑ
　兵法を隠れ家とのみ
　たのむ身なれや

と自詠の一首が、懐紙に書かれて、壁の茶掛となっている。

だが、この老子的な達人も、家康が礼を厚うして招くに至ると、

(懇招、黙し難し——)

と呟いて、何十年間の道境三昧の廬を出て、京都紫竹村の鷹ケ峰の陣屋で、初めて、大御所に謁したのであった。

その時、つれて行ったのが、五男又右衛門宗矩、その年二十四歳、孫の新次郎利厳が、まだ十六歳の前髪。

こう二人の鳳雛の手をつれて、家康に謁した。そして、旧領三千石安堵の墨付と共に、

「以後、徳川家の兵法所へ仕えるように」

と、家康がいうと、

「何とぞ、せがれ宗矩を」

と、子を推挙して、自分は又、柳生谷の山荘へ退き籠ってしまった。そして子の又右衛門宗矩が、将軍家指南番として、江戸表へ出ることになった折に、この老龍が授けたものは、いわゆる技や力の剣術ではなく、

(世を治むるの兵法)

であった。

二

彼の「世を治むるの兵法」は、また彼の「身を修むるの兵法」でもあった。

石舟斎はそれを、

「これ皆、師の御恩」

と常にいって、ひたすら上泉伊勢守信綱の徳を忘れなかった。
「伊勢殿こそ柳生家の護り神ぞや」
口ぐせに、彼のいうとおり、彼の居間の棚には、常に、伊勢守から受けた新陰流の印可と、四巻の古目録とが奉じてあり、忌日には、膳を供えて祠ることも忘れなかった。
その四巻の古目録というのは、一名絵目録ともいって、上泉伊勢守が自筆で、新陰流の秘し太刀を、絵と文章で書いたものであった。
時折、石舟斎は、老後になっても、それを繰りひろげて、偲ぶのであった。
「絵も妙手でおわした」
いつもふしぎに衝たれるのが、その絵であった。天文時代の風俗をすがたに持った人物と人物とが、颯爽と、あらゆる太刀の形を取って、白刃の斬合をしている図――それをながめていると、神韻縹渺として、山荘の軒に、霧の迫ってくる心地がするのである。
伊勢守が、この小柳生城へ訪ねて来たのは、石舟斎がまだ兵馬の野心勃々としていた三十七、八歳のころだった。
そのころ、上泉伊勢守は、甥の疋田文五郎という者と、老弟の鈴木意伯をつれ、諸国の兵法家を求めて遊歴していたもので、それがふと伊勢の太の御所といわれる北畠具教の紹介で、宝蔵院に見え、宝蔵院の覚禅房胤栄は、小柳生城に出入りしていたので、
「こんな男が来たが」
と、石舟斎――その頃は、まだ柳生宗厳と称っていた彼へ話した。
それが、機縁だった。

伊勢守と宗厳は、三日に亙って、試合をした。
第一日、起ち合うと、
「とりますぞ」
伊勢守は、打つ所を明言しておいて、言葉のとおり打ちこんだ。
第二日も、同じように敗けた。
宗厳は、自尊を傷つけられた、次の日は工夫を凝らし、精神を潜めて、体の形も変えた。
すると伊勢守は、
「それは悪い、それでは、こう取る」
といって、忽ち、前の二日と同じように、指摘した所へ太刀を与えた。
宗厳は、我執の太刀をすてて、
「初めて、兵法を観た」
といった。
それから半歳の間、強って、伊勢守を小柳生城にひきとめて、一心に教わった。
伊勢守は、永くはと、袂を分つ折に、
「まだまだ私の兵法などは未完成なものです。あなたは若い、私の未完成を完成してみるがよい」
こういって、一つの公案を授けて行った。その公案――問題というのは、
無刀の太刀如何？
という工夫であった。

宗厳は、以来数年間、無刀の理法を考えつめた。寝食をわすれて、研鑽した。
後、伊勢守がふたたび彼を訪れた時には、彼の眉は明るかった。
「いかがあろうか」
と、試合うと、
「む！」
伊勢守は、一目見て、
「もうあなたと太刀打はむだなことである。あなたは、真理をつかまれた」
そういって、印可、絵目録四巻を残して去った。
柳生流は、ここから誕生し、また、石舟斎宗厳の晩年の韜晦も、この兵法が生んだところの一流の処世術であったのである。

三

今、彼の住んでいる山荘は、もちろん小柳生城の中ではあるが、砦作りの頑丈な建築は、石舟斎の老後の心境にはぴったりしないので、べつに、簡素な一草庵を建て、入口もべつにして、まったく一箇の山中人の生活に余生を楽しんでいる。
「お通、どうじゃの、わしが挿けた花は生きておろうが」
伊賀の壺に、一輪の芍薬を投げ入れて、石舟斎は、自分の挿けた花に見惚れていた。
「ほんに……」
と、お通はうしろから拝見している。

「大殿さまは、よほど茶道もお花もお習いになったのでしょう」
「うそを申せ、わしは公卿じゃなし、挿花や香道の師についたことはない」
「でも、そう見えますもの」
「なんの、挿花を生けるのも、わしは剣道で生けるのじゃ」
「ま」
彼女は、驚いた目をして、
「剣道で挿花が生けられましょうか」
「生かるとも。花を生けるにも、気で生ける。指の先で曲げたり、花の首を縊めたりはせんのじゃ。野に咲くすがたを持って来て、こう気をもって水へ投げ入れる。——だからまずこの通り、花は死んでいない」
この人のそばにいてから、お通はいろいろなことを教えられた気がする。
——ほんの道ばたで知り合ったというだけの縁で、この柳生家の用人である庄田喜左衛門に、無聊な大殿へ、笛の一曲をと望まれて従いて来たのであったが——
その笛が、ひどく、石舟斎の気に入ったものか、また、この山荘にも、お通のような若い女のやわらかさが一点はあって欲しいと思われたのか、お通が、
「お暇を」
といい出しても、
「まあ、もう少しおれ」
とか、

「わしが茶を教えてやる」
とか、
「和歌をやるか。では、わしにもすこし古今調を手ほどきしてくれい。万葉もよいが、いっそこう侘びた草庵の主になってみると、やはり山家集あたりの淡々としたところがよいの」
などといって、離したがらないし、お通もまた、
「大殿さまには、かようなお頭巾がよかろうと思って縫ってみました。おつむりへお用い遊ばしますか」
武骨な男の家来たちには、気のつかない細やかさを尽すので、
「ほう、これはよい」
その頭巾をかぶり、またとない者のように、お通を可愛がるのであった。
月の夜にはよく、彼女がそこでお聴きに入れる笛の音が、小柳生城の表のほうまで聞えて来た。
庄田喜左衛門は、
「飛んだお気に入って——」
と自分までが、拾い物をしたように、欣しく思っていた。
喜左衛門は今、城下から戻って来て、古い砦の奥の林を抜け、大殿の静かな山荘をそっとのぞいた。
「お通どの」
「はい」

柴折(しおり)を開けて、
「まあ、これは。……さあどうぞ」
「大殿は」
「御書見でいらっしゃいます」
「ちょっと、お取次ぎ下さい。――喜左衛門、ただ今、お使いから戻りましたと」

四

「ホホホ。庄田様、それはあべこべでございます」
「なぜ」
「わたくしは、外から呼ばれて参っている笛吹きの女、あなたは柳生家の御用人さま」
「なる程」
喜左衛門も、おかしくなったが、
「しかしここは、大殿だけのお住居、そなたはべつなお扱いじゃ――とにかくお取次を」
「はい」
と、奥へ行ってすぐ、
「どうぞ」
と、迎え直す。
お通の縫った頭巾を被(かぶ)って、石舟斎は茶室に坐っていた。
「行って来たか」

「仰せのように致して参りました。ていねいに、お言葉を伝え、お表からとして、菓子を持参いたしました」
「もう立ったか」
「ところが、てまえがお城へ戻るとまた、すぐ追いかけて、旅籠の綿屋から書面を持たせてよこし、折角の途上、曲げても、小柳生城の道場を拝見して参りたいから、明日はぜひとも、城内へお訪ねする。また、石舟斎様にも親しくお目にかかって、御あいさつしたいというのでござります」
「小せがれめ」
石舟斎は舌打ちして、
「うるさいの」
不興な顔をした。
「宗矩は江戸、利厳は熊本、そのほか皆不在と、よくいったのか」
「申しましたのです」
「こちらから、鄭重に断りの使者までつかわしたに、押しつけがましゅう、強って訪ねてくるとは、嫌な奴だ」
「なんとも……」
「うわさの通り吉岡の伜どもは、あまり出来がよくないとみえる」
「綿屋で会いました。あそこに、伊勢詣りの戻りとかで滞在中の伝七郎という人、やはり人品がおもしろう御座いませぬ」

「そうじゃろう、吉岡も先代の拳法という人間は相当なものだった。伊勢殿とともに、入洛の折は、二、三度会うて、酒など酌み交わしたこともある。――が、近ごろはとんと零落の様子、その息子とあるがゆえに、見くびって、門前ばらいも済まぬ、というて、気負うている若い小せがれに、試合を挑まれて、柳生家が叩いて帰しても始まらぬ」
「伝七郎とかいう者、なかなか自信があるらしゅうございます。強って、来るというのですから、私でも、あしらってつかわしましょうか」
「いや、止せ止せ。名家の子というものは、自尊心がつよくて、ひがみやすい。打ち叩いて帰したら、ろくな事をいい触らしはせん。わしなどは、超然じゃが、宗矩や利厳のためにならぬ」
「では如何いたしましょうか」
「やはり、ものやわらかに、名家の子らしゅう扱って、あやして帰すに如くはない。……そうじゃ、男どもの使者ではかどが立つ」
　お通のすがたを振向いて、
「使いには、そなたがよいな、女がよい」
「はい、行って参りましょう」
「いや、すぐには及ぶまい。……明朝でいい」
　石舟斎は、さらさらと茶人らしい簡単な手紙を書き、それを、先刻、壺へ挿けた芍薬の残りの一枝へ、結び文にして、
「これを持って、石舟斎事、ちと風邪心地のため、代ってお答えに参りましたと、小せがれの挨拶をうけて来い」

五

なお石舟斎から、使いの口上を授かって、お通は、次の日の朝、
「では、行って参ります」
被衣して、山荘を出た。
外曲輪の厩をのぞき、
「あの……お馬を一頭お借りして参ります」
そこらを掃除していた厩方の小者が、
「おや、お通さん。――どちらまで？」
「お城下の綿屋という旅籠まで、大殿のお使者に参ります」
「では、お供いたしましょう」
「それには及びませぬ」
「だいじょうぶで？」
「馬は好きです。田舎にいた頃から、野馬に馴れておりますから」
褪紅色の被衣が、駒のうえに自然な姿で揺られて行った。
被衣は、都会ではもう旧い服装として、上流のあいだでも廃っていたが、地方の土豪や中流の女子にはまだ好ましがられていた。
ほころびかけた白芍薬の一枝に石舟斎の手紙が結んである、それを持って、片手で軽く手綱をさばいてゆく彼女のすがたを見ると、

と、畑の者は見送っていた。
「あの人がお通様か」
「お通様がとおる」
わずかな間に、彼女の名が、畑の者にまでこう知れ渡っているわけは、畑の者と石舟斎とが、百姓と領主というような窮屈な関係でなく、非常に親しみぶかい間がらにあるので、その大殿のそばに近ごろ、笛をよくする美しい女が侍いているということから、彼らの石舟斎に対する尊敬と親密が、従って、彼女にまで及ぼしている実証であった。
半里ほど来て、
「綿屋という旅籠は？」
駒の上から、農家の女房に聞くと、その女房がまた、子供を背負って、流れで鍋の尻を洗っていたのに、
「綿屋へ行かっしゃれますか。わしが、ご案内いたしますべ」
用をすてて、先へ駈けるので、
「もし、わざわざ来て下さらなくても、およそ口で仰っしゃって下さればようございますのに」
「なに、すぐそこだがな」
そのすぐそこが十町もあった。
「此家だがな、綿屋さんは」
「ありがとう」
降りて、軒先の樹に、駒をつないでいると、

「いらっしゃいまし。お泊りですか」

と、小茶ちゃんが出てくる。

「いいえ、こちらに泊っている吉岡伝七郎様を訪ねて来たのです。——石舟斎様のお使いで」

小茶ちゃんは駈けこんで、やがて戻って来ると、

「どうぞ、お上がり下さい」

折から今朝宿を立つので騒々とそこで草鞋を穿いたり、荷を肩にしていた旅人たちは、

「何家の？」

「誰のお客」

小茶ちゃんに尾いて奥へ通ってゆく彼女の鄙に稀れな眉目と、どことなく、臈たけているとでもいうか、品のあるすがたに、眼と囁きを送っていた。

ゆうべ遅くまで飲んで、今し方やっと起き出した所の吉岡伝七郎とその連れの者は、小柳生城からの使いと聞き、またきのうの熊みたいな顎鬚の持主かと期していると、思いのほかな使者と、その使者の携えている白芍薬の枝を見て、

「や、これは。……こんな取り散らかしている所へ」

と、ひどく恐縮顔をして、部屋の殺風景へ気をつかうばかりでなく、自分たちの衣紋や膝も、遽に改めて、

「さ、こちらへ、こちらへ」

六

「小柳生の大殿から、申しつかって来た者でござりますが」
お通は、芍薬の一枝を、伝七郎のまえにさし置いて、
「おひらき下さいませ」
「ほ。……このお文」
伝七郎は解いて、
「拝見いたす」
一尺にも足らない手紙である。茶の味とでもいおうか、さらさらと墨も淡く、

御会しゃく、度々、痛み入り候、老生、あいにく先頃より風邪ぎみ、年老りの水ばなよりは、清純一枝の芍薬こそ、諸君子の旅情を慰め申すに足るべく、被存れ候まま、花に花持たせて、お詫びにつかわし候。
老い籠りの身は世の外に深う沈みて、顔浮かみ出すも、もの憂や。
御憫笑御憫笑　　石舟斎
伝七郎どの
ほか諸大雅

「ふム……」
つまらなそうに鼻を鳴らし、手紙を巻いて、
「これだけでござるか」

「それから——かように大殿のおことばでございました。せめて、粗茶の一ぷくなりとさし上げたいのですが、家中武骨者ぞろいで、心ききたる者はいず、折わるく子息宗矩も、江戸表へ出府の折、粗略あっては、都の方々へ、かえってお笑いのたね、また失礼。いずれまたのおついでの節にはと——」
「ははあ」
不審顔を作って、
「仰せによると、石舟斎どのは、何か、吾々が茶事のお手前でも所望したように受け取っておられるらしいが、それがしどもは、武門の子、茶事などは解さんのでござる。お望み申したのは、石舟斎どののご健存を見、ついでに御指南を願ったつもりであるが」
「よう、ご承知でいらっしゃいます。したが、近頃は、風月を友にして、余生をお送りあそばしているお体、何かにつけ、茶事に託してものを仰っしゃるのが癖なのでございまする」
「ぜひがない」
と、苦々しく、
「では、いずれまた、再遊のせつには、ぜひともお目にかかると、お伝えください」
と伝七郎が、芍薬の枝をつきもどすと、お通は、
「あの、これは、道中のお慰みに、お駕なれば駕の端へ、馬なれば鞍のどこぞへでも挿して、お持ち帰り下さるようにと、大殿のおことばでございましたが」
「なに、これを土産にだと」
眼を落して、辱められでもしたように、憤っと色をなして、

「ば、ばかな。芍薬は京にも咲いているといってくれい」
――そう断られる物を、強いて、押しつけてゆくわけにもゆかないので、お通は、
「では帰りました上、そのように、……」
芍薬を持ち、腫れ物の膏薬を剝ぐように、そっとあいさつして、廊下へ出た。
よほど不快だったとみえ、送って来る者もない。お通は、それを背に感じて、廊下へ出ると、くすりと笑った。
同じ廊下の幾間かを隔てた先の一室には、もうこの土地へ来て十日余りになる武蔵が泊っていたのである。彼女が、その黒光りに艶の出ている廊下を横に見て、反対に表のほうへ出て行こうとすると、ふと、武蔵の部屋から、誰か起って、廊下へ出て来た。

七

ばたばたと追いかけて来て、
「もうお帰りですか」
お通が、振り顧ってみると、上がる時にも、案内に立った小茶ちゃんである。
「え。御用がすみましたから」
「早いんですね」
世辞をいって――彼女の手をのぞいて、
「この芍薬、白い花が咲くんですか」
「そうです、お城の白芍薬ですの、ほしいならば上げましょうか」

「下さい」
と手を出す。
その手へ、芍薬をのせて、
「左様なら」
彼女は、軒先から駒の背に乗って、ひらりと、被衣にすがたを包んだ。
「またいらっしゃいませ」
小茶ちゃんは見送ってから、旅籠の雇人たちに、白芍薬を見せびらかしたが、誰も、よい花だとも美しいともいってくれないので、やや失望しながら、武蔵の部屋へ持って来て、
「旦那はん、花お好き」
「花」
窓に頰づえをついて、彼は、小柳生城のほうを今も見つめていたのである。
(——どうしたらあの大身に接近できるか。どうしたら石舟斎に会えるか。また、どうしたら剣聖といわれるあの老龍に一撃与えることができるか)
を、遠心的な眼が、じっと考えつめていた。
「……ほ、よい花だな」
「好き」
「好きだ」
「芍薬ですって。——白い芍薬」
「ちょうどよい。そこの壺に挿しておくれ」

「あたいには挿せない。旦那はん挿して」
「いや、おまえがいいのだ。無心が却っていい」
「じゃあ、水を入れてくる」
小茶ちゃんは、壺をかかえて出て行った。
武蔵はふとそこへ置いて行った芍薬の枝の切り口に眼をとめて、小首をかしげた。何が彼の注意をひいたのか、じっと見ていた果てには手をのばし、それを寄せ、その花を見るのではなく、枝の切り口を飽かずに見ている。
「……あら、……あら、あら」
自分でこぼして歩く壺の水に、こう声をかけながら、小茶ちゃんは戻って来て、壺を床の間に置き、無造作に、それへ芍薬を入れてみたが、
「だめだア、旦那はん」
子ども心にも、不自然をさけぶ。
「なるほど、枝が長すぎるな。よし、持ってこい、ちょうどよく切ってやるから」
小茶ちゃんが抜いてくると、
「切ってあげるから、壺へ立てて、そうそう地に咲いているように、立てて持っておいで」
いわれる通り、小茶ちゃんは持っていたが突然、きゃッといって、芍薬を抛り捨て、脅えたように泣きだした。
無理のないことであった。
やさしい花の枝を切るのに武蔵の切り方は余り大げさであった。――それは眼に見えないほど

早かったにせよ、いきなり前差の小刀(しょうとう)へ手をかけたと思うと、ヤッ――とするどい声と、そして、刀をパチンとその鞘へ納める音と殆ど一緒に白い光が、小茶ちゃんの持っていた手と手のあいだを、通りぬけていたのである。

吃驚(びっくり)して彼女が泣き出しているというのに、武蔵は、それを宥(なだ)めようとはせず、自分のした切り口と元の切り口と、二つの枝を両手に取って、

「ウーム……」

じっと、見くらべているのだった。

八

ややあって、武蔵は、

「ア、済まない、済まない」

泣きじゃくっている小茶ちゃんの頭を撫で、心をくだいて、謝ったり、機嫌をとったりして、

「この花は、誰が切って来たのか知らないか」

「もらったの」

「誰に」

「お城の人に」

「小柳生城の家中か」

「いいえ女の人」

「ふウム。……では城内に咲いていた花だの」
「そうだろ」
「悪かった、後でおじさんが菓子を買おう、今度はちょうどよい筈だから、壺へ挿してごらん」
「こう？」
「そうそう、それでよい」
おもしろいおじさんと馴ついていた武蔵が、小茶ちゃんは、刀の光を見てから、急に怖くなったらしい。それがすむとすぐ、部屋に見えなくなった。
武蔵は、床に微笑している芍薬の花よりも、膝の前に落ちている枝の根元七寸程の切れ端へ、まだ眼も心も奪われていた。
その元の切り口は、鋏で剪ったのでもないし、小刀とも思われない。幹は柔軟な芍薬のそれではあるが、やはり相当な腰の刀を用いて切ってあるものと武蔵は見たのである。
それも、生やさしい切り方ではないのだ。わずかな木口であるが切り人の非凡な手の冴えが光っている。
試みに、武蔵は、自分もそれに倣って腰の刀で切って見たのであるが、こう較べて、細やかに見ると、やはり違っている。どこがどうと指摘できないが、自分の切り口には、遙かに劣るものを正直に感じるのだった。――たとえば一個の仏像を彫るのに、同じ一刀を用いても、その一刀の痕には、明らかに、名匠と凡工の鑿のちがいが分るように。
「はてな？」
彼は、独り思う。

「城内の庭廻りの侍にすら、これほどな手腕のものがいるとすると、柳生家の実体は、世間でいう以上なものかも知れない」
そう考えてくると、
「誤っている、自分などはまだ所詮――」
と、謙遜った気持にもなるし、またその気持を乗りこえたものが、
「相手にとって不足のないものだ。敗れた時は、いさぎよく、彼の足もとへ降伏するまでだ。――だが、何ほどのことがあろう、死を期してかかるからには」
闘志を駆って、こう坐っているうちにも、全身が熱くなって来る。若い功名心が、脈々と、肋骨のうちに張りつめる。
――が、手段だ。
所詮、武者修行のお方には、石舟斎様は、お会いなされますまい。誰のご紹介をお持ちになろうと、お会いになる気づかいはありません――とは、この旅宿の主もいったことばである。宗矩は不在、孫の兵庫利厳も遠国。――どうしても、柳生を打ってこの土地を通ろうというのには、石舟斎を目がけるほかはない。
「何かよい方法は？」
またそこへ考えが戻ってくると、彼の血のうちを駆けていた野性と征服慾は、やや落ちついたものへ返って、眼は、床の間の清純な白い花へ移っていた。
「…………」
何気なく見ているうちに、彼はふと、この花に似ている誰かを思い出していた。

——お通。

が久しぶりに、彼の、荒々しくのみ働いている神経と粗朴な生活の中に、彼女のやさしい面貌が浮かんできた。

九

小柳生城のほうへ、お通が、駒のひづめを軽そうに引っ返して行くと、

「やアーーい」

雑木の茂っている崖の下から、誰か、こう自分へ向っていうらしい者がある。

「子ども」

とは、すぐ分っていたが、この土地の子どもは、なかなか若い女を見てからかうような勇気のある子はいない。——誰かと、駒を止めていると、

「笛吹きのお姉さん、まだいるの？」

真ッ裸な男の子だった。濡れた髪をして、着物は丸めて小脇にかかえ込んでいる。それが、臍もあらわに、崖から飛び上がって来て、

(馬になんか乗ってやがる)

と、軽蔑するような眼で、お通を仰ぐのだった。

「あら」

お通には、不意打だった。

「誰かと思ったら、おまえはいつか、大和街道でベソを掻いていた城太郎という子でしたね」

「ベソ掻いて？　――嘘ばっかりいってら、おら、あの時だって、泣いてなんかいやしねえぜ」
「それはとに角、いつここへ来たの」
「この間うち」
「誰と」
「お師匠様とさ」
「そうそう、おまえは、剣術つかいのお弟子さんでしたね。――それが今日はどうしたの、裸になって」
「この下の渓流(ながれ)で、泳いで来たんだ」
「ま。……まだ水が冷たいだろうに、泳ぐなんて、人が見ると笑いますよ」
「行水だよ、お師匠様が、汗くさいっていうから、お風呂のかわりに入って来たのさ」
「ホホホ。宿は」
「綿屋」
「綿屋なら、たった今、私も行って来た家ですね」
「そうかい、じゃあ、おらの部屋へ来て、遊んでゆけばよかったな、もどらないか」
「お使いに来たのですから」
「じゃあ、あばよ」
お通はふり顧って、
「城太郎さん、お城へ遊びにおいで――」
「行ってもいいかい」

彼女は、愛嬌につい投げたことばに、ちょっと、自分で困りながら、
「いいけど、そんなかっこうじゃ駄目ですよ」
「じゃ嫌だよ。そんな窮屈なところへなんか、行ってやるもんか」
それで助かったような気がしてお通はほほ笑みながら、城内へ入った。
厩へ馬をもどし、石舟斎の草庵へ帰って、使い先のもようを話すと、
「そうか、怒ったか」
石舟斎は笑って、
「それでいい。怒っても、つかまえどころがあるまいからそれでいい」
といった。
しばらく経って、何かほかの話の折に思い出したのであろう。
「芍薬は、捨てて来たか」
と訊いた。
旅宿の小女に与えて来たというと、その処置にもうなずいて、
「だが、吉岡のせがれ伝七郎とかいう者、あの芍薬を、手には取って見たろうな」
「はい、お文を解く時」
「そして」
「そのまま突き戻しました」
「枝の切り口は見なかったか」
「べつに……」

「何も、そこに眼をとめて、いわなかったか」
「申しませんでした」
石舟斎は、壁へいうように、
「やはり会わんでよかった。会って見るまでもない人物。吉岡も、まず拳法一代じゃ」

四 高 弟

一

荘厳といっていいほどな道場である、外曲輪(そとぐるわ)の一部で、床(ゆか)も天井も、石舟斎が四十歳頃に建て直したという巨材だ。ここで研磨した人々の履歴を語るように、年月の古びと艶を出していて、戦時には、そのまま武者溜りとして使えるように広くもあった。
「軽いっ——太刀先ではないっ——肚(はら)っ、肚っ肚っ！」
襦袢(じゅばん)一着に、袴をつけ、用人の庄田喜左衛門は、一段高い床に腰をかけて、呶鳴っていた。
「出直せっ、成っていない」
叱られているのは、やはり柳生家の家士であった。汗で眼まいのしている顔を、
「アふっ……」
振りうごかしながら、

「えやあっ！」
すぐ火と火のように打ち合っているのだった。
ここでは、初心に木剣を持たせなかった。上泉伊勢守の門で考案したという韜という物を使っている。革のふくろに割竹をつつみこんだ物である。鍔はない、革の棒だ。
——びしいッっ。
撲ることの烈しい場合は、それでも、耳が飛んだり、鼻が柘榴になったりする。敢えて、打ちどころに約束はないのである。横ざまに、諸足を撲ってぶっ仆してもいいのだ。仆れて仰向いた顔へ、さらに二撃を加えてもべつだん法に反いたことにはならない。
「まだ！　まだ！　そんな事で」
ヘナヘナになるまでやらせておく。初心ほどわざと冷酷にあつかう。ことばでも罵る。たいがいな家士は、これがあるので柳生家の奉公はなみなことではないといっている。新参などで続く者は稀れである。従って、ふるいにかけられた人のみが、家中なのだ。
足軽や厩者でも、柳生家の家人である者は、多少なり刀術の心得のない者はない。庄田喜左衛門は、役目は用人であるが、すでに早く新陰流に達し、石舟斎が研鑽して、家の流というところの柳生流の奥秘も会得していた。——そして、彼は彼で、自分の個性と工夫を加えて、
（おれのは、庄田真流である）
と、称していた。木村助九郎は、馬廻りであったが、これも上手だった。村田与三は、納戸役であるが、しかし、今は肥後へ行っている柳生家の嫡孫兵庫とは、好敵手だといわれた者である。出淵孫兵衛もここの一役人に過ぎないが子飼いからの者で、従って、豪壮な剣をつかう男

だ。

（わしの藩へくれい）

と、その出淵は越前侯から、村田与三は、紀州家から、懇望されているくらいだった。

出来ると、世間に聞えると、諸国の大名から、

（あの男をくれぬか）

と、聟のように持ってゆかれるので、柳生家は、誉れであったが、困りもする。断ると、

（そちらでは、よい雛鳥がいくらでも後から孵るのだから）

などという。

時代の剣士は、今この古い砦の武者溜りから、無限に湧いて出るような家運であった。この家運の下に奉公する侍が、韜と木剣で、たたきに叩き抜かれなければ一人前になれないことは、また当然な家憲でもあった。

「――なんじゃっ、番士」

ふいに、庄田が立って戸外の人影へいった。

番士のうしろには、城太郎が立っていた。庄田は、

「おや？」

と、眼をみはった。

二

「おじさん、今日は――」

「こら、なんで貴さま、お城へなど入って来たか」
「門にいた人に連れて来てもらったんだ」
　城太郎の答えに無理はない。
「なる程」
　庄田喜左衛門は、彼を連れて来た大手門の番士に、
「なんだ、この小僧は」
「あなた様にお目にかかりたいと申すので」
「こんな小僧のことばを取り上げて、御城内へ連れて来てはいかん。——小僧」
「はい」
「ここはお前たちの遊びに来る場所ではない。帰れ」
「遊びに来たんじゃない。お師匠様の手紙をもって、使いに来たんだ」
「お師匠様の……。ははあ、そうか。おまえの主人は、武者修行だったな」
「見てください、この手紙」
「読まんでもいい」
「おじさん、字が読めないのかい？」
「なに」
　苦笑して——
「ばかをいえ」
「じゃあ、読んだらいいじゃないか」

「こいつ、喰えん小僧だ。読まんでもいいというのは、たいがい、読まなくとも分っているという意味だ」
「わかっているにしても、一応は読むのが礼儀じゃないか」
「孑孑や蛆ほど多い武者修行に、いちいち礼儀を執っていられないことは許してくれ。この柳生家で、それをやっていたら吾々は毎日、武者修行のために奉公していなければならないことになる。——そういっては、せっかく使いに来たおまえに可哀そうだが、この手紙も、ぜひ一度、鳳城の道場を拝見させていただきたい、そして、天下様御師範のお太刀の影なりともよろしいから、同じ道に志す後輩のために、一手の御授業を賜わりたい……。まあ、そんなところだろうなあ」
城太郎は、まるい眼を、ぐるりと動かして、
「おじさん、まるで中を読んでるようなことをいうね」
「だから見たも同じだといっておるじゃないか。ただし、柳生家においても、何もそう訪ねてくる者を、素ッ気なく追い返すというわけではない」
嚙んでふくめるように、
「——その番士に、教えてもらうがいい。御当家を訪れた一般の武者修行は、大手を通って、中門の右を仰ぐと、そこに、新陰堂と木額のかかっている建物がある。そこの取次の者へ申し入れると、休息も自由、又、一夜や二夜は泊めてあげる設備も出来ている。そして、世の後進のために、わずかながら、出立の折には、笠の代として、一封ずつの金を喜捨することにもなっている。だから、この手紙は、新陰堂の役人のほうへ持ってゆくがよろしい」

そう諭(さと)して、
「わかったか」
するとと、城太郎は、
「わからない」
と、首を振って右の肩をすこし昇(あ)げ、
「おい、おじさん」
「なんじゃ」
「人を見てものをいいなよ。おれは、乞食の弟子じゃないぜ」
「ふム。貴さま……、ちょっと口がきけるの」
「もし、手紙を開けて見て、おじさんがいったことと、書いてある用向きと、まるで、違っていたらどうする？」
「むむ……」
「首をくれるかい」
「待て待て」
栗のイガを割ったように、喜左衛門は顎髯(あごひげ)の間から、赤い口を見せて、笑ってしまった。

三

「首はやれん」
「じゃあ、手紙を見ておくれよ」

「小僧」
「なんだい」
「貴さまが、師の使命を恥かしめぬ心にめでて、見てつかわす」
「あたりまえだろ。おじさんは柳生家の用人じゃないか」
「舌は、絶倫だな。剣もそんなになればすばらしいが……」
いいながら封を切って、武蔵の手紙を黙読していたが、読み終ると、庄田喜左衛門は、ちょっと、怖い顔つきをした。
「城太郎。――この手紙のほかに、何か持って来たか」
「あ、忘れていた、これを」
ふところから、無造作に出したのである。それは、七寸ばかりの芍薬の切枝だった。
「………」
黙然と、喜左衛門は、その両方の切り口を見くらべていたが、しきりと、小首をかしげるのみで、武蔵の書中にあることばの意味が、十分に、彼には解せないらしいのである。
武蔵の書面には、計らずも、宿の小女から芍薬の一枝をもらったこと。それが御城内のものであるということ。――次に、切り口を見て非凡なお方の切ったものと拝察したということ。
そう次第を書いて来て、
(花を挿け、その神韻を感じるにつけ、どなたがあれをお切りになったか、どうしても知りたい気がする。甚だ、つかぬことをお訊ね申すようであるが、御家中の誰方であるや、おさしつかえなくば、使いの童に、一筆お持たせねがいたい)

自分が、武者修行の者とも書いてない。試合の希望もいっていない。それだけの文意であった。
（ふしぎなことをいってくる）
喜左衛門は、そう思って、一体どう切り口が違っているかを、まず審さな眼で検めてみたが、どっちがどう先に切ってあるのか、どこに相違があるのか、見出せないのだ。
「村田」
その手紙と、切枝とを、彼は道場の内へ持って入って、
「これを見ろ」
と示した。そして、
「一体、この枝の両端の切り口が、どっちがそんな達人の切ったもので、また、どっちが、より劣った切り口になっているか、貴公の眼で鑑わけがつくか」
村田与三は、睨むように、交る交る見ていたが、
「わからぬ」
吐き出すようにいった。
「木村に見せてみよう」
奥へ入って、お役部屋をのぞいてゆき、木村助九郎を見つけて同じように意見を訊くと、木村も、
「さてなあ」
不審とするばかりだった。

だが、いあわせた出淵孫兵衛のことばによると、

「これは一昨日、大殿が手ずからお切りになったものだ。——庄田殿は、その折おそばにいたはずではないか」

「いや、花をお挿けになっているのは見たが」

「その時の一枝だ。——それをお通が、殿のいいつけで、吉岡伝七郎の許へ、お文を結びつけて携えて行ったもの」

「オ。あれかな？」

喜左衛門はそういわれて、もいちど、武蔵の手紙を読み直した。こんどは、愕然と眼を革めて、

「御両所、ここには、新免武蔵と署名しあるが、武蔵といえば、先頃、宝蔵院衆と共に般若野で多くの無頼者を斬ったという——あの宮本武蔵とは別人だろうか」

四

——武蔵とあれば、多分、そうだろう、あの武蔵にちがいあるまい。

出淵孫兵衛も、村田与三も、そういって、手から手へ、再度、手紙を渡して読み直しながら、

「文字にも、気稟がみえる」

「人物らしいな」

と、呟いた。

庄田喜左衛門は、

「もし、この手紙にある通り、ほんとに、芍薬(しゃくやく)の枝の切り口を一見して、非凡と感じたのなら、これはおれたちより少し出来る。——大殿が手ずから切ったものだから、或は、まったく鑑(み)る者が鑑れば違っているのかも知れないからな」
「むム……」
出淵は、ふいに、
「会ってみたいものだな。——それも一つ糺(ただ)してみようし、また、般若野のことなども、訊いてみるもよかろう」
喜左衛門は思い出して、
「使いに来た小僧が、待っておるのだ。——呼んでみるかの」
「どうじゃ」
独断ではというように出淵孫兵衛は、木村助九郎に計(はか)ってみる。助九郎がいうには、今はすべての武者修行に授業を断っている折だから道場の客としては迎えられない。しかしちょうど、中門の上の新陰堂の池の畔(ほとり)には、燕子花(かきつばた)がさいているし、山つつじの花もぽつぽつ紅くなっている。そこに、酒でも設けて、一夕(せき)、剣談を交わそうとあれば、彼もよろこんで来るであろうし、大殿の耳へ入っても、それならばお咎めはなかろうではないか。
喜左衛門は、膝を打って、
「それはよいお考えだ」
村田与三も、
「自分たちに取っても一興、さっそく、そう返事をやろうではないか」

と、話は決まる。
――戸外では、城太郎、
「アア……遅いなあ」
欠伸をしていたが、やがて、彼のすがたを嗅いで、のっそり寄って来た大きな黒犬を見ると、
こいつよい友達と、
「やい」
耳をつかんで引き寄せ、
「すもうを取ろう」
抱きついて、引っくり転した。
よく自由になるので、二、三度手玉にとって抛ったり、上顎と下顎を手で抑えて、
「わんといえ」
そのうちに、何か、犬の癇に触ったことがあるとみえ、いきなり城太郎のすそへ噛みついて、
犢のように唸りだした。
「こいつ、おれを誰だと思う」
木刀に手をかけて、彼が見得を切ると、犬は、喉を太くして、猛然と、小柳生城の兵を奮い
起たすような声で吠えだした。
こつうんッ――
と、木剣が一つ、犬のかたい頭に石を打ったような音をさせると、猛犬は、城太郎の背へかぶ
りつき帯を咥えて、彼の体を振り飛ばした。

「生意気なっ」

彼の起つより、犬のほうが遙かに迅かった。ギャッと、城太郎は、両手で顔を抑えた。

そして、逃げ出すと、

わ、わ、わ、わんッ

猛犬のほえる谺は、後ろの山を揺るがした。顔を抑えている両手の指のあいだから血がながれて来たので、城太郎は、逃げ転びながら、

「わアん――」

と、これも犬に負けない大声をあげて、泣き出してしまった。

円　座

一

「行って参りました」

帰って来ると、城太郎は取り澄ました顔つきで、武蔵の前にかしこまった。

武蔵は、何げなく彼の顔を見て驚いた。碁盤の目みたいに顔中が傷でバラ掻きになっている。

鼻なども、砂の中に落ちた苺みたいに血だらけなのだ。

さぞ鬱陶しい事だろうし、痛くもあろうに、それについては、城太郎がちっとも触れないの

で、武蔵も何も問わなかった。
「返事をよこしたよ」
庄田喜左衛門の返書をそこへさし出して、ふた言三言、使い先の様子を話していると、顔からぽとぽと血がながれてくる。
「ハイ。それだけです、もうよございますか」
「ご苦労だった」
武蔵が、喜左衛門の返書へ眼を落している間に、彼は、両手で顔を抑えて、あわてて部屋の外へ去った。
小茶ちゃんが、後ろから尾いて来て、心配そうに彼の顔をのぞいた。
「どうしたの、城太郎さん」
「犬にやられたんだ」
「ま、どこの犬」
「お城の――」
「アア、あの黒い紀州犬。あの犬じゃ、いくら城太郎さんでもかなうまいよ。いつかも、お城の中へ忍び込もうとした他国の隠密の者が噛み殺されたというくらいな犬だもの」
いつも虐められているくせに、小茶ちゃんは親切に、彼を導いて、裏の流れで顔を洗わせたり、薬を持って来て付けてやったりするので、今日ばかりは城太郎も悪たれをたたかず、彼女のやさしい親切に甘えて、
「ありがと。ありがと」

くり返して、頭ばかり下げていた。
「城太郎さん、そんなに、男のくせに、安ッぽく頭を下げるものじゃないわ」
「だって」
「喧嘩しても、あたし、ほんとは城太郎さんが好きなんだもの」
「おらだって」
「ほんまに」
城太郎は、膏薬と膏薬のあいだの顔の皮膚を真っ赤にさせた。小茶ちゃんも火みたいな顔をして、その頬ぺたを両手で押えた。
誰もいなかった。
そこらに乾いている馬糞から陽炎が燃えている。そして、緋桃の花が太陽からこぼれて来た。
「でも、城太郎さんの先生は、もうすぐここを立つんだろ」
「まだいるらしいよ」
「一年も二年も泊っているとうれしいんだけど……」
馬糧小屋の馬糧の中へ、二人は仰向けになって転がった。手と手だけは繋いでいた。体が納豆のように蒸れて来ると、城太郎は物狂わしく小茶ちゃんの指へいきなり嚙みついた。
「ア痛っ」
「痛かった。ごめん」
「ううん、いいの、もっと嚙んで」
「いいかい」

「アア、もっと噛んで、もっと強く噛んで——」
犬ころみたいに、二人は、馬糧を頭から被って、喧嘩のように抱き合っていた。どうするでもなく抱擁をもだえ合っていた。すると、小茶ちゃんを探しに来た爺やが、呆れ果てたように眺めていたが、突然、道徳の高い君子のような顔をして、
「この阿呆っ。餓鬼のくせに、何して居さらすっ」
ふたりの襟くびを摑んで引きずり出し、小茶ちゃんのお尻を、二ツ三ツ打った。

二

その日から翌る日へかけ、二日のあいだというもの、武蔵は何を考えているのか殆ど口もきかずに腕を拱いていた。
沈湎たるその眉を見て、城太郎はひそかに怖れをなした。馬糧小屋の中で小茶ちゃんと遊んだことが分ったのではないかと思って——
ふと、夜半に、目をさまして、そっと首を出して見た時も、武蔵は、夜具の中に眼をあいて、おそろしい程、考えつめた顔つきをして、天井を見つめていた。
「城太郎、帳場の者に、すぐ来てくれと申してこい」
次の日の黄昏れが窓に迫って来た頃である。あわてて城太郎が出てゆくと、入れ代って、綿屋の手代が入って来た。間もなく、勘定書が届けられ、武蔵はその間に、出立の身支度をしているのだった。
「お夕飯は」

と、宿の者が訊きに来ると、

「いらぬ」

という彼の返事。

小茶ちゃんは、ぼんやり部屋の隅に立っていたが、やがて、

「旦那はん、もう、今夜は、此宿へ帰って寝ないの」

「ウム。長い間、小茶ちゃんにもお世話になったな」

小茶ちゃんは、両方の肱を曲げて、顔をかくした。泣いているのである。

――御機嫌よう。

――どうぞお気をつけて。

綿屋の番頭や女たちは、門口に並んで、この山国をどういうつもりか黄昏れに立つ旅人へ、人里の声を送った。

「？　……」

そこの軒を離れてから後ろを見ると、城太郎が従いて来ないので、武蔵は又、十歩ほど引っ返して、彼の姿をさがした。

綿屋の横の蔵の下に、城太郎は小茶ちゃんと別れを惜しんでいた。武蔵の影を見たので二人はあわてて側を離れて、

「……左様なら」

「……あばよ」

城太郎は、武蔵のそばへ駈けて来て、武蔵の眼を怖れながら、時々振りかえった。

柳生谷の山市の灯は、すぐ二人の後になった。武蔵は相かわらず黙々と足をすすめているだけであった。振り顧っても、もう小茶ちゃんの姿が見えないので、城太郎も悄ンぼりと従いてゆくほかはない。

「まだか？」

やがて武蔵から、

「何処」

「小柳生城の大手門は」

「お城へ行くの」

「うむ」

「今夜はお城で泊るのかい」

「どうなるか、わからんが」

「もうそこだよ、大手門は」

「ここか」

ぴたと、足を揃えて、武蔵は立ちどまった。

苔につつまれた石垣と柵の上に、巨木の林が海のように鳴っていた。そこの真っ暗な多門型の石塀のかげに、ポチと、四角な窓から明りが洩れている。

声をかけると、番士が出て来た。庄田喜左衛門からの書面を見せ、

「お招きによって罷り越した宮本と申す者でござる。——お取次を」

番士は、もう今夜の客を知っていた。取次ぐまでもなく、

「お待ちかねでござる、どうぞ」

と、先に立って、外曲輪の新陰堂へ、客を導いて行った。

三

ここの新陰堂は、城内に住む子弟たちが儒学を受ける講堂でもあり、また藩の文庫でもあるらしく奥へゆく通路の廊架側には、どの室にも、壁いっぱい書物の棚が見うけられる。

「柳生家といえば、武名だけで鳴っているが、武ばかりではないと見える」

武蔵は、城内を踏んで、柳生家というものの認識に、想像以上な厚味と歴史を感じるのだった。

「さすがに」

事ごとに頷かれるのである。

たとえば、大手からここまでの間の清掃された道を見ても、応対する番士のもの腰でも、本丸のあたりの厳粛なうちにも和やかな光のある燈火をながめても。

それはちょうど、一軒の家を訪れて、その家の上がり口に履物をぬぐとたんに家風と人とがほぼ分るようである。武蔵は、そうした感銘もうけながら、通された広い床へ坐った。

新陰堂には、どの部屋にも、畳というものは敷いてなかった。この部屋も板敷である、そして、客なる彼へは、

「どうぞ、おあてなされ」

と小侍が藁で編んである円座という敷物をすすめた。

「頂戴する」
遠慮なく、武蔵はそれを取って坐った。従僕の城太郎は、勿論、ここまでは通らない。外の供待でひかえている。
小侍がふたたび出て、
「今宵は、ようこそお越し下さいました。木村様、出淵様、村田様みなお待ちかねでございましたが、ただ庄田様のみが、生憎と突然な公用で、ちと遅なわりまするが、やがてすぐ参られますゆえ、暫時お待ちのほどを」
「閑談の客でござる、お気づかいなく」
円座を、隅の柱の下へ移して、武蔵はそこへ倚りかかった。
短檠の明りが、庭先へ届いている。どこかで甘いにおいがするなと思って見ると、藤の花がこぼれているのである。紫もある白藤もある。ふと珍しく思ったのは、ここで初めてまだ片言の今年の蛙の声を聞いたことである。
せんかんとそこらあたりを水が駈けているらしい。泉は床下へも通っているとみえ、落着くに従って、円座の下にもさらさらと流れの音が感じられる。やがては、壁も天井も、そして一穂の短檠の灯までが、水音を立てているのではないかと疑われるほど、武蔵は冷々とした気につつまれた。
だが——その寂寞たる中にあって、彼のからだの裡には、抑えきれないほど沸きあがっているものがあった。熱湯のような争気を持つ血液である。
（柳生が何か）

と隅柱の円座から睥睨しているところの気概である。
（彼も一箇の剣人、われも一箇の剣人。道に於いては、互角だ）
と思い、又、
（いや今宵は、その互角から一歩を抜いて、柳生を、おれの下風にたたき落してみせる）
彼は信念していた。
「いや、お待たせ申して」
と、その時、庄田喜左衛門の声がした。ほかの三名も同席して、
「ようこそ」
と挨拶の後、
「それがしは、馬廻り役木村助九郎」
「拙者は、納戸方村田与三」
「出淵孫兵衛でござる」
と順々に名乗り合った。

四

酒が出る。
古風な高杯に、とろりと粘るような手造りの地酒。肴は、各々の前の木皿へ取り分けられてある。
「お客殿、こんな山家のことゆえ、何もないのです。ただ、寛いでどうぞ」

「ささ、遠慮なく」
「お膝を」
四名の主人側は、一人の客に対して飽くまでいんぎんであって、また飽くまで打ち解けて見せる。
武蔵は酒はたしなまない。嫌いなのではなく、まだ酒の味というものが分らないのである。
しかし、今夜は、
「頂戴する」
めずらしく杯を取って舐めてみた。まずいとは思わないが、格別にも感じない。
「おつよいと見える」
木村助九郎が、瓶子を向ける。席が隣なのでぽつぽつ話しかけるのであった。
「貴君から先日お訊ねのあった芍薬の枝ですな。あれは実は、当家の大殿がお手ずから切ったものだそうです」
「道理で、お見事なわけ」
と、武蔵は膝を打った。
「――しかしですな」
と、助九郎は膝をすすめ、
「どうして、あんな柔軟な細枝の切り口を見て、非凡な切り手ということが貴君には分りましたか。そのほうが、吾々には、むしろ怪訝しいのですが」
「…………」

武蔵は、小首をかしげて、答えに窮するもののように黙っていたが、やがて、
「左様でござろうか」と、反問した。
「そうですとも」
庄田、出淵、村田の三名も、異口同音に、
「吾々には、分らない。……やはり非凡は非凡を識るというものか。そこのところを、後学のために、こよいは一つ説明していただきたいと思うのですが」
武蔵は、また一つ杯をふくみ、
「恐縮です」
「いや、ご謙遜なさらずに」
「謙遜ではござらぬ。有り態に申して、ただ、そう感じたというだけに過ぎませぬ」
「その感じとは？」
柳生家の四高弟は、ここを追及して、武蔵の人間を試そうとするもののようであった。最初、一瞥したとたんに、四高弟はまず、武蔵の若年なのをちょっと意外としたらしい。次には、その逞ましい骨格に目がついた。眼ざしや身ごなしにも弛みがないと感服した。
けれど、武蔵が酒を舐めると、その杯の持ちようや箸のさばき、何かにつけ、粗野が目について、
（ははあ、やはり野人だ）
つい書生扱いになり、従って、幾分軽んじてくる傾きがあった。
たった三杯か四杯かさねただけなのに、武蔵の顔は、銅を焼いたように火てりだし、始末に

困るように、時々手を当てた。
その容子が、処女みたいなので四高弟は笑った。
「ひとつ、貴君のいうところの感じとは、どういうものか、お話し下さらんか。この新陰堂は、上泉伊勢守先生が、当城に御滞在中、先生のため御別室として建てたもので、剣法に由縁のふかいものなのです。こよい武蔵どのの御講話を拝聴するにも、最もふさわしい席と思うが」
「困りましたな」
武蔵はそういうだけであった。
「――感覚は感覚、どういっても、それ以外に説きようはござらぬ。強いて目に見たく思し召すなら、太刀を把って、私をお試しくださるほかはない」

五

何とかして石舟斎へ近づく機縁をつかみたい、彼と試合してみたい、兵法の大宗といわれる老龍を自己の剣下にひざまずかせてみたい。
自己の冠に、大きな勝星を一つ加えることだ。
――武蔵来り、武蔵去る。
と記録的な足痕を、この土地へのこすことだ。
彼の旺んな客気は今、その野望で満身を燃やしながらここに坐っている。しかもそれを現わさずにである。夜も静か、客も静かな裡にである。短檠の光は時折、烏賊のような墨を吐き、風の間に、どこかで片言の初蛙が鳴く。

庄田と出淵は、顔を見あわせて何か笑った。武蔵が今いったことば——
(——強いて目に見たく思し召すなら、私をお試しくださるほかはない)
これは穏かのようだが、明らかに戦闘を挑むものだ。出淵と庄田は、四高弟のうちでも年上だけに、早くも武蔵の覇気を観てとって、
(豎子、何をいうか)
と、その若気を苦笑するもののようであった。
話題は一つところにとどまらない。剣の話、禅の話、諸国のうわさ話、わけても関ヶ原の合戦には、出淵も、庄田も、村田与三も主人について出たので、その折、東軍と西軍との敵味方であった武蔵とはひどく話に実が入って、主人側もおもしろげに喋べり出し、武蔵も興に入って話に耽ける。
徒に、刻は過ぎ——
(今夜をおいて、二度と、石舟斎へ近づく機会はない)
思いめぐらすうちに、
「お客、麦飯でござるが」
と、酒をひいて、麦飯と汁とが出される。
それを喰べつつも、
(どうしたら彼に)
武蔵は、他念がない。そして思うには、
(所詮、尋常なことでは接近できまい。よし!)

彼は、自分でも下策と思う策を取るほかなかった。つまり相手を激させて、相手を誘い出すことだ。しかし、自分を冷静において、人を怒らせることは難しい。武蔵は、故意に、暴論を吐いてみたり、無礼な態度を見せたりしたが、庄田喜左衛門も出淵も笑って聞き流すだけである。くわっと乗って来るような不覚はこの四高弟のうちにはない。
武蔵は、やや焦心った。これで帰ることが無念だった。自分の底の底までを見透かされてしまった気がする。
「さ、寛ごう」
食後の茶になると、四高弟は、円座を思い思いの居心地へ移して、膝を抱えるのもある。あぐらを組む者もある。
武蔵だけは、依然として、隅柱を負っていた。つい無口になる。怏々として楽しまないものが胸を占めて霽れないのだ。勝つとは限らない、撃ち殺されるかも知れない。——それにしても石舟斎と試合わずしてこの城を去るのは生涯の遺憾だと思う。
「やっ？」
ふいにその時、村田与三が縁へ起って、暗い外へつぶやいた。
「太郎が吠えている。ただの吠え方ではない。何事かあるのではあるまいか」
太郎とはあの黒犬の名か、成程、二の丸のほうで怖ろしく啼き立てている。その声が、四方の山の谺を呼んで、犬とも思えない凄さであった。

一

犬の声は、容易にやまない。凡事(ただごと)とも思えない吠え方なのである。
「何事だろう？　失礼だが、武蔵どの、ちょっと中座して見て参ります。——どうぞ御ゆるりと」
席を外(はず)して、出淵孫兵衛が出てゆくと、村田与三も、木村助九郎も、
「暫時、ごめんを」
と各〻、武蔵へ対して、会釈を残しながら、出淵につづいて外へ去った。
遠い闇の中に、犬の声は、愈〻、何か主人へ急を告げるように啼きつづけていた。
三名が去った後の席は、その遠吠えがよけいに凄く澄んで聞え、白けわたった燭の明りに、鬼気がみなぎっていた。
城内の番犬が、こう異様な啼き声を立てるからには、何か城内に異変があったものと考えなければならぬ。今、諸国ともにやや泰平のようでもあるが、決して隣国に気はゆるせたものではない。いつどんな梟雄(きょうゆう)が立って、どんな野心を奮い起さない限りもないのだ。乱波者(らっぱもの)（おんみつ）はどこの城下へも入りこんで、枕を高くして寝ている国をさがしているのだ。
「はての？」

独りそこに残っている主人側の庄田喜左衛門も、いかにも不安そうであった。何となく、火色の凶い短檠の灯を見つめて、陰々滅々と谺する犬の声をかぞえるように聴き耳をたてていた。

そのうちに、一声、けえん！　と怪しげな啼き方が尾を曳いて聞えると、

「あっ」

喜左衛門が、武蔵の顔を見た。

武蔵もまた、

「あっ……」

と、微かな声を洩らし、同時に、膝を打っていった。

「死んだ」

すると、喜左衛門も共に、

「太郎め、殺られおった」

といった。

二人の直感が一致したのである。喜左衛門はもう居堪まらないで、

「解せぬこと」

と、席を立った。

武蔵は何か思い当ることがあるもののように、

「私の連れて参った城太郎という僕童は、そこに控えておりましょうか」

と、新陰堂の表の部屋にいる小侍に向ってたずねた。

そこらを捜しているらしく、しばらくたってから、小侍の返辞が聞えた。

「お下僕は、見えませぬが」
武蔵は、ハッとしたらしく、
「さては」
と、喜左衛門へ向い、
「ちと心懸りな儀がござる。犬の斃れておる場所へ参りたいと思いますが、ご案内下さるまいか」
「おやすいこと」
喜左衛門は、先に立って、二の丸のほうへ走った。
例の武者溜りの道場から一町ほど離れている場所だった。四、五点の松火の明りがかたまっていたのですぐ分った。先に出て行った村田も出淵もそこにいた。そのほか集まって来ていた足軽だの、宿直の者だの、番士たちだのが、真っ黒に垣をなして何か騒々いっているのだった。
「お！」
武蔵は、その人々のうしろから、松火の明りが円い空地を作っている中をのぞいて、愕然とした。
案のじょう、そこに突っ立っていたのは鬼の子のように、血まみれになっている城太郎であった。
木剣を提げ、歯を食いしばり、肩で息をつきながら、自分をとり囲んでいる藩士たちを、白い眼で睨みつけている。
その側には、毛の黒い紀州犬の太郎が、これも、無念な形相をして、牙を剝き出し、四肢を横

にして斃(たお)れているのだった。
「？　……」
　しばらくものをいう者もなかった。犬の眼は、松火(たいまつ)の焔に向って、くわっと開いているけれど、口から血を吐いているところを見ると、完全に死んでいるのである。

二

　唖然として、そこの有様に眼をみはっていたが、やがて誰かが、
「オオ、ご愛犬の太郎だ」
　うめくように呟くと、
「こいつ奴(め)」
　いきなり一人の家臣は、茫然としている城太郎のそばへ行き、
「おのれかッ、太郎を撃ち殺したのは」
　ぴゅっと掌(て)のひらが横に唸った。城太郎はその掌が来る咄嗟に顔を交(か)わして、
「おれだ」
　と、肩を昂(あ)げて叫んだ。
「なぜ撃ち殺した？」
「殺すわけがあるから殺した」
「わけとは」
「かたきをとったんだ」

「なに」
意外な面持ちをしたのは、城太郎に立ち向っているその家臣だけでなかった。
「たれのかたきを？」
「おれのかたきをおれが取ったんだ。おととい使いに来た時、この犬めが、おれの顔をこの通りに引っ掻いたから、今夜こそ撃ち殺してやろうと思って、捜していると、あそこの床下に寝ていたから、尋常に勝負をしろと、名乗って戦ったんだ。そしておれが勝ったんだ」
彼は、自分が決して卑怯な決闘をしたのではないということを、顔を赤くして力説するのだった。
しかし、彼を咎めている家臣や、この場のことを重大視している人々は、犬と人間の子の果し合いが問題ではないのである。人々が憂いや怒りをふくむ所以は、この太郎と呼ぶ番犬は、今は江戸表にある主人の但馬守宗矩が、ひどく可愛がっていた犬でもあり、殊に、紀州頼宣公が愛している雷鼓という牝犬の児を、宗矩が所望して育てたという素姓書もある犬なのであった。――それを撃ち殺されたとあっては、不問に付しておくわけにゆかない。禄を食んでいる人間が二名もこの犬の係りとしてついているのでもある。
今、血相をかえて、城太郎へ向って、青すじを立てている家臣が、即ちその太郎付の侍なのであろう。
「だまれっ」
また一拳を彼の頭へ見舞った。
こんどは交わし損ねて、その拳が城太郎の耳の辺をごつんと打った。城太郎の片手がそこを抑

え、河童あたまの毛がみな逆立ッた。
「何するんだ！」
「お犬を撃ち殺したからには、お犬のとおりに打ち殺してくれる」
「おれは、このあいだの、返報をしたんだ。返報のまた返報をしてもいいのか。大人のくせにそれくらいな理窟がわからないのか」
彼としては、死を賭して、やったことだ。侍の最大な恥は面傷だというその意気地を明らかにしたのだ。むしろ、誉められるかとさえ思っているかも知れないのである。
だから、太郎付の家臣が、いくら咎めようと怒ろうと、彼としては怯まないのだ。かえってその由謂れのないことを憤慨して、反対に喰ってかかった。
「やかましいっ。いくら童でも、犬と人間のけじめがつかぬ年ごろではあるまい。犬に仇討ちをしかけるとは何事だ。——処分するぞっ、こらっ、お犬のとおりに」
むずと城太郎の襟がみをつかんで、その家臣は、初めて周りの人々へ眼をもって、同意を求めた。自己の職分として、当然にすることを宣言するのであった。
藩士たちは、黙ってうなずいた。四高弟の人々も、困った顔いろはしていたが黙っていた。
——武蔵も黙然と見ていた。

三

「さっ、吠えろ小僧」
二、三度襟がみを振廻されて、眼がくらくらとした途端に、城太郎は大地へ叩きつけられてい

た。

お犬の太郎付の家臣は、樫の棒を振りかぶって、

「やいっ童。おのれがお犬を撃ち殺したように、お犬に代って、おのれを撃ち殺してやるから起て。――きゃんとでもわんとでも吠えて来い、噛みついて来いっ」

急に起てないのであろう、城太郎は歯をくいしばって、大地へ片手をついた。そして徐々に、木剣と共に体を起すと、子供とはいえ、その眼はつり上がって死を決し、河ッ童あたまの赤い毛は、怒りに逆立って、こんがら童子のような凄い形相を示した。

犬のように、彼は唸った。

虚勢ではない。

彼は、

(おれの為たことは正しくて間違っていない)

と信じているのである。大人の激憤には、反省もあるが、子供がほんとに憤ると、それを生んだ母親でさえ持てあますものだ。まして、樫の棒を見せられたので、城太郎は、火の玉のようになってしまった。

「殺せっ、殺してみろっ」

子供の息とも思えない殺気であった。泣くが如く呪うが如く、こう彼がわめくと、

「くたばれッ」

樫の棒は唸りを呼んだ。

一撃の下に、城太郎はそこへ死んでいる筈である。カッンという大きな響きがそれを人々の耳

へ直覚させた。
――武蔵は、実に冷淡なほど、なおもその際まで、黙然と腕ぐみしたまま、傍観していた。
ぶん――と城太郎の木剣は、その時、城太郎の手から空へ吹き飛ばされていたのであった。無意識に彼は、最初の一撃をそれで受けたのであったが、当然、手のしびれに離してしまったものらしく、次の瞬間には、
「こん畜生」
眼をつぶって、敵の帯際へ噛ぶりついていた。
死にもの狂いの歯と爪は、相手の急所を制して離さなかった。樫の棒は、そのために、二度ほど空を払った。子供と侮ったのがその者の不覚なのである。それに反して城太郎の顔つきは絵にも描けないほど物凄かった。口を裂いて敵の肉を食いこみ、爪は衣を突きぬいていた。
「こいつめッ」
するとまた一本、べつな樫の棒が現われ、そうしている城太郎の背後から、彼の腰を狙って、撲り下ろそうとした時である。武蔵は初めて腕を解いた。石垣のようにじっと固くなっていた人人の間から、ついと進み出したのが、はっと感じる間もないくらいな行動であった。
「卑怯」
二本の脚と棒が宙へ輪を描いたと思うと、どたっと鞠みたいな物が二間も先の大地へ転がった。
その次には、
「この悪戯者めが」

と、叱りながら、城太郎の腰帯へ諸手をかけて、武蔵は、自分の頭の上に、高々と差し上げてしまった。

そして又、咄嗟に棒を持ち直している太郎付の家臣に向い、

「最前から見ておるが、すこしお取調べに手落ちがあろう。これは、拙者の下僕でござるが、貴公たちは、抑〻、罪を、この小童に問われるつもりか、それとも主人たる拙者に問うつもりか」

すると、その家臣は、激越に言い返した。

「言うまでもなく、双方に糺すのじゃ」

「よろしい。然らば、主従二人して、お相手いたそう。それっ、お渡しするぞ」

ことばの下に、城太郎の体は、相手の姿へ向って抛り投げられた。

四

先刻から、周囲の人々は、

(彼は何を血迷っているのか。自分の下僕であるあの小童を、頭上に差し上げて、あれを一体どうするつもりだろう?)

武蔵の仕方に眼をみはり、武蔵の心を付度りかねていたらしい。

すると、諸手にさしあげていた城太郎のからだを、武蔵が、宙天から落すように相手の者へ向って抛りつけたので、

「あっ——」

人々は、そこを広くして、思わず後へ跳び退いた。
人間をもって人間へ打つける。余りにも無茶な――意外な――武蔵の仕方に気をのまれてしまったのである。
武蔵に抛られた城太郎は、天から降って来た雷神の子みたいに、手も足もちぢめ、まさかと油断して突っ立っていた相手の胸のあたりへ、
「わっ」
ぶつかったのである。
顎を外したように、
「ぎぇッ」
異様な声をあげると、その者の体は、城太郎の体と重なって、立ててある材木を離したように、直線にうしろへ倒れた。
したたかに、大地へ、後頭部でも打ったのか、城太郎の石頭が、ぶつけた途端に先の肋骨をくだいたのか、兎に角、ぎぇッといった声をさいごに、太郎付のその家臣は唇から血を噴いてしまったが、城太郎の五体はその胸の上で一ッとんぼ返りを打ったと思うと、そのまま二、三間先まで、鞠のように転がって行った。
「や、やったなっ」
「どこの素浪人」
これはもう太郎付の役であると否とにかかわらず、周りにいた柳生家の家臣たちが、こぞって罵り出した雑言だった。こよい四高弟の者が、客として招いた宮本武蔵とよぶ人間であることを

判乎知っていた者は少ないのであるから、さしずめ、そんなふうに見て、殺気立ったのも無理ではないのである。

「さて――」

武蔵は、向き直った。

「各々」

何を、彼はいおうとするのか。

すさまじい血相をもって、城太郎が取り落したところの木剣をひろい、それを右手にさげて、

「小童の罪は、主人の罪、どうなりと、ご処罰を承ろう。ただし、それがしも、城太郎も、いささか剣をもって侍の中の侍をもって任じている者にござりますゆえ、犬のごとく棒をもって撃ち殺されるわけには参りかねる。一応お相手つかまつるから左様ご承知ねがいたい」

これでは罪に伏すのではなくて、明らかな挑戦だ。

ここで一応、武蔵が、城太郎に代って、謝罪と陳弁をつくして藩士たちの感情を極力なだめることに努めれば、或は、何とか穏かに納まりがついたろうし、また、先程から口を挾みかねていた四高弟の輩も、

(まあ、まあ)

と、相互のあいだにはいる機会もあったろうが、武蔵の態度は、あたかもそれを拒み、かえって、自分のほうから事件の葛藤を好んでいるように見えるので、庄田、木村、出淵などの四高弟は、

「奇怪な」

眉をひそめて、彼の態度をひどく憎むもののように、端へ避って、じっと、鋭い眼をそろえて、武蔵を見まもっていた。

五

勿論、武蔵の暴言には、四高弟のほか、そこにいる面々は皆、尠からず、激昂した。

彼の何者であるかを知らないし、また彼の意中を測れない柳生家の諸士は、それでなくても、火になりたがっていた感情へ油をそそがれて、

「なにをッ」

誰とはなく、武蔵へ応じ、

「不逞な奴っ」

「どこぞの諜者だろう、縛ってしまえ」

「いや、斬ッちまえ」

また――

「そこを去らすなっ」

前後からこうひしめいて将に彼の身は、彼の手に抱え寄せられている城太郎と共に、白刃の中に隠されてしまうかと見えた。

「あッ待てっ」

庄田喜左衛門であった。

喜左衛門がそう叫ぶと、村田与三も、出淵孫兵衛も、

「あぶないっ」
「手を出すな」
四高弟の者は初めて、こう積極的に出て、
「退け退け」
と、いった。
「ここは、吾々にまかせろ」
「各〻は、各〻のお役室へもどっておれ」
そして——
「この男には、何か画策があると観た。うかと、誘いに釣り込まれて、負傷を出しては、御主君に対し吾々の申し開きが立たぬ。お犬のことも、重大事には相違ないが、人命はより貴重なものだ。その責任も、吾々四名が負うもので、決して、貴公たちに迷惑はかけぬから、安堵して、立ち去るがよい」
程経て後のそこには、最前新陰堂に坐っていた客と主人側だけの頭数だけが残っていた。
けれど、今はもう、主客のあいだがらは一変して、狼藉者と裁く者との、対立である。敵対である。
「武蔵とやら、気の毒ながらそちらの計策は破れたぞ。——察するに、何者かに頼まれ、この小柳生城を探りに来たか、或は御城内の攪乱を目論んで来たものに違いあるまい」
四名の眼は、武蔵をかこんで詰めよるのであった。この四名のどの一人でも達人の域に達していないものはないのである。武蔵は、城太郎を小脇に庇いながら、根が生えたように、同じ位置

に立っているのであったが、仮に今、この場を脱しようと考えても、それは身に翼を持っていても、こう四名の隙を破って逃げ去ることは難しいだろうと思われた。
出淵孫兵衛が、次に、
「やよ、武蔵」
鯉口を切った刀の柄を、やや前へせり出して、構え腰をしていった。
「事破れたら、いさぎよう自決するのが武士の値打だ。小柳生城の中へ、童ひとりを連れて、堂堂と、入り込んで御座った不敵さは、曲者ながらよい面がまえ。それに、一夕の好誼もある。――腹を切れ、支度のあいだは待ってやろう。武士はこうぞという意気を見せられい」
それで、すべてが解決できると四高弟の方では考えていた。
武蔵を招いたことが、抑〻、主君へは無断のことであったから、彼の素姓目的も、不問のまま闇の出来事として、葬り去ろうという意思らしいのだ。
武蔵は肯じない。
「なに、この武蔵に腹を切れといわれるか。――馬鹿なっ、馬鹿なことを」
昂然と、肩を揺すって彼は笑った。

六

飽くまでも、武蔵は相手の激発を挑むのであった。闘争を仕かけるのであった。
なかなか感情をうごかさなかった四高弟の者も、遂に、眉に険をたたえ、
「よろしい」

ことばは静かだが、断乎とした気をふくんでいった。
「こちらが、慈悲をもって申しておれば、つけ上がって」
出淵のことばにつづいて、木村助九郎が、
「多言無用」
武蔵の背へ廻って、
「歩めっ」
背を突いた。
「何処へ？」
「牢内へ」
——すると武蔵はうなずいて歩きだした。
しかしそれは自分の意思のままに運んでゆく足であって、大股に本丸のほうへ近づいて行こうとするのである。
「何処へ行く？」
ぱっと助九郎は先へ廻って、武蔵のまえに両手をひろげ、
「牢は、こちらでない。後へもどれ」
「もどらん」
武蔵は、自分の側へ、ひたと貼りついたようにしている城太郎へ向い、
（おまえは、彼方の松の下にいるがよい）
この辺はもう本丸の玄関に近い前栽らしく、所々に、枝ぶりのよい男松が這っていて篩にかけ

たような敷き砂が光っていた。

武蔵にいわれて、城太郎はその袂の下から勢いよく走った。そして、一つの松の木を楯にして、

(そら、お師匠様が、何かやりだすぞ)

般若野における武蔵の雄姿を思いだし、彼もまた、針鼠のように筋肉を膨らませていた。

――見ると、その間に、庄田喜左衛門と出淵孫兵衛のふたりが、武蔵の左右へ寄り添い、武蔵の腕を両方から逆に取って、

「もどれ」

「もどらぬ」

同じことばを繰返していた。

「どうしても戻らぬな」

「む！　一歩も」

「うぬっ」

前に立って、木村助九郎が、ついにこう癇を昂げ、刀の柄を打ち鳴らすと、年上の庄田と出淵の二人は、まあ待てとそれを止めながら、

「もどらぬなら戻らぬでよろしい。しかし、汝は、何処へ行こうとするか」

「当城の主、石舟斎へ会いにまいる」

「なに？」

さすがの四高弟も、それには愕として顔いろを革めた。奇怪でならなかったこの青年の目的

が、石舟斎へ近づくことであろうなどとは、誰も考えていなかったのである。

庄田は、畳みかけて、

「大殿へ会って、何とする気じゃ」

「それがしは、兵法修行中の若輩者、生涯の心得に、柳生流の大祖より一手の教えを乞わんためでござる」

「しからばなぜ、順序をふんで、我々にそう申し出ないか」

「大祖は、一切人と会わず、また修行者へは、授業をせぬと承った」

「勿論」

「さすれば、試合を挑むよりほか道はあるまい、試合を挑んでも、容易に余生の安廬より起って出ぬに相違ない。――それゆえ拙者は、この一城を相手にとって、まず、合戦を申しこむ」

「なに、合戦を?」

あきれた顔つきで四高弟はそう反問した。そして、武蔵の眼いろを見直した。――こいつ狂人ではあるまいかと。

相手の者に、両腕をあずけたまま武蔵は空へ眼を上げていた。何か、バタバタと闇が鳴ったからである。

「? ……」

四名も眼をあげた。その一瞬、笠置山の闇から城内の籾蔵の屋根のあたりへ、一羽の鷲が、星をかすめて飛び降りた。

心火

一

合戦といっては、言葉が大げさにひびくが、武蔵が今の自分の気持をいい現わすには、そういってもなおいい足りないほどであった。

技の末や、単なる小手先の試合では決してない。そんな生ぬるい形式を、武蔵は求めているのでもない。

合戦だ、飽くまでも戦いだ。人間の全智能と全体力とを賭けて、運命の勝敗を挑むからには、形式はちがっても、彼にとっては大なる合戦にかかっている気持と少しも違わないのである。

——ただ三軍をうごかすのと、自己の全智と全力をうごかすのとの相違があるだけだった。

一人対一城の合戦なのだ。——武蔵の踏ん張っている踵には、そういう激しい意力があった。

——で自然、合戦というような言葉が口をついて出たので、相手の四高弟は、

（こいつ狂人か？）

と、彼の常識を疑うように、その眼ざしを見直したが、これは疑ったほうにも無理はなかった。

「よしっ、おもしろい」

敢然と、こう応じて、木村助九郎は、穿いていた草履を足で飛ばし、そして、股立をからげた。

「――合戦とはおもしろい。陣鼓や陣鐘を鳴らさんまでも、その心得で応戦してやる。庄田氏、出淵氏、そやつをおれのほうへ突っ放してくれ」

さんざん止めもし、堪忍もした揚句である。第一、木村助九郎はさっきから頻りと成敗したがっている。

（もうこれまでだろう）

そう眼でいい合すように、

「よしっ、まかせるっ」

両方から抱えていた武蔵の腕を、二人が同時に離して、ぽんと背を突くと、六尺に近い武蔵の巨きな体が、

だ、だ、だっ――

四ツ五ツ大地を踏み鳴らし、助九郎の前へ、よろめいて行った。

助九郎は、待っていたものの、颯――と一足退いた。弾み込んでくる武蔵の体と自分の腕の伸びとに間合を測って退いたのである。

「――ガギッ」

奥歯のあたりでこう息を噛むと、助九郎の右の肱は、顔へ上がっていた。そして音のない音が、ヒュッと鳴るかのように、武蔵のよろめいて来た影を抜き打ちにした。

ザ、ザ、ザ、ザ――

と、剣が鳴った。助九郎の刀が神霊を現わしたように、鏘然と、刃金の鳴りを発したのである。

──わっ。という声が一緒に聞えた。武蔵が発したのではない。彼方の松の下にいた城太郎が飛び上がってさけんだのだ。助九郎の刀がザザと鳴ったのも、その城太郎がつかんでは投げつけた荒砂の雨だったのである。

けれど、その際の一つかみの砂などは、何の効果もないことはもちろんだった。武蔵は、背を突かれたせつなに、予め、助九郎が間合を測ることを計って、むしろ自分の勢いをも加えて、彼の胸いたへ突進して行ったのである。

突かれてよろめいてくる速度と、その速度に捨て身の意思を乗せてくるのとでは、速度の上に、大きな相違がある。

助九郎の退いた足と、同時に、抜き打ちに払った尺度には、そこに誤算があったので、見事に空を撲ってしまった。

二

約十二、三尺の間隔をひらいて、二人は跳び退いていた。助九郎の刀が反れ、武蔵の手が刀にかかろうとした瞬間にである。──そして双方で、じっと、闇の下へ沈みこむように竦んでいる。

「オ。これは見もの！」

そう口走ったのは庄田喜左衛門であった。庄田のほかの出淵、村田の二人も、まだ何も自分た

ちは、その戦闘圏内に交じっているわけでもないのに、ハッと、何ものかに吹かれたような身動きをした。そして各〻が、おる所の位置を更え、自らな身がまえを持ちながら、

(出来るな、こいつ)

武蔵の今の一動作に、等しく眸をあらためた。

――しいッと何か身に迫るような冷気がそこへ凝り固まってきた。助九郎の切っ先は、ぼやっと黒く見える彼の影の胸よりもやや下がり目な辺りにじっとしている。そのまま動かないのだ。武蔵も、敵へ右の肩を見せたまま、つくねんとして突っ立っている。その右の肘は、高く上がって、まだ鞘を払わない太刀のつかに精神をこらしているのだった。

「…………」

ふたりの呼吸をかぞえることが出来る。少し離れたところから見ると、今にも闇を切ろうとしている武蔵の顔には、二つの白い碁石を置いたかのような物が見える。それが彼の眼だった。

ふしぎな精力の消耗であった。それきり一尺も寄りあわないのに、助九郎の体をつつんでいる闇には次第にかすかな動揺が感じられてきた。明らかに、彼の呼吸は、武蔵のそれよりも、あらく迅くなって来ているのである。

「ムム……」

出淵孫兵衛が思わずうめいた。毛を吹いて大きな禍いを求めたことが、もう明確にわかったからである。庄田も村田も同じことを感じたにちがいない。

(――これは凡者でない)と。

助九郎と武蔵の勝負は、もう帰すところが三名にはわかっていた。卑怯のようであるが、大事

を惹き起さないうちに——又あまり手間どって無用の怪我を求めないうちに、この不可解な闖入者を、一気に成敗してしまうに如くはない。
　そういう考えが、無言のうちに、三名の眼と眼をむすんだ。すぐそれは行動となって、武蔵の左右へ迫りかけた。すると、弦を切ったように刎ねた武蔵の腕は、いきなり後ろを払って、
「いざっ」
　すさまじい懸声を虚空から浴びせた。
　虚空と聞えたのは、それが武蔵の口から発したというよりは、彼の全身が梵鐘のように鳴って四辺の寂寞をひろく破ったせいであろう。
「——ちいッ」
　唾するような息が、相手の口をついて走った。四名は四本の刀をならべて、車形になった。武蔵の体は蓮の花の中にある露にひとしかった。
　武蔵は今、ふしぎに自己を感得した。満身は毛穴がみな血を噴くように熱いのだ。けれど、心頭は氷のように冷たい。
　仏者のいう、紅蓮という語は、こういう実体をいうのではあるまいか。寒冷の極致と、灼熱の極致とは、火でも水でもない、同じものである。それが武蔵の今の五体だった。

三

　砂はもうそこへ降って来なかった。城太郎はどこへ行ったか、忽然と影もない。
　——颯々。颯々。

まっ暗な風が時折、笠置のいただきから颪ちてくる。そして、容易にうごかないそこの白刃を研ぐように吹いて、ビラ、ビラ、と燐のように戦ぎを闇の中に見せる。
四対一である。けれど武蔵は、自分がその一の数であることは、さして苦戦をおぼえない。
(なんの！)
と、血管が太くなるのを意識するのみであった。
死。
いつも真っ向から捨てようとしてかかるその観念も、ふしぎと今夜は持たない。また、
(勝てる)
とも思っていなかった。
笠置颪ろしが、頭の中をも吹きぬけて行くような心地であった。脳膜が蚊帳のようにすずしい。そしておそろしく眼がよく見える。
――右の敵、左の敵、前の敵。だが。
やがて武蔵の肌はねっとりと粘ってきた。額にもあぶら汗が光っている、生れつき人なみ以上巨大な心臓は膨れきって、不動形の肉体の内部にあって極度な、燃焼を起しているのだ。
ず、ず……
左の端にいた敵の足がかすかに地を摺った。武蔵の刀の先は、蟋蟀のひげのように敏感にそれを観て取る。それをまた、敵も察して入って来ない。依然たる四と一との対峙がつづく。
「………」
しかしこの対峙が不利であることを、武蔵は知っていた。武蔵は敵の包囲形の四を、直線形の

四にさせて、その一角から次々に斬ってしまおうと考えるのであったが、相手は、烏合の衆ではない達人と上手のあつまりだ、そういう兵法にはかからない。厳として位置を更えない。

先が、その位置を変えないかぎり、武蔵の方から打ってゆく策は絶対になかった。この中の一名と相打ちして死ぬ気ならばそれも可能であるが、さもなければ、敵の一名から行動してくるのを待って、敵の四の行動が、ほんの瞬間でも、不一致を起すところを臨んで打撃を加えるほかにない。

（——手ごわい）

四高弟のほうも、今は武蔵の認識をまったく革めて、誰ひとりとして、味方の四の数をたよっている者はなかった。この際、数を恃んで、毛ほどでも弛みを見せれば武蔵の刀は、きッとそこへ斬りこんでくる。

（——世の中には、いそうもない人間が、やはりいるものだ）

柳生流の骨子をとって、庄田真流の真理を体得したという庄田喜左衛門も、ただ、

（ふしぎな人間）

として、敵の武蔵を、剣の先から見澄ましているだけだった。彼にさえ、まだ一尺の攻撃もなし得なかった。

剣も人も、大地も空も、そうして氷に化してしまうかと思われた一瞬、思いがけない音響が、武蔵の聴覚をハッとおどろかせた。

誰がふくのか、笛の音だった。そう距離もないらしい本丸の林を通って、冴えた音が風に運ばれて来るのであった。

四

笛。──高鳴る笛の音。だれだ、ふくのは。
われもなく敵もなく、生死の妄念もまったく滅して、ただ一剣の権化となりきっていた武蔵は、その耳の穴から、計らざる音律の曲者にしのび込まれて、途端に、われに返ってしまった、肉体と妄念のわれに戻ってしまった。
なぜならば、音は、彼の脳裡に、肉体のあるかぎりは忘れ得ないであろうほどふかく記憶に烙きついているはずであった。
故郷美作の国の──あの高照の峰の附近で──夜毎の山狩に追われつつ、飢えと心身のつかれに、頭も朦朧となっていた時、ふと、耳にひびいて来た笛の音ではないか。
あの時──
こう来い、こうお出で。──と自分の手をとって導くように呼び、そしてついに、僧の沢庵の手に捕まる機縁を作ってくれたその笛の音ではないか。
武蔵は忘れても、武蔵のあの時の潜在神経は、決して、忘れることのできない感動をうけていたにちがいない。
その音ではないか。
音がそっくりであるばかりでなく、曲もあの時のと同じなのだ。アッと、突き抜かれてみだれた神経の一部が、
(──オオ、お通)

脳膜の中でさけぶと、武蔵の五体というものは、途端に、雪崩を打った崖のように、脆いものになってしまった。
見のがすはずはない。
四高弟の眼には、そのせつな、破れ障子のような武蔵のすがたが見えた。
「――たうっッ」
正面の一喝と共に、木村助九郎の肘がまるで七尺も伸びたかのように眼に映った。――武蔵は、
「かッ」
その刃先へ喚き返した。
総身の毛に火がついたような熱気をおぼえ、筋肉は、生理的にかたく緊まって、血液は、噴き出そうとするところの皮膚へ、激流のように集まった。
――斬られたっ。
武蔵はそう感じた。ぱっと左の袖口が大きく破れて、腕が根元から剝き出しになってしまったのは、その辺の肉と一緒に、袂を斬り取られたのであると思った。
「八幡っ」
絶対な自己のほかに、神の名があった。自己の破れ目から、稲妻みたいにその声が迸った。
一転。
位置を更えて振向くと、自分のいたところへのめッて行く助九郎の腰と足の裏が見えた。
「――武蔵っ」

出淵孫兵衛が叫んだ。
村田と庄田は、
「やあ、口ほどもない」
横へ駈け廻ってくる。
武蔵はそれに対して、大地を踵で蹴った。彼のからだはそこらの低い松の梢をかすめるくらいな高さに躍り、その距離をさらに一躍、また一躍して、後も見ずに闇の中へ駈け入ってしまった。
「――汚し」
「――武蔵っ」
「恥を知れっ」
下の空濠へ急落している崖のあたりで、野獣の跳ぶような木の折れる音がした。――それがやむとまた、笛の音は、呂々と、星の空をながれて遊んでいた。

篤

一

三十尺もある空濠だった。空濠といっても、深い闇の底には、雨水が溜っていないとは限らない。

灌木帯の崖を、勢いよく辷り落ちて来た武蔵は、そこに止まって石を抛ってみた。そして次に、石を追って、飛びこんだ。
井戸の底から仰ぐように、星が遠くなった。武蔵は濠の底の雑草へ、どかんと仰向けに寝ころんだ。一刻ほどもじっとしていた。
肋骨が大きな波を打つ。
肺も心臓も、そうしている間にやっと常態を整えてくる。
「お通……。お通が、この小柳生城にいるわけはないが？　……」
汗は冷え、肺は落ち着いて来ても、乱麻のように掻きみだれた気持は容易に平調にならなかった。
「心の曇りだ、耳のせいだ」
そうも思い、
「いや、人の流転はわからぬものゆえ、ひょっとしたら、やはりお通がいるのかも知れない」
彼は、お通のひとみを、星の空にえがいてみた。
いや彼女の眼や唇は、敵て、虚空にえがいてみるまでもなく、常に無自覚に武蔵の胸に住んでいるのだった。
甘い幻想が、ふと彼をつつむ。
国境の峠で彼女のいったことば、
（あなたの他に、私にとって男性はありません。あなたこそ、ほんとの男性、私はあなたがなくては生きられない）

また、花田橋のたもとで彼女のいったことば――
(ここで、九百日も立っていました。あなたが来るまで)
なお、あの時いった――
(もし来なければ、十年でも二十年でも、白髪になっても、ここの橋の袂に待っているつもりでした。……連れて行って下さい。どんな苦しみも厭いません)
武蔵は胸が痛んでくる。
苦しまぎれに、あの純な気持を裏切って、隙を作って、自分は驀しぐらに走ってしまった。
どんなに――あの後では自分を恨んでいただろう。理解できない男性を、呪わしい存在として唇を噛みしめたことだろう。
「ゆるしてくれ」
花田橋の欄干に小柄で残してきたことばが、吾れ知らず、今の武蔵の唇からも洩れていた。そして、涙のすじが眼じりから白くながれていた。
「ここじゃあない」
ふいに、高い崖の上で人声がした。三つ四つ松明が、木の間を掻きわけて立ち去るのが見えた。
武蔵は、自分の涙に気がつくと忌々しげに、
「女などがなんだ!」
手の甲で眼をこすった。
幻想の花園を蹴散らすように、ガバと跳び起きて、ふたたび小柳生城の黒い屋形を見上げ、

「卑怯といったな、恥を知れといったな。武蔵はまだ、降伏したとはいっていないぞ。退いたのは、逃げたのではない。兵法だ」

空濠の底を、彼は歩きだした。何処まで歩いても空濠の中である。

「一太刀でも打ち込まずにおこうか。四高弟などは相手でない。柳生石舟斎その者へ見参、見ろ、今に――合戦はこれからする！」

そこらに落ちている枯木を拾って、武蔵は膝に当ててバキバキと折り始めた。それを石垣の隙間に差しこんで、順々に足がかりを作り、やがて彼の影は、空濠の外側へ跳び上がっていた。

二

笛の音はもう聞えない。

城太郎はどこへ隠れ込んだのか。――一切のことが、武蔵の頭になかった。

彼はただ旺盛なる――自分でも持てあますほど旺盛な――血気と功名心の権化となり終っていた。そのすさまじい征服慾の吐け口を見いだすのみに、眼は生命の全部を燃やしていた。

「お師匠さまあ――」

どこか遠い闇で呼ぶような心地がする。耳を澄ませば聞えないのである。

(城太郎か)

ふと思ったが、武蔵は、

(あれに、危険はあるまい)

案じなかった。

なぜならば、先刻、崖の中腹あたりに松明を見たが、それっきりで城内でも自分たちの身を、飽くまで捜索しようとはしていないらしく思われる。

「この間に、石舟斎へ」

さながら深山のような林や谷間を、彼は、彼方此方さまよい歩いた。あるいは、城の外へ出てしまったのではないかと疑ったが、所々の石垣や濠や、籾倉らしい建物を見ると、城内であることは確かなのだが、石舟斎の住んでいる草庵とは、どこにあるのか、捜し当たらないのである。

石舟斎が、二ノ丸にも本丸にも住まわず、城地のどこかに、一庵をむすんで余生を送っているということは、綿屋の主からも聞いていたことだ。その草庵さえわかれば、直接、戸をたたいて、彼は、決死の見参をするつもりなのである。

(何処だ！)

彼は、叫びたい感情で、夢中になって歩いていた。ついには、笠置の絶壁へまで出て、搦手の柵からむなしく引返した。

(出て来いっ。おれの相手たらん者は)

妖怪変化でもよいから、石舟斎になって、ここへ現われて来てほしかった。四肢にみなぎっている満々たる闘志は、夜もすがら彼を悪鬼のように歩かせた。

「あっ？　……おお……ここらしいぞ」

それは城の東南へ降りたゆるい傾斜の下だった。その辺の樹木を見ると、みな姿がよく、鋏や下草の手入れがよくゆき届いていて、どうあっても、人の住んでいる閑地らしい。

門がある！

利休風の茅ぶき門で、腕木には蔓草が這い、垣のうちには、竹林が煙っていた。

「オオ、ここだ」

覗いてみると、禅院のように、道は竹林を通って、高いその山の上へと這っているのだ。武蔵は、一気に垣を蹴やぶって入り込もうとしたが、

「いや待て」

門のあたりの清掃された床しさや、あたりに白くこぼれている卯の花の何となく主人の風を偲ばせるものに、猛りきっている心を宥められて、ふと、自分の鬢のみだれや、襟元に気がついた。

「もう、急くことはない」

殊に自分の疲れも思い出された。石舟斎に面接する前に、まず自身を整えることが考え出された。

「朝になれば、誰か、門を開けに来るだろう。――その上でよい、その上でも、強って修行者を拒む態度であったら、またとる手段もある」

武蔵は、門廂の下に、坐りこんだ。そして、後ろの柱へ背をよりかけると、よい心地で眠りに入ることができた。

星がしずかだった。卯の花が風のたびに白くうごいた。

三

ボトと、襟くびへ落ちて来た露の冷たさに、武蔵は眼をさました。いつのまにか夜は明けてい

る。熟睡した後の頭脳は、流れこむように耳の穴から入る無数の鶯の声と朝の風に洗われて、たった今、この世に誕生したような明るさであり、なんのつかれも残滓もなかった。
ふと、眼をこすって、眸を上げると、真っ紅な夜明けの太陽が、伊賀、大和の連峰を踏んで、昇っていた。
武蔵は、いきなり突っ立った。十分に休養を摂った肉体は、太陽に焼かれると、すぐ希望に燃え功名や野心にうずき、手脚はそれに蓄えている力のやり場を催促して、
「む、む——」
と伸びをせずにいられなくなって来る。
「今日だ」
なんとはなく、そう呟く。
その次に彼は空腹を思い出した。飢えを思うと、城太郎の身にも及ぼして、
「どうしたか」
と、軽く案じる。
ゆうべは少し彼に酷い目をあわせ過ぎたようでもあるが、それも彼の修行の足しになることと承知して武蔵はしていることであった。どう間違っても、彼に危険はないものと多寡をくくっていてよい気がする。
淙々と、水音がゆく。
門内の高い山から傾斜を駈けて一すじの流れが、勢いよく、竹林を繞り垣の下を通って、城下へ落ちてゆくのである。武蔵は、顔を洗い、そして、朝飯のように水をのんだ。

「美味い！」
水のうまさが身に沁みた。
察するに、石舟斎は、この名水があるために、この水の源へ草庵の地を選んだのであろう。
武蔵はまだ、茶道を知らず、茶味なども解さなかったが、単純に、
「美味い！」
と思わず口をついて叫ぶほど、水のうまさというものを、今朝は感じた。
ふところから汚い手拭きを出して、それも流れで洗濯した。布は忽ち白くなる。
襟くびを深く拭き、爪の垢まできれいにした。刀の笄を抜いて、その次には、みだれた髪の毛を撫でつける――
とにかく柳生流の大祖に今朝は会うのである。天下にも幾人しかいない現代の文化の一面を代表している人物なのだ。――その石舟斎に、いや武蔵のような無禄無名の一放浪者にくらべれば、月と小糠星ほども格のちがう大先輩に見参に入るのだ。
襟をただし、髪を撫でるのは、当然な礼節の表示である。
「よしっ」
心も整った、頭もすがすがしい武蔵は、悠揚迫らない客の態度になって、そこの門を叩こうとした。
だが、草庵は山の上であるしここを叩いても聞えるはずがないがと、ふと、鳴子でもないのかと門の左右を見まわすと、左右二つの門柱に、一面ずつの聯が懸けてあって、その文字彫の底には青泥が沈めてあり、読んでみると、一首の詩になっていた。

右がわの聯には、

吏事君ヨ怪シムヲ休メヨ
山城門ヲ閉ズルヲ好ムヲ

また、左の柱には、

此山長物無シ
唯野ニ清鶯ノ有ルノミ

武蔵は、凝然と、その詩句をにらんでいた。――満地の樹々に啼きぬく老鶯の音の中に。

四

門にかけてある以上、聯の詩句は、いうまでもなく山荘の主人の心境と見てさしつかえあるまい。

「――吏事（役人）君ヨ怪シムヲ休メヨ。山城門ヲ閉ズルヲ好ムヲ。此山長物無シ、唯野ニ清鶯ノ有ルノミ……」

幾度も口の裡で誦む。

すがたに礼節を持ち、心に澄明な落ちつきを湛えている今朝の武蔵には、その詩句の意味が、素直に分った。――同時に、石舟斎の心境と、その人がらや生活も彼の心へ、ぴたりと映った。

「……おれは若い」

武蔵は、自ら頭が下がってしまうのをどうしようもない。

石舟斎が、一切、門を閉じて拒んでいるのは、決して、武者修行の者だけではないのである。

あらゆる名利を名聞を、また一切の我慾と他慾を——
世の吏事（役人）に対してすら、怪しむのをやめてくれと断っているのである。石舟斎のそうして世間を避けている姿を思うと、武蔵は高い梢に冴えている月の相が聯想された。
「……届かない！　まだ、自分などには届かない人間だ」
彼は、何としても、この門を叩く気になれなくなった。蹴って闖入して行くなどということは、もう考えてみるだけでも怖しい。いや、自分が恥かしい。
花鳥風月だけが、この門を入るべきものだと思う。彼はもう今では、天下の剣法の名人でも一国の藩主でも何でもない。大愚に返って、自然のふところに遊ぼうとしている一人の野の隠居だ。
そういう人の静かな住居を騒がすことは、余りに心ない業だ。名利も名聞もない人に打ち勝って何の名利になる？　名聞になる？
「アア。もしこの聯の詩がなかったら、おれは、石舟斎からよい笑われ者に見られる所だった」
陽がやや高くなったせいか、鶯の声も、夜明けほどはしなくなった。
——と、門のうちの遠い坂の上から、ぽたぽたと迅い跫音が聞えて来た。跫音におどろいて立つ小禽のつばさが、八方に、小さな虹を描く。
「あっ？」
狼狽した色が武蔵の顔を横ぎった。垣の隙間からその人の姿がわかった。——門内の坂を駈けおりて来たのは若い女なのである。
「……お通だ」

ゆうべの笛の音を武蔵は思い出した。咄嗟に、みだれた心のうちで、
(会おうか。会うまいか)
彼は迷うのであった。
会いたい！　と思う。
また、会ってはならぬ！　と思う。
烈しい動悸が、武蔵の胸をあらしみたいに翔けまわった。彼は、意気地のない、殊に、女には弱い——一個の青春の男でしかなかった。
「……ど、どうしよう？」
まだ、心が決まらないのだ。その間に、山荘の方から坂道を駈けおりて来たお通は、すぐそこまで来て、
「あらっ？」
足を止めた。
後を振顧った。
そして何となく今朝は、欣びごとでもあるらしい生々した眸を、彼方此方へやって、
「一しょに尾いて来たと思ったら？　……」
と、誰かを捜すように、見まわしていたが、やがて、両手を唇にかざして、山の上へ向い、
「城太郎さアん。城太郎さアん」
と、呼び出した。
その声を聞いたり、姿を近く見ると、武蔵は顔を紅らめてこそこそと樹蔭へかくれてしまっ

た。

五

「——城太さアん」
間を措いて、彼女がまた呼ぶと、こんどは明らかに返辞があって、
「おウーイ」
と、間の抜けた答えが、竹林の上のほうでする。
「あら、こっちですよ。そんな方へ道を間違えては駄目。そうそうそこから降りておいでなさい」
やがて孟宗竹の下を潜って、お通のそばへ城太郎は駈けて来た。
「なアんだ、こんなところにいたのか」
「だから、私の後に尾いておいでなさいといったでしょう」
「雉子がいたから、追いつめてやったんだ」
「雉子などを捕まえているよりも、夜が明けたら、大事な人を捜さなければいけないじゃありませんか」
「だけど、心配することはないぜ。おれのお師匠様に限っては滅多に討たれる気づかいはないから」
「でも、ゆうべお前は、何といって、私のところへ駈けつけて来たの？　……今、お師匠様の生命が危いから、大殿様にそういって、斬り合いをやめさせてくれと呶鳴って来たじゃありません

か。あの時の城太さんの顔つきは、今にも泣き出してしまいそうでしたよ」
「それや、驚いたからさ」
「驚いたのは、おまえよりも、私のほうでした。——おまえのお師匠様が、宮本武蔵というのだと聞いた時——私は余りのことに口がきけなかった」
「お通さんは、どうしておらのお師匠様を前から知っていたんだい」
「同じ故郷の人ですもの」
「それだけ」
「ええ」
「おかしいなあ。故郷が同じというだけくらいなら、何もゆうべ、あんなに泣いてうろうろすることはないじゃないか」
「そんなに私、泣いたかしら」
「人の事は覚えていても、自分の事は忘れちまうんだな。……おらが、これは大変だ。相手が四人だ、ただの四人ならよいが、みんな達人だと聞いていたから、これは捨てておくと、お師匠様も、今夜は斬られるかも知れない……。そう思ッちまって、お師匠様に加勢する気で、砂をつかんで、四人の奴らへ投げつけていると、あの時、お通さんが、どこかで笛を吹いていたろう」
「ええ、石舟斎様の御前で」
「おれは、笛を聞いて、ア、そうだ、お通さんにいって、殿様に謝ろうと胸の中で考えたのさ」
「それでは、あの時、私のふいていた笛は武蔵様にも聞えていたのですね。たましいが通ったのでしょう、なぜなら私は、武蔵様のことを思いながら、石舟斎様の前であれを吹いていたのです

から」

「そんな事は、どっちだっていいけれど、おらは、あの笛が聞えたんで、お通さんのいる方角が分ったんだ。夢中になって、笛の聞えるところまで駈けてッた。そして、いきなり何といっておらは呶鳴ったんだっけ」

「合戦だっ、合戦だっ。――と呶鳴ったんでしょう。石舟斎様も、おどろいたご様子でしたね」

「だが、あのお爺さんは、いい人だな。おらが、犬の太郎を殺したことを話しても、家来のように怒らなかったじゃないか」

この少年と話をしはじめると、お通もついつりこまれて、刻も場合も忘れてしまう。

「さ……。それよりも」

止めどない城太郎のお喋舌りを遮って、お通は、門の内側へ寄った。

「――話は後にしましょう。何より先に、今朝は、武蔵様を捜さなければいけません。石舟斎様も、例を破って、そんな男なら会ってみようと仰っしゃって、お待ちかねでいらっしゃるのですから……」

閂を外す音がする。

利休風の門の袖が左右にひらいた。

六

今朝のお通は、華やいで見える。やがて武蔵に会えるという期待にあるばかりでなく、若い女

と生れての欣びを生理的にもいっぱいに皮膚の上にあらわしている。
夏に近い太陽は、彼女の頬を果物のようにつやつやとみがきたてている。薫々とふく若葉の風は肺の中まで青くなるほどにおう。
こぼれる朝露を背にあびながら、樹蔭に潜んで彼女のすがたを眼の前に見ていた武蔵は、
（アア健康そうになったな）
すぐそこに気づいた。
七宝寺の縁がわに、いつも悄んぼりと空虚な眼をしていた頃の彼女は、決して今見るような生生した頬や眸をしていなかった。さびしい孤児の姿そのものだった。
その頃のお通には恋がなかった。あっても、ぼんやりしたものだった。どうして自分のみが孤児なのか、そればかりを仄かに怨んだり回顧したりしていた感傷的な少女だった。
だが武蔵を知って、武蔵こそほんとの男性だと信じてからの彼女は、初めて、女性の沸らす情熱というものに自身の生きがいを知り出したのである。――殊に、その武蔵を追って旅にさまよい出してからは、あらゆるものに耐え得る要素が体にも心にも養われて来た。
武蔵は、物蔭から、彼女のそうしてみがかれて来た美に眼をみはった。
（まるで違ってきた！）と。
そして彼は、どこか人のいない所へ行って、洗いざらい自分の本心といおうか――煩悩といおうか――強がっているこころの裏の弱いものをいってしまって、花田橋の欄干にのこした無情に似た文字を、
（あれは偽だ）

と、訂正してしまおう?

そして、人さえ見ていなければかまわない、女になんか幾ら弱くなってやっても大したことはない。彼女がここまで自分を慕ってくれた情熱に対して、自分の情熱も示し合おう。抱きしめてもやろう、頬ずりをしてもやろう、涙もふいてやろう。

武蔵は、幾度も、そう考えた。考えるだけの余裕があった。——お通が自分にいったかつての言葉が耳に甦ってくるほど、彼女の真っ直な思慕に対して叛くことが、男性として酷い罪悪のように思われてならない——苦しくてならない。

けれど、そういう気持を、ぎゅっと歯の根で嚙んでしまう怖ろしい怺えを武蔵は今しているのだった。そこでは、一人の武蔵が二つの性格に分裂して、

(お通!)

と、呼ぼうとし、

(たわけ)

と、叱咤している。

そのどっちの性格が、先天的なものか後天的なものか、彼自身には固よりわからない。そしてじっと木蔭の中に沈みこんでいる武蔵の眸には、無明の道と、有明の道とが、みだれた頭の裡にも、徴かにわかっていた。

お通は、何も知らないのである。門を出て十歩ほど歩み出した。そして、振向くと、城太郎がまた何か門のそばで道草をくっているので、

「城太さん、何を拾っているの。早くお出でなさいよ」

「ま、そんな汚い手拭なんか拾って、どうするつもり？」
「待ちなよ、お通さん」

七

門のそばに落ちていた手拭であった。手拭は今しぼったように濡れていた。それを踏んづけてから城太郎は抓み上げて見ていたのである。
「……これ、お師匠様のだぜ」
お通は側へ来て、
「え、武蔵様のですって」
城太郎は、手拭の耳を持って両手にひろげ、
「そうだそうだ、奈良の後家様のうちでもらったんだ。紅葉が染めてある。そして、宗因饅頭の『林』という字も染めてあら」
「じゃあ、この辺に？」
お通が遽かに見まわすと、城太郎は彼女の耳のそばでいきなり伸び上がって、
「——おッしょう様あっ」
傍らの林の中で、さっと樹々の露が光り、鹿でも跳ぶような物音がその時した。——びくっとお通は顔を回らして、
「あっ？」
城太郎を捨てて、突然、驀しぐらに走り出した。

城太郎は後から息をきって追いかけながら、
「――お通さん、お通さん、何処へ行くのさ！」
「武蔵様が駈けてゆく」
「え、え、どっちへ」
「彼方へ」
「見えないよ」
「――あの、林の中を」
武蔵の影をチラと見た欣びに似た失望と――見る間に遠く去ってゆくその人へ追いつこうとする女の脚のいっぱいな努力で、彼女は、多くの言葉を費していられなかった。
「うそだい、違うだろ」
城太郎は、ともに駈けてはいるがまだ信じない顔つきで、
「お師匠様なら、おらたちの姿を見て、逃げてゆくわけはない、人違いだろ」
「でも、御覧」
「だから何処にさ」
「あれ――」
遂に、彼女は、発狂したかのような声をふりしぼって、
「武蔵様あ！　……」
道ばたの樹につまずいてよろめいた。そして、城太郎に抱き起されながら、
「おまえもなぜ呼ばないのです！　城太郎さん、はやく、お呼び！」

城太郎はぎょっとして、そういうお通の顔に眼をすえてしまった。――何と似ていることだろう、口こそ裂けていないが、血ばしっている眼、青じろく針の立った眉間、蠟を削ったような小鼻や顎の皮膚――
似ている。そっくりといってもよい。あの奈良の観世の後家から、城太郎がもらって来た狂女の仮面と。
城太郎は、たじろいて、彼女の体から手を放した。するとお通は、その戸惑いを叱りつけるように、
「はやく追いつかなければだめです。武蔵様は、帰って来ない。お呼び、お呼び、私も呼びますから声かぎりに――」
そんな馬鹿なことはあるはずがないと、城太郎は心のうちで否定するのであったが、お通の余りにも真剣な血相を見ては、そうもいっていられなかったとみえ、彼も、精いっぱい大きな声を出して、お通の走るままに走って行った。
林をぬけると低い丘があって、山づたいに月ケ瀬から伊賀へゆける裏道になっていた。
「あっ、ほんとだ」
そこの丘の道に立つと、城太郎の眼にも武蔵の姿が明らかに映った。けれどそれはもう声も届かない距離の彼方にであった。後も見ずに遠くを駈けてゆく人影だった。

八

「あっ、彼方に――」

二人は駈けた。呼んだ。
足のかぎりに、声のかぎりに。
泣き声をふくんだ二人のさけびが、丘を降り、野を駈け、山ふところの谷間まで駈けて、木魂を呼びたてる。
だが、遠く小さく見えていた武蔵の影は、そこの山ふところに駈け入ったまままもうどこにも見あたらなかった。
漠々として白雲はふかい。淙々として渓水の音は空しい。母親の乳ぶさから打ち捨てられた嬰児のように、城太郎は地だんだを踏んで泣きわめいた。
「ばか野郎っ、お師匠さんの大馬鹿。おらを捨てて……おらをこんなところへ捨てて……やいっ、ちくしょうっ、どこへ行っちまやがったんだ」
お通はまたお通で、彼とはべつに、大きな胡桃の木に喘ぐ胸をもたせかけて、ただ、しゅくしゅくと泣きじゃくっている。
これほどに一生を投げやっている自分の気持も、まだあの人の足を止めるには足らないのであろうか。彼女はそれが口惜しかった。
彼の人の志が今何を目的としているか、又、何のために自分を避けて行ったのか、それは姫路の花田橋の時からよく分っている問題である。けれど彼女としてはこう思う。
(どうして私に会っては、その志の邪魔になるのか?)
また、こうも思った。
(それはいいわけで、私が嫌いなのか?)

だが、お通は、七宝寺の千年杉を幾日か見つめて、武蔵がどういう男性であるかを十分に識りつくしていた。女にうそをいうような人ではないと信じている。嫌ならば嫌といいきる人なのだ。その人が、花田橋では、
（決して、そなたが嫌いなわけではない――）
といった。
お通は、それを恨みに思う。
では自分はどうしたらいいのか。孤児（みなしご）というものには一種の冷たさとひがみがあって、めったに人を信じないかわりに、信じたからには、その人よりほかに頼りも生きがいもないように思い込むものだ。まして自分は本位田又八という男性に裏切られている。男性を見ることに深刻になるべく教えられた揚句なのだ。この人こそ世の中に少ない真実の男性と見て生涯をも決めて歩いて来たのである。どうなっても後悔はしないという覚悟で。
「……なぜ一言（ひとこと）でも」
胡桃（くるみ）の葉はふるえていた。樹にものをいえば樹さえ感動するかのように。
「……あんまりです……」
怨めば怨むほどもの狂わしく恋しいのだ。宿命といおうか。どうしても、その人との生命の合致を見なければ、ほんとの人生を呼吸することのできない生命を持っていることは、弱々しい精神には耐えないほどな苦しみに違いなかった。片肺の肉体を持っている以上な苦しみだった。
「……あ、坊さんが来る」
半狂人（はんきちがい）のように怒っていた城太郎がそう呟いたが、お通は胡桃（くるみ）の木から顔を離そうとしなかっ

た。

伊賀の山々には、初夏が来ている。真昼になるほど空は透明性と紺碧を深くしてきた。

──旅の坊さんは、その山をひょこひょこ降りて来た。白雲の中から生れて来たように、世の中の絆を何も持っていない姿である。

ふと、胡桃の木の彼方を通りかけて、そこにいるお通のすがたを振り向いた。

「おや？　……」

その声に、お通も顔をあげた。泣き腫らした眼は、びっくりして大きくさけんだ。

「あっ……沢庵さん」

折も折である。宗彭沢庵のすがたは、彼女にとって、大きな光明だった。それだけに、こんなところへ沢庵が通るなんて、余りに偶然な気がして、お通は、白昼夢にさまよっているような気持がしてならなかった。

九

お通にとっては意外であったが、沢庵にしてみれば、彼女をここで発見したのは、自分の予測があたったに過ぎないことだし、それから城太郎も加えた三人づれで、柳生谷の石舟斎のところへ戻ることになったのも、べつだん何の偶然でも奇蹟でもなかったのである。

抑々。

宗彭沢庵と柳生家との関係は、今に始まった間がらではなく、その機縁は遠い前からのことであって、この和尚がまだ大徳寺の三玄院で、味噌を摺ったり大台所を雑巾を持って這い廻ってい

た頃からの知りあいだった。
その頃、大徳寺の北派といわれる三玄院には、常に生死の問題を解決しようとする侍とか、武術の研究には同時に精神の究明が必要であると悟った武道家とか、異った人物の出入りが多くて、
（三玄院には謀叛の霧が立っている）
と噂されたほど、そこの禅の床は、僧よりも侍に占められていたものだった。
――そこへよく来ていた人物の中に上泉伊勢守の老弟鈴木意伯があり、柳生家の息子という柳生五郎左衛門があり、その弟の宗矩などがあった。
まだ但馬守とならない青年宗矩と沢庵とは、忽ち、親しくなって、以来、二人の交友は浅からぬものがあって、小柳生城へも幾度も訪れるうちに、宗矩の父の石舟斎とは息子以上に、
（話せるおやじ）
と尊敬し、石舟斎もまた、
（あの坊主、ものになる）
と、許していた。
こんどの訪問は、九州を遍歴して、先ごろから泉州の南宗寺へ来て沢庵は杖をとめていたので、そこから久しぶりに、柳生父子の消息を手紙でたずねてやると、その返辞に、石舟斎から細細と便りがあって、
（――近ごろ自分は至ってめぐまれている。江戸表へやった但馬守宗矩も、無事御奉公をしているし、孫の兵庫も、肥後の加藤家を辞して、目下は修行して他国を歩いているが、これもまずま

ずどうやら一人前にはなれそうだし、折から近ごろ、自分の手許には、眉目うるわしい笛の上手な佳人が来て、朝夕の世話やら、茶や花や和歌の相手やら、とかくに寒巌枯骨になりやすい草庵に、一輪の花をそえている。その女性は、和尚の郷国とはすぐ近い美作の七宝寺とやらで育った者であるといえば、和尚とは話も合おう。佳人の笛を聞きながら一夕の美酒は、茶で時鳥という夜ともまた変った味がある。ぜひ、そこまで来ているなら、一夜を割いて、老叟の宿へも来たまえかし）

——こういう手紙を見ると、沢庵は、尻を上げずにいられなかった。まして手紙のうちにある眉目うるわしい女性の笛吹きといえば、どうやら、かねて時折は案じている昔なじみのお通らしくもあるし——

そんなわけでぶらりとこの地方を歩いて来た沢庵であるから、その柳生谷に近い山で、お通のすがたを見かけたことは、さまで意外としなかったが、お通の話によって、

「惜しかった」

と、彼も舌を鳴らして嘆息したのは、たった今、武蔵が伊賀路のほうへ向って駈け去ったということであった。

女の道

一

そこの胡桃の木の丘から、石舟斎のいる山荘の麓まで、城太郎を連れて、悄々と引っ返してゆく間に、沢庵からいろいろ問いただされて、お通がつつみ隠しなく、その後の自分の歩いて来た途やらこの度のことを、彼なれば何でもと心をゆるして、語りもし相談もしたであろうことは、想像に難くあるまい。

「む。……む……」

沢庵は、妹の泣き言でも聞いてやるように、うるさい顔もせず幾たびも頷いて、

「そうか、なるほど、女というものは、男にはできない生涯を選ぶものだ。——そこで、お通さんの今考えていることは、これからどっちを歩こうという岐れ道の相談じゃろ」

「いいえ……」

「……じゃあ?」

「今更、そんなことに、迷ってはおりません」

俯向きがちな彼女の力のない横顔を見れば、草の色も真っ暗に見えているであろうほど、滅失の中の人だったが、そういった言葉の語尾には、沢庵も眼をひらいて見直すくらい、強い力がこ

もっていた。
「あきらめようか、どうしようか、そんな迷いをしているくらいなら、私は七宝寺から出てなど参りません。……これからも行こうとする途は決まっているのです。ただそれが、武蔵さまの不為であったら――私が生きていてはあの方の幸福にならないのなら――私は自分を、どうかするほかないのです」
「どうかするとは」
「今いえません」
「お通さん、気をつけな」
「何をですか」
「おまえの黒髪をひっぱっているよ。この明るい陽の下で死神が」
「私には何ともありません」
「そうだろう、死神が加勢しているんじゃもの。――だが、死ぬほどうつけはないよ。それも片恋ではな。ハハハハハ」
まるで他人事に聞き流されるのがお通は腹だたしかった。恋をしない人間になんでこの気持がわかる。それは沢庵が、愚人をつかまえて禅を説くのと同じである。禅に人生の真理があるなら、恋のうちにも必死な人生はあるのだ、尠くも、女性にとっては、生ぬるい禅坊主が、隻手の声如何などと、初歩の公案を解くよりも、生命がけの大事なのである。
（――もう話さない）
唇をかんでそう決めたように、お通が黙ってしまうと、今度は沢庵から真面目さを見せて、

「お通さん、おまえはなぜ男に生れなかったのだい。それほど強い意思の男ならば、尠くも一かど国のために役立つ者になれたろうに」
「こういう女があってはいけないんですか。武蔵さまの不為なのですか」
「ひがみなさんな。そういったわけではない。——だが武蔵は、おまえがいくら愛慕を示しても、そこから逃げてしまうんじゃないか。——そうとしたら、追ってもつかまるまい」
「おもしろいので、こんな苦しみをしているのではありません」
「少し会わないうちに、お前も世間なみの女の理窟をいうようになったの」
「だって。……いえ、もうよしましょう、沢庵さんのような名僧智識に、女の気持がわかるはずはありませんから」
「わしも、女の子は、苦手だよ、返辞にこまる」
お通は、ついと足を反らし、
「——城太さん、おいで」
彼と共に、沢庵をそこへ置き捨てて、べつな道へ歩みかけた。

二

沢庵は立ちどまった。ふと嘆くような眉をうごかしたが、是非もないとしたらしく、
「お通さん、ではもう石舟斎様にお別れもせずに、自分の行きたい途へ行くつもりか」
「ええお別れは、心のうちでここからいたします。もともと、あの御草庵にも、こんな長くお世話になるつもりもなかったのですから」

「思い直す気はないか」
「どういうふうに」
「七宝寺のある美作の山奥もよかったが、この柳生の庄もわるくないの。平和で醇朴で、お通さんのような佳人は、世俗の血みどろな巷へ出さずに、生涯そっと、こういう山河に住まわせて置きたいものじゃ。たとえばそこらに啼いている鶯のようにな」
「ホ、ホ、ホ。ありがとうございます。沢庵さん」
「だめだ――」
沢庵は、嘆息した。自分の思い遣りも、盲目的に思う方へ走ろうとするこの青春の処女には、何の力もない事を知った。
「だが、お通さん。――そっちへ行くのは、無明の道だぞ」
「無明」
「おまえも寺で育った処女じゃから、無明煩悩のさまよいが、どんなに果てなきものか、悲しいものか、救われ難いものかぐらいは知っておろうが」
「でも、私には、生れながら有明の道はなかったんです」
「いや、ある！」
沢庵は一縷の望みへ情熱をこめて、この腕に縋れとばかり、お通のそばへ寄ってその手を取った。
「わしから石舟斎様へよう頼んであげよう。身の振り方を、生涯の落着きを。――この小柳生城にいて、よい良人をえらび、よい子を生み、女のなすことをなしていてくれたら、それだけここ

の郷土は強くなるし、そなたもどんなに幸福か知れぬが」
「沢庵さんの御親切はわかりますけど……」
「そうせい」
思わず手を引っ張って、城太郎へも、
「小僧、おまえも来い」
城太郎はかぶりを振って、
「おら嫌だ。お師匠さまの後を追いかけて行くんだから」
「行くにしても、一度、山荘へもどれ、そして石舟斎さまに御あいさつ申しての」
「そうだ、おら、御城内へ大事な仮面を置いて来た。あれを取りにゆこう」
城太郎は駈けて行ったが、彼の足もとには、有明もない、無明もない。
しかしお通はその二つの岐れ路に立ったままうごかなかった。それからも沢庵がむかしの友達に返って、懇々と、彼女のさしてゆく人生の危険であることと、女性の幸福がそこばかりにないことを説くのであったが、お通の今の心をうごかすには足らなかった。
「あった！　あった！」
城太郎は仮面をかぶって、山荘の坂道を駈け降りて来た。沢庵はふとその狂女の仮面をながめて慄然とした。――やがて年月経た無明の彼方にいつか出会うお通の顔を今見せられたように。
「――では沢庵さま」
お通は一歩離れた。
城太郎は、彼女の袂にすがって、

「さ、行こう。サ……早く行こう」
沢庵は、昼の雲に、眸をあげ、おのれの無力を嘆じるように、
「やんぬる哉。――釈尊も女人は救い難しといったが」
「左様なら。石舟斎様へは、ここから拝んで参りますが、沢庵さんからも……どうぞ」
「ああ、われながら坊主が馬鹿に見えて来る。行く先々で、地獄ゆきの落人ばかりに行き会う。……お通さん、六道三途で溺れかけたら、いつでもわしの名をお呼び。いいか、沢庵の名を思い出して呼ぶのだぞ。――じゃあ行けるところまで行ってみるさ」

火の巻

西瓜

一

伏見桃山の城地を繞(めぐ)っている淀川の水は、そのまま長流数里、浪華江(なにわえ)の大坂城の石垣へも寄せていた。――で、ここら京都あたりの政治的なうごきは、微妙に大坂のほうへすぐ響き、また大坂方の一将一卒の言論も、おそろしく敏感に伏見の城へ聞えて来るらしい。

今――

摂津、山城の二ヵ国を貫くこの大河を中心にして、日本の文化は大きな激変に遭(あ)っている。太閤(たいこう)の亡き後を、さながら落日の美しさのように、よけいに権威を誇示して見せている秀頼や淀君の大坂城と、関ケ原の役から後、拍車をかけて、この伏見の城にあり、自ら戦後の経綸と大策に当たり、豊臣(とよとみ)文化の旧態を、根本から革(あらた)めにかかっている徳川家康の勢威と――その二つの文化の潮流が、たとえば、河の中を往来している船にも、陸(おか)をゆく男女の風俗にも、流行歌(はやりうた)にも、職

をさがしている牢人の顔つきにも、混色しているのだった。
「どうなるんだ？」
と、人々はすぐそういう話題に興味を持つ。
「どうって、何が？」
「世の中がよ」
「変るだろう。こいつあ、はっきりしたことだ。変らない世の中なんて、抑〻、藤原道長以来、一日だってあった例はねえ。――源家平家の弓取が、政権を執るようになってからは猶更そいつが早くなった」
「つまり、また戦か」
「こうなっちまったものを、今更、戦のない方へ、世の中を向け直そうとしても、力に及ぶまい」
「大坂でも、諸国の牢人衆へ、手をまわしているらしいな」
「……だろうな、大きな声ではいえねえが、徳川様だって、南蛮船から銃や弾薬をしこたま買いこんでいるというし」
「それでいて――大御所様のお孫の千姫を、秀頼公の嫁君にやっているのはどういうものだろ？」
「天下様のなさることは、みな聖賢の道だろうから、下人にはわからねえさ」
石は焼けていた。河の水は沸いている。もう秋は立っているのだが、暑さはこの夏の土用にも勝って酷しい。

淀の京橋口の柳はだらりと白っぽく萎えている。気の狂ったような油蟬が一匹、川を横ぎって町屋の中へ突き当ってゆく。その町も晩の灯の色はどこへか失って、灰を浴びたような板屋根が乾き上がっているのだった。橋の上下には、無数の石船がつながれていて、河の中も石、陸も石、どこを見まわしても石だらけなのである。

その石も皆、畳二枚以上の巨きなものが多かった。焼けきった石の上に、石曳きの労働者たちは、無感覚に寝そべったり腰かけたり仰向けに転がったりしている。ちょうど今が、昼飯刻でその後の半刻休みを楽しんでいるのであろう。そこらに材木をおろしている牛車の牛も涎をたらして、満身に蠅を集めてじっとしている。

伏見城の修築だった。

いつのまにか、世の人々に「大御所」と呼ばしめている家康がここに滞在しているからではない。城普請は、徳川の戦後政策の一つだった。

譜代大名の心を弛緩させないために。——また、外様大名の蓄力を経済的にそれへ消耗させてしまうために。

もう一つの理由は、一般民に、とにかく徳川政策を謳歌させるためには、土木の工を各地に起して、下層民へ金をこぼしてやるに限る。

今、城普請は全国的に着手されていた。その大規模なものだけでも、江戸城、名古屋城、駿府城、越後高田城、彦根城、亀山城、大津城——等々。

二

この伏見城の土木へ日稼ぎに来る労働者の数だけでも、千人に近かった。その多くは、新曲輪の石垣工事にかかっているのである。伏見町はそのせいで、急に、売女と馬蠅と物売りが殖え、
「大御所様景気や」
と、徳川政策を謳歌した。
その上、
「もし戦争になれば」
と、町人たちは、機と利を察して、思惑に熱していた。社会事象のことごとくを、そろばん珠にのせて、
「儲けるのはここだ」
無言のうちに、商品は活潑にうごいた。その大部分が、軍需品であることはいうまでもない。
もう庶民の頭には、太閤時代の文化をなつかしむよりも、大御所政策の目さきのいい方へ心酔しかけていた。司権者は誰でもいいのである。自分たちの小さな慾望のうちで、生活の満足ができればそれで苦情がないのだ。
家康は、そういう愚民心理を、裏切らなかった。子どもへ菓子を撒いてやるより易々たる問題であったろう。それも徳川家の金でするのではない。栄養過多な外様大名に課役させて、程よく、彼らの力をも減殺させながら効果を挙げてゆく。
そうした都市政策の一方、大御所政治は、農村に対しても、従来の放漫な切り取り徴発や、国持まかせを許さなかった。徳川式の封建政策をぼつぼつ布きはじめていた。
それには、

（民をして政治を知らしむなかれ、政治にたよらせよ）
という主義から、
（百姓は、飢えぬほどにし、気儘もさせぬが、百姓への慈悲なり）
と、施政の方策をさずけて、徳川中心の永遠の計にかかっていた。
それはやがて、大名にも、町人にも、同じようにかかって来て、孫子の代まで、身うごきのならない手かせ足かせとなる封建統制の前提であったが、そういう百年先のことまでは、誰も考えなかった。いや、城普請の石揚げや石曳きに稼ぎに来ている労働者などは、明日のことさえ、思っていないのである。
昼飯をたべれば、
「はやく晩になれ」
と祈るのが、いっぱいな慾念だった。
それでも時節がら、
「戦争になるか」
「なれば何日頃？」
などと、時局談は、いっぱし熾んだったが、その心理には、
「戦争になったって、こちとらは、これ以上、悪くなりようがねえ」
という気持があるからで、ほんとにこの時局を憂いたり、平和の岐点をじっと案じて、どの方へ曲がるのが国と民のためだろうなどと考えているのでは決してないのである。
「――西瓜いらんか」

いつも昼休みに来る百姓娘が、西瓜の籠を抱えて触れて来た。石の蔭で、銭の裏表を伏せて、博戯をしていた人足の群で、二つ売れた。
「こちらの衆は、西瓜どうや。西瓜買うてくれなはらんか」
と、群から群へ唄ってくると、
「べら棒め、銭がねえや」
「ただなら食ってやる」
そんな声ばかりだった。
すると、たった一人ぽち、青白い顔をして、石と石のあいだに倚りかかって膝を抱えていた石曳きの若い労働者が、
「西瓜か」
と、力のない眼をあげた。
痩せて――眼がくぼんで――日に焦けて、すっかり変ってしまったが、その石曳きは、本位田又八だった。

三

又八は、土のついた青銭を、掌のうえでかぞえた。西瓜売りにわたして一個の西瓜と交換した。それを抱え込むと、またしばらく、石に倚りかかったまま、ぐんなり俯向いているのである。
「げ……げ……」
突然、片手をつくと、草の中へ牛みたいに唾液を吐いた。西瓜は膝から転がり出している。そ

れを取ろうとする気力もないし、食べようという気で買ったわけでもないらしいのだ。
「…………」
にぶい眼で、西瓜をながめていた。眼は虚無の玉みたいに何の意力も希望もたたえていない。呼吸をすると肩ばかりうごいた。
「……畜生」
呪う者ばかりが頭脳へ映ってくる。お甲の白い顔であり、武蔵のすがたであった。今の逆境へ落ちて来た過去を振顧ると、武蔵がなかったらと思い、お甲に会わなかったらと彼はつい思う。
過ちの一歩は、関ケ原の戦の時だ。次に、お甲の誘惑だ。あの二つのことさえなかったら、自分は今も、故郷にいたろう。そして本位田家の当主になって、美しい嫁をもち、村の人々から、羨望される身でいられたに違いない。
「お通は、怨んでいるだろうなあ……。どうしているか」
彼の今の生活は、彼女を空想することだけが慰めだった。お甲という女の性質がよくわかってからは、お甲と同棲しているうちから、心はお通へもどっていたのだった。やがてあの「よもぎの寮」と呼ぶお甲の家を、ていよく突き出されたような形で出てしまってからは、よけいにお通を思うことが多かった。
その後また、よく洛内の侍たちの間で噂にのぼる宮本武蔵なる新進の剣士が、むかし友達の「武蔵」であることを知ると、又八はじっとしていられなかった。
(よしっ、俺だって)
彼は酒をやめた。遊惰な悪習を蹴とばした。そして次の生活へかかりかけた。

（お甲のやつにも、見返してやるぞ。——見ていやがれ）

だが、さしずめ適当な職業は見つからなかった。五年も世間を見ずに、年上の女に養われて来た不覚のほどが、はっきり身に沁みて分ったが、遅かった。

（いや、遅かあない。まだ二十二だ。どんなことをしたって……）

と、これは誰にでも起せる程度の興奮だったが、又八としては、眼をつぶって運命の断層をとび越えるような悲壮をもって、この伏見城の土木へ働きに出たのだった。そしてこの夏から秋までの炎天の下で、自分でもよく続いたと思うほど労働をつづけていた。

（おれも、一かどの男になってみせる。武蔵のやる芸ぐらい、俺に出来ない法はない。いや、今にあいつを尻目にかけて、出世してみせてやる。その時には、お甲にも黙って復讐できるのだ。見ていろここ十年ばかりに）

だが——と彼はふと思うのだった——十年経ったら、お通は幾歳になるだろうと。

武蔵や自分よりも、彼女は一ッ年下だ。すると今から十年経つうちには、もう三十を一つこえてしまう。

（それまで、お通が、独り身で待っているかしら？）

故郷のその後の消息は何も知らない又八だった。そう考えると、十年では遠すぎる、少なくもここ五、六年のうちだ。なんとしても身を立てて、故郷へ行き、お通に詫びて、お通を迎え取らなければならない。

「そうだ……五年か、六年のうちに」

西瓜を見ている眼に、やや光が出てきた。すると、巨きな石の向う側から、仲間の一人が、肱

を乗せていった。
「おい又八、何をひとりでぶつぶついってるんだ。……オヤ、ばかに青い面して、げんなりしているじゃねえか。どうしたんだ、腐った西瓜でも喰らって、腹でも下痢したのか」

四

つけ元気に、又八はうすく笑った。だがすぐ、不快な眼まいがこみあげて来るらしく、生唾を吐いて顔を振った。
「な、なあに、大したことはないが、少し暑さ中りしたらしいんだ。……すまないが、午から一刻ほど、休ましてくれ」
「意気地のねえ野郎だな」
逞しい石曳き仲間は、慰れむように嘲った。
「なんだい、その西瓜は。喰えもしねえのに買ったのか」
「仲間にすまないから、みんなに喰べてもらおうと思って」
「そいつあ如才のねえこった。おい、又八の奢りだとよ、食ってやれ」
西瓜を持って、その男は、石の角へたたきつけた。忽ち、そこらの仲間が蟻のように寄って来て、赤いしずくの滴る甘肉の破片を貪り合った。
「やあい、仕事だぞうっ」
石曳きの小頭が、石のうえに上がって呶鳴った。監督の侍が、鞭を持って陽除け小屋から出て来る。遽かに汗のにおいが大地にうごき、馬蠅までわんわん立つ。

くのだった、雲の峰がうごくように。

築城時代の現出は、それにつれて全国に、石曳き歌というものの流行を興(おこ)した。今、ここの人足たちが唄い出したのもそれである。阿波の城主蜂須賀至鎮(よししげ)が城ぶしんの課役に出て、そこから国表へつかわしたその頃の書信の一節にも、

(――ゆうべさる方にて習い申しそろ儘(まま)、名古屋の石曳きうた書きつけて参らせそろ)

とあって、その歌詞に

　われが殿衆は
　藤五郎さまじゃに
　粟田口(あわたぐち)より
　石また曳きゃる
　　　　エイサ、エイサ
　コロサと曳きゃる
　お声きくさえ
　四肢(よあし)がなゆる
　まして添うたら
　死のずよの

(――老(おい)も若きもうたい囃(はや)しそろ。これにてなくば、うき世なるまじく見え候(そろ))

労働歌が絃歌になり、蜂須賀侯のような大名までが、夜興(やきょう)の口誦(くちずさ)みに戯(たわむ)れたものとみえる。

街に歌がさかんになりだしたのは、何といっても太閤の世盛りからだった。室町将軍の頃には、歌があっても廃頽的な室内のものだけだった。その頃は、児童がうたう歌まで、ひがみっぽい暗い歌が多かったが、太閤の世になってからは、歌も明るくなり大きくなり希望的になって、民衆はそれを汗をかきながら太陽の下でうたうことを甚だ好んだ。

関ケ原の役の後、社会文化に家康色がだんだん濃くなってくると、歌もすこし変って来て、豪放さはうすくなった。太閤様のころには、民衆からひとりでに歌が湧いてきたが、大御所の世間になってからは、徳川家付の作者が作ったような歌が民衆へ提供されて来た。

「……ああ、苦しい」

又八は、頭をかかえた。頭は火みたいに熱かった。仲間のわめいている石曳き歌が、虻に取り巻かれているように耳にうるさかった。

「……五年、五年。アア五年働いていたらどうなるんだ。一日稼いでは、一日分食ってしまい、一日休めば、一日食わずにいなけれやならない」

生唾も出しきって、青ざめた顔を俯向けていた。

——すると、いつのまに来ていたのか、そこから少し離れた所に、藁編みの目の粗い笠を眉深にかぶって、袴腰へ武者修行風呂敷をしばりつけた背の高い若者が、半開きにした鉄扇を、笠のひさしにかざして、熱心に伏見城の地勢や工事のさまを眺めていた。

佐々木小次郎

一

何思ったか、武者修行はそこへ坐りこんだ。面積一坪ほどな平石の前にである。坐ってみるとちょうど机の高さぐらいに肱がつけるのだ。

「ふッ……ふッ……」

焦けていた石の砂を息で吹く、砂とともに蟻の列もふき飛んでゆく。

ふたつの肱をつくと、編笠はしばらく頬杖に乗っている。陽ざかりで、石はみな照り返すし、草いきれは逆さに顔を撫でるし、さぞ暑いだろうに、身うごきもしない。城の工事に眺め入っているのである。

少し離れた所に、又八がいることなどは、意に介さない様子であった。又八もそこへ来てそういう態をしている武者修行があろうとあるまいと、固より自分に何の交渉があるわけではないし、頭や胸も依然として不快なので、時折、胃から生唾を吐きながら、背を向けて休んでいた。

――と。その苦しげな息を耳にとめたのだろう。編笠がうごいて、

「石曳き」

と、声をかけ、

「どういたした?」
「へい……暑さ中りで」
「苦しいのか」
「少し落ちつきましたが……まだこう吐きそうなんで」
「薬をやろう」
印籠を割って、黒い粒を掌へうつし、起って来て又八の口へ入れてくれた。
「すぐ癒る」
「ありがとう存じます」
「にがいか」
「そんなでもございません」
「まだ、貴様はそこで、仕事を休んでおるのか」
「へ……」
「誰か参ったら、ちょっとおれの方へ声をかけてくれ、小石で合図をしてくれてもいい、頼むぞ」
武者修行は、そういって、前の位置に坐りこむと、今度はすぐ矢立から筆を取り出し、半紙綴の懐中手帖を石の上にひろげて、ものを書くことに没頭しはじめた。
笠のつば越しに、彼の眼のやりばが、間断なく城へ向ったり、城の外のほうへ行ったり、又城のうしろの山の線や、河川の位置や、天守などへ、転々とうごいてゆくところを見ると、その筆の先は、伏見城の地理と廓外廓内の眼づもりを、絵図に写っているにちがいなかった。

関ヶ原の戦(いくさ)の直前に、この城は西軍の浮田勢と島津勢に攻められて、その増田廓(ますだぐるわ)や大蔵廓(おおくらぐるわ)や、また諸所の塁濠(るいごう)などもかなり破壊されたものだったが、今では、太閤時代の旧観にさらに鉄壁の威厳を加えて、一衣帯水の大坂城を睥睨(へいげい)していた。

今――武者修行が熱心に写している見取図(みとりず)をのぞくと、彼は、いつの折かに、その城のうしろを掩(おお)っている大亀谷や伏見山からもここの城地を俯瞰(ふかん)して、べつに一面の搦手図(からめてず)を写しているらしく、いかにも精密なものが出来かかっている。

「……あっ」

又八が、そういった時には、写図に一心になっている編笠のうしろへ、工事課役の大名の臣か、伏見の直臣(じきしん)かわからないが、草鞋(わらじ)ばきで、太刀を革紐(かわひも)で背なかに負うた半具足の侍が、武者修行の気のつくまで、黙って立っていたのだった。

――すまないことをした。又八は正直にすまないと思った。けれどももう遅い。石を投げてやっても声をかけてやっても、もう遅い。

そのうちに、武者修行は、汗の襟元へ食いついた馬蠅(うまばえ)を手で払う拍子に、

「――あ？」

振り仰いで、驚きの眼をみはった。

工事目付の侍は、その眼をじっと睨(ね)め返して、石の上の見取図へだまって具足の手を伸ばした。

二

この炎天下の我慢と、粒々の辛苦をして、やっと写した城の見取図が、ものもいわず、いきなり肩越しに出て来た手のために、皺くちゃに掴み奪られようとするのを見ると、武者修行は、火薬の塊りが火を呼んだように、

「何するかッ」

満身で呶鳴った。

手頸をつかまえて立つと、工事目付は奪り上げた彼の写図帖を、奪り返されまいとして、宙へその手をさしあげつつ、

「見せろ」

「無礼なッ」

「役目だ」

「なんであろうが」

「見ては悪いものか」

「悪いっ。貴様などが見たってわかるもんじゃない」

「とにかく預かる」

「いかん！」

帳の写図は、双方の手に裂かれて、半図ずつ握りしめた。

「曳ッ立てるぞ、素直にせぬと」

「どこへ」
「奉行所へ」
「貴様、役人か」
「然り」
「何番の。誰の」
「左様なこと、汝らが、訊かんでもいい。此方(このほう)は、工事場見廻りの役、怪しいと認めたによって、取調べるのじゃ——誰様のおゆるしをうけて、お城の地勢や、御普請などを写し取ったか」
「おれは武者修行だ、後学のため諸国の地理や築城を見学しておる、なんでわるいか」
「さような口実でうろついておる敵の間者(かんじゃ)は、蝿や蟻ほど多いのじゃ。……とにかくこれは返せん、其方も一応取りただすによって、あっちまで来い」
「あっちとは」
「工事奉行のお白洲」
「おれを罪人扱いするか」
「だまって参るのだ」
「役人、こらっ。——貴様あ、そんな権柄顔(けんぺいがお)さえすれば愚民が驚くと思っておる癖がついてるな」
「歩かんか」
「歩かせてみろ」
てこでも動かない姿勢を示すのである。見廻りは、青すじを立てた。摑んでいた写図の破れ

を、地へすてて踏みにじり、二尺余りの長い十手を腰から抜いた。
武者修行の手が刀へかかったら、すかさず、その肱へ十手の打撃を入れてやろうとするもののように、腰を退いて身構えたが、その様子もないので、もう一度、
「歩かんと、縄を打つぞ」
ことばの終らないうちに、武者修行のほうから一歩出て来た。何か大きな声を発したと思うと、見廻りは首の根をつかみ寄せられていた。武者修行の片手はまた、彼の鎧帯の腰をつかんで、
「この、虫けら」
巨石の角へ向って抛り投げた。
見廻りの侍頭は、先刻そこで石曳きの男がたたき割った西瓜のようになって、形を失ってしまった。
「……アッ」
又八は、顔を抑えた。
真っ赤な味噌みたいなものが彼のいる辺りまで刎ねて来たからである。平然たるものは、彼方の武者修行であった。よほどこんな殺人に馴れているのか、また一気に憤りを爆発させて後の涼しさに落着いているのか、とにかく、あわてて逃げ出す様子もなく、見廻りの足で踏みにじられた写図の断片と、そこらに散らばっている反古をひろい集め、次に、相手を投げる途端に紐が切れて飛んで行った編笠を、静かな目で捜している。
「…………」

又八は、凄惨な気に打たれていた。恐ろしい力量を見て自分の毛穴までよだっている。——見るところ武者修行はまだ三十に届くまい。陽焼けのした骨太の顔に薄あばたがあり、耳の下から顎にかけて四半分ほど顔がない。ないというのはおかしいが、太刀で斬られた痕の肉が変に縮んでしまったのかも知れない。その耳の裏にも黒い刀痕があり、左の手の甲にも刀傷がある。なお肌着を脱いだら幾つでも同様な刀傷が出て来そうな——見るからに近寄りがたい猛気をその顔はそなえていた。

三

笠を拾って、怪異なその顔へ被ると、武者修行はさっと足を速めた。風のように彼方へ向って逃げ出したのである。勿論、そこまでの行動は極めて短い間だった。蟻のように労働している何百という石曳きも、鞭や十手を持って、そのあぶら汗を叱咤している監督も、誰も気づく遑がなかったほどに——

だが、その広い工事場を、絶えず高い所から見渡している独特な眼があった。それは丸太組の櫓のうえにいる棟梁衆や作事与力の上役だった。そこから突然、大きな声が放たれたと思うと、櫓の下の湯呑み所の板がこいの中で、大釜の火にいぶされながら働いていた足軽たちが、

「なんだ？」

「何だ」

「また、喧嘩か」

と、外へ飛び出した。

もうその時は、作業場と町屋の境に出来ている竹矢来の木戸で、真っ黒にかたまった人間の怒号が黄いろい埃につつまれていた。
「間者だな！　大坂の」
「性懲りもなく」
「ぶっ殺せ」
口々にいって、石工や土工や工事奉行の配下は、みな自分の敵でもいるように駈け集まって行く。
半分顎のない武者修行が捕まったのだ。竹矢来の外へ出て行く牛車の蔭にかくれて、すばやく木戸の口をすり抜けようとしたが、そこの番衆たちに挙動を怪しまれて、釘の植わっている刺叉という柄の長い道具で、いきなり足を搦み取られたのであった。
そこへ、櫓の上からも、
「その編笠を引ッ捕えろっ」
と、呼ばわる声が同時にあったので、理由などは問わず、遮二無二、組み伏せにかかると、武者修行は形相をあらためて、野獣のように死にもの狂いとなった。
刺叉を引っ奪くられた男が、真っ先にその得物の先で髪を引っかけられた。四、五人叩き伏せておいて、虚空へさっと閃かしたのは彼の腰に横たえていた胴田貫らしい大太刀である。平常の差刀には頑丈すぎるが、陣太刀にすれば手ごろである。——それを抜いて額の真っ向に揮りかぶると、
「こいつらッ」

睨んだだけで、そこの重囲が凹(くぼ)んだので、武者修行は血路をひらくつもりで駈けこんで行った。

すると、危険を避けて人間はわっと散らかったが、途端に八方から小石が降って来たのである。

「殺(や)っちまえ」

「たたっ殺してしまえっ」

肝腎(かんじん)な侍たちが臆して近よらないので、平常、武者修行というものに対して、彼らは少しばかりの知識や学問を鼻にかけ、世の中をただ威張って横に歩くのを見栄にしている無産の僻(ひが)み者か、一種の逸民と認めて、それに反感を抱いている石工だの土工だのという労働者たちが、

「殺(や)っちまえ」

「のしちまえ」

と叫んで、四方から抛(ほう)りつける、それは無数の石つぶてであった。

「この凡下(ぼんげ)どもめ！」

駈け入れば、わッと散るのだ。武者修行の眼はもう自分の生きる路を見つけるよりも、その石の来るほうの人間へ向って、理智や利害を超えている。

四

怪我人も多く出たし、死者も幾人かあったのに、それから一瞬の後は、各々(めいめい)職場にかえって、けろりとした工事場の広さであった。

何事もなかったように、石曳きは石を曳き、土工は土をかつぎ、石工は鑿で石を割っている。鑿が火花を出す暑い音、霍乱をおこして暴れくるう馬のいななき、残暑の空は、午後に入って、じいんと鼓膜が馬鹿になるような熱さだった。伏見城から淀のほうへ背のびをしている雲の峰は、しばらくうごきもしなかった。

「もう九分九厘まで、くたばっているが、御奉行が来るまでこうして置くから、汝そこにいて、こいつの番をしておれ。――死んだら死んだまでのことでいい」

人足頭や目付の侍に、こう命じられたことを又八は覚えている。――だが頭がどうかなってしまったのか、先刻から目撃したきりそう吩咐けられたことも、なんだか悪夢をみているようで、眼や耳には意識しても、頭のしんまで届いていない。

「……人間なんて、つまんねえものだな。たった今そこで、城の見取図を写していた男が」

又八のにぶい眸は自分から十歩ほど先の地上にある一個の物体を見つめたまま、最前からぼんやりと虚無的な考えに囚われている。

「……もう死んでるらしい。まだ三十前だろうに」

と彼は思い遣った。

顎の半分ない武者修行は、太い麻縄で縛られて、血に土のまぶされた黒い顔を、無念そうにしかめたまま、その顔を横伏せにして倒れている。

縄尻はそばの巨きな石に巻きつけてあるのだった。もう「ウ」も「ス」もいい得ない死人の体をそう大仰に縛っておかないでもよさそうなものと又八はながめていたことだった。何で撲られたのか、破れた袴から変な恰好して露出している脚の脛は、肉が弾けて折れた白骨の先が飛び出

していた。髪は粘って血を噴いているし、その血へは虻がたかり、手や脚にはもう蟻の群が這っている。
「武者修行に出たからには、のぞみを抱いていたろうに。――故郷は何処か。親はあるのかないのか」
そんなことを思い遣ると、又八はいやな気持に襲われて、武者修行の一生を考えているのか、自分の身の果てを考えているのか、分らなくなってきた。
「望みをもつにも、もっと悧巧に出世する道がありそうなものだ」
と、つぶやいた。
時代は若い者の野望を煽って、「若者よ夢を持て」「若者よ起て」と未完成から完成への過渡期にあった。又八ですらその社会の空気を感じるほど、今は、裸から一国一城の主を望める時である。
そのために、青年は続々離郷する――また家を離れ骨肉も省みない。その多くが武者修行の道をとるのだ。武者修行をして歩けば今の社会では到るところで衣食に事を欠くことはない。田夫野人でも武術には関心をもっているからだ。寺院へ頼っても渡れるし、あわよくば地方の豪族の客となり、なお、幸運にぶつかれば、一朝事のある場合のために、大名の経済から「捨て扶持」「蔭扶持」などというものを貢がれることもある。
だが数多い武者修行の中で、そういう幸運にあう者がどれほどあろうかといえば、これは極めて少数にちがいない。功成り名を遂げ、一人前の禄取りになるほどの者は一万人中で二人か三人を出ないであろう。――それでいて修行の苦しさと、達成の至難なことは、これでいいという、

卒業の行き止まりがないのである。
（馬鹿馬鹿しい……）
又八は、同郷の友の宮本武蔵が行った道を憐んだ。おれは将来、奴を見返してやるにしても、そんな愚かな道はとらないぞと思う。ここに死んでいる顎のない武者修行のすがたを見てもそう思う。
「……おやっ？」
又八は飛び退いて大きな眼をすえた。なぜならば、死んだものときめていた蟻だらけの武者修行の手がびくっと動き出して、縄目の間から鼈のような手首だけを出して大地へつき、やがてむくりと、腹を上げ、顔を上げ、次に前のほうへ一尺ばかり、ずるりと這い出して来たからであった。

五

ぐ……と生唾をのんで又八はなおも後へ摺り退がった。腹の底から驚きを感じると声も出ないものだ。ただ眼のみ大きくみひらいて、目前の事実に茫失した。
「……ひゅっ……ひゅっ……」
彼は、何かいおうとするらしい。彼とは顎の半分ない武者修行である。完全に死んでいると思っていたこの男は、まだ生きていたのだ。
……ヒュッ、ヒュッと断れ断れに彼の呼吸が喉で鳴るのである。唇は黒く渇いてしまって、そこから言葉を吐くのはもう不可能な業であった。それを必死に一言でもいおうとするので、呼吸

が割れた笛の鳴るような音を出すのだった。

又八が驚いたのは、この男が生きていたからではない。胸の下に縛りつけられている両手で這って来たからだ。それだけでも、驚くに足る人間の死力であるのに、その縄尻の巻きつけてある何十貫もあろう巨石が、この瀕死の傷負いが引っ張る力で、ズル、ズル……と一、二尺ずつ前へ動いて来たからである。

まるで、化物のような怪力だ。この工事場の労働者のうちにも、ずいぶん力自慢があって、十人力とか二十人力とか自称している天狗もあるが、こんな化け物は一人もいない。

しかも、この武者修行は、今や死なんとしている体なのだ。——死なんとする境にあるために、そんな人間業でない力が出るのかも知れないが、とにかく、その飛び出しそうな武者修行の眼が自分の方を見つめて這い進んで来たので、又八は腰が竦んでしまった。

「……しょっ……しょっ……お、お、おねがい」

また何か、変った語音を出していう。意味はまったく分らない。ただ判じのつくのは武者修行の眼だ——死なんとするのを知っているその眼である——血ばしっている中に涙腺はかすかに涙みたいなものを湛えている。

「……たっ……た……たのむ……」

がくっと首を前へ折った。こんどはほんとに息が絶えたのだろう、見ているうちに襟首の皮膚の色が青黒く沈んで行った。草むらの蟻がもう白っぽい髪の毛にたかっている。血のかたまった鼻の穴を一匹はのぞきこんでいた。

「？　……」

何を頼まれたのか、又八は茫としているだけだった。けれどこの怪力の武者修行が臨終の一念は、自分へ憑き物のようについていて違えることのできない約束の負担を負わされたような気持がしてならない。——自分の病苦を見て、薬を服ませてくれたり、誰か来たら合図してくれと頼まれたのに、迂っかりしていて、それを告げてやらなかったことなども、妙に深刻な宿縁みたいに思い出されてくる。

——石曳き唄は、遠くなっていた。お城は暮靄にかすんで来た。いつのまにかもう黄昏れかけて、伏見の町には早い灯りがポッポッ戦ぎだしている。

又八は、死者の腰に結びつけている武者修行風呂敷をそっと触ってみた。——生国、骨肉などの身許も、この中を見ればわかるにちがいない。

(故郷の土へ、遺物を届けてくれというのだろう)

「そうだ……何かこの中に」

そう彼は判断した。

包みと印籠を、死者の体から取って、自分の懐中へ入れた。——そして髪の毛でもと思って、一握り切ろうとしたが、死者の顔をのぞいて、ぞっとしてしまった。

——跫音が聞えた。

石の蔭から見ると、奉行配下の侍たちだ。又八は、死骸から無断で取った品物が自分の懐中にあると思うと、自分の危険を感じて、そこにいたたまらなくなった。——背を屈めて、石の蔭から蔭へと、野鼠のように逃げて行った。

六

夕ぐれの風はもう秋だった。糸瓜は大きくなっている。その下で、盥の湯に浴かっている駄菓子屋の女房が、家の中の物音に、戸板の蔭から白い肌を出していった。
「誰だえ。又八さんかい？」
又八はこの家の同居人だった。
今、あたふたと帰って来ると、戸棚を掻廻して、一枚の単衣と一腰の刀を出し、姿を更えると、手拭で頰冠りして、またすぐ草履を穿こうとしていた。
「暗かろ、又八さん」
「なに、べつに」
「今すぐ灯りをつけるで」
「それには及ばないよ、出かけるから」
「行水は」
「いらん」
「体でも拭いて行ったら」
「いらん」
急いで裏口から飛び出して行った。といっても、垣も戸もない草原つづきである。彼が長屋から出て来ると入れちがいに、数名の人影が、萱の彼方を通って、駄菓子屋の裏表へ入ってゆくのが見えた。工事場の侍が交じっていた。又八は、

「あぶない所だった」

と呟いた。

顎の半分ない武者修行の死体から、包みや印籠を取った者のあることは、その後ですぐ発見された筈である。当然、その側にいた自分に盗人の嫌疑がかかったに相違ない。

「だが……俺は盗みをしたのじゃない。死んだ武者修行の頼みにやむなく持物を預かって来たのだ」

又八は疚しくなかった。その品は懐中に持っている。これは預かった物だと意識しながら持っている。

「もう石曳きに行かれない」

彼は、明日からの放浪に、なんのあてもなかった。しかし、こういう転機でもなければ、何年でも石を曳いているかも知れないと思うと、かえって先が明るく考えられる。

萱の葉が肩までかかる。夕露がいっぱいだ。遠くから姿を発見される惧れがなくて逃げるには気楽だ。さてこれからどっちへゆくか？　どっちへ行こうと体一つである。何かいい運だの悪い運だのがいろいろな方角で自分を待っているらしく思う。今の足の向き方ひとつで生涯に大きな違いが生じるのだ。必然、こうなるものだと決定された人生などがあろうとは考えられない。偶然にまかせて歩くよりほか仕方がない。

大坂、京都、名古屋、江戸——流浪の先を考えてみるが、何処に知己があるわけではなし、賽ころの目をたのむように頼りがない。賽ころに必然がないように、又八にも必然がないのだった。何かここに起ってくる偶然があれば、それに引かれて行こうと思う。

だが、伏見の里の萱原には、歩けど歩けど何の偶然もなかった。虫の音と露とが深くなるばかりだった。単衣のすそはびっしょり濡れて足に巻きつき、草の実がたかって、脛がむず痒い。又八は、昼の病苦をわすれた代りに、すっかり飢じくなっていた。胃液まで空っぽなのだ。迫手の心配がなくなってからは、急に歩くことが苦痛になっていた。

「……何処かで寝たいものだ」

その慾望が彼を無意識にここへ運んで来たのである。それは野末に見えた一軒の屋の棟だった。近づいてみると垣も門も暴風の時に傾いたまま誰も起してやり手がない。おそらく屋根も満足なものではあるまい。しかし一度は貴人の別荘とされて、都あたりから、糸毛の輦に臈たけた麗人が、萩を分けて通ったこともありそうな家造りなのである。又八はその無門の門を通って中へ入り、秋草の中に埋まっている離亭や母屋をながめて、ふと玉葉集の中にある西行の、

　会ひしりて侍りける人の伏見にすむと聞きて尋ねまかりけるに、庭の草、道も見えずしげりて虫の啼きければ――「わけて入る袖にあはれをかけよとて露けき庭に虫さへぞ啼く」

――そんな文句を思いだして、肌寒げに立ちすくんでいると、当然人は住んでいないものとばかり思っていた家の奥に、風で燃え出した炉の火がぱっと赤く見え、しばらくすると尺八の音がそこから聞えだした。

七

ちょうどよい塒とここに一夜を明かしている虚無僧らしいのである。炉の火が赤く立つと、大きな人影が婆娑として壁に映る。独り尺八を吹いているのだ。それはまた他人に聞かそうためで

もなく自ら誇って陶酔している音でもない。秋の夜の孤寂の遣る瀬なさを、無我と三昧に過ごしているだけのことなのだ。

一曲終ると、

「ああ」

虚無僧は、ここは野中の一軒家と、安心しきっているらしく独り言に――

「四十不惑というが、おれは四十を七つも越えてからあんな失策をやって、禄を離れ家名をつぶし、剰え独りの子まで他国へ流浪させてしまった。……考えれば慚愧にたえない。死んだ妻にも生きている子にも会わせる顔がない。……このおれなどの例を見ると、四十不惑などというのは聖人のことで、凡夫の四十だいほど危いものはない。油断のならない山坂だ。まして女に関しては」

胡坐の前に、尺八を縦に突き、その歌口へ両手をかさねて、

「二十だい、三十だいの年でも、由来おれは、やたらに女のことで失敗をやって来たが、そのころにはどんな醜聞をさらしても、人も許してくれたし、生涯の怪我にもならなかった。……ところが、四十だいとなると、女に対してすることが厚顔ましくもなるし、それがお通の場合のような事件になると、今度は世間がゆるさない。そして、致命的な外聞になってしまった。禄も家もわが子にも離れるような失敗になってしまった。……そして、この失敗も、二十だい三十だいなら取り返せるが、四十だいの失敗は二度と芽を出すことがむずかしい」

盲人のように俯向いたまま、声を出してそういっているのである。

――又八は、彼のいる近くの部屋までそっと上がって行ったが、炉の火にぽっと浮いている虚

無僧の痩せおとろえた頰の影や、野犬のように尖っている肩や、脂けないほつれ毛などを見つつ、その告白を聞いていると、夜鬼のすがたを思い出して、ぞっと背がすくんでしまい、近寄って話しかける気持になどは迚もなれなかった。

「アア……それを……おれは……」

虚無僧は、天井を仰向いた。骸骨のように鼻の穴が大きく又八のほうから見える。凡の浪人の垢じみた着物を着て、その胸に、普化禅師の末弟という証ばかりに黒い袈裟をつけているに過ぎないのである。敷いている一枚の筵は、常に巻いて手に持って歩く彼の唯一の衾であり雨露の家だった。

「――いっても、返らないことだが、四十だいほど、油断のならない年頃はない。自分だけが、いっぱし世の中も観、人生もわかったつもりで、少しばかりかち得た地位に思い上がって、ともすると、女に対しても、臆面のない振舞に出るものだから、おのれのような失敗を――運命の神から背負い投げを喰わされるのだ。……慚愧のいたりだ」

誰かに向って謝っているように、虚無僧は頭を下げて、さらにまた下げて、

「おれはいい、おれは、それでも、いいとしよう。――こうして懺悔の中に、なお許してくれる自然のふところに生きて行かれるから」

と、ふと涙をこぼし、

「――だが、済まないのは、わが子に対してだ。おれの為た結果は、おれに酬うより、あの城太郎のほうへより多く祟っている。とにかく、姫路の池田侯に藩臣としてこのおれが歴乎としていれば、あの子だって、千石侍の一人息子だ。それが今では、故郷を離れ、父を離れ……。イヤそ

れよりも、あの城太郎が成人して、この父が、四十だいになってから、女のことで藩地から放逐されたなどと知る日が来たら、おれはどうしよう。おれは子に会わす顔がない」

――しばらくは、両手で顔を掩っていたが、やがて何思ったか、炉のそばを立つと、

「やめよう、また愚痴が出て来おった。……おお月が出たな、野へ出て、思うさま流して来ようか。そうだ、愚痴と煩悩を野へ捨てて来よう」

尺八を持って、彼は外へ出て行った。

八

妙な虚無僧である。よろよろ立ってゆく時、物蔭から又八が見ていると、その痩せこけた鼻下にはうすいどじょう髭が生えていたように思う。そう年を老っているほどでもないのに、ひどくよぼよぼした足元だった。

ぷいと出て行ったきり、なかなか戻って来ないのだ。少し精神に異常があるのだろうと、又八は不気味に思う半面にあわれな気もした。それはいいが、物騒なのは、炉に残っている火であった。ぱちぱちと夜風がそれを煽っている。燃え折れた柴の火は、床を焦がしているではないか。

「あぶねえ、あぶねえ」

又八はそこへ行って、土瓶の水をじゅっとかけた。これが野中の破れ邸だからいいようなものの飛鳥朝や鎌倉時代の二度と地上に建てることのできない寺院などであったらどうだろうと考えて、

「あんなのがいるから、奈良や高野にも火事があるんだ」

と彼は、虚無僧の去ったあとに自分が坐って、がらにもない公徳心を呼び起していた。
家産や妻子もない代りに、社会への公徳心も絶無な浮浪者には、火が怖いものという観念も全くないらしい。だから彼らは、金堂の壁画の中ですら平然と火を燃やす。世の中に無用に生きているに過ぎない一個の空骸を暖めるために火を燃やす。
「だが……浮浪人だけが悪いともいえねえな」
又八は自分も浮浪人であることを思って考えた。今の世の中ほど浮浪人が多い社会はない。それは何が生んだかといえば、戦だった。戦によってぐんぐん地位を占めてゆく者も多い代りに、芥のように捨てられてゆく人間の数も実に夥しい。これが次の文化の手枷、足枷となるのもやむを得ない自然の因果といえよう。そういう浮浪の徒が、国宝の塔を焚火で焼く数よりは、戦が、意識しつつ、高野や叡山や皇都の物を焼いたほうが、遙かに大きな地域であった。
「……ほ。洒落たものがあるぞ」
又八はふと横を見てつぶやいた。ここの炉も床の間も、改めて見直せば、元は茶屋にでも使っていたらしい閑雅な造りなのである。そこの小床の棚に、彼の眼をひいた物がある。
高価な花瓶や香炉などではない。口の欠けた徳利と、黒い鍋だった。鍋には食べ残した雑炊がまだ半分残っているし、徳利は振ってみると、ごぼっと音がして、欠けた口から酒がにおう。
「ありがたい」
こういう場合、人間の胃は、他の所有権を考えている遑はない。徳利の濁り酒をのみ、鍋を空にして、又八は、
「ああ、腹が満った」

ごろんと手枕になる。
トロトロと炉の火もとに眠りかける。雨のように野は虫の音に更けてゆく。戸外ばかりでなく、壁も啼く、天井も啼く、破れ畳も啼きすだく。
「そうだ」
何か思い出したとみえる。むくりと彼は起き直った。懐中にある一個の包み——彼の顎の半分ない武者修行から、死に際に頼まれて持って来た包みの中を——こうしている間に一度見ておこう。そう急に思いついたらしい。
解いてみた。——それは蘇芳染の汚れきった風呂敷だった。中から出て来たのは、洗いざらした襦袢だの普通の旅行者の持つ用具などであったが、その着更えをひろげてみると、いかにも大事そうに、油紙でくるんである巻紙大の物と路銀の金入れであろう、どさっと重い音が膝の前に落ちた。

九

むらさき革の巾着であった。その金入れの中には、金銀取交ぜてだいぶの額が入っていた。又八は数えるだけでも自分の心が怖くなって、思わず、
「これは他人の金だ」
と、殊更につぶやいた。
もう一つの油紙に包んであるものを開いてみると、これは一軸の巻物である。軸には花梨の木が用いてあり、表装には金襴の古裂れが使ってあって、何となく秘品の紐を解く気持を抱かせら

れる。
「何だろ？」
全く見当のつかない品物だった。巻を下へ置いて、端の方から徐々に繰り展げて見てゆくと
――

印　可

一　中条流太刀之法
一　表
電光、車、円流、浮きふね
一　裏
金剛、高上、無極
一　右七剣
神文之上
口伝授受之事

月　日

越前宇坂之庄浄教寺村
富田入道勢源門流

後学　鐘　巻　自　斎

佐々木小次郎殿

とあって、その後に別な紙片を貼り足したと思われるところには「奥書」と題して、左の一首

の極意の歌が書いてあるのであった。

掘らぬ井に
たまらぬ水に
月映して
影もかたちもなき
人ぞ汲む

「……ははあ、これは剣術の皆伝の目録だな」
そこまでは又八にもすぐ分ったが、鐘巻自斎という人物については、何の知識もなかった。もっとも、その又八にでも、伊藤弥五郎景久といえばすぐ、
（アアあの一刀流を創始して、一刀斎と号している達人か）
と合点がゆくであろうが、その伊藤一刀斎の師が、鐘巻自斎という人で、またの名を外他通家といい、まったく社会からは忘れられている、富田入道勢源の正しい道統をうけついで、その晩節をどこか辺鄙な田舎に送っている高純な士であるなどということはなおさら知らない。
そういう詮索よりも、
「――佐々木小次郎殿？　……ははアすると、この小次郎というのが、きょう伏見のお城工事で、無残な死に方をしたあの武者修行の名だな」
と、そこに頷いて、
「強いはずだ。この目録をみても分るが、中条流の印可をうけているのだもの。惜しい死に方をしたものだな。……さだめしこの世に心残りなことだったろう。あの最期の顔は、いかにも死ぬ

のが残念だという顔つきだった。——そしておれに頼むといったのは、やはりこの品だろう。これを郷里の知る辺へでも届けてくれといいたかったに違いない」

又八は、死んだ佐々木小次郎のために、口のうちで、念仏をとなえた。そしてこの二品は、きっと死者の望むところへ届けてやろうと思った。

——また、ごろりと彼は横になっていた。肌寒いので寝ながら炉の中へ柴を投げこんで、その炎にあやされながらウトウト眠りかけた。

ここを出て行った奇異な虚無僧が吹いているのであろう、遠い野面から尺八の音が聞えて来る。

何を求め、何を呼ぶのか。彼が出て行く折につぶやいたように、愚痴と煩悩を捨て切ろうとする必死がこもっているせいかも知れない。——とにかくそれは物狂わしいまで夜もすがら吹いて野をさまよっていたが、又八はもう疲れきって、熟睡してしまったので、尺八の音も虫の音も、すべて昏々の中であった。

狐雨

一

野は灰色に曇っている。今朝の涼しさは「立つ秋」を思わせ、眼に見るものすべてに露があ

る。
戸の吹き仆されている厨に、狐の足痕がまざまざ残っていた。夜が明けても、栗鼠はそこらにうろついている。
「アア、寒い」
虚無僧は、眼をさまして、広い台所の板敷へかしこまった。
夜明け頃、ヘトヘトになって戻って来ると、尺八を持ったまま、ここへ横になって眠ってしまった彼である。
うす汚い袷も袈裟も、夜もすがら野を歩いていたために、狐に魅かされた男のように草の実や露でよごれていた。きのうの残暑とは比較にならない陽気なので、風邪をひき込んだのであろう、鼻のうえに皺をよせ、鼻腔と眉を一緒にして、大きな嚔を一つ放つ。
ありやなしやの薄いどじょう髭の先に、鼻汁がかかった。恬として、虚無僧はそれを拭こうともしないのである。
「……そうじゃ、ゆうべの濁り酒がまだあったはず」
つぶやいて起ち上がり、そこも狐狸妖怪の足痕だらけな廊下をとおって、奥の炉のある部屋をさがしてゆく。
捜さなければ分らないほど、この空屋敷は昼になってみるとよけいに広いのである。もちろん、見つからないほどでもないが――
(おや?)
うろたえた眼をして見廻している。あるべきところに酒の壺がないのだ。しかしそれはすぐ炉

のそばに横たわっているのを発見したが、同時に、その空の容器とともに、肱枕をして、涎をながして眠っている見つけない人間をも見出し、
「誰だろ?」
及び腰に覗き込んだ。
よく眠っている男だった。揺りつけても眼を醒ましそうもない大鼾声をかいているのである。酒はこいつが飲んだのだな――と思うとその鼾声に腹が立つ。
まだ事件があった。今朝の朝飯として食べのこしておいた鍋の飯が、見れば底をあらわして一粒だにないではないか。
虚無僧は顔いろを変えた。死活の問題であった。
「やいっ」
蹴とばすと、
「ウ……ウむ……」
又八は、肱を外してむっくと首をあげかけた。
「やいっ」
つづいて、もう一ツ、眼ざましに足蹴を食らわすと、
「何しやがる」
寝起きの顔に、青すじを立てて、又八はぬっくと起ち上がった。
「おれを、足蹴にしたな、おれを」
「したくらいでは、腹が癒えんわい。おのれ、誰に断って、ここにある雑炊飯のあまりと酒を食

らったか」
「おぬしのか」
「わしのじゃ！」
「それやあ済まなかった」
「済まなかったで済もうか」
「謝る」
「謝るとだけでことは納まらん」
「じゃあ、どうしたらいいんだ」
「かやせ」
「返せたって、もう腹の中に入って、おれの今日の生命のつなぎになっているものをどうしようもねえ」
「わしとて、生きて行かねばならん者だ。一日尺八をふいて、人の門辺に立っても、ようよう貰うところは、一炊ぎの米と濁酒の一合の代が関の山じゃ。……そ、それを無断であかの他人のおのれらに食われて堪ろうか。かやせ！　かやせ！」
餓鬼の声である。どじょう髭の虚無僧は、飢えている顔に青すじを立て威猛高に喚いた。

二

「さもしいことをいうな」と又八は蔑んで――
「多寡が鍋底の雑炊飯や、一合に足らぬ濁り酒のことで、青筋を立てるほどのことはあるまい

が」

　虚無僧は執こく憤って、

「ばかをいえ、残り飯でも、この身にとれば一日の糧だ、一日の生命だ。かやせっ、かやさなければ――」

「どうするって」

「うぬっ」

　又八の腕くびを摑まえ、

「ただはおかぬっ」

「ふざけるなっ」

　振り離して、又八は、虚無僧の襟がみを摑み寄せた。

　飢えた野良猫にひとしい虚無僧の細っこい骨ぐみだった。叩きつけて、一振りに、ぎゅうといわせてやろうとしたが、襟がみを摑まれながら、又八の喉輪へつかみかかって来た虚無僧の力には、案外な粘りがある。

「こいつ」

　と、力み直したが、相手の足もとは、どうして、確かりとしたものだ。

　かえって又八が顎をあげて、

「うッ……」

　妙な声をしぼりながら、どたどたっと次の部屋まで押し出され、それを食い止めようとする力を利用されて、手際よく、壁へ向って投げ捨てられた。

根太も柱も腐蝕っている屋敷である。一堪りもなく壁土が崩れて、又八は全身に泥をかぶった。

「ペッ……ペッ……」

猛然と唾して立つと、ものをいわない代りに、凄い血相が刃物を抜いて、跳びかかってきた。

虚無僧も心得たりという応対で、尺八をもって渡りあう。しかし情けないことにはすぐ息喘れが出て来て、尖った肩でせいせいいうのだ。それに反して又八の肉体はなんといっても若かった。

「ざまを見ろっ」

圧倒的に又八は、斬りかけ斬りかけして、彼に息をつく間を与えない。虚無僧は化けて出そうな顔つきになった。体の飛躍を欠いてともすると蹴つまずきそうになる。そのたびに何ともいえない死に際のさけびを放った。そのくせ八方に逃げ廻って、容易には太刀を浴びないのである。

しかし結果は、その誇りが又八の敗因となった。虚無僧が猫のように庭へ跳んだので、それを追うつもりで廊下を踏んだ途端に、雨に朽ちていた縁板がみりっと割れた。片足を床下へ突っこんで、又八が尻もちをついたのを見ると、得たりと刎ね返して来た虚無僧が、

「うぬ、うぬ、うぬっ」

胸ぐら取って、顔といわず鬢といわず、撲りつけた。

脚がきかないので又八はどうにもならなかった。自分の顔が見るまに四斗樽のように腫れたかと思う。――すると、もがき争っている懐中から、金銀の小粒がこぼれた。撲られるたびに美い音がして、貨幣はそこらに散らかった。

「――やっ？」

虚無僧は、手を放した。
又八もやっと彼の手をのがれて跳び退いた。
自分の拳が痛くなるほど、憤怒を出しきった虚無僧は、肩で息をしながら、あたりにこぼれた金銀に眼を奪われていた。
「やいっ、畜生め」
腫れ上がった横顔を抑えながら又八は、声をふるわせてこういった。
「な、なんだっ、鍋底のあまり飯くらいが！　一合ばかしの濁酒が！　こう見えても、金などは腐るほど持っているんだ。餓鬼め、ガツガツするな。それほどほしけれやあ、くれてやるから持ってゆけっ。その代り、今てめえが俺を撲っただけ、こんどは俺が撲るからそう思えっ。——さっ、冷飯と濁酒代に利子をつけて返すから、頭を出せっ、頭をここへ持って来いっ」

三

又八がなんと罵っても、相手の虚無僧がそれきりぐうの音も出さないので、彼もようよう気を鎮めて見直すとどうしたことか、虚無僧は縁板に顔を沈めて泣いている——
「こん畜生、金を見たら急に哀れっぽいふうを見せやがって」
と、又八は毒づいたが、そうまで、恥かしめられても、虚無僧はもう先の勢いはどこへやら、
「あさましい。アア、あさましい。どうしておれはこう馬鹿なのか」
もう又八へ対していっているのではない、自りで悶え悲しんでいるのだ。その自省心の烈しいことも、常人とは変っていて、

「この馬鹿、貴さまは一体、幾歳になるのか。こんなにまで、世の中から落伍して、落魄れ果てた目をみながら、まだ醒めないのか、性なしめ」

そばの黒い柱へ向って、自分の頭をごつんごつん打つけては泣き、打つけては泣き、

「何のために、汝は尺八をふいているか。愚痴、邪慾、迷妄、我執、煩悩のすべてを六孔から吐き捨てるためではないか。――それを何事だ、冷飯と酒のあまりで、生命がけの喧嘩をするとは。しかも息子のような年下の若者と」

ふしぎな男だ。そういって口惜しげにベソを掻くかと思うと、また、自分の頭を、柱に向って叩きつけ、その頭が二つに割れてしまわないうちは止めそうもないのである。

その自責からする折檻は、又八を撲った数よりも遙かに多い。又八は呆っけにとられていたが、青ぶくれになった虚無僧の額から血がにじみ出て来たので、止めずにいられなくなった。

「ま、ま、止したらどうだ、そんな無茶な真似」

「措いて下され」

「どうしたんだい」

「どうもせぬ」

「病気か」

「病気じゃござらぬ」

「じゃあなんだ」

「この身が忌々しいだけじゃ。かような肉体は、自分で打ち殺して、鴉に喰わせてやったがましじゃが、この愚鈍のままで殺すのも忌々しい。せめて人なみに性を得てから、野末に捨ててやろ

うと思うが、自分で自分がどうにもならぬので焦れるのじゃ。……病気といわれれば病気かのう」

又八は、何か急に気の毒になって来て、そこらに落ちている金を拾いあつめて、幾らかを彼の手に握らせながら、

「おれも悪かった、これをやろう。これで勘弁してくれ」

「いらん」手を引っこめて、

「金など、いらん、いらん」

鍋の残り飯でさえ、あんなに怒った虚無僧が、けがらわしい物でも見るように、強く首を振って、膝まで後へ退がってゆく。

「変な人だな、おめえは」

「さほどでもござらぬ」

「いや、どうしても、少しおかしいところがあるぜ」

「どうなとしておかれい」

「虚無僧、おぬしには、時々、中国訛りが交じるな」

「姫路じゃもの」

「ほ……。おれは美作だが」

「作州？　――」と、眼をすえて、

「してまた、作州はどこか」

「吉野郷」

「えっ。……吉野郷とはなつかしいぞ。わしは、日名倉の番所に、目付役をして詰めていたことがあるで、あの辺のことは相当に知っておるが」
「じゃあ、おぬしは、元姫路藩のお侍か」
「そうじゃ、これでも以前は、武家の端くれ、青木……」
名乗りかけたが、今の自分を省みて、人前に身を置いているに耐えなくなったか、
「嘘だ、今のは、嘘じゃよ。どれ……町へながしに行こうか」
ぷいと立って、野へ歩み去った。

幻術（めくらまし）

一

――金が気になる。費（つか）ってならない金だと思うにつけて気になるのだ。たんとは悪いが、少しぐらいは、この中から借りて費ったところで罪悪にはなるまいと遂には思う。
「死者の頼みで、その遺物（かたみ）を、郷里へ届けてやるにしても、路銀というものが要る。当然、その費用は、この内から費（つか）ったとて関（かま）うまい」
又八はそう考えてから、幾分気が軽くなった。――気が軽くなった時には、もう幾分ずつ、小出しにそれを費い始めていた時なのである。

だが、金のほかに死者から預かっている「中条流印可目録」の巻物のうちにある佐々木小次郎とは、一体どこが生国だろうか。
多分——あの死んだ武者修行がその佐々木小次郎にちがいないとは思うが、牢人か、主持か、またどういう経歴の者であるかは、さっぱり分らないし、分ろうとする手がかりもない。
唯一の頼りは、佐々木小次郎に対して、印可目録を授けている鐘巻自斎という剣術の師匠だ。その自斎がわかれば、小次郎の素姓もすぐ知れよう。それについて、又八も伏見から大坂へ下って来る道々、茶店、飯屋、旅籠と折のあるごとに、
「鐘巻自斎という剣術のすぐれた人がいるかね」
訊ねてみたが、
「聞いたこともないお人ですなあ」
と、誰もいう。
「富田勢源の流儀をひいている中条流の大家だが」
と、いってみても、
「はてね?」
まったく知る者がないのである。
——すると、路傍で会った或る侍が、多少、兵法にも心得がある様子で、
「その鐘巻自斎とかいう仁は、生きていても、もう非常な老齢のはずだ。たしか、関東に出て、晩年は上州のどこか山里にかくれたきり、世間へ出なかったように聞いておる。——その人の消息を知りたければ、大坂城へ参って、富田主水正という人物をたずねてみるとよい」

と、教えてくれた。
富田主水正とは何かと訊くと、秀頼公の兵法師範役のうちの一人で、たしか、越前宇坂之庄の浄教寺村から出た富田入道勢源の一族の者だったと思うがという話。
すこし、あいまいな気もしたが、とにかく大坂へ出るつもりだし、又八は、市街へ入るとすぐ、目抜きの町の旅籠へ泊って、そんな侍が御城内にいるか否かを訊いてみると、
「はい、富田勢源様のお孫とかで、秀頼公のお師範ではありませんが、御城内の衆に兵法を教えていたお方はございましたが、それはもう古い話で、数年前に越前の国へお帰りになっております」
これは、宿の者のいうところだった。町人とはいえ、城内の用勤めもしている家の者のいうことであるから、前の侍のことばよりはよほど真実味のある話だった。
宿の者の意見ではまた、
「――越前の国まで、尋ねておいで遊ばしても、主水正様が、今も果たしてそこにいるかどうかも分りませんから、そんな頼りのない方を遠国までたずねてゆくよりは、近頃、有名でいらっしゃる、伊藤弥五郎先生をおさがしになるのが近道でございましょう。あの方もたしか、中条流の鐘巻自斎という人のところで修行なされて、後に、一刀流という独自な流儀をお創めになったのですから」
それも一理ある忠告であった。
だが、その弥五郎一刀斎の居所をさがしてみると、これも近年まで洛外の白河に、一庵をむすんでいたが、近頃はまた、修行に出たのか、杳としてその影を京大坂の附近では見かけたことが

ないと誰もいう。
「ええ、面倒くせえ」
又八は、匙を投げた。――そう急ぐにも当らないことをと、独り語につぶやいて。

二

眠っていた野心的な若さを、又八は、大坂へ来てからたたき起された。
ここではさかんに、人物を需要しているのだった。
伏見城では、新政策や武家制度を組んでいるが、この大坂城では、人材を糾合して、牢人軍を組織しているらしかった。もとよりそれは、公然とではないが。
「後藤又兵衛様や、真田幸村様や、明石掃部様や――また長曾我部盛親様などへも、秀頼公から、そっと、生活のお手当というものが、届いているのだそうな」
町人たちの間でも、もっぱらそういう噂をしている。――で、どこの城下よりも牢人が尊ばれ、牢人の住みよいのが、今では大坂の城下だった。
長曾我部盛親などは、町端れのつまらない小路に借家して、若いのに頭をまるめ、一夢斎と名を更えて、
（浮世のことなど、わしゃ知らんよ）
といった顔つきして、風雅と遊里の両方に身をやつして暮しているが、その手から、いざという場合には、猛然と起って、
（太閤御恩顧のため）

という旗じるしの下に集まろうという牢人が、七百や八百は飼ってあって、その生活費も、秀頼のお手元金から出ているのだということも聞いた。
又八は、二月ほど、大坂を見聞しているうちに、
（ここだ。出世のつるをつかむ土地は）
と、まず興奮を抱いた。
空脛に、槍一本かつぎ出して、宮本村の武蔵と、関ヶ原の空をのぞんで飛び出した時のような壮志が、久しぶりに、近頃、健康になった彼の体にも、甦って来たらしいのである。
ふところの金は、ぽつぽつ減ってゆくが、何かしら、
（おれにも運が向いてきた）
という自覚がして来て、毎日が明るくて、愉快だった。石に蹴つまずいても、そんな足下から、不意にいい運の芽が見つかりそうな気がするのである。
（まず、身装だ）
彼はいい大小を買って差した。もう寒さにかかる晩秋なので、それにうつりのよい小袖と羽織も買った。
旅籠は、不経済と考えて、順慶堀に近い馬具師の家の離れを借り、食事は外でし、見たいものを見、家へは帰ったり帰らなかったり、好みどおりな生活をしている間に、よい知己を得、手づるを見つけ、扶持の口にありつこうと心がけていた。
この程度に、生活を持していることは、彼としては、かなり自戒を保って、生れ変ったほど、身を修めているつもりなのである。

（あれへ大槍を立たせ、乗換え馬を牽かせ、供の侍を、二十人も連れて通りなさる。――今では大坂城の京橋口に御番頭として詰めてござるが、順慶堀の川ざらいには、土をかついで御座った牢人衆であったに）

そんなうらやましい噂を、町ではよく聞くが、さて、又八がだんだんに見るところでは、

（世の中というやつは、まるで石垣だ、きっちりと、使われる石は組んであって、後から入る隙はねえものだ）

すこし疲れて来たが、また、

（なあに、蔓の見つからねえうちが、そう見えるんだ、うまく、割り込むまでが、むずかしいが、何かへ取ッついてしまえば）

と思い直して、間借している馬具師のおやじへも、就職をたのんでおいた。

「旦那がたあ、お若いし、腕もおできなさるじゃろうし、御城内の衆へ頼んでおけば、すぐお抱えの口はありましょうで」

ありそうな口吻で、そこの馬具師も安うけあいしたが、就職はなかなかかかって来ない。――そのうちに冬も十二月、ふところの金も半分になっていた。

三

繁華な町なかの空地の草にも、朝々霜が真っ白におりる。その霜が消えて、道のぬかるむ頃から、銅鑼だの、太鼓だのが、そこでは鳴り出す。

師走の忙しない人々が、案外のんきな顔して、冬日の下にいっぱいに群れていた。いとも粗雑

な矢来を囲って、外からは見えないようにそれへ筵を張り廻してある人寄せの見世物が、六、七ヵ所に紙旗や毛槍を立て、その閑人の群へ呼びかけて、客を奪い合う様はなかなか真剣な生活戦だった。

安醤油のにおいが人混みのあいだを這う。串にさした煮物をくわえて、馬みたいに嘶いている毛脛の男たちがあるし、夜は、白粉を塗りこくって袖をひく女たちが、解放された牝羊みたいに、ぽりぽり豆を食べながら繋がって歩いてゆく。野天へ腰かけを出して、酒を汲んで売っている所では、今、一組の撲りあいがあって、どっちが勝ったのか負けたのか、後へ血をこぼしたまま、その喧嘩のつむじ風は、わらわらと町の方へ駈け去ってしまった。

「ありがとうございました。だんな様が、ここに御座ったで、器物は壊されずにすみましただ」

酒売りは、何度も、又八の前へきて、礼をくり返した。

その礼ごころが、

「こんどのお燗は、あんばいよくついたつもりで」

頼まない肴物まで添えてくる。

又八は悪い気持でなかった。町人どうしの喧嘩なので、もしこの貧しい露店の物売りに損害をかけたら取ッちめてやろうと睨みつけていたが、何の事もなくすんで、露店のおやじのためにも、自分のためにも、同慶であったと思う。

「おやじ、よく人が出るな」

「師走なので、人は出ても、人足は止まりませぬでなあ」

「天気がつづくからいい」

鳶が一羽、人混みの中から、何か咥えて高く上がってゆく。——又八は赤くなっていた、そしてふと、（そうだ、おれは石曳きする時に酒は禁めると誓ったのだが、いつから飲み始めてしまったろう）
他人事のように考えた。
そして自ら、
（まあいい、人間、酒ぐらい飲まねえでは）
と、慰めたり、理由づけたりして、
「おやじ、もう一杯」
と、うしろへいった。
それと一緒に、ずっとそばの床几へ来て、腰かけた男がある。牢人だなとすぐ見てとれる恰好だった。大小だけは人をして避けしめるほど威嚇的な長刀であるが、襟垢のついた袷に上へ一重の胴無しも羽織っていない。
「オイオイ亭主、おれにも早いところ一合、熱くだぞ」
腰かけへ、片あぐらを乗せて、じろりと又八のほうを見た。足もとから見上げて、顔のところまで眼がくると、
「やあ」
と、何の事もなく笑う。
又八も、
「やあ」

と、同じことをいって、
「燗のつく間、どうですか一献。飲みかけで失礼だが」
「これは——」
すぐ手を出して、
「酒のみという奴、いやしいもので、実は、尊台が、ここで一杯やっているのを見かけると、どうにも、こう……ぷウんと鼻を襲ってくる香が堪らん、袂をひいてな」
いかにも美味そうに飲む男だ。磊落で、豪傑肌らしいと、又八はその飲み振りを見ていた。

四

よく飲む。
又八がそれから一合もやるうちに、この男はもう五合を越えて、まだ慥かりしたものだった。
「どのくらい？」
と訊くと、
「ちょっと一升、落ちついてなら、まあ、量がいえぬ」
と、いう。
時局を談じると、この男は、肩の肉をもりあげた。
「家康がなんだ。秀頼公をさしおいて、大御所などと、ばからしい。あのおやじから本多正純や、帷幕の旧臣をひいたら、何が残る。狡猾と、冷血と、それと多少の政治的な——武人が持たぬ才を少し持っているというに過ぎない。石田三成には勝たせたかったが、惜しいかな、あの

男、諸侯を操縦すべく、あまりに潔癖で、また身分が足らなかった」
そんなことをいうかと思うと、
「貴公、たとえば、今にも関東、上方の手切れとなった場合は、どの手につく」
と、訊く。
又八が、ためらいなく、
「大坂方へ」
と答えると、
「ようっ」とばかり、杯を持って床几から立ち上がり、
「わが党の士か、あらためて一盞献じ申そう。して、貴君はいずれの藩士」
といって、
「いや、ゆるされい。まず自身から名乗る。それがしは、蒲生浪人の赤壁八十馬、という者。御そんじないか、塙団右衛門、あれとは、刎頸の友で、共に他日を期している仲。また今、大坂城での錚々たる一方の将、薄田隼人兼相とは、あの男が、漂泊時代に、共に、諸国をあるいたこともある。大野修理亮とも、三、四度会ったことがあるが、あれはすこし陰性でいかん。兼相よりは、ずっと勢力はあるが」
喋りすぎたのを気がついたように、後へもどって、
「ところで、貴公は」
と、訊き直す。
又八は、この男の話を、全部がほんととは信じなかったが、それでも、何か圧倒されたような

怯け目を感じ、自分も、法螺をふき返してやろうと思った。
「越前宇坂之庄浄教寺村の、富田流の開祖、富田入道勢源先生をごぞんじか」
「名だけは聞いておる」
「その道統をうけ、中条流の一流をひらかれた無慾無私の大隠、鐘巻自斎といわるる人は、私の恩師でござる」
男は、そう聞いても、かくべつ驚きもしないのだ。杯を向けて、
「じゃあ、貴公は、剣術を」
「左様」
又八は、嘘がすらすら出るのが愉快だった。
大胆に嘘をいうと、よけいに酔いが顔に咲いて、酒のさかなになる気がするのである。
「——多分、実はさっきから、そうじゃないかと、拙者も見ておったので。やはり鍛えた体はちがうとみえ、どこか出来ているな、……して、鐘巻自斎の御門下で、何と仰せられるか。さしつかえなくば、ご姓名を」
「佐々木小次郎という者で、伊藤弥五郎一刀斎は、私の兄弟子です」
「えっ」
と、相手の男が驚いたらしい声を発したので、又八のほうこそ吃驚してしまった。あわてて、
(それは冗戯)
と、取消そうと思ったが、赤壁八十馬は、とたんに地へ膝をついて頭を下げているので、今更もう冗戯ともいえなかった。

五

「お見それ申して」
と、八十馬は何度もあやまる。
「佐々木小次郎殿といえば、とくより耳にしておるその道の達人。知らないというものは、他愛のないもので、先刻からの失礼は、平に」
又八は、ほっとした。佐々木小次郎をよく知っている者か、面識でもある間がらでもあれば、たちまち嘘がばれて、脂をしぼられるところであったがと——
「いや、お手を上げて下さい。そう改まられては、私こそ、ご挨拶のしようがない」
「いや、先程から、広言のみ吐いてさぞお聞き苦しかったことで」
「なに、私こそ、まだ仕官もせず、世間も知らぬ若輩者で」
「でも、剣においては。——いやよくお名まえは彼方此方で聞きますぞ。……そうだ、やはり佐々木小次郎」
つぶやいて、八十馬は、酔うと目やにの出る性らしい眼を、どろんと据え、
「その上で、まだ御仕官もなさらぬのか、惜しいものだ」
「ただ剣一方に、すべてを打ち込んで来たので、世間にはとんと何の知己もないために」
「や、なる程。——ではまんざら仕官のお望みがないわけでもないので」
「もとより。いずれは、主人を持たねばならぬと考えていますが」
「ならば、造作もないこと。——実力があるのだからたしかなものだ。もっとも実力があって

も、黙っていては容易に見出されるはずはない。こうお目にかかっても、それがしですら、尊名を聞いて初めて驚いたようなもので」

と、さかんに焚きつけて、

「お世話しよう」

と、いい出した。

「実はそれがしも、友人の薄田兼相に身の振り方を依頼してあるところ。大坂城では、禄を問わず、抱え入れようとしている折だし、貴公のような人物を推挙すれば、薄田氏も、すぐ買おう。おまかせ下さるまいか」

どうやら赤壁八十馬は乗り気になっているらしい。又八は、その就職へありつきたいことは山山だが、佐々木小次郎であると他人の名を借用してしまったことが、どうもまずい。引っこみのつかない不出来だ。

かりに美作の郷士本位田又八と名乗って実際の履歴を話したら、この男も乗り気にはなるまい。鼻さきで軽蔑を与えられる位なところが落ちである。やはり佐々木小次郎の名がものをいったのだ。

——待てよ、と又八は胸のうちで考える。何もそう心配したほどのものじゃないと思う。なぜならば、佐々木小次郎なる者はもう死んでいる人間だ。伏見城の工事場で打ち殺されてしまった人物ではないか。——しかもそれが佐々木小次郎なりとは、おそらく、おれ以外の何者も知っていまい。

死者の所持していた唯一の戸籍証明である「印可目録」は自分が彼の臨終の一言によって預か

って来ているので、後で、調べのつこうわけはない。また一箇の乱暴人として、打殺した死者に対して、そんな面倒な調べをいつまでもやっているはずもない。
(分りっこはない！)
又八の頭に大胆な、狡い考えがそう閃めいた。勃然として、彼は、死んだ佐々木小次郎になり切ってやろうと臍を決めた。
「おやじ、勘定」
金入れから金を出して、そこを起ちかけると、赤壁八十馬はあわてて、
「今の話は？」
と、一緒に立った。
「ぜひ、ご尽力をねがいたいが、この路傍では、十分な話もできぬ。どこか座敷のあるところへでも行って」
「ああそうか」
と、八十馬は満足そうにうなずいて、自分の飲んだ代まで、又八が払っているのを、当り前のような顔して眺めていた。

六

怪しげな白粉の裏町である。又八としては、もっと高等な酒楼へ案内するつもりだったが、赤壁八十馬が、
「そんなところへ揚がって、つまらぬ金を費うよりは、もっとおもしろい土地がある」

といって、頻りに裏町遊びを謳歌するので、ともかく引っ張られて来てみると、まんざら又八の肌に合わない情調ではない。

比丘尼横丁というのだそうである。大袈裟にいえば長屋千軒がみな売笑婦の家で、一夜に百石の油を燈心にともすともいえるほどな繁昌さである。

すぐ近くに、汐のさす黒い堀が通っているので、出格子だの、紅燈の下だのには、よく見ると、船虫や河蟹がぞろぞろ這っていて、それが生命取りのさそりという妖虫のようにうすきみ悪いが、無数の白粉の女の中には眉目美いのも稀にあって、中には、もう四十にちかい容貌に、鉄漿を黒々つけ、比丘尼頭巾にくるまって、夜寒を喞ち顔でいるなど、なかなかもののあわれも蕩児の心をそそるのであった。

「いるな」

又八が、ため息つくと、

「いるだろう、へたな茶屋女や歌妓などより、遙かにましだ。——売女というと、いやな気がするが、冬の一夜をここに明かして、その前身なり、氏素姓なりを、寝ものがたりに聞いてみると、みな、生れた時からの売女ではないて」

肩と肩のすれ合ってゆく往来中を、八十馬は、得意になって、弁じていた。

「室町将軍の奥につかえていたという比丘尼があるし、父は武田の臣だったの、松永久秀の縁類の者だのという女が、この中にはずいぶんある。——平家の没落した後もそうだったが、天文、永禄からこっちは、あの時代などから見るともっと激しい盛衰がくり返されたのだから、浮世の下水には、こんなふうに落花の芥が溜るのだろうな」

それから一軒の家へ上がって、八十馬に遊びの仕方をまかせると、これはこの道での豪の者とみえ、酒のあつらえ方、女たちのあつかいよう、そつがなくて、成程、この裏町はおもしろい。泊ったことはもちろんである。昼間になっても、飽いたといわない八十馬だった、お甲の「よもぎの寮」では、いつも日蔭者でいた又八も、多年の鬱憤をここに晴らしたか、

「もう、もう。酒はいやだ」

と遂にかぶとを脱いで、

「帰ろう」

いい出すと、

「晩までつきあい給え」

と、八十馬はうごかない。

「晩までつきあったらどうするんだ」

「今夜、薄田兼相（すすきだかねすけ）のやしきへ行って兼相と会う約束がしてあるんだ。今から出ても時刻（とき）が半端だし……。それに、そうだ、貴公の望みももっとよく聞いて置かなければ、先へ行って話もできない」

「禄など、初めからそう望んでも無理だろう」

「いかん、自分からそんな安目を売ってはいかん。とにかく中条流の印可を持って、佐々木小次郎ともいわれる侍が、禄はいくらでもいいから、ただ仕官がしたいなどといったら、かえって先から蔑（さげす）まれるぞ。――五百石もくれといっておこうか、自信のある侍ほど手当や待遇なども大きく出るのが通例だからな、やせ我慢などせぬがいいのだ」

七

谷間の壁を見上げるように、この辺りはもう早い日蔭になっている。大坂城の巨大な影が夕空を蔽っているからである。
「あれが、薄田の邸だぞ」
濠の水に背を向けて、二人は寒そうに佇んだ。昼間から注ぎこんでいた酒も、この濠端に立つと一たまりもなく吹き飛んで、鼻の先に水洟が凍りつく。
「あの腕木門か」
「いや、その隣の角屋敷」
「ふム……宏壮なものだな」
「出世したものさ。三十歳前後の頃には、まだ、薄田兼相などといっても、世間で知っている奴はなかった、それがいつのまにか……」
赤壁八十馬のことばを、又八はそら耳で聞いていた。疑っているのではない、もう彼のことばの端など注意してみる必要を感じないほど信頼し切っていたのだった。——そしてこの巨城を取巻いている大小名の門をながめて、
「おれも」
と、鬱勃としてくるものを彼も抑えきれない青年だった。
「じゃあ、今夜ひとつ、兼相に会って、うまく貴公の体を売りこんでみせるからな」
八十馬は、そういって、

「――ところで、例の金だが」
と、催促した。
「そう、そう」
又八は懐中から、革巾着を取り出した。少しくらいは、と思いながらいつのまにかこの革巾着の金も三分の一になっていた。その残りの底をはたいて、
「ざっと、これだけあるが、これくらいなおくりものでいいのか」
「いいとも、十分だ」
「何かに包んでゆかなければいけまいが」
「なあに、仕官の取做しを頼む時の、御推挙料だの、御献金だのというやつは、薄田ばかりじゃない、公然と誰でも取っていることだから、何も憚って差し出す必要はすこしもないのだ。――じゃあ預かっておくぜ」
持ち金のほとんどあらましを、彼に手渡してしまうと、又八はやや不安をよび起して、歩み出した八十馬に追いすがり、
「うまく頼むぞ」
「大丈夫だ。先で、渋った顔をしていたら、金をやらずに持って帰るだけのことじゃないか。何も、兼相だけが、大坂方の勢力家じゃなし、大野でも後藤でも、頼みこむ思案はいくらもある」
「返辞は、いつ分るか」
「そうだな、ここで、待っていてくれてもいいが、濠ばたの吹きさらしに、立っているわけにもゆくまいし、また、怪しまれるから、明日会おう」

「明日——どこで」
「人寄せの懸っているれいの空地へ行ってくれ」
「承知した」
「貴公と初めて会った、あの酒売りのおやじの床几で、待っていてくれれば間違いない」
時刻も打合せて、赤壁八十馬は、そこの門内へ、大手を振って入って行った。肩を振って、堂堂と通ってゆく態度を見とどけて、
（あれなら、なるほど、薄田兼相とは、貧困時代からの旧友だろう）
又八は、安心に似た気もちを抱いて、その晩は、さまざまな夢に耽り、あくる日を待ちかねて、定めの時刻に、人寄せ場の空地へ、霜解けをふんで行った。
きょうも師走の風が寒かったが、冬日の下にはたくさん集まっていた。

八

どうしたのか、赤壁八十馬は、その日、姿を見せなかった。
次の日。
又八は、こう善意に解釈して、れいの野天の酒売りの床几で、
「何かの都合だろう」
「きょうは」
と、正直に空地の人混みを見廻していたが、その日も遂に八十馬の姿を見ずに暮れてしまった。
少し、てれて、

「おやじ、また来たぞ」
三日目である。こういって、床几に腰をすえると、酒売りのおやじが、毎日の彼の挙動を密かに怪しんでいたとみえ、一体、誰を待つのかと訊ねるので、実は云々な仔細で、いつぞやここで知己になった赤壁という牢人と落合う約束になっているのだが――と語ると、
「え？　あの男に」
おやじは呆れたような口吻で、
「では、仕官の口を周旋してやるからといって、あいつ奴に、金を取られたので」
「取られたわけではない。わしから依頼して、薄田殿へわたす口入れ金を預けておいたのだが、その返辞がはやく知りたいので、毎日待っているわけだが」
「おやおや、おまえ様は」
おやじは、気の毒そうに、又八の顔をながめて、
「百年待っていても、あの男が来るはずはありませぬ」
「げっ。――ど、どうして」
「彼奴は、名うてな悪で、この空地には、ああいうガチャ蠅がたくさんおりましてな、少し甘い顔と見れば、すぐたかって来るのでございます。よほど、気をつけてあげようかと思ったが、あとの祟りが恐いし、おまえ様も、あの風態を見れば、気がつくだろうと思っていたのに、金を抜かれてしまうなんて……。これやお話にならんわい」
気の毒を通り越して、又八の無智をむしろ愍れむような口吻なのである。だが又八は、恥を掻いたとは思わない。突然の損失と希望から抛り出された傷手に、身がふるえ、血が憤って、茫

然と、空地の人群を見つめていた。
「むだとは思うが、念のため幻術の囲いへ行って訊いてみなさるがよい。あそこではよく、ガチャ蠅が集まって、銭の賭事をしておりますで、そういう金をつかめば、ことによると、賭場へ顔を出しているかもわかりませぬ」
「そ、そうか」
又八は、あわてて床几を起ち、
「その幻術の人寄せというのは、どこの囲いか」
老爺の指さすほうを見ると、この空地のうちでは最も大きな矢来が一つ見える。幻術者の群が興行しているのだという。見物は、木戸口に蝟集していた。又八が近づいて行ってみると、
「ちょちょんがちょっ平」
だとか、
「変兵童子」
とか、
「果心居士之一弟子」
とかいう有名な幻術師の名が、木戸口の旗に記してあって、幕と筵でかこんであるその広い矢来のうちでは、怪しげな音楽に交じって、術者の掛声と、見物の拍手が湧いていた。

九

裏へ廻ると見物の出入りしないべつな口があった。又八が、そこを覗くと、

「賭場へゆくのか」
と、立番の男がいう。
うなずくと、よしというような眼をしたので、彼は入って行った。幕の中では、青天井をいただいて、二十人ばかりの浮浪人が、車座になって、博戯をしている。
又八が立つと、じろっと、すべての白い眼が彼を見上げた。一人がだまって、彼の前に席を開けたので、あわてて、
「この中に、赤壁八十馬って男はいないか」
訊くと、
「赤馬か。そういえば赤馬の奴、ちっとも出て来ねえが、どうしたんだろう」
「ここへ来ましょうか」
「そんなこと、わかるもんか。まあ、入りねえ」
「いや、おれは博戯事に来たんじゃない。その男を捜しに来たのだ」
「おい、ふざけるなよ、博戯もせずに、賭場へ何しに来やがったんだ」
「すみません」
「向う脛を掻っ払うぞ」
「すみません」
ほうほうのていで出て来ると、追いかけて来たガチャ蠅の一人が、
「野郎待て。ここは、すみませんで済む場所たあ違う。ふてえ奴だ。博戯をしなけれやあ、場代をおいてゆけ」

「金などない」
「金もねえくせに、賭場のぞきをしやがって、さては、隙があったら、銭を攫って行こうという量見だったにちげえねえ、この盗っ人め」
「なんだと」
又八が、くわっとして刀の柄を示すと、これは面白いと、相手は敢て喧嘩を買ってくる腰だった。
「べら棒め、そんな脅しに、いちいち怖ついていちゃ、この大坂表で、生きちゃあいられねえんだ。さ、斬るなら斬ってみろ」
「き！　斬るぞ」
「斬れっ、何も、断るにゃ及ばねえや」
「おれを知らんか」
「知ってるもんか」
「越前宇坂之庄、浄教寺村の流祖、富田五郎左衛門が歿後の門人佐々木小次郎とはわしのことだ」
そういったら逃げるだろうと思いのほか、相手は、ふき出して、又八のほうへ尻を向け、矢来のうちのガチャ蠅を呼び立てた。
「やい、みんな来い、こいつ何とか今、オツな名乗りをあげやがったぜ。おれたちを相手に抜く気らしい。ひとつお腕のうちを見物としようじゃねえか」
いい終ると、きゃッと、その男は尻を斬られて跳び上がった。又八が、不意に抜き打ちをくれたのである。

「畜生っ」
という声。それから、わっと大勢の声がうしろに聞えた。又八は血刀をさげて人混みの中へまぎれ込んだ。
なるべく人間の多いところへと又八は姿をかくして歩いていたが、危険を感じるほど、どの人間の顔もガチャ蠅に見え、とてもうろついておられなくなった。
ふと見ると、眼のまえの矢来に、大きな虎の絵を描いた幕が垂れていて、木戸には、鎌槍と、蛇の目の紋と旗じるしが立ててあり、空箱に乗っている町人が、しゃがれ声をふりしぼって、
「虎だ、虎だっ、千里行って、千里帰る、これは朝鮮渡りの大虎、加藤清正公が手捕りの虎――」
というような人寄せ文句を、ふしづけて呶鳴っていた。
銭を抛って、又八は中へとびこんだ。そして、いささかほっとしながらどこに虎がいるのかと見廻してみると、正面に戸板を二、三枚並べ、それへ洗濯物でも貼りつけてあるように、一枚の虎の皮が貼りつけてあった。

十

死んだ虎を見せられても、見物は、神妙に眺め入って、これは生きていないじゃないかと、腹を立てる者はなかった。
「これが虎かいな」
「大きなものやなあ」
感心して、入口から出口の木戸へ入れ代ってゆく。

又八は、なるべく刻を過ごそうと考えていつまでも虎の皮の前に立っていた。——すると、ふと自分の顔の前に、旅装いの老夫婦が立って、
「権叔父よ。この虎は、死んでいるのじゃろうが」
と、婆のほうがいう。
爺侍は、竹の仕切り越しに手をのばして、虎の毛に触れながら、
「元より、皮じゃもの、死んでおるわさ」
「木戸で呼ばわっている男は、さも生きているようにいうたがの」
「これも、幻術の一つじゃろて」
爺侍は苦笑していたが、婆のほうは、忌々しげに、萎んでいる唇を振り向けて、
「やくたいもない、幻術なら幻術と看板にあげておいたがよい。死んだ虎を見るくらいなら絵を見るわさ。木戸へ去んで、銭をかやせというて来う」
「婆、婆。人が笑うぞよ、そんなこと、喚かんでもええ」
「なんの、見栄がいろう、おぬしいうが嫌ならわしがいう」
見物の者を押し分けて、戻りかかると、あっ——とその人混みの中に肩を沈めた者がある。
権叔父と呼ばれた爺侍が、
「やっ、又八っ」
と、呶鳴った。
お杉隠居は、眼がわるいので、
「な、なんじゃ、権叔父」

「見えなんだかよ、婆のすぐうしろに、又八めが立っておったぞ」
「げっ、ほんまか」
「逃げたっ」
「どっちゃへ？」
二人は、木戸の外へ転び出した。
もう空地の雑沓は暮色につつまれていた。又八は、幾たびも人にぶつかった。そのたびに、くるくる舞して、後も見ずに、町中のほうへ逃げてゆく。
「待て、待て、倅っ」
振りかえってみると、母親のお杉は、まるで狂気のようになって追って来るのだった。
権叔父も、手をふりあげ、
「馬鹿ようっ。なんで逃げるぞい。——又八っ、又八っ」
それでもなお、又八が足を止めないので、お杉隠居は、皺首を前に伸ばし、
「泥棒、泥棒、泥棒っ——」
夢中でさけんだ。
暖簾棒だの竹竿を持って、町の者は、先へゆく又八を蝙蝠を打つようにたたき伏せた。
往来の者も、わいわいと取りかこんで、
「捕まえた」
「ふてえ奴だ」
「どやせ」

「たたっ殺してやれ」
足が出る、手が出る、唾を吐きかける。
後から息を喘って、権叔父とともに追いついて来たお杉隠居はそのていを見ると、群衆を突きとばし、小脇差のつかに手をかけて歯を剝いた。
「ええ、むごいことを、おぬしら何しやるのじゃ、この者へ」
弥次馬は、理を弁えずに、
「婆どの。こいつは、泥棒だよ」
「泥棒ではない、わしが子じゃわ」
「え、おまえの子か」
「おおさ、ようも足蹴にしやったな。町人の分際で、侍の子を足蹴にしやったな。婆が相手にしてくりょう、もいちど、今の無礼をしてみやい」
「冗戯じゃない。じゃあ先刻泥棒泥棒と呶鳴ったのは誰だ」
「呶鳴ったのは、この婆じゃが、おぬしら風情に足蹴にしてくれと頼みはせぬ。泥棒とよんだら伜めが、足を止めようかと思うていうた親心じゃわ。それも知らいで、撲ったり蹴ったりは何事じゃ、このあわて者めが！」

怨敵

一

町中の森である。おぼろに常夜燈がまたたいていた。

「こう来やい」

お杉隠居は、又八の襟がみを抓んで、往来からそこの境内まで引きずって来た。

婆の権まくに驚いたとみえ、弥次馬はもう尾いて来ない。殿として、鳥居の下で見張っていた権叔父も、やがて後から来て、

「婆、そう折檻はせぬものだぞ。又八とて、もう子どもではなし」

母子の手と襟がみを、もぎ離そうとすると、

「何をいうぞい」

隠居は、権叔父を、肱で突き退けて、

「わしが子を、わしが折檻するに差し出口など、要らぬお世話、おぬしは黙っていやい。——こ、これっ、又八っ」

泣いて欣んでもいい場合を、この婆は憤怒して、わが子の襟がみを、大地へ小突き廻している。

老人になれば誰も単純で気短かになるという。今の場合の複雑な感情は余りにも枯渇した血には強烈すぎたのであろう。泣いているのか、怒っているのか、狂喜の変態なあらわれか。

「親のすがたを見て、逃げ出すとはなんの芸じゃ。汝は、木の股から生れくさったか、わしが子ではなかったかよ。——こ、これッ、ここな呆ぼけ者奴が」

と、幼い時に打擲したように、又八の尻をぴしぴし打って、
「よもやもう、この世に生きておろうとも思わなんだに、のめのめこの大坂に生きていくさると は憎い憎い、ええもう憎い奴よの。なんで故郷へもどって来て、ご先祖様のまつりをせぬか、こ の母にちょっとでも、顔見せぬか。親類縁者どもが、あれよこれよと案じているのも、われには 弁えがつかぬかよっ」
「――お、おふくろ。かんべんしてくれ、かんべんしてくれ」
又八は、嬰児みたいに、母の手の下からさけんだ。
「悪いことは知っている。知っていればこそ、帰れなかったんだ。今日も、余り不意だったので 吃驚して、逃げる気もなく、おらあ駈け出してしまった。……面目ない、面目ない！　おふくろ にも叔父御にも、おらあただ面目ないんで」
と、両手で顔を掩った。
それを見ると、婆も目鼻に皺をあつめて、すすり泣いた。しかし気丈な老婆は、自分が脆くな るのをすぐ自分の心で叱咤しながら、
「ご先祖の恥さらし、面目ないというからには、どうせ碌なことをしていくさったのではあるま いが」
権叔父は、見るに見かねて、
「もうよかろう、婆、そう打擲しては、かえって又八を拗け者にするぞよ」
「また差し出口かよ、おぬしは男のくせに甘うていかぬ。又八には父親がないゆえ、この婆は母 であるとともに、厳しい父親でもなければならぬのじゃ。それゆえわしは折檻をしまする。……

まだまだこんなことで足ろうかいの。又八ッそれへ直りゃい」
自分も大地へ畏まって坐りこみ、子へも、大地を指さしていった。
「はい」
又八は、土にまみれた肩を起して、悄然と坐り直した。

二

この母親は怖かった。世間の母親なみ以上の甘さもあったが、すぐご先祖様を持ち出すので、又八は頭があがらないのであった。
「つつみ隠しをするときかぬぞよ。関ケ原の戦へ出て、おぬし、あれ以来、何していやった。婆の得心がまいるまで、つぶさに話しゃれ」
「……話します」
隠す気は起らない。
又八は、友達の武蔵と戦場から落ちのびたこと――そして伊吹のあたりに潜んだこと――お甲という年上の女にかかって、数年のあいだ同棲して苦い経験をし、今では、悔いていることなど、すっかり話してしまうと、胃の中の腐っている物を吐き尽したように、気が軽くなった。
「ふウむ……」
と、権叔父が呻くと、
「あきれた子よの」
と、隠居も舌を鳴らし、

「そして今では、何していやるか。身装は、どうやら飾ってござるが、仕官して、禄の少々も、取っていやるか」
「はい」
うっかり、いい返事をしたが、又八は、露見をおそれて、
「いや、仕官はいたしませぬが」
「では、何で喰べている」
「剣——剣術などを、教えまして」
「ほう」
婆は、初めて、綻びたように機嫌よく、
「剣術を、おおそうかいの。そういう生活を過ごしながらも、剣術に精出していやったとは、さすがにわしが子。……のう叔父御よ、やはり婆が子じゃの」
この辺で機嫌を直させてしまいたいものだと権叔父は、大きく何度もうなずいて、
「それやあ、ご先祖の血は、どこかにあろうわさ。一時の極道はしようとも、そのたましいだに失わずば」
「して又八」
「はい」
「この上方では、誰について、腕を磨きやった」
「鐘巻自斎先生に」
「ふウむ……あの鐘巻先生にの」

目も鼻も飴のようにしてあまり喜ぶので、又八はもっと喜ばせてみたくなり、懐中の印可の巻を出して巻末の一行――佐々木小次郎殿とあるところだけを隠して、
「御覧じませ、この通り」
と、常夜燈の明りへ、展げて見せた。
「どれ、どれ」
手を出したが、渡さずに、
「安心してござれ、おふくろ」
「なるほど」
隠居は、首を振って、
「見たか、権叔父、大したものじゃわ。小さい頃から、あの武蔵などより、ぐんと賢く、腕も出来ていただけのことはある」
と、涎を垂らさないばかりに満足をあらわしたが、ふと、それを巻きかけた又八の手がすべって、終りの一行が眼にうつると、
「これ待て、ここに佐々木小次郎とあるのはなんじゃ」
「あ……これですか……これは仮名です」
「仮名？　何で仮名などつかいなさる、本位田又八と、立派な名のあるものを」
「でも省みて、自分に恥のある生活をしていたので、先祖の名を汚すまいと」
「オオそうか。その性根たのもしい。――おぬしは何も知るまいがこれから故郷元のことども聞かせて進ぜるほどに、よう聞きなされ」

隠居は、そう前置きして、この一人息子を、いよいよ鼓舞し、激励するために、その後、宮本村に起った事件やら、本位田家の立場から、また、自分と権叔父とが、ために出郷することになり、お通と武蔵とを討つべく、多年ふたりの行方をさがし歩いていることなど――誇張する気もなく誇張に落ちたが――何度も鼻をかみながら、諄々と眼を濡らして語った。

三

じっと首を垂れたまま、又八は老母の烈々と吐くことばに打たれていた。こうしている間は、彼も善良で神妙な息子だった。

けれど、隠居がいおうとする重点は、もっぱら家名の面目とか、侍の意気とかにあったが、この息子の感情を強く打った点は、そこになくて、

（お通がこころ変りした）

と、いう初耳の話だった。

「おふくろ、それは真実か」

彼の顔いろを知ると、隠居は、自分の鞭撻が、彼を奮起させたものと思いこみ、

「嘘と思うなら、叔父御にもただしてみやれ、お通阿女はおぬしを見かぎって、武蔵の後を追って去んだわさ。――いやの、もっと悪う考えれば、武蔵はおぬしが、当分は村へ帰らぬものと知ってじゃ程に、お通をだまして、奪って逃げたともいえる。のう権叔父」

「そうじゃ、七宝寺の千年杉へ、沢庵坊主のため、縛りつけられたのを、あのお通の手をかりて逃げ失せた男女のことゆえ、どうせ碌な仲じゃあるまいての」

こう聞いては又八も、鬼とならずにいられなかった。それでなくても、彼へは――あの武蔵という人間に対しては、どういうものか反感があってならなかったところである。
隠居の激励は、鞭に鞭を加えて――
「わかったかよ又八。この婆や権叔父が、故郷(くに)を出て、こうして諸国をあるいている意気地が。――息子の嫁を奪って逃げた武蔵(たけぞう)、本位田家に後足で砂をかけて失(う)せたお通。――こう二つの首を打たいでは、婆は、ご先祖のお位牌と、故郷(くに)の衆にむかって、会わせる顔がないじゃろが」
「わかりました。……よく」
「おぬしにも、それではのめのめと、故郷の土は踏めまいが」
「帰りません、もう、帰りません」
「討ってたも、怨敵(おんてき)を」
「ええ」
「気のない返辞をするものかな、おぬしには武蔵(たけぞう)を討つ力がないと思うてか」
「そんな事はありません」
権叔父も、そばから、
「案じるな又八、わしもついているのじゃが」
「この婆とても」
「お通と武蔵、二つの首を、晴れて故郷への土産に引っさげて戻ろうぞ。のう又八、そうしておぬしにはよい嫁女をさがし、あっぱれ本位田家の跡目をついで貰(ひ)わにゃならん。そうした上は、武士の面目も立つ、近郷への評判もようなる、まず、吉野郷(ごう)で負け目をとる家統(いえすじ)は他(ほか)にはあるま

いてな」
「さあ、その気になってたも。なるかよ又八」
「はい」
「よい子じゃ、叔父御、賞めておくりゃれ。きっと武蔵とお通を討つと誓うた。……」
と隠居はやっと気がすんだらしく、先刻から怺えていた氷のような大地から身を動かしかけたが、
「ア……痛々々」
「婆、どうしやった」
「冷えてかいの、腰が急に吊ってこう下腹へさしこんで来ましたわい」
「これやいかぬ、また持病を起してか」
又八は、背を向けて、
「おふくろ、すがりなされ」
「何、わしを負うてくれる。……負うてくれるか」
と、子の肩に抱きついて、
「何年ぶりぞいの、叔父御よ、又八がわが身を負うてくれたわいな」
と、欣し泣きに泣くのであった。
母の温い涙が肌にとおって来ると、又八も何か無性に欣しくなって、
「叔父御、旅籠はどこか」
「これから探すのじゃ、どこでもいい、歩いてくりゃれ」

「合点だ——」
と、又八は老母の体を弾ませて歩きながら、
「ほう、軽いなあ、おふくろ。——軽い、軽い、石よりも軽いぞ」

美少年

一

藍や紙が積み荷の大部分であった。ほかに禁制の煙草も船底にかくしているらしい。元より秘密だが、においで知れる。
月に何度か、阿波の国から大坂へ通う便船で、そうした貨物とともに便乗している客には、この年の暮を、大坂へ商用に出るか、戻るかする商人が八、九分で、
「どうです、儲かるでしょう」
「儲かりませんよ、堺はひどく景気がいいというが」
「鉄砲鍛冶など、職人が足らなくて弱っているそうですな」
べつの商人が、又、
「てまえは、その戦道具の、旗差物とか、具足など納めていますが、昔ほど儲かりませんて」
「そうかなあ」

「お侍方がそろばんに明るくなって」
「ハハア」
「むかしは、野武士がかついで来る掠め物を、すぐ染めかえ、塗りかえして、御陣場へ納める。するとまた、次の戦があって、野武士がそいつを集めてくる。また新物にするといったふうに、盥廻しがきいたり、金銀のお支払いなどもおよそ目分量みたいなものでしたがね」
　そういう話ばかりが多い。
　中には、
「もう内地では、うまい儲けはありっこない。呂宋助左衛門とか、茶屋助次郎といった人のように、乗るか反るかで海の外へ出かけなければ」
　と、海洋をながめて、彼方の国の富を説いている者があるし、或る者はまた、
「それでも、何のかのといっても、わしら町人は、侍から見れば遙かに割がよく生きていますよ。いったい侍衆なんて、食い物の味ひとつ分るじゃなし、大名の贅沢といったところが、町人から見ればお甘いもので、いざといえば、鉄と革を鎧って、死にに行かなければならないし、ふだんは面目とか武士道とかにしばられて、好きな真似はできないし、気の毒みたいなものでございますよ」
「すると、景気がわるいの何のといっても、やはり町人にかぎりますかな」
「かぎりますとも気ままでね」
「頭さえ下げていればすみますからな。――その鬱憤はいくらでもまた、金のほうで埋め合せがつくし」

「ぞんぶんこの世を楽しむにかぎりまさあね」
「何のために生れて来たんだ——といってあげたいのがいますからね」
商人でもこの辺は、中以上のところとみえる。舶載の毛氈をひろく敷きこんで、一階級を示しているのだ。
のぞいてみると、なる程、桃山の豪奢は今、太閤が亡き後は、武家になくて、町人の中へ移っているかと思われる。酒器のぜいたくさ、旅具旅装の絢爛なること、持物の凝っていること、ケチな一商人でも、侍の千石取などは及びもない。
「ちと、飽きましたな」
「退屈しのぎに、始めましょうか」
「やりましょう。そこの幕をひとつ懸け廻して」
と、小袖幕のうちにかくれると、彼らは、妾や手代に酒をつがせて、南蛮船が近ごろ日本へ齎した「うんすん骨牌」というものを始める。
そこで賭けている一つかみの黄金があれば、一村の飢餓が救われるであろうほどの物を、まるで、冗戯みたいに、遣り取りしていた。
こういう階級の中に、ほんの一割ほどだが、乗り合わしている山伏とか、牢人者とか、儒者とか、坊主とか、武芸者などという者は、彼らからいわせるといわゆる、
（いったいなんのために生きているんだ）
と借問される部類のほうで、みんな荷梱の蔭に、ぽつねんと味気ない顔して、冬の海をながめているのだった。

二

それらのあじきない顔つきの組の中に、一人の少年が交じっていた。
「これ、じっとしておれ」
荷梱に倚り懸って、冬日の海に向いながら、膝の上に何やら丸っこい毛だらけな物を抱いている。
「ホ。可愛い小猿を」
と、そばの者がさしのぞいて、
「よく馴れてござるの」
「は」
「永くお飼いになっているのであろうな」
「いいえ、ついこのごろ、土佐から阿波へ越えてくる山の中で」
「捕まえられたのか」
「その代り、親猿の群に追いかけられて、ひどい目にあいました」
話を交わしながらも、少年は、顔を上げない。小猿を膝の間に挟んで、蚤を見つけているのだった。
前髪に紫の紐をかけ、派手やかな小袖へ、緋らしゃの胴羽織を纏っているので、少年とは見えるものの、年齢のほどは、少年という称呼に当てはまるかどうか、保証のかぎりでない。
煙管にまで、太閤張というのが出来て、一頃は流行ったように、こういう派手派手しい風俗

も、桃山全盛の遺風であって、二十歳をこえても元服をせず、二十五、六を過ぎても、まだ童子髪を結って金糸をかけ、さながらまだ清童であるかのような見栄を持つ習いが、いまに至ってもかなり遺っているからである。

だからこの少年も、一概に身なりをもって、未成年者と見ることはできない。体つきからしても、堂々たる巨漢であるし、色は小白くて、いわゆる丹唇明眸であるが、眉毛が濃くて、眉端は眼じりから開いて上へ刎ねている。なかなかきつい顔なのだ。

けれどまた——

「これ、なぜうごく」

と、小猿の頭を打って、猿の蚤とりに他念のない様子などは、なかなかあどけなくもある。何もそう年齢の詮索ばかり気にやむこともないが、あれこれ綜合してその中庸をとって推定すれば、まず十九か、二十歳というところでなかろうかと思われる。

さてまた、この美少年の身分はというと、元より旅いでたちで、革足袋にわらじ穿きだし、どことい って抑えどころもないが、歴乎とした藩臣でなく、牢人の境界であることは、こういう船旅において、ほかの山伏だの傀儡師だの、乞食のようなボロ侍だの、垢くさい庶民の中に交じって、気軽にごろごろしている態をみても、およそ想像はつく。

だが、牢人にしては、ちょっと立派なものを一つ身に着けている。それは、緋羽織の背なかへ、革紐で斜めに負っている陣刀づくりの大太刀である。反りがなくて、竿のように長い。

ものが大きいし、拵えが見事なので、その少年のそばへ寄った者は、すぐ少年の肩ごしに柄の聳えているその刀に目がつくのだった。

「――いい刀を持っている」
そこから少し離れたところから、祇園藤次も、さっきから見恍れていた一人であった。
「京洛でもちょっと見ない」
と思う。
刀のすぐれた物をみると、その持ち主から、遠くは、その以前の経歴までが考えられてゆく。祇園藤次は、機があったら、その美少年へ、話しかけてみたいと思っていた。
――冬の昼靄にうすずいて、よく陽のあたっている島の淡路は、艫のかなたに、だんだん遠くなってゆく。
はたはたと、大きな百反帆は、生きもののように、船客たちの頭の上で潮鳴りを切って鳴っていた。

三

藤次は旅に倦んでいた。
なま欠伸が出る――
飽きのきた旅ほど他人の世界を感じるものはない。祇園藤次は、その飽々した旅を、もう十四日もつづけて来たあげくのこの船中であった。
「――飛脚が間にあったかしらて？　……間にあえば、大坂の船着場まで、迎えに来ているにちがいないが」
と、お甲の顔を思い浮かべて、せめてもの無聊をなぐさめてみる。

さしも、室町将軍家の兵法所出仕として、名誉と財と、両方にめぐまれて来た吉岡家も、清十郎の代になって、放縦な生活をやりぬいたため、すっかり家産は傾いてきた。四条の道場まで、抵当に入っているので、この年暮には、町人の手へ取られるかも知れないという内ふところ。

年暮に近づいて、あっちこっちから責め立ててくる負債をあわせると、いつのまにか、途方もない数字にのぼっていて、父拳法の遺産をそっくり渡して、編笠一かいで立ち退いても、なお、足らないくらいな実情に堕ち入っていた。

(どうしたものか)

という清十郎の相談である。この若先生をおだてて、さんざん費わせた責任の一半は藤次にもあるので、

(おまかせなさい、うまく整理をつけてお目にかけましょう)

狡智をしぼって、彼の案出したのが、西洞院の西の空地へ、吉岡流兵法の振武閣というものを建築するという案で——社会の実態に鑑みるに、いよいよ武術は旺んになり、諸侯は武術家を要望している。この際、多くの後進を養成するために、従来の道場をさらに拡大して、流祖の遺業をして、もっと天下にあまねからしめなければならぬ——それはまた、われわれ遺弟の当然なさなければならない義務でもある。

そんな主旨の廻文を、清十郎に書かせ、これを携えて、中国、九州、四国などに散在している吉岡拳法門下の出身者を、歴訪して来たのである。もちろん振武閣建築の寄附金を勧進するために。

先代の拳法が育てた弟子は随分各地の藩に奉公していて、みな相当な地位の侍になっている。

けれど、そういう勧説を持って行っても、藤次が予算していたように、おいそれと寄進帳へ筆をつけてくれるのはすくない。
(いずれ書面をもって)
とか、
(いずれ、上洛の折に)
とかいうのが多く、現に藤次が携えて帰る金は、予定していた額の何分の一にも当らない。
だが、自分の財政ではなし、まあ、どうかなろうと多寡をくって、先刻から、師の清十郎の顔より、久しく会わないお甲の顔のほうを、努めて、想像にのぼせていたが、それにも限度があるので、また、生欠伸に襲われて、退屈なからだを、船のうえに持てあましていた。
うらやましいのは、先刻から小猿の蚤をとっている美少年だった。いい退屈しのぎを持っている。藤次は、そばへ寄って、とうとう話しかけ出した。
「若衆。――大坂表までお渡りか」
小猿の頭を抑えながら、美少年は大きな眼をじろりと彼の顔へあげた。
「はあ、大坂へ行きます」
「ご家族は大坂にお住まいかの」
「いえ、べつに」
「では阿波のご住人か」
「そうでもありません」
膠のない若衆である。そういってまた他念なく、小猿の毛を指で掻き分けているのであった。

四

ちょっと話のつぎ穂がない。
藤次は、黙ったが、また、
「よいお刀だな」
と、こんどは彼の背にある大太刀を賞めた。すると美少年は、
「はあ、家に伝来のもので」
急に藤次のほうへ膝を向け、賞められたのを欣しそうに、
「これは陣太刀に出来ていますから、大坂の良い刀師へあずけ、差し料に拵えを直そうと思っているのです」
「差し料には、ちと長すぎるようだが」
「されば、三尺です」
「長剣だな」
「これくらいなものが差せなければ――」
自信がある――というように美少年は笑靨をうごかす。
「それは差せないことはない――三尺が四尺でも。――けれども実際に用うる場合、これが自由にあつかえたら偉いが」
と、藤次は、美少年の衒気をたしなめるようにいう。
「大太刀を、かんぬきに横たえて、りゅうとして歩くのは、見た眼は伊達でよいが、そういう人

物にかぎって、逃げる時には、刀を肩へかつぐやつだ。——失礼だが、貴公は、何流を学ばれたか」

剣術のことになると、自然、藤次はこの乳臭児を見下げずにいられなかった。

美少年は、ちらと、彼のそういう尊大な顔つきへ、瞳をひらめかせ、

「富田流を」

と、いった。

「富田流なら、小太刀のはずだが」

「小太刀です。——けれども何、富田流を学んだから小太刀をつかわなければならないという法はありません。私は、人真似がきらいです。そこで、師の逆を行って、大太刀を工夫したところ、師に怒られて破門されました」

「若いうちは、えて、そういう叛骨を誇りたがるものだ。そして」

「それから、越前の浄教寺村をとび出し、やはり富田流から出て、中条流を創てた鐘巻自斎という先生を訪ねてゆきますと、それは気の毒だと、入門をゆるされ、四年ほど修行するうち、もうよかろうと師にもいわれるまでになりました」

「田舎師匠というものは、すぐ目録や免許を出すからの」

「ところが、自斎先生は容易にゆるしを出しません。先生が印可をゆるしたのは、私の兄弟子である伊藤弥五郎一刀斎ひとりだという話でした。——で私も、何とかして、印可をうけたいものと、臥薪嘗胆の苦行をしのんでいるうち、故郷許の母が死去したので、功を半ばに帰国しました」

「お国は」
「周防岩国の産です。――で私は、帰国した後も、毎日、練磨を怠らずに、錦帯橋の畔へ出て、燕を斬り、柳を斬り、独りで工夫をやっていました。――母が亡くなります際に、伝来の家の刀ぞ、大事に持てといわれてくれましたこの長光の刀をもって」
「ほ、長光か」
「銘はありませんが、そういい伝えています。国許では、知られている刀で、物干竿という名があるくらいです」
無口だと思いのほか、自分のすきな話題になると、美少年は問わないことまで語りだした。そして口を開き出すとなると、相手の気色などは見ていない。
そういう点や、またさっき自分で話した経歴などから見ても、すがたに似あわない我のつよい性格らしく思われた。

五

ちょっと、言葉をきって、美少年はその眸に、雲のかげを映し、何か感慨に耽っていたが、
「――けれどその鐘巻先生も、昨年、大寿を全うして、ご病死なされてしまった」
呟くようにいい、
「私は、周防にあって、同門の草薙天鬼から、その報らせをうけた時、師恩に感泣しました――師の病床についていた草薙天鬼、それは私よりもずっと先輩だし、又、師の自斎とは叔父甥の血縁でもあるのですが、その者には、印可を与えずに、遠く離れている私を思ってくれて、生前

に、印可目録を書き遺して、一目会って、手ずから私に与えたいと申されたそうであります」

眸がうるんで来て、今にも涙のこぼれそうな眼になる。

祇園藤次は、この多感な美少年の述懐を聞いても、若い彼といっしょになって、感傷を共にする気には元よりなれない。

だが、退屈に苦しんでいるよりは、ましだと考えて、

「ふム、成程」

熱心に聞いている顔つきを装うと、美少年は、鬱懐をもらすように、

「その時、すぐ行けばよかったのです。けれど私は周防、師は上州の山間、何百里の道です。折わるく、私の母も、その前後に歿したので、遂に、師の死に目に会えませんでした」

――船がすこし揺れだした。冬雲に陽がかくれると、海は急に灰色を呈し、時々、舷に飛沫が寒く立つ。

美少年はなお話をやめない。多感な語気をもって語る。――それから先の事を綜合すると、彼の境遇は今、故郷の周防の家屋敷をたたみ、師の甥でもあり同門の友でもある草薙天鬼という者と、どこかで落ち合おうというために、この旅行をつづけているものと見られる。

「師の自斎には、何の身寄りもありません。で、甥の天鬼には、遺産といってもわずかでしょうが、金を与え、遠く離れている私には、中条流の印可目録を遺してゆかれました。天鬼は、私のそれを預かって、今諸国を修行にあるいていますが、来年の彼岸の中日には、上州と周防とのちょうど中ほどの道程にあたる三河の鳳来寺山へ、双方からのぼって、対面しようという約束を書面で交わしてあります。そこで私は天鬼から師のおかたみを受けることになっているので、そ

れまでは近畿のあたりを悠々と、修行がてら見物して歩こうと思っているのです」
ようやくいうだけの事をいい終ったように、美少年は改めて、話し相手の藤次にむかい、
「あなたは、大坂ですか」
「いや京都」
それきり黙って、しばらく、波音に耳をとられていたが、
「すると其許はやはり、兵法をもって身を立てて行かれる気か」
藤次はさっきから少し軽蔑した顔つきであったが、今もうんざりしたようにいう。この頃のように、こう小生意気な兵法青年がうようよ歩いて、すぐ印可の目録のといって誇っていることが、彼には、小賢しく聞えてならない。
そんなに天下に上手や達人が蚊みたいに殖えてたまるものか。第一自分などさえ、吉岡門に二十年近くもいて、やっとこれ位なところであるのに――と身にひきくらべ、
（こんなのが、将来に皆、どういう飯を食ってゆくのか）
と、思うのだった。
膝をかかえて、灰色の海をじっと見ていたと思うと、美少年は又、
「――京都？」
と、つぶやいて、藤次のほうへ眸を向け直した。
「京都には、吉岡拳法の遺子、吉岡清十郎という人がいるそうですが、今でもやっておりますか？」

六

よいほどに聞いてみれば、だんだん口の幅を広くしてくる。気に食わない前髪めがと藤次は小癪に思う。
けれど考え直してみると、こいつはまだ自分が吉岡門の高弟祇園藤次なる者であることを知らないのだ。知ったらさだめし前言に恥じて、びっくりする奴に違いない。
退屈しのぎが昂じて、ひとつ揶揄ってやろうと、藤次はそこで、
「――されば、四条の吉岡道場も、相かわらず盛大にやっておるらしいが、其許は、あの道場を訪れてみたことがあるか」
「京都へのぼったら、ぜひ一度はどの程度か、吉岡清十郎と立合ってみたいと存じていますが、まだ訪ねてみたことはありません」
「ふッ……」
笑いたくなった。藤次は顔を歪めた後から、軽蔑をみなぎらして、
「あそこへ行って、片輪にならずに、門を戻って来る自信が、あるかな？」
「なんの！」
美少年は突っ返すようにいった。――その言葉こそ可笑しけれ――とばかり笑い出すのだった。
「大きな門戸を構えているので、世間が買いかぶっているので、初代の拳法は達人だったでしょうが、当主の清十郎も、その弟の伝七郎とやらも、たいした者じゃないらしい」

「だが、当ってみなければ、分るまいが」
「もっぱら諸国の武芸者のうわさです。うわさですから、皆が皆、ほんとでもありますまいが、まず京流吉岡も、あれでおしまいだろうとは、よく聞くことですね」
大概にしろといいたい。藤次は、ここらで名乗ってやろうかと思ったが、ここでけりを着けたのでは、揶揄ったのでなく、揶揄われたに等しいものになる。船が、大坂へ着くにはまだ大分間もあることだし、
「なるほど、このごろは、諸国にも天狗が多いそうだから、そういう評判もあろうな。ところで、おん身は先ほど、師を離れて、郷里にあるうちは、毎日のように、錦帯橋の畔へ出て、飛燕を斬って大太刀のつかいようを工夫されたと仰っしゃったな」
「いいました」
「じゃあ、この船で、時々、ああして飛び来っては掠めてゆく海鳥を、その大太刀で、斬り落すことも容易であろうな」
「………」
何か悪感情を包んでいる相手のことばを、美少年もようやくさとったらしく、瞬間、まじまじと藤次のそういう浅黒い唇を見つめていたが、やがて、
「出来たって、そんな莫迦な芸を私はやる気になれぬ。――あなたは、それを私にやらせようという肚だろうが」
「でも、京流吉岡を、眼下に見るほどな自信のある腕なら」
「吉岡をくさしたことが、あなたの気に入らなかったとみえる。あなたは、吉岡の門人か、縁者

か」
「何でもないが、京都の人間だから、京都の吉岡を悪くいわれれば、やはりおもしろくはない」
「ははは、うわさですよ、私がいったわけじゃない」
「若衆」
「なんです」
「生兵法という諺を知っているか。将来のため忠言しておくが、世間をそう甘く見すぎると、出世はせんぜ。やれ、中条流の印可目録を取っているの、飛燕を斬って、大太刀の工夫をしたのと、人をみな盲とするような法螺はよせ。よいか、法螺をふくのも相手を見てふくのだぜ」

七

「私を、法螺ふきと、仰っしゃったな」
美少年が、こう念を押すように突っ込むと、
「いったがどうした」
藤次は、反らした胸を、わざと相手へ寄せて、
「おまえの将来のためにいってやったのだ。若い者の衒いも、少しは愛嬌だが、あまり過ぎると見ぐるしい」
「…………」
「最前から何事もふむふむと聞いているので、人を舐めてつい駄ぼらが出たのだろうが、実は此方こそ、吉岡清十郎の高弟、祇園藤次という者だ。以後、京流吉岡の悪評をいいふらすと、ただ

はおかんぞ」
周りの船客がじろじろ見るので、藤次はそれだけの権威と立場とを明らかにして、
「このごろの若い奴は、生意気でいかん」
つぶやきながら、独り、艫のほうへ歩み去った。
――と、黙って美少年もその後について行くのだった。
(何かなくては済まないらしいぞ)
と予感したので、船客たちは、遠方からではあるが、皆、二人のほうへ首を振向けた。
藤次は決して事を好んだわけではない。大坂へ着けば、船着場にはお甲が待っているかもしれないのだ。女と会う前に、年下の者と、喧嘩などをやっては、人目につくし、あとがうるさい。
そしらぬ顔して、彼は、舷の欄へ肱をかけ、艫舵の下にうず巻いている青ぐろい瀬を見ていた。
「もし」
美少年は、その背中を軽くたたいた。相当に拗こい性質である。だが、感情に激しているような語気ではない、極めて静かなのだ。
「もし……藤次先生」
知らないふうも装えないので、
「なんだ」
顔を向けると、
「あなたは、人中において、私を法螺ふきと申されたが、それでは私も面目が立たないから、最

前、やって見ろとおおせられた芸を、やむなくここで演じてみようと存じます。立ち会ってください」
「わしが、何を求めたか」
「お忘れのはずはない。あなたは、私が周防の錦帯橋の畔で、飛燕を斬って大太刀の修練をしたといったら、それを笑って、然らば、この船を頻りと掠め飛んでいる海鳥を斬ってみせろといわれたではないか」
「それはいった」
「海鳥を斬ってお目にかけたら、その一事だけでも、私がまるで嘘ばかりいっている人間でないことがおわかりになろう」
「それは——なる！」
「ですから、斬ります」
「ふむ」
　と半ば、冷笑して、
「やせ我慢して、もの笑いになってもつまらんぜ」
「いや、やります」
「止めはしないが」
「しからば、立ち会いますかな」
「よし、見届けよう」
　藤次が、張りをこめていうと、美少年は、二十畳も敷ける艫のまん中に立って、船板を踏ま

え、背に負っている「物干竿」という大太刀のつかへ手をやりながら、
「藤次先生、藤次先生」
と、いった。
藤次は、その構えを白い眼で見すえながら、何用か、と彼方から答えた。
すると、美少年は、真面目くさって、
「おそれ入るが、海鳥を、私のまえへ呼び降ろしていただきたい。何羽でも、斬って見せます」

八

一休和尚の頓智ばなしをそのまま用いて、美少年は、藤次へ酬いたものとみえる。
藤次はあきらかに愚弄されたのだ。人を小馬鹿にするも程があるといっていい。当然、烈火のように怒った。
「だまれ。あのように空を翔けている海鳥を思いのままに、眼の前へ呼びよせられるものなら、誰でも斬るわ」
すると美少年は、
「海は千万里、剣は三尺、側へ来ないものは、私にも斬れません」
それ見たかといわないばかりに藤次は二、三歩出て、
「逃げ口上をいう奴だ、出来ませんなら出来ませんと、素直に謝れ」
「いや、謝るほどなら、こんな身構えは仕りません。海鳥のかわりに、べつな物を斬ってお目にかける」

「何を？」
「藤次先生、もう五歩こちらへ出て来ませんか」
「なんだ」
「あなたのお首を拝借したい。私が法螺ふきか否かを試せといったそのお首だ。罪もない海鳥を斬るよりは、そのお首のほうが恰好ですから」
「ばッ、ばかいえっ」
思わず藤次はその首をすくめた。——とたんに美少年の肱は弦の刎ねたように、背の大剣を抜いたのであった。ばっと空気の斬れる音がした。三尺の長剣が、針ほどな光にしか見えないくらい迅かったのである。
「——な、なにするかッ」
よろめきながら藤次は襟くびへ手をやった。
首はたしかに着いているし、そのほかなんの異状も感じなかった。
「おわかりか」
美少年は、そういって、荷梱のあいだへ立ち去った。
土気色になった自分の顔いろを、藤次はいかんともすることが出来なかった。だが、その時はまだ自分の五体のうちの最も重要な部分が斬り落されていることなど気づかなかった。
美少年が去った後で、ふと、冬陽のうすくあたっている船板の上を見ると、変な物が落ちている。それは、刷毛のような小さな毛の束だ、アッと、初めて気づいて、自分の髪へ手をやってみると、髷がない。

「や、や？　……」

撫でまわして驚き顔をしている間に、根の元結がほぐれて、鬢の毛はばらりと顔にちらかった。

「やったな！　青二才」

棒のように胸へ突っ張ってくる憤怒であった。美少年が自ら語っていたことのすべてが、嘘でも法螺でもないことが、とたんに分りすぎるほど彼には分った。年に似合わない怖ろしい技だと思う。若い仲間にも、ああいう若いのもいるのかと今さら思う。

だが、頭脳の驚嘆と、肚のそこの憤怒とは、べつ物である。そこからのぞいて見ると、美少年は先刻の席へもどって、何か、失くし物でもしたように、自分の足もとを見廻している。藤次は、絶好な隙をその体に見つけた。——刀の柄糸に唾をくれて固く握ったのである。身をかがめて、美少年のうしろへ迫り、こんどは、彼の髷を斬り払ってやろうとするのだった。

——だが藤次には、その髷先だけを鮮やかに斬る確信はなかった。当然、顔にかかる、頭の鉢を横に割るだろう。勿論、それでさしつかえない。

うむっ！　満身が赤く膨れあがって、彼の唇と鼻腔が出る息を結んだ時であった。

——胴の間の彼方で、小袖幕を囲って、最前から、「うんすん骨牌」という博戯に千金を賭けて、夢中になっていた阿波、堺、大坂あたりの商人たちが、

「札が足らない」

「どこへ飛んだのじゃ？」

「そっちを見ろ」

高い帆柱の上を指さして、頓狂なさけびをあげた。
「やっ、小猿めが！　あんなところへ！」
敷物を払って騒いでいたが、そのうちの一人が、ふと、大空を仰いで、
「いや、こっちにもない」

九

──なる程、猿だ、猿がいる。
三十尺もあろうかと思われる帆ばしらの天っ辺に。
下では、ほかの船客までが、海上の旅に倦み飽いていた折からなので、事こそあれと、みな顔を空へ上げ、
「やあ、何か啣えている」
「骨牌のふだですよ」
「ハハア、あそこで、金持ち連がやっていた骨牌を攫って行ったんですか」
「ごらんなさい、小猿のやつも、帆ばしらの上で骨牌をめくる真似をしている」
ヒラヒラと、そういう顔の中へ一枚の札が落ちて来た。
「畜生」
堺の商人のひとりが、あわててそれを拾いあげたが、
「まだ足らない。もう三、四枚持っているはずだ」
他の連中も口々に──

「誰か、猿の奴から、札を奪り返して来いやい。博戯が出来ぬ」
「どうして、登れるものか、あんな高いところへ」
「船頭なら」
「それや登るだろう」
「金をやって、船頭に取って来てもらおうじゃないか」
そこで船頭は、金をもらって、承諾はしたが、海上では司権者である船頭として、一応、この事件の責任を問わなければならないという顔つきで、
「お客衆」
と、荷物のうえに上がって、船客たちを見まわし、
「――あの小猿は、いったい誰の飼い猿じゃ、飼主はここへ出てもらおう」
といった。
どこからも、おれのだといって名乗り出る者がない。しかし、その辺にいた客はみな知っている。例の美少年のすがたへ期せずして一同の眼が注がれた。
船頭も知っていた筈だ。そこで当然業腹が煮えてきたに違いない。船頭声を一段と張りあげて、
「飼い主はねえのか。飼い主がねえならねえように、おらが処分するが、あとで苦情はあんめえな」
いないのではない、美少年は荷物に倚りかかって、黙然と、何か考え事でもしている様子なのだ。

「……なんて図々しい」
と、ささやく者がある。船頭もぎょろりと美少年の頭を見ていた。博戯を邪げられた金持ち階級は、遽にざわめいて悪口を口走る。――鉄面皮だの、唖かの、つんぼかのと。
だが美少年は、ちょっと膝を横に坐り直したきりだった。どこへ吹く風かという姿である。
「海のうえにも、猿が住むとみえて、飼い主のねえ猿が舞いこんだ。飼い主のねえ畜生なら、どうして始末してもかまうめい。――皆の衆、これほど船頭は断っているのに飼い主が名乗って出ねえだ。後で、耳が遠いの、聞かなかったのと、苦情のねえように、証人になってくらっせえ」
「いいとも、わしらが証人に立ってやる」
と例の旦那連中が、腹を立てて、呶鳴った。
船頭は、船底へゆく段梯子を下りて行った。上がって来た時には、火のついた火縄と、種子島銃を持っていた。
（――怒ったな船頭）
同時に、あの飼い主の若衆がどう出るだろうかと、人々はまた、美少年の姿を振りかえってみた。

十

のん気なのは、上の小猿だ。
潮風の空で、骨牌を見ている。それがいかにも意思があって人間をからかっているように見えるのである。

だが――突然、白い歯を剝いて、キッ、キッ、キッと啼き出すと、帆車の横木を走ったり、帆ばしらの突端へ飛びついたり、急に狼狽しはじめた。
「………」
下では、船頭が、火縄を鼻の先にいぶして種子島の銃先を空へ向け、じっと、小猿を狙いすましていた。
「ざまを見ろ、あわてやがって――」
と、だいぶ酒の入っているらしい旦那連のうちの一人がいう。
「しっ……」
と、堺の商人が袂をひいた。それまで唖のように他所を向いていた美少年がぐっと体を起し、
「船頭」
と、こちらへ声を投げたからである。
こんどは、船頭のほうでそら耳を装っていた。火縄が、チラと関金の煙硝へ口火を点じかけた。――と、間髪を容れなかったのである。
「あっ」
ドカアンと弾音はたかく反ッぽへ走った。銃は美少年の手に引っ奪くられているのだった。船客たちは、耳を抑えて俯つ伏した。――その頭のうえを越して、ぶうんと、鉄砲は船の外なる渦潮の中へ投げ捨てられていた。
「な！　なにしやがる！」
これは船頭の当然な怒号だった。おどり上がって美少年の胸ぐらにぶら下がったのである。

頑丈な船乗の体も、美少年のまえに正当に立つと、ぶら下がったという言葉がおかしくないほど、背も骨ぐみも、段ちがいに美少年のほうが逞しくて立派だったのである。
「おまえこそ、何するのだ、飛び道具で、無心の小猿を撃ち落そうとしたろう」
「そうだ」
「不届きではないか」
「なぜッ。——断ってあるぞ、おらの方では」
「どう断った？」
「おめえは、眼がねえのか、耳がねえのか」
「だまれ、こう見えても、わしは客だ、わしは武士だ。船頭風情の身をもって、客よりも高い場所に突っ立ち、頭の上からあのように喚いたとて、侍が、答えられるか」
「いい抜けを吐ざくな。そのためにおらは何度も断ってある。その断りかたが気にくわねえにせよ、なぜ、おらが立つ前に、あちらの客衆が迷惑したのを、黙りこくって、知らぬふりしていさらしたのじゃ」
「あちらの客衆とは——おおあの幕の中で先刻から博戯をしておった町人どもか」
「大口をたたくな、あの客衆は、並の客衆よりは、三倍も高い船賃を出してござらっしゃる」
「いよいよ不埒な町人どもだ、衆人の中で、大びらに金を賭け、酒の座を気儘に占め、わが物顔して、この船中に振舞っている様子、面白くない人間どもかなと眺めていたのじゃ。小猿が骨牌のふだを取って逃げたからとて、この身がいいつけたわけではなし、あの連中のする悪戯を、猿が真似したまでのこと、わしから迷惑を詫び出るすじはない」

ことばの半ばから、美少年は、血の気の多いその顔を、彼方の一つどころにかたまっている堺や大坂の旦那連のほうへ向けて、極めて皮肉な笑い方をしていったのであった。

わすれ貝

一

潮騒の夕闇に、木津川湊の灯は赤く戦いでいる。

どことなく魚臭いものが迫る。陸が近づいたのだ。船から呼ばわる声と、陸でわいわいという声が、徐々に、距離をちぢめていた。

どぼーんと、真っ白なしぶきが立つ。錨が抛りこまれたのである。繋綱が投げられる——渡り板が架けられる。

「かしわ屋でございますが」

「住吉の社家の息子さまは、この船にござらっしゃらぬか」

「飛脚屋さんはいるかね」

「旦那様あ」

渡海場の埠頭にかたまっていた迎えの提燈は、灯の波を作って船の横へ迫ってゆく。

その中を、例の美少年が、揉まれて降りて行った。肩に小猿を乗せている姿を見て、旅籠の客

引きが二、三人、

「もしもし、猿のお泊り賃は、無料にいたして置きますが、私どもへお越しくださいませぬか」

「てまえどもは住吉の門前で、ご参詣にもよし、座敷の見晴らしも至極よいお部屋がございますが」

それらの者には一顧もせず、そうかといって迎えに来ている知人もないらしく、美少年は小猿をかついで、真っ先にこの湊から姿を消してしまった。

それを見送って、

「何んていう生意気なやつだろう。すこしばかり兵法が出来ると思って」

「まったく、あの若造のために、船の中は半日、みんな面白くなく暮してしまった」

「こっちが町人でなければ、あのままただでこの船を降ろすのじゃないが」

「まあまあ、侍には、たんと威張らせて置いてやるがいいさ。肩で風を切っていれば、それで気が済むんだから他愛はない。わしら町人は、花は人にくれても、実を喰おうという流儀だから、今日ぐらいな忌々しさは、仕方があるまいて」

こんなことをいいながら、荷物沢山な旅すがたを揃えて、ぞろぞろ降りて行ったのは例の堺や大坂の商人連であり、そこへは無数の出迎えが、提燈や乗物をあつめ、一人一人に、幾人かの女の顔も取り巻いていた。

祇園藤次は、誰よりも後から、こっそりと陸へ上がっていた。

形容のできない顔つきである。不愉快といって、きょうほど不愉快な日はなかったに違いない。髷をちょん切られた頭には、頭巾を被せているが、眉にも唇にも、暗澹とただよっている。

と。――その影を見つけ、
「もし……ここですよ、藤次さま」
その女も、頭巾を被っていた。渡海場に立って吹き曝されていた顔が、寒さに硬ばって、年をかくしている皺が、白粉の上に出ていた。
「お、お甲か。……来ていたのか」
「来ていたのかって、ここへ迎えに来ているようにと、私へ手紙をよこしたくせに」
「だが、間にあうかどうか、と実は思っていたものだから」
「どうしたんですえ、ぼんやりして――」
「イヤ、すこし、船に暈ったとみえる……。とにかく、住吉へでも行って、よい宿を見つけよう」
「え、あちらに、駕も連れて来ましたから」
「そいつは有難う、じゃあ宿も先に取っておいてくれたか」
「みな様も、待ちかねているでしょう」
「え？」
意外な顔して、藤次は、
「オイお甲、ちょっと待ってくれ。おまえとここで落ちあったのは、二人ぎりでどこか静かな家で二、三日悠っくりしようという考えじゃないか。……それを、皆様とは一体、誰と誰のことをいうのだ」

二

「乗らない。わしは乗らない」
祇園藤次は、迎えの駕を拒んでぷんぷん怒りながら、お甲の先へ歩いていた。
お甲が何かいうと、
「ばかっ」
と、ものをいわせない。
彼をして、こう立腹させた原因は、お甲が告げた新しい事情にも因づくが、すでに船の中からもやもやしていた鬱憤が、併せて今、爆発したことは否めない。
「おれは、一人で泊るっ。駕なんか追ッ返せ。なんだ。人の気も知らないで、ばかっ、ばかっ！」
と、袂を払う。
河の前の雑魚市場は、みな戸が閉まって、魚の鱗が、貝をちらしたように、暗い長屋の戸に光っていた。
そこまで来ると、人影も少なくなったので、お甲は、藤次に抱きついた。
「およしなさい、見ッともない」
「離せっ」
「一人で泊ったら、あっちが変なものになりますよ」
「どうにでもなれっ」
「そんなこといわないで」
白粉と髪の香の、冷たい頬が、藤次の頬へ貼りついた。藤次はやや旅の孤独から甦った。

「……ネ、頼みますから」
「がっかりした」
「そうでしょう、だけど、二人にはまたいい機があるでしょう」
「おれは、せめて大坂で二、三日は二人ぎりと、楽しみにして着いたのだ」
「分ってますよ」
「わかっているなら、なぜ他の者を引ッ張って来たのだ。俺が思っているほど、おまえは俺を思っていないからだろう」
藤次が責めると、
「また、あんな……」
と、お甲はうらめしげな眼をこらして、泣きたいような顔をして見せる。
彼女のいい訳は、こうだった。
藤次から飛脚を受け取ると、彼女は勿論、自分だけで大坂へ来るつもりだった。ところが折わるく、吉岡清十郎がその日もまた、六、七名の門人を連れて「よもぎの寮」へ飲みに来て、いつのまにか、朱実の口から、そのことを聞いてしまい、
(藤次が大坂へ着くなら、わしらも迎えに行ってやろうじゃないか)
といい出した。それに調子をあわせる取り巻き連も多く、
(朱実も行け)
と、いう騒ぎになってしまい、いやともいえずお甲は一行十人ほどの中に交じって住吉の旅館に落着き、一同の遊んでいる間に、自分だけ一人で駕を持ってここへ迎えに来たのだという。

──聞いてみれば、事情はやむを得ないものだったが、藤次は腐りきってしまった。今日という日に迷信がわき起るほど、何か、後にも先にも、不愉快ばかりが考えられた。
第一、陸を踏むとすぐ、清十郎だの同輩だのに、旅先の首尾を聞かれることが辛い。
いやもっと嫌なことは、この頭巾を脱ぐことである。
(何といおう)
彼は、髷のない頭を苦に病んだ、彼にも侍というものの面目はある。人に知られない恥なら掻いてもよいが、人にわかる恥を重大に思う。
「……じゃあ仕方がない、住吉へ行くから駕を連れて来い」
「乗ってくれますか」
お甲はまた、渡海場のほうへ、駈け戻った。

三

この夕方、船で着く藤次を迎えに行くといって出たお甲は、まだ帰って来ない。その間に、同勢は風呂にはいり、旅舎のどてらに着膨れて、
「やがて、藤次もお甲も見えるだろう、その間、こうしていてもつまらんじゃないか」
飲んで待っていようという事になったのは、この同勢として、当然な納まりであった。
藤次の顔が見えるまでのつなぎとして飲んでいたうちはいいが、いつの間にか膝がくずれ、杯がみだれ出すと、もうそんな者はどうでもよくなってしまい、
「この住吉には、唄い女はいないのか」

「きれいなのを三、四人呼ぼうじゃないか。どうだ諸卿」
と、病気が始まる。
（よせ、つまらない）などという顔は、この中には一つもいない。ただ師の吉岡清十郎の顔いろを多少憚るのであったが、
「若先生には、朱実が側についているから、別間のほうへ、お移り願おうじゃないか」
横着な奴らかなと清十郎はにが笑いする。けれど、それは自分に取っても好ましい。炬燵のある部屋に入って、朱実とふたりで差し向うほうが、この同勢と飲んでいるより、どれほどいい人生かわからない。
「さあ、これからだ」
とは門人どもが、門人だけになってからの発声だった。やがて程なく十三間川の名物という怪しげな唄い女が笛、三味線などのひねこびた楽器を持って庭にあらわれ、
「いったい、あんたはん達は、喧嘩するのかいな、酒あがるのかいな」
と、訊ねる。
すでによほど大トラになっている一人が、
「ばかっ、金を費って喧嘩をする奴があるか。おまえたちを呼ぶからには、大いに飲んで遊ぶのだ」
「じゃあ、まちっと、静かにあがりやはったらどうかいな」
手際よく扱われて、
「然らば、歌おう」

抛り出していた毛脛をひっ込めたり、横にしていた体を起して、絃歌ようやく盛んならんとする頃おい、小女が来て、
「あの、お客様が、船からお着きなさいまして、ただ今、お連れ様といっしょに、ここへきやはりまする」
と、告げて行った。
「なんだ、何が来たと」
「藤次といった」
「冬至冬至、魚の目か」
お甲と祇園藤次は、あきれ顔して部屋の口に立っていた。誰も彼を待ったらしい者は一名もないのだった。藤次は、一体何のために、この年末この同勢が、住吉へなど来ているのかと疑った。お甲にいわせれば自分を迎えに来たのだというが、どこに自分を迎えに来たらしい人間が一人でもいるか、むっとして、
「おい、下婢」
「はい」
「若先生は、どこにいらっしゃるか、若先生のいる部屋へ行こう」
廊下をもどりかけると、
「よう、先輩、ただ今お帰りか。——一同が待っておるのに、お甲などと、途中でよろしくやっているなんて、この先輩、怪しからんぞ」
大トラが立ち上がって来て首の根にかじりついた。たまらない臭気を放つ。逃げようとしたの

で、トラは強引に座敷へ引きずり込んだ、そして、膳を踏みつけたから形のごとく杯盤狼藉を作って、共倒れに仆れた。

「……あっ、頭巾を」

藤次は、あわてて自分のそれへ手をやったが遅かった。辷った拍子に、トラは彼の頭巾をつかんで後ろへ腰をついていた。

四

「あれ？」

と、奇異な感じに打たれたように、一座の眼は、藤次の髷のない頭にあつまって、

「頭をどうかなされたので？」

「ホホウ、奇妙なお髪」

「どうしたわけでござる」

無遠慮な凝視を浴び、藤次は狼狽に顔をどす赤くして、頭巾を被り直しながら、

「いや、ちとな、その腫物ができたので」

と、誤魔化したが、

「わはははは」

と、皆笑いくずれ、

「旅土産は、腫物でござったか」

「できものに閉じ蓋」

「頭かくして尻かくさず」
「論より証拠」
「犬も歩けば――」
などと駄洒落をいって、誰も藤次のいいわけを真に受けないのである。
その晩は、酒の興で済んだが、次の日になるとこの同勢が、ゆうべとは打って変って、旅舎のすぐ裏の浜辺に出て、天下の大事でも議すように、
「怪しからん沙汰だ」
と、肩を昂げ、唾をとばし、肱を突っ張って、小松の生えている砂地に円く坐っていた。
「――だが慥かか、その話は」
「この耳で、おれが聞いたのだ、おれが嘘をいうと思うのか」
「まあ、そう怒るな、怒ってみたところで仕方がない」
「仕方がないで黙過することはできん。いやしくも天下の兵法所をもって任じる吉岡道場の名折れだ、断じて、これを捨ておくことはできないぞ」
「しからば、どうするのだ」
「これからでも遅くあるまい。その小猿を連れて歩いている前髪の武者修行を捜し出す！　どんなことをしても捜し出す！　そして、彼奴の髷をちょん切って、祇園藤次ずれの恥辱じゃない、吉岡道場の存在を厳かにする。――異議があるか」
ゆうベトラになった酔っぱらいが、洒落ていえば、今日は龍となって嘯くかのように、趣をかえて、激昂しているのだ。

その動機をたずねると、こうなのである。――今朝がた、彼らが特に朝風呂を命じて、宿酔の脂をながしていると、そこへ入浴って来た相客の者で、堺の町人というものが、きのう阿波から大坂へくる便船のうちでは、実におもしろいことがあったといって、例の小猿を携えている美少年のうわさを語り、祇園藤次が髷を切り落された由来に及んでは、手真似、顔つきまでして、
（なんでもその髷を切られたほうの侍は、京都の吉岡道場の高弟だっていっていたが、あんなのが高弟じゃ吉岡道場もざまはない）
ことおかしげに、湯に入っているうち喋舌って行った。
彼らの憤激はそれから始まったものである。怪しからぬ先輩と、祇園藤次をつかまえて詰問に及ぼうとすると、藤次は今朝早く、吉岡清十郎と何か話していたが、朝飯をたべるとすぐ、お甲とふたりで、先へ京都へ発ってしまったという。
いよいよもって、うわさは事実にちがいない。そういう腰抜けの先輩を追いかけるのは愚かである、追うならばどこの何者かわからないが、自分たちの手で、小猿を携えた前髪を捕まえ、存分に、吉岡道場の汚名をそそいでやろうじゃないか。
「――異議があるか」
「勿論、ない」
「しからば――」
と、手筈をしめし合せ、そこの同勢は、袴の砂を払って立ち上がった。

五

住吉の浦は、眼のおよぶ限り、白薔薇をつないだような波である。冬とも思えない磯の香が陽に煙っている。
朱実は、白い脛を見せて、波に戯れながら何か拾って見ては捨てていた。
何事か起ったように、吉岡の門人たちが思い思いな方角へ向い、刀のこじりを刎ね上げて分れて行くのを眺めて、
「オヤ、何だろう」
朱実はまるい眼をしながら、波打ち際に立って見送っていた。
いちばん最後になった門人の一人は、彼女のすぐ側を駈けて来たので、
「何処へ行くのです」
声をかけると、
「オ、朱実か」
足を止めて――
「おまえも一緒になって捜さんか。ほかの者もみな手分けして、捜しに行ったんだ」
「何を捜しに行ったんです」
「小猿を携えている前髪の若い侍さ」
「その人がどうかしたのですか」
「抛っておいては、清十郎先生のお名まえにもかかわるのだ」
祇園藤次の飛んでもない置土産の一件を話して聞かすと、朱実は興もない口吻で、
「皆さんは、始終喧嘩ばかり捜しているんですね」

と、たしなめ顔にいう。
「何も喧嘩を好むわけじゃないが、そんな青二才を、黙って捨てておいては天下の兵法所たる京流吉岡の名折れになるじゃないか」
「なったっていいじゃありませんか」
「ばかいえ」
「男って、ずいぶんつまらないことばかり捜して、日を暮しているんですね」
「じゃあ、おまえは、さっきからそんなところで何を捜しているんだ」
「わたし――」
朱実は、足もとのきれいな砂へ、眼を落して、
「わたしは、貝殻を見つけているの」
「貝殻？　……それみろ、女の日の暮し方のほうが、なおくだらないじゃないか。貝殻など何も捜さなくっても、天の星ほど、こんなに落ちている」
「わたしの捜しているのは、そんなくだらない貝殻じゃありません。わすれ貝です」
「わすれ貝、そんな貝があるものか」
「ほかの浜にはないが、この住吉の浦にだけはあるんですって」
「ないよ」
「あるんですよ」……いい争って、朱実は、
「嘘だと思うならば証拠を見せてあげますからこっちへ来てごらんなさい」
と、ほど遠からぬ所の松並木の下へ、無理やりにその門人を引っぱって来て一つの碑を指し

た。

いとまあらば
ひろひに行かむ住吉の
きしに寄るてふ
恋わすれ貝

新勅撰集のうちにある古歌の一首がそれには刻んである。朱実は誇って、
「どうです、これでもないといえますか」
「伝説だよ、取るにも足らん歌よみの嘘だ」
「住吉にはまだ、わすれ水、わすれ草などという物もあるんです」
「じゃ、あるとしておくさ。――だが、それが一体何のお禁厭になるのかい」
「わすれ貝を帯かたもとの中へ秘しておくと、物事が何でも忘れっぽくなるんですとさ」
「その上、もっと忘れっぽくなりたいのかい」
「ええ、何もかも忘れてしまいたい、忘れられないために、わたしは今、夜も寝られないし、昼間もくるしいんです。……だから捜しているの。あんたも一緒になって捜してくださいよ」
「それどころじゃない」
思い出したように、その門人は足の向きを変えて、どこかへ駈けていってしまった。

六

――忘れたい。

苦しくなると、そう思うほどだったが、また、
「忘れたくない」
朱実は、胸を抱いて、矛盾の境に立った。
もしほんとにわすれ貝という物があるならば、それはあの清十郎の袂へこそ、そっと入れてやりたい。そしてこの自分という者を彼から忘れてもらいたいと、ため息ついて思う。
「執こい人……」
思うだけでも、朱実は心がふさいだ。自分の青春をのろうために、あの清十郎は生活しているような気もちにさえ襲われる。
清十郎のねばり濃い求愛に、心が暗くなる時は、必ずその心のすみで、彼女は武蔵のことを考えた。――武蔵が心にあることは、救いであったが、また苦しくもなって来た。なぜならば、遮二無二に今の境遇を切り解いて現在の身から夢の中へ、駈け出してしまいたくなるからだった。
「……だけど？」
彼女は、しかし幾たびもためらった。自分はそこまでつき詰めているが、武蔵の気もちはわからなかった。
「……アアいっそのこと忘れてしまいたい」
青い海が、ふと誘惑でさえあった。朱実は、海を見つめていると、自分が怖くなった。何のためらいもなく、真っ直にそこへ向って駈けて行かれる気がするのである。
そのくせ自分がこんなつき詰めた考えを抱いているなどということは、およそ彼女の養母のおも知らない。清十郎も思わない。誰でも朱実と一つに暮した者は皆、この娘は至って快活で、

お転婆で、そしてまだ、男性の恋愛が受け取れないほど開花の晩い質だと思いこんでいるらしいのである。
朱実はそんな男たちやまた養母を、心のうちであかの他人に思っていた。どんな冗戯でもいえるのである。そしていつも鈴のついた袂を振って、駄々っ子みたいに振舞っているのだったが、独りになると、春の草いきれのように熱いため息をついていた。
「――お嬢さま、お嬢さま。さっきから先生がお呼びでございますよ。どこへ行ったのかと、えらい御心配になって」
旅舎の男だった。彼女のすがたを碑のそばに見つけて、こういいながら走って来た。
朱実がもどって行って見ると、清十郎はただひとりで、松かぜの音を静かに閉てこめた冬座敷で、緋の蒲団をかけた炬燵に手を入れてぽつねんとしていた。
彼女のすがたを見ると、
「どこへ行っていたのだ、この寒いのに」
「オオ嫌だ、ちっとも寒くなんかありやしない。浜はいっぱいに陽があたっていますもの」
「何していた」
「貝をひろっていたの」
「子どもみたいだな」
「子どもですもの」
「正月が来たら幾歳になると思う」
「幾歳になっても子どもでいたい……いいでしょう」

「よかあない。すこしは、おふくろの案じているのも考えてやれよ」
「おっ母さんなんか、何も私のことなんか考えているものですか。自分がまだ若い気ですもの」
「ま、炬燵へお入り」
「炬燵なんか、逆上るから大っ嫌い。……私はまだ年寄りじゃありませんからね」
「朱実」……手くびをつかんで、清十郎は膝へ引き寄せた。
「きょうは誰もいないらしい。おまえの養母も、粋をきかして先へ京都へ帰ったし……」

七

ふと清十郎の燃えている眼を見て、朱実はからだが硬ばってしまった。
「……………」
無意識に身を退きかけたが、彼の手は、彼女の手くびを離さない。痛いほど握りしめ、
「なぜ逃げる?」
とがめるように額に青すじを立てる。
「逃げやしません」
「きょうは皆、留守なのだ、こういう折はまたとない。そうだろう朱実」
「なにがです」
「そう棘々しくいうな。もうおまえと馴染んでから小一年、おれの気持もわかったはず、お甲はとうに承知なのだ。おまえがおれに従わないのは、おれに腕がないからだとあの養母はいっている。……だから今日は」

「いけません！」……突然、朱実は俯ッ伏して、
「――離してください、この手をこの手を」
「どうしても」
「嫌、嫌、嫌ですっ」
手くびは捻じ切れそうに赤くなってくる。それでも清十郎は離さないのである。こういう場合に京八流の兵法が応用されては、いかに彼女が争っても無駄であろう。それにまた、きょうの清十郎はいつもとやや違っていた。いつも自暴に酒を仰飲って執こくからむのだが、きょうは酒気はないし、青白い顔をしているのだった。
「――朱実、おれをこうまで意地にさせて、おまえはまだ、おれに恥をかかすのか」
「知らないっ」
朱実は遂に、
「あたし、大きな声を出しますよ。離さないと、みんなを呼ぶからいい」
「呼んでみい！　……。この棟は母屋から離れているし、誰も来るなと断ってあるのだ」
「わたし帰ります」
「帰さん！」
「あなたの体じゃありません」
「ば、ばかっ。……おまえの養母に聞け、おまえの体には、おれの手から身代金ほどの金が、お甲へやってあるのだ」
「おっかさんが私を売り物にしても、私は売った覚えはない。死んだって、嫌な男なぞに」

「なにっ」

緋の炬燵ぶとんが、朱実の顔を押し被せた。朱実は心臓のつぶれるような声をあげた。

……呼べど、呼べど、誰も来なかった。

ひんやりと薄陽のあたっている障子には、何事もなげに、松のかげが遠い潮鳴りのように揺れているに過ぎない。外は、あくまで静かな冬の日であった。チチ、チチ、とどこかで、人間の無残な振舞いとはおよそ遠い小鳥の声がしていた。

……ほど経って。

そこの障子のうちで、わっと号泣する朱実の声がもれた。

しいんとして、ややしばらくのあいだ、人の声も気はいもしないでいると思うと、清十郎が青じろい顔を持って、ついと、障子の外へすがたを現わした。

爪で引っ搔かれて血になった左の手の甲を抑えながら――

すると同時に、ぐわらっと突き破るように障子を開けて、朱実が外へ走って行った。

「あっ！　……」

清十郎は身伸びをして、手拭で巻いた手を抑えながら、見送ってしまった。――捕まえる間もなかったのである。まるで、発狂したような迅さと取乱した彼女の姿であった。

「…………」

ちょっと、不安そうな眼をしたが、清十郎は、追って行かなかった。――どこへゆくかと見ていた朱実の影がやはりこの旅舎のうちの一間へ、庭のほうから入ってかくれ込んだ様子なので、ほっとするとともに、或る満足感を皮膚の下へたたえて、薄い笑いをその顔に歪めていた。

無　常

一

「これよ、権叔父」
「おい、なんじゃあ」
「おぬし、くたびれぬかよ」
「いささか気懶うなっておる」
「そうじゃろが、この婆もちと、きょうは歩行い飽いた。したが、さすがに住吉の社、見事な結構ではある。……ホホ、これが若宮八幡の秘木とかいう橘の樹かいの」
「そうとみえる」
「神功皇后さまが、三韓へ御渡海なされた折に、八十艘の貢物のうちの第一のみつぎ物がこれじゃといういい伝えじゃが」
「婆よ、あの神馬小屋にいる馬は、よい馬ぞよ。加茂の競べ馬に出したら、あれこそ第一でがなあろうに」
「ムム、月毛じゃの」
「何やら立て札があるわ」

「この飼料のおん豆を煎じて飲ますれば、夜泣き、歯ぎしりが止むとある。権叔父、おぬし飲むがええ」
「ばかをいわしゃれ」
笑いながら見廻して、
「おや、又八は」
「ほんに、又八はどこへ行ったぞいな」
「ヤア、ヤア、あれなる神楽の殿の下に足をやすめているわ」
「又よう。又ようっ——」
婆は手をあげて、
「そっちゃへ行くと、元の大鳥居の方へ出るのであろうが。——高燈籠のほうへ行くのじゃがな」
と呼ぶ。
又八は、のそりのそり歩いて来た。この婆とこの爺を連れにして、毎日こう歩いてばかりいるのは、彼としてかなりの我慢らしく見える。それが五日や十日の見物というならまだしも、宮本武蔵という敵と巡り会って討ち果すまでの長い旅かと思うと、なんとしても、憂鬱にならざるを得ない。
三人つながって歩いていても無益であるから、各〻わかれて、自分は自分で武蔵の所在をさがすから——と提議してみたが、
（もうやがてすぐ正月、久しゅう母子一緒に屠蘇を酌まぬし、いつ何時、これがこの世の名残りとなろうも知れぬお互いの身、せめて、ことしの正月だけは、ともに過ごそうではないか）

母がいうので、又八は無下にもできなかった。元日か二日が過ぎたらすぐ別れようと思う。だが、婆も爺も、先の短いせいか、仏性があるというのか、神社仏閣というといちいちお賽銭を奉ったり、長々と祈願をこめたりばかりしていて、今日も、この住吉だけで、ほとんど一日暮れてしまいそうだ。

「はよう来ぬか」

鈍々たる足つきで、顔をふくらせて来る又八をながめて、お杉隠居は、若い者のように焦れた。

「勝手なことをいってら」

又八は、口返答して、少しも足を早めないのだ。

「人を待たせる時は、いくらでも待たせておいて」

「何をいうぞ、この息子は。神さまの霊域へ来たら、神さまをおがむのは人間のあたりまえなことじゃ。おぬし、神にも仏にも手を合せたのを見たことがないが、そういう量見では、行く末が思いやらるる」

又八は、横を向いて、

「うるせえな」

それを聞き咎めてまた婆が、

「何がうるさいのじゃ」

初めの二、三日こそ、母子の愛情は蜜より濃やかであったが、馴れるにつれ又八が、事ごとにいたてを突いたり老母を小馬鹿にしたりするので、旅籠に帰るとお杉隠居は、この息子を前に坐ら

せ、毎夜のようにお談義ばかりであった。
それが今、ここで始まりそうな気色なので権叔父は、こんなところで開き直られては閉口と、
「まアまア、まアまア」
と、母子をなだめて歩み出した。

二

困った母子だと権叔父は思う。
何とか、隠居のきげんを直し、又八のふくれ面もなだめたいものだと、双方に気をつかって歩いている。
「ホホよいにおいがすると思ったら、あれなる磯茶屋で、焼き蛤をひさいでおる。婆よ一酌やろうではないか」
高燈籠の近くにある海辺の葭簀茶屋であった。気のすすまない顔つきの二人を誘って、
「酒あるか」
権叔父は先へ入って行く。
そして、
「さ、又八もきげん直せ。婆もちとやかまし過ぎるぞよ」
杯を出すと、
「飲みとうない」
お杉隠居は、横を向く。

引っ込みを失って、権叔父はその杯を、
「じゃあ又八」
と、彼へ酌した。
むッつりむッつり又八は忽ち二、三本ほど飲みほしてしまう。それが老母の気に喰わないことは勿論である。
「おい、もう一本」
権叔父をさし措いて、又八が四本目を求めると、
「いい加減にしやれ！」
と、婆は叱った。
「遊山や酒のむためのこの旅かよ。権叔父も、ほどにしたがよい。幾歳になっても、又八と同じように、年がいもない人じゃ」
きめつけられた権叔父は、独りで飲んだように真っ赤になった顔の遣り場を失って、てれ隠しに撫で廻し、
「そうじゃ、ほんに違いない」
のそのそ先に軒先へ出てしまう。
その後で始まったらしい。又八をつかまえてお杉隠居の諄々たる訓戒である。この烈しくて脆い女親の憂いと愛は、わが子にその本能を揺り起すと、とても宿屋へ帰るまで待っていられなかった。他人がいようといまいと気にもかけない。――又八はそれに対して憤っとした反抗を顔に示して眺め返している。

いうだけいわせて、
「おふくろ」
こんどは又八からいい出した。
「じゃあ、この俺という人間を、おふくろは結局、意気地なしの腰ぬけの、親不孝者と折紙つけているのだな」
「そうじゃろが、今日まで、汝れのして来た行状のどこに意気地のあるところがあるかよ」
「俺だって、そう見くびった者じゃない。おふくろなどに分るものか」
「わからいでか、子を見ること親に如かずじゃ。汝れのような子を持ったが、本位田家の不作というもの」
「だまって見ていろ、まだおれは若いのだ。婆あめ、悪たれいうて、草葉の蔭から後悔するな」
「オオ、その後悔ならしてみたい。だが恐らくは、百年待っても覚つかないことじゃろう。思えば、嘆かわしい」
「嘆かわしい子なら持っていても仕方があるまい。おれから去ってやる」
憤然と、又八は立った。そして、ぷいと大股に彼方へ歩き出して行くのだった。
婆は、あわてて、
「こ、これっ」
と、ふるえ声で呼び止めたが又八は振り向かなかった。――止めてくれてもよさそうな権叔父はまた権叔父で、何を暢気な顔して見ているのか、海のほうに向って、じっと、大きな眼をすえたきり動かない。

そこで、婆は、いちど上げた腰を床几にもどして、
「権叔父っ、止めるでない。止めるでないぞよっ」

三

その声に、
「婆」
権叔父は答えて振り向いたが、いうことは、隠居の期待とちがっていた。
「あの女子、なんとも、いぶかしいわ、ちょっと、待ってくれい」
いうが早いか、権叔父は、蛤茶屋の軒先へ笠を抛って、まるで弦から放たれたように、海へ向って駈け出して行った。
隠居は、おどろいて、
「阿呆っ、どこへおじゃるッ、それどころじゃないわ！　又八がっ——」
と、彼につづいて十間ほど駈けて行ったが、磯の藻草に足をからまれて、勢いよく前へ転んだ。
「ば、ばかっ」
顔も肩も、砂だらけになって、婆は這い起きた。
そして腹立たしげに、権叔父の姿を捜していた眼が、突然、鏡のように大きくなったと思うと、
「馬鹿っ、馬鹿っ」

と連呼して、
「気が狂うたかっ、どこへ行くのじゃっ、権叔父っ」
と彼女までが、発狂したのではあるまいかと疑われるような血相で、権叔父の駈けて行った海へ向って、彼女も駈け出して行ったのである。
――見ると。
権叔父はもう海へ入っていた。このあたりは至って遠浅なので、まだ水は脛のあたりまでしか浸っていないが、夢中になって沖へ沖へと駈けてゆくので、その飛沫は、駈けてゆく彼のすがたを包み、真っ白に煙っている。
ところが――その権叔父の前にも、もう一人の若い女が、凄まじい勢いで、海へ駈けこんで行くではないか。
初めに、権叔父がその女を発見した時は、女は松原の蔭にたたずんで、じっと海の碧さを見つめていたが、アッ――と思った時は、黒髪をちらしているその姿は、もう飛沫を蹴って、真一文字に海へ駈けていたのであった。
だがこの浦は前にもいったとおり五町六町の沖まで潮が浅いので、先に走ってゆく女の姿も、まだ脚の半分ほどしか隠れていない。
白い水けむりを浴びて、赤い袖裏や金糸の帯が光っている。あたかも平敦盛が駒を沈めて行くかのように見えるのだった。
「女あッ……！　女っ……。おういッ！　……」
やっと、間近まで追いついて、権叔父がこう呶鳴ったとたんに――そこから急に底が深くなっ

ているのであろう、ガボと、異様な一声を水面に残して、女のすがたは不意に大きな波紋の下にかくれてしまった。
「やれ不心得者っ、やはり死ぬ気か」
ずぶずぶと、権叔父も同時に、全身まで沈みこんで行った。

岸では、隠居が、波打ち際に沿って横へ駈け廻っていた。
一沫の水けむりと共に、女の影も、権叔父のすがたも見えなくなると、
「あれっ、あれっ、誰ぞ、早く行かねば、間にあいはせぬっ。二人とも死んでしまうわッ」
と、まるで他人のせいみたいに喚いて、
「はよう、助けに行けっ、浜の者っ、浜の者っ」
と、転んだり駈けたり、また、手を振り廻したり、自分が溺れるかのように騒いでいた。

四

「心中か」
「まさか……」
と、救って来た漁師たちは、砂の上へ寝かした二つの体を見てわらった。
権叔父のからだは、髑乎と若い女の帯をつかんでいた。そのふたりとも、息はなかった。
若い女は、髪の毛こそ、根が切れて乱れていたが、まだ生きてるように、化粧の白粉や口紅が浮き上がっていた。紫いろになった唇をチラと噛んで笑っているのである。

「オオ、この女は見たことがあるぜ」
「さっき浜べで、貝殻をひろっていた女じゃないか」
「そうだ、あの宿屋に泊っている女だ」
そこへ報らせに行くまでもなかった。むこうから四、五人して駈けて来るのがその宿屋の者らしく、中に、吉岡清十郎の顔も見える。
ここの人だかりに、さてはと息を喘いて来た清十郎は、
「おっ、朱実だ」
真っ蒼になって——しかし人前を憚るように、棒立ちに悚んでしまった。
「お侍、おめえの連れか」
「そ、そうだ」
「はやく、水を吐かしてやんなせえ」
「た、たすかるか」
「そんなことをいってる間に」
と、漁師たちは、権叔父と朱実と、両方のからだに分れて鳩尾を押したり、背をたたいたりした。
朱実は、すぐ息をふき甦した。清十郎は宿舎の者に負わせて、人目から逃げるように旅舎へ帰って行った。
「権叔父よ……権叔父よっ……」
お杉隠居は、さっきから権叔父の耳へ顔をつけたきり泣いていた。

若い朱実は、蘇生したが、権叔父は老体でもあるし、すこし酒気もあったので、まったく絶息したものとみえる。いくらお杉隠居が呼んでも、ふたたびその眼は開かなかった。
手をつくした漁師たちも、
「この老人のほうは駄目だ」
と、さじを投げた。
そう聞くと、隠居はもう涙を見せなかった。折角、親切にしてくれる人々へ、
「何がだめじゃ！　一方の女子が息をふき返したのに、この者ばかり生きぬという法があろうか」
食ッてかかるような権まくで、手を出している者たちを突き退け、
「この婆が活かして見せるわ」
と、必死になって、あらゆる手当を施すのだった。
その一心不乱な様子は、見るも涙ぐましい程であったが、そこらに居合わす者を、まるで雇人か何ぞのように、やれ押し方が悪いの、そうしては効がないの、火を焚けの薬を取って来いのと、権突くと顎の先で使うので、縁もゆかりもない浜の者たちは腹を立てて、
「なんだ、このくそ婆」
「死んだ者と、気絶した者とはちがうのだ、活かせるものなら活かしてみろ」
呟きあって、いつの間にか、皆ちりぢりにそこを去ってしまった。
浜べはもう暮れかかる、うす靄の沖に、橙色の雲がわずかに夕明りを流していた。婆はまだ思い諦めようとしない。そこに火を焚いて、焚火のそばへ権叔父を抱き寄せ、

「おういっ、権叔父……権叔父……」

波は暗くなった。

燃やしても燃やしても、権叔父の体は温かくならなかった。だが、お杉隠居は、まだ不意に権叔父が口をきき出すもののように信じて疑わないらしく、印籠の薬を嚙んで唇移しにふくませたり、体をかかえて揺すぶったりしながら、

「まいちど、眼を開いて下され、ものをいうてたもい。……これ、どうしたものじゃ、この婆を見捨てて先へ逝くという法があろうか。――まだ武蔵も討たずに、お通阿女の成敗も果さぬのに」

旧　約

一

海鳴りと松かぜに暮れてゆく障子のうちに、朱実はうつらうつら昏睡していた。枕を当てがわれると急に発熱して、頻りとそれからは囈言をいう。

「…………」

枕の上の顔よりも青じろい顔して、清十郎はその側に寂然と坐っていた。自分が踩み躙った花の痛々しい苦悶に対して、自責の首を垂れたまま、さすがに彼の良心も苦悶しているらしい。

野獣にもひとしい暴力をふるって、この明朗な処女を本能の餌にして満足を感じたのも彼という人間だし、また枕許につき切って、精神的にも、肉体的にも、一時人生を失ったその処女の呼吸や脈搏を心配しながら、じっと、厳粛そのもののように硬ばっている良心的な人間も、同じ吉岡清十郎なのである。

一日という短い生活のうちに、そういう矛盾の甚だしい二つの自己を息づかせながら、しかし当の清十郎は、それが必ずしもおかしくはないように、沈痛な眉と、慚愧の唇を結んでいた。

「……落ちついてくれ、朱実。おればかりじゃない、男とはたいがいこうしたものなのだ。……今におまえだって分ってくれる日がある。おれの愛があまりに烈し過ぎたのでおまえは驚いてしまったのだろうが」

こういう繰り言を、彼は、朱実へ対していうのか、自己をなぐさめるためにいうのか、纏綿とさっきから枕許に坐って呟いているのであった。

墨をながしたように部屋の中は陰惨としていた。朱実の白い手がばたんと時々夜具の外へ出る。夜具をかけてやるとまた、うるさそうにそれを払う。

「……きょうは何日？」

「え？」

「後……幾日で……お正月」

「もう七日ばかりじゃないか。正月までには癒るよ、元日までに、京都へ帰ろう」

清十郎が顔を寄せると、

「嫌あ——ッ」

突然、泣くように、顔の上の顔を平手で打って、
「あっち へ行けっ」
と、罵った。
狂わしい声が続けさまになおその唇から走るのだった。
「ばかっ、獣っ」
「…………」
「獣だ、おまえなんか」
「…………」
「見るのも嫌」
「朱実、かんにんしてくれ」
「うるさいっ、うるさいっ、うるさいっ」
必死になって白い手が闇を打つのである。清十郎は苦しげに息を嚥んでその狂態を眺めていた。やや落ちついたと思うとまた、
「……きょうは幾日？」
「…………」
「お正月はまだ？」
「…………」
「元日の朝から七種の日まで、毎朝、五条の橋へ行っていると――武蔵様からの言伝があったのよ。待ち遠しいお正月……ああ早く京都へ帰りたい。五条の橋へゆけば、武蔵様が立っている」

「……え、武蔵？」

「…………」

「武蔵とは、あの宮本武蔵のことか」

驚いて清十郎が顔を差し覗くと、朱実はもう答えもせぬ。青い瞼は昏々と眠っているのである。

ハラハラと枯れ松葉が波明りの障子を打つ。どこかで馬の嘶きが聞えたと思うと、そこの障子に外から燈火が映し、旅舎の女を先に立てて、一人の客が案内されて来た。

「若先生は、こちらですか」

二

「おう誰だ？　――清十郎はこれにおるが」

あわてて境のふすまを閉め、何気ない態をつくっていると、

「植田良平でござる」

物々しい旅いでたちの男が、埃を浴びた姿のまま、障子を開けてその端へ腰かけた。

「あ、植田か」

何しにここへ来たのだろうかと清十郎はまず疑った。植田良平というのは、祇園藤次、南保余一兵衛、御池十郎左衛門、小橋蔵人、太田黒兵助などという古参門下とともに、吉岡の十剣と自称している高弟のうちの一名だった。

こんどの小旅行には、勿論そういう股肱の弟子は連れて来ていない。植田良平も四条道場に残

っていた方である。――それが、みれば旅装も騎馬支度で、かなり急用らしい血相でもある。留守中、気がかりはたくさんあるが、ここまで良平が鞭打って来るほどの急用は、まさか年暮に迫っての負債とか遣り繰り相談とも思われない。
「何だ。何かわしの留守中に起ったのか」
「すぐ若先生にも、お立ち帰り願わなければなりませぬゆえ、このまま申しあげます」
「ム……」
「はてな」
植田良平は、内懐中へ両手を入れて、何か自分の肌をあたふた探っていた。
――と、ふすま越しに、
「嫌アっ――畜生っ――あっちへゆけっ」
うつつにまで、昼の悪夢におびやかされているのであろう、朱実の、さけびが、囈言とも思えないほど、生々しい呪いをおびて響いた。
良平は吃驚して、
「あっ……何です、あれは」
「いや……朱実が……ここへ来てからちと体をわるくし、熱のせいか、時折、うわ言をいうのだ」
「朱実ですか」
「それよりは急用のほう、心がかりじゃ早く聞こう」
「これです」

腹帯の底からやっと取り出した一通の書面をそこへ差し出す。
女の置いて行った燭台を、良平はずっと清十郎のそばへ送った。
何気なく眼を落して、
「あっ……武蔵からだの」
良平は声に力をこめて、
「そうです！」
「開封したか」
「急展とありますので、留守居の者が計りあって、一読いたしました」
「な、なんと申して参ったのか」
清十郎はすぐそれを手にとれなかった。——他人に問うまでもなく彼自身の胸になければならない宮本武蔵だったが、おそらくは、二度とはあの男が、自分へ対して書面をよこすことなどはあり得まいと多寡をくくっていたのである。その気持が今裏切られて、愕然と、彼の背ぼねの髄を氷のように突き抜けて行ったので、全身の肌が何とはなく粟を生じ、にわかに、清十郎はそれを披いてみる心地も出ず、しばらくただそこに措いて見ているのであった。
憤った唇を嚙みしめて、良平はこういった。
「——遂にやってきました。この春、ああは豪語して去ったものの、よもや二度とは京都へ足ぶみ致すまいと思っていたのに——よくよくな慢心者——約束とあって——御覧なさい、吉岡清十郎どの他御一門と、名宛ても不敵に、新免宮本武蔵と、ただ一人名前で、打つけてよこしたその果し状を」

三

武蔵は今、どこにいるのか、居所は認めてないので、その書面からは知り得べくもない。
どこからにしても、彼が忘れずに、吉岡一門の師弟へ対してこう約束の履行を迫って来たからには、もう彼と吉岡家との間は、討つか討たれるかの交戦状態に入ったものと思わなければならない。
試合は——果し合いだ——果し合いは生命を遣るか奪るかの大事を、侍の剣と面目に賭してなすことだ、口先や小手先の技見せではない。生命をそこへ出してすることなのだ。
それを、当面の吉岡清十郎が知らないでいるのは危険の限りである。また安閑とその日の迫るまで遊び暮していていいものではない。
京都にある硬骨な弟子のうちには、清十郎の行状にあいそをつかして、
(この場合、沙汰の限りだ)
と怒っている者があるし、
(拳法先生が世におわせば)
と、悲涙をふるって、一介の武者修行から与えられた侮辱に対して歯がみをしている者もあった。
で、取り敢ず、
(ともかくお耳に入れて、すぐさま京都へ引っ張って来い)
という人々の意見を帯びて、植田良平はここへ馬で飛んで来たわけであるが、そのかんじんな

武蔵からの書面を、どうした理か、清十郎は膝のまえに置いて眺めているだけで、容易に披いて見ようとはしない。
「とにかく、御一覧を」
やや焦れて、良平がいうと、
「む……これか」
やっと手に取って、清十郎は読み出した。
読んでゆくうちに彼の指先にかすかな顫えが隠されなかった。――それは武蔵の文字や文面がさまでに烈しいからではなかった。彼自身の心が今ほど脆く弱りきっている時はなかったのである。襖ごしに聞える朱実の囈言は、彼にも多少は平常にあった侍の心がまえというものを、まったく泥舟が水へ浸ったように覆していた。
武蔵からのその内容はまた、至って簡明なもので、こう書いてある――

以来御健在ナリヤ
約ニ依而、玆ニ書ヲ呈ス
貴剣サダメシ御鍛養ト被存候、貧生マタ些カ鍛腕ヲ撫シテ罷リアリ候
御見ニ入ル場所ハ何処、日ハ何日、時ハ如何ニ。
当方構エテ望ミナシ、タダ尊示ニ従ッテ旧約ノ勝敗ヲ決セント存ズルアルノミ。
憚リナガラ正月中七日マデノ間、五条橋畔マデ、御返答高札下サルベク候
　　月　　日
新免宮本武蔵政名

「すぐ帰る」
清十郎は文殻(ふみがら)をたもとへ突っ込むとそういって立ち上がった。――さまざまに纏(もつ)れる気持が、もう少しでも彼をそこへじっとして置かせなかった。
あわただしく旅舎(やど)の者を呼ぶ。金を与えて、朱実の身体(からだ)を預かっておいてくれと頼むと、旅舎では迷惑顔であったが、嫌ともいい切れないで遂にひきうける。
――この家を、このいやな晩を、遁(のが)れ出してしまいたいのが、清十郎の気持にはいっぱいだった。
「そちの馬を借りるぞ」
あわただしい旅支度は、やがて逃げるように、馬の鞍へ取ッついた。植田良平も馬の尾を追って、暗い住吉の並木を駈け出していた。

物干竿

一

――ハハア見かけました。猿(えて)を肩に乗せた派手やかな若衆ですね、そういう扮装(よそお)いの若衆ならばさっき通りましたよ、という者がある。
どこで、どこで。

なに高津の真言坂を降りて農人橋のほうへ行ったと。そして橋は越えずに東堀の刀屋の店頭でも見たというか。
さてこそ、手がかりはついたぞ、それだそれだ、そいつに違いない。
「それ行け」
とばかり、雲をつかむような相手を追って、夕方の往来の者の眼をそばだたしめて行く一群の男どもがここにある。
もう東堀の片側町は戸の下りていた頃なのである。一人が中へ入って、そこの刀師に何やら厳めしく詮議だてしていたが、やがてのこと、戸外へ出て来て、
「天満へ行け、天満へ行け」
と先に立ってまた急ぎ出す。
駈けながら他の者が、
「わかったのか」
吉左右を糺すと、
「突きとめた」
とその者は力みかえる。
いうまでもなくこの一群は、今朝から住吉を中心として、渡海場から小猿を携えて市中へ入ったれいの美少年の後を捜し廻っている吉岡門下の者たちだった。
今そこの刀剣師の店で訊くと、真言坂から手繰ってきた手がかりはどうやら間違いないらしい。たしかに店の戸を下ろす黄昏れごろ、肩の小猿を店頭に抛って、腰をおろした前髪の侍があ

ったという。

(主はいるか)

と訊かれたが、生憎不在なのでその由を職人が答えると、

(頼みたい研物を持って来たのだが、比類のない名刀だから主がいなくてはちと不安心だ。いったいお前の家では、研や装剣の仕事にかけて、どれほどの腕があるのか確かめてからの事にしたい。——なにかここの主の研いだ物があるなら見せろ)

という事なので、畏まって、然るべき刀を幾口か出して見せると、それぞれ無造作に一見して後、

(つまらぬ鈍刀ばかりをお前の家では手がけていると見えるな。そういう研師の手にかけるのは心もとない。わしが頼もうという刀は肩に負っているこの物干竿という名称のある伝来の逸品、無銘だがかくの通り摺上もない備前物の名作だ)

とてそれをギラリと抜いて示しながら、さんざん自分の刀の自慢を述べたてるので、職人もやや片腹いたく思って、なるほど物干竿とはよく銘けましたな、曲もなくてただ長いだけが取柄だとつぶやくと、すこし機嫌を悪くして、遽に腰を上げ、天満から京都へのぼる船はどこから出るのかと道を訊いた上、

(ひとつ、京都で研がせよう。大坂はどこの刀屋を覗いても、雑兵の持つ数物ばかり荒砥にかけておる、イヤ邪魔をいたした)

と、涼しい顔して、さっさと立ち去ってしまったというのである。

いかさま聞けば聞くほど生意気な青年らしい。祇園藤次の髷をチョン斬っていよいよ思い上が

っているに相違ない。こうして後からあの世への迎えが宙を飛んで自分の背に迫って行きつつあるのも知らずに、得々と大手を振って歩いているものと思われる。
「みろ、青二才」
「もう首根ッこを押えたのも同じこと。急ぐにも及ばん」
朝から歩きづめである。くたびれたのがこういった。すると先に駈けているのが、
「いやいや、急がねば駄目だぞ。淀の溯りは、今ごろ出るのがたしか仕舞い船の筈」
と喘いでいった。

二

天満の川波を見ると、
「やっ、いかん」
真っ先のが叫んだので、
「どうした？」
次のがいうと、
「もう船着茶屋が床几を重ねておる。川にも船が見えぬ」
「出てしまったか」
弾みあう息を揃えて、どやどやそこに佇んで、しばしは出し抜かれたように川面を見ていたが、店をしまいかけた茶屋の者に訊ねると、たしかに小猿と前髪は乗ったとある。そしてまた、その仕舞い船がここを離れたのはつい今し方で、まだこの先の船着場である豊崎までは溯っていま

いともいう。
それに下りは速いが、上り船は遅々たるものである。陸を走っても追いつきましょうという言葉に、
「そうだ、何もがっかりすることはない。ここで間に合わなかったとすれば、もう急がずともよい、一息入れて行こう」
茶をのんだり、餅や駄菓子等を頬張った上、さて又、川に沿って暗い道を急ぎに急いで行った。
ひろい暗の彼方に、銀蛇に似た河のすがたが二股に裂けていた。一すじの淀川が中津川と天満川とに岐れるところである。その辺にチラと灯が見えた。
「船だっ」
「追いついたぞ」
七名は色めき立つ。
枯れ蘆はみな刃もののように光っていた。一草の青いものすらない田や畑であった。霜をふくむかと思われるような風だったが、寒いなどということは考え出されない。
「しめた」
距離は、いよいよ縮まる。
明らかにそれと分ると、つい思慮もなく、一人が呶鳴ってしまった。
「おおウいっ。――その船待てっ」
すると船から、
「なんじゃあ……」

と半間な声がひびいてくる。

陸では今、お先走って呶鳴った男を、ほかの仲間が叱っていた。——何も今、ここで呶鳴るにはあたらない。これから何十町か先まで行けば、嫌でも船着があって、乗る客も降りる客もあるにちがいない。それをここから呶鳴っては船中にある敵に心支度をさせるようなものではないか、というのだった。

「まあ、どっちにせよ、先は多寡の知れた一人。呶鳴ったからには、明らさまに名乗りかけて、川の中へ逃げ込まない用心をしろ」

「そうだ、そのことだ」

と程よく捌く者があって、仲間割れは救われた。

そこでこの七名は、気をそろえて、淀を溯る夜船の船脚とおよそ足の早さを共にしながら、

「おうーいっ」

とまた呼び直した。

「なんじゃあ」

客ではない、船頭らしい。

「その船を岸へ寄せろ」

こういうと、

「阿呆吐かせ」

これはどっと誰彼なく、船の中から揚がった笑い声だった。

「着けぬかっ」

威嚇すると、こんどは客の声らしく、
「着けぬわい」
と、口吻を真似していう。
七名の陸の顔は、湯気を立てているかと思うように、白い息を吐いて、
「よしっ、着けぬとあれば、先の船着場で待つが、その船の中に、小猿を連れた前髪の青二才がいるであろう。恥を知るならば、舷へ立てといえっ。もしまた、其奴を逃がした場合は、乗合いの者残らず、関り合いとして陸へ引きずり上げるから左様心得ろ」

三

三十石船の中の騒めきが、陸から眺めていても手にとるようにわかった。さあことだぞと色を失った様子なのである。
岸へ着けたら何か始まるにちがいない。陸を歩いている七名の侍は、そういえば皆、袴をくくりあげ襷をかけ、刀に反りを打たせている。
「船頭、返事をするな」
「なにをいうても黙っておれ」
「守口までは着けぬがよい、守口へ行けば川番所のお役人がいるで」
客は口々にこう囁いて生唾をのんでいた。先に減らず口をたたいた男などは唖みたいに眼をすくめた。陸と川の中との隔てがなによりの頼りであった。
陸の七名は、船脚と並行してどこまでもついて来た。しばらく黙って見ているのは、こっちで

どう出て来るかを待っているらしい。しかしいつまでも答えがないので、
「――聞えたか。小猿を連れた洟垂れ武士、舷へ出ろ、舷へ」
　すると、船のうちで、
「わしのことか」
　何を先でいっても答えるなといいあっていた客のうちから、突然、こう答えて舷に立った若者があった。
「おうっ」
「いたな」
「小僧め」
　その影を認めて、陸の七名は眼を剝いたり、指さしたり、近ければ水を渡ってもやって来そうな気勢を示している。
　物干竿とよぶ大太刀を背中へ負って、前髪の人影はじっと立っていた。すぐ足もとの舷を打つ水明りが、尖っている歯を白く見せた。
「小猿を連れている前髪の青二才とあれば、わしより他にないが、各〻は何者だ、稼ぎのない野武士たちか、それとも、腹の減った旅芸人か」
　声が川を渡って来ると、
「なにっ」
　七名は岸へ顔を揃えて各〻歯ぎしりを嚙みながら、
「吐かしたな、猿つかい奴」

悪罵は、順々に、その口々から飛び出して、川面を打った。
「身のほど知らずが、今に吠え面掻いて、謝るなよ」
「われわれをなんだと思う。今の口は、吉岡清十郎門下のわれわれと知ってか、知らずにか」
「ちょうどよい、手をのばして、その細首を洗っておけ」
船は毛馬堤へかかっていた。
ここには繋い杭とホッ立て小屋がある。毛馬村の船着と見て、七名は、ばらばらとそこへ先廻りして降口を扼して待っていた。
――だが船は遠く河心に止まっていて、ぐるぐる廻っているのだった。客も船頭も、事態の容易ならぬものを案じて、着けないほうが無事であると主張しているらしいのである。吉岡門下の七名はそれと見て、
「こらッ、なぜ着けぬ」
「明日も明後日も着けずにいられるか。後で後悔するな」
「その船を寄せぬと、乗りおうている奴ばら、一人あまさず打ち斬るぞ」
「小舟で行って、斬り込むがよいかっ」
あらゆる脅し文句をそこから放っていると、やがて、三十石船の舳が此方の岸へ向き直ると共に、
「やかましいっ！」
冱寒の大河を裂くような一声が彼方にあって――
「望みにまかせて、今それへ参ってやるから、腰のつがえを定めて待っておれ」

見れば前髪の若者自身が、水馴れ棹を取って、頻りと止める船頭や客を尻目に、ぐいぐいと棹の水を切ってこなたの岸へ船を突き進めて来るのであった。

四

「――来るぞ」
「命知らずめが」
柄に手をかけて、七名は、船のぶつかって来る岸の辺りの岸辺を囲んでいた。
川を横に、真っ直に流紋を切って来る船の剣舳であった。不動の身を取って、そこに突っ立っている前髪の美少年の姿が、息を撓めて岸で待ちかまえている七名の者の眸へ、ぐうっと迫るに従って、いっぱいな大きさに映った――と、思う途端にである。
ざ、ざ、ざっ、船は枯れ蘆の泥へ舳を突ッこんで、自分たちの胸へどんと来たように、七名の踵が無意識にズズッと後へ退った。それと共に、船の舳から丸っこい動物の影が、四、五間ほども幅のある船と岸との間の枯れ蘆の沼をぽーんと跳んで、七名のうちの誰か一人の首っ玉へ躍りかかったのである。
「ひゃっッ」
一人が叫ぶと、七名の手から七本の白光が、鞘を脱して、空へ噴いた。
「猿だっ」
と気がついたのは、すでに空を一撃してからで、それを当の敵である前髪の飛躍と錯覚してあわてたのは、彼ら自身も不覚を認めたらしく、

「あわてるな！」
と、お互いを戒め合った。
関り合いになるまいと、船の一隅へかたまって縮み上がっていた乗合客は、彼らの狼狽ぶりに、硬ばっていた神経のどこかを擽ぐられたが、誰もくすりとも声を出さなかった。
ただ、あれっ——といった者がある。見ると、自分で水馴れ棹を突いていた前髪の美少年が、その棹を、蘆の中にとんと突いたと思うと、先に跳んだ小猿よりも軽く、弾みを与えた自分の体を、岸の彼方へ難なく送っていたのであった。
「やっ？」
すこし方角が違ったので、七名は一斉にそっちへ向き直った。さんざん待ちかまえていたことではあるが、咄嗟の場合と差のない焦心がどの顔にも引ッつれていた。円を作って相手へ迫る遑がなく、そのまま、岸に沿ってだっと向って行ったので、当然、彼らの陣形は縦隊になり、それを受けるところの前髪の少年をして、十分な気構えを持たせる余地を敢て与えてしまった。
真っ先になってしまった縦隊の者の頭は、もう怯んでも退けない位置である。途端に眼は充血し耳は聞えなくなっていた。平常の剣法の修練などはてんで意識にものぼらないのである。カッと歯を剝きだして、食いつくように前髪の影へ刀を差し出して行った。
「…………」
たださえ巨きい美少年の体軀は、その時、つま先で伸び上がるように胸を張り、右手をぐっと肩の上にやった。背に負っている大刀の柄を握ったのである。
「吉岡の門人どもだといったな。望むところだ。先には、髷だけで許してくれたが、思うに、そ

れでは物足らないのであろう、わしもすこし物足らぬ」
「ほ、ほざいたなっ」
「どうせ手入れにやるこの物干竿、手荒につかうぞっ」
こう宣言をうけながら、その前に硬ばっていた人間は、逃げることができなかった。まるで据物同然に、物干竿の長剣は梨割りにその者を死骸にしてしまった。

五

前の者の背が後の者の肩を押し返した。出鼻に先頭の一人が、敵の大太刀の一颯に、無造作な死を目前に遂げたのを見ると、後六名の者は、途端に脳中枢の正確を欠いて、行動の統一を全然失ってしまった。
衆はこうなると一より脆い。それに反して図に乗った前髪の美少年は、竿とよぶほど伸びの利く長剣で、次の者を横に撲った。
腰ぐるまは斬れなかった。しかし撲られただけでも十分にこたえたに違いない。何か一声吠えてその一人は、横ッ飛びに蘆の中へ飛びこんでしまう。
（――次っ）
と睨め廻した時は、さしも戦い下手の同勢も、非を覚って形を変え、五弁の花が芯をつつむように、この敵ひとりを囲み込んでいた。
「退くな」
「退くなよ」

味方同士が、こう励ましあうのだった。そこで多少勝ち目を見出した勢いを駆って、
「小童めが！」
勇気というよりはもう無自覚の忘恐がなす仕業である。この際、多言の必要はないのに、
「おもい知れっ」
叫びを重ねて一人は飛びかかって行った。振り下ろした刀はかなり深く入ったつもりであるのに、前髪の敵の胸へはまだ二尺ほども手前の空間を斬り下げていたのである。
当然、自信を持ちすぎたその刀の先は、カチッと石を打った。刀の持主はすでに自分から死の穴へ逆さに首を突っ込んで行ったかのような姿勢になり、鐺と足の裏を高く上げて、敵の前に身を曝してしまった。
だが、易々と斬り得る足元の敗者を斬らずに前髪の美少年は、身をかわした機みに弾みを加えて、ぶうんと横側の敵へ当って来た。
「ぐわッ」
明らかな末期のさけびがまた一つそこで揚がった。するともう二度と陣形を立て直す気力も失って、後の三名はわらわらとつながって逃げ出した。
逃げる姿へ、人間は最も殺伐な猛気がおこる。物干竿を両手に持って、
「それが吉岡の兵法かっ」
前髪は追いかけた。
「きたないぞ、返せっ」
罵りを浴びせかけながら、彼は足を止めなかった。

「待てっ、待てっ、わざわざ人を船から呼び上げておいて、捨てて逃げる侍がどこにあるかっ。このまま逃げるにおいては、京八流の吉岡を天下に笑ってやるがよいか」
笑ってやるぞということばは、侍が侍に投げる場合の最大の侮辱なのだ。唾以上の恥かしめなのだ。——だがもう逃げてゆく者の耳へはそれもこたえない。
その頃ちょうど毛馬堤を、寒々と、馬の鈴が鳴って来た。霜明りと淀の水明りは、提灯も必要としないほどだった。馬上の人影も、馬の尻について来る徒歩の人影も、白い息を吐いて、寒さを忘れていたかのように先を急いでいる様子である。
「あっ」
「御免っ」
追われて来た三名は、馬の鼻づらへ打つかりそうになって、きりきり舞をしながら後ろを振向いた。

六

あわてて手綱を絞ったので、馬は足掻きして嘶いた。馬上の者は、馬の前で戸惑いしている三名をのぞいて、
「やっ、門下ども」
意外な顔したが、すぐ腹をたてて、叱りつけた。
「たわけめ、どこに終日うろついていたのだっ」
「ア、若先生ですか」

するとまた、馬の陰から前へ出て来た植田良平が、
「何事だその態は。若先生のお供をして来ながら、若先生が帰るのも知らず、また、酒の上の喧嘩か。馬鹿もいい加減にして歩け」
いつものでんでまた酒の上の喧嘩かと見られたのでは堪らない。三名は不平に満ちた語気で、それどころか自分たちは、当流の権威と師匠の名誉のために戦って、かくかくの始末と、舌も渇いているし、狼狽もしているので、怖ろしい早口をもって一息に告げ、
「あれ、あれへ、や、やって来ました」
と、ここへ近づいて来る跫音を振顧って、恟々たる眼いろになる。
その弱腰をながめて、植田良平は、愛想をつかし、
「なにを躁ぐか、口ほどもない。それでは当流の汚名をそそぐつもりでしたことも、却って泥の上塗りだわ。——よしっ、おれが会ってやろう」
と、馬上の清十郎もその三名も後に立たせて、独りだけ十歩ほど前にすすみ、
(御座んなれ、前髪)
身構え取って、近づく跫音を待っていた。
——とは知ろうはずもなく前髪は、れいの長剣を舞わせながら、脚に風を起して、
「やアいっ、待てっ。逃げるのが吉岡流の極意か。わしは殺生したくないが、この物干竿が、まだまだと鍔鳴りして承知せぬ。返せ、返せ、逃げてもいいが、その首置いて行けっ」
毛馬堤の上をこう呼ばわりながら、今しもその影はここへ宙を飛んで来る。
植田良平は手に唾して刀の柄を握り直した。疾風の勢いにある前髪の美少年は、そこに身を屈

していた良平が眼に入らないのか、頭の上を踏ンづけるような足幅であった。

「──わッしょッ」

撓め切っていた良平の腕は唸って、こう大喝をくれながら地摺りに大刀で払い上げた。縒り合せた両手に伸びて行った切っ先は、星を斬ったように高く揚がったに過ぎない。美少年の体は片脚立ちに止まって、ぎりっと反対のほうへ廻って振向いたと思うと、

「オヤ、新手か」

た、た、た、とのめって行く良平へ物干竿をぶんと薙ぎ返した。

烈しいの何のといって、植田良平はまだかつてこんな剣気に吹かれた例を知らない。その殺風から身を交わした代りに、彼は毛馬堤から田圃のほうへ転がっていた。幸いに、堤は低いし、凍っている田圃であったが、戦機を外してしまったことは勿論である。ふたたび堤の上へ出て見た時には、敵の影は獅子奮迅に見えた。長剣物干竿の光が、門下の三名を刎ね飛ばし、さらに進んで、馬上の吉岡清十郎へ迫ろうとしている。

七

自分の身まで来る間に解決するものと、清十郎は安心していたのである。ところが、その危険は、すぐ迫って来た。

ひどい暴剣振りである。物干竿は突進して来た。いきなり清十郎の乗っている馬の脾腹を突こうとする。

「岸柳、待てっ」

こう清十郎は高く叫んだ。そして鐙にかけていた片足をすばやく鞍の上へ移し、その鞍を蹴るがごとく突ッ立ったと思うと、馬は前髪の美少年を躍り越えて、弦を離れた矢のように彼方へ駈け出し、清十郎の体は反対に、三間も後ろへぽんと飛び降りていた。

「——鮮やかッ」

と、賞めたのは、味方ではなくて、敵の前髪の美少年だった。

物干竿を持ち直して、清十郎のほうへ一躍しながら、

「今の所作、敵ながら見よい嗜み、察するところ吉岡清十郎その人と見た。よい折だ——いざッ」

向けて来る物干竿の切っ先は炎々たる闘志の塊であった。清十郎の体にはさすが拳法の嫡子、それを受けるだけの余裕と鍛えたものが十分に見える。

「岩国の佐々木小次郎、さすがに目が高い。いかにも自分こそは清十郎であるが、理由もなく、其許と刃交ぜをする意思は持たぬ。——勝負はいつでも決しられる。なんの意趣でこの始末か、まず退き給えその刀を」

最初に清十郎が、岸柳と呼んだ時には、耳にも入らなかったらしいが、二度目には明らかに岩国の佐々木と名をさしたので、前髪は、

「や！　……わしを、岸柳佐々木小次郎とは、どうしてご存じあるのか」

と驚きに打たれた。

清十郎は、膝を打って、

「やはり、小次郎殿であったか」

と、いいながら前へ進んで来た。
「——お目にかかるのは、固より初めてだが、おうわさは常々詳しく聞いていた」
「誰に？」
と、すこし茫然としたように小次郎はいう。
「其許の兄弟子、伊藤弥五郎どのから」
「お、一刀斎どのと御懇意か」
「ついこの秋頃まで、一刀斎どのは、白河の神楽ケ岡の辺に一庵をむすんでおいであった。屢〻、こちらよりも訪れ、先生も時折、四条の拙宅へ立ち寄って下されたりなどして」
「ホウ！……」
小次郎は笑靨を作って、
「では満更、貴公ともただの初対面ではない」
「一刀斎どのは何かというと、よく其許の噂をなされていた。——岩国に、岸柳佐々木と称する者がある。自分と同様に、富田五郎左衛門のながれを汲み、鐘巻自斎先生に師事した者で、同門の中では一番の年下ではあるが、行末天下に自分と名を争う者は彼より他にはあるまいと——」
「だがそれだけで、この咄嗟にわしを佐々木小次郎とは、どうしてお分りあったか」
「まだ年ばえもお若いことや、人柄はこうこうなどと一刀斎どのから伺っていたし、また其許が、岸柳と号されている謂れも詳しく承知しているので、その長剣を自由になさるさまを見た時すぐ、もしやと胸に泛かんだので、当て推量にいってみたのが測らずもほんとをいい中ててしまったわけ」

「奇だ！　これは奇遇」
小次郎は快哉をさけんだがふと、血ぬられた物干竿を自分の手にながめると、この始末は一体どうしたものかと思い惑った。

八

話しあえばお互いに解け合うものがあったのであろう。それから時経て、毛馬堤の上を、佐々木小次郎と吉岡清十郎の二人が先に立って、旧知のように肩を並べ、その後から植田良平と三名の門人が、寒そうに従いて、京都の方角へ夜をかけて歩いて行く姿が見出される。
「いや、初めからこっちは、妙に売られた喧嘩なので、何もことを好んだわけではちっともない」
と、これは小次郎のいい分。
清十郎は小次郎の口から親しく祇園藤次が阿波通いの船中でした振舞や、後の彼の行動など思いあわせ、
「怪しからぬ男だ、帰ったら糾明せねばならぬ。――其許を怨むどころか、此方こそ、門下どもの統御の不行届き何とも面目ない」
そういわれると、小次郎も謙譲を示さねばならなくなって、
「いやいや、わしもこのような性質の者でございますゆえ、ずいぶん大言を吐くし、喧嘩なら退かぬ構えで誰へでも応対するから、あながち門人衆ばかりが悪いわけではありません。――むしろ吉岡流の名と師の体面を思ってやった今夜の者たちは、生憎腕のほうはどれもこれも貧弱です

が、その心根に至っては、むしろ不憫なものがある」
「拙者が悪い」
清十郎は、自責しながら、沈痛な顔をして歩いていた。
そちらに含むところがなければ一切を水に流そう――と小次郎がいうと、
「願ってもないことだ。却って、これをご縁に、将来はご交誼をねがいたい」
と、清十郎も応じていう。
二人の打ちとけた様子を前に見ながら、弟子たちはほっとした気持で後から続いていた。――
一見、体の巨きな坊ンちみたいな前髪の美少年が、伊藤弥五郎一刀斎が常に、
（岩国の麒麟児）
と、口を極めて称えていた岸柳佐々木であろうと誰がちょっと思い当ろうか。祇園藤次が軽く
舐めて舐め損なったのも、あながち無理はない気がするのである。
それと分って、今更、胆を寒うしているのは、その小次郎の愛剣物干竿の先から命びろいをし
た植田良平や他の者どもで、
（これが、岸柳か）
と、眼を改めて、その人間の幅広い背中を見直して、なるほどそう知ってから見れば、どこか
に非凡なところがあると、今更、自己の眼識の浅さをも併せて認めている。
やがて、以前の毛馬村の船着場へ来ると、そこには物干竿の犠牲になった幾つかの死骸がもう
寒天に凍っていた。死骸の後始末は三名にいいつけて置き、植田良平は先に逃げて行った馬を見
つけて曳いて来る。――また、佐々木小次郎は頻りと口笛をふいて、懐中に飼い馴れたれいの小

猿を呼んでいた。
口笛を聞くと、小猿はどこからか現われて、彼の肩へとびついた。――ぜひぜひ四条の道場へ来て逗留してもらいたいというので、吉岡清十郎は自分の乗馬を小次郎へすすめたが、小次郎はかぶりを振って、
「それはいけない。私はまだ青くさい一介の若輩だし、貴公はいやしくも平安の名家吉岡拳法の嫡男、門人数百を持つ一流の御宗家だ」
と、馬の口輪を取って、
「遠慮なくお召なされ、ただ歩くより口輪を取って歩いたほうが歩きよい。おことばに甘えて、しばらくのあいだお世話にあずかるとして、京都までこうして話しながらお供いたそう」
傲慢不遜かと思うと、礼儀もわきまえている小次郎だった。――やがて今年も暮れて初春を迎えるとすぐ、宮本武蔵なる人間と出会わなければならない宿題を持つ清十郎は、折からこの小次郎という人物をわが家へ迎える機縁をひろって、何かに心づよい気がして来るのだった。
「ではお先に失礼して、足の疲れたころには代るといたそう」
彼もまた、そう礼儀をして、鞍の上へ移った。

山川無限

一

　東国での名人として、塚原卜伝や上泉伊勢守の名が代表されていた永禄の頃には、上方では京都の吉岡と大和の柳生の二家が、まずそれに対立したものと見られている。
　だがほかにもう一家、伊勢桑名の太守北畠具教がある。この具教もその道においてかくれない達人であり、またよい国司でもあったらしく、
「太の御所」
　といえば、彼の歿後までも伊勢の領民はなつかしいお方として、そのころの桑名の繁昌や善政を慕っている。
　北畠具教は、卜伝から一の太刀というものを授けられて、卜伝の正流は東国にひろまらずに伊勢へ残った。
　卜伝の子、塚原彦四郎は、父から家督はうけたが、一の太刀の秘伝を遂にゆるされなかった。そこで父の死後、彦四郎は郷里の常陸から伊勢へ赴き、具教に会ってこういった。
「私も父の卜伝より、かねて一の太刀を授かっていますが、生前父がいうには、あなた様へもご伝授してある由、同じものか、違いのあるものか、異同を較べて、お互いに極秘の道を究明してみたいと思いますが、思し召はいかがですか」
　すると具教は、師の遺子である彦四郎が、技を撮りに来たものとすぐ察してはいたが、
「よろしい、お目にかけましょう」
　と快諾して、一の太刀の秘術を見せた。

彦四郎はそれによって、一の太刀を写しとることができたが、要するにそれは型の真似事でしかなく、元々その器でなかったから、卜伝流はやはり伊勢のほうに広く行われ、従ってその余風からこの地方には兵法の達人上手が今でもたくさんに輩出している――

といったような土地自慢は、その国へ足を入れると必ず聞かされるところであるが、変なてめえ自慢から比べればよほど耳ざわりがよいし、また見物の参考にもなるので、今も、桑名の城下から垂坂山へかかって来る道中馬の上にある旅人は、

「成程、成程」

と、馬子のそうしたお国ばなしをあえて遮らずに、頷いて聞いていた。

時は十二月の中旬で、伊勢は暖いにしても、那古の浦からこの峠へくる風は相当に肌寒いが、駄賃馬に乗っている客は、奈良晒のじゅばんに袷一重、その上に袖無羽織をかけてはいるが、怖ろしく薄着であるし、うす汚い。

笠を被る必要もないほど陽焦けのしている真ッ黒顔に、これもまた、往来へ捨てても拾い人がありそうもない古笠を被っているのだ。髪は幾日洗わないのか鳥の巣みたいにもじゃもじゃしていて、ただ束ねてあるというだけに過ぎない。

(駄賃がもらえるかしらて？)

と馬子は内心で、心配しながら乗せた客だった。それに行く先がちと辺鄙な、帰り客のきかない山間ではあるし……と。

「旦那」

「む？　……」

「四日市で早めの午、亀山で夕方、あれから雲林院村へ行くと、もうとっぷり夜になりますだが」
「ムム」
「ようがすかね」
「ウム」
何をいってても頷いてばかりいるのだ、無口な客は馬の背から那古の浦に気を奪られている。
それは、武蔵だった。
春の末つ方からこの冬の暮まで、どこを足にまかせて歩いて来たのか、皮膚は渋紙のように風雨に染まり、ただ二つの眼だけがいよいよ白く鋭く見える。

二

馬子はまた訊ねて、
「旦那、安濃郷の雲林院村というと、鈴鹿山の尾根の二里も奥だが、そんな辺鄙なところへ、何しに行かっしゃるのじゃ」
「人を訪ねに」
「あの村には、木樵か百姓しかいねえはずだに」
「くさり鎌の上手がいると桑名で聞いたが」
「ははあ、宍戸様のことかね」
「うむ、宍戸何とかいったな」

「宍戸梅軒」
「そう、そう」
「あれは鎌鍛冶じゃ、そして鎖鎌をつかうそうじゃ。すると旦那は武者修行だの」
「うむ」
「それなら鎌鍛冶の梅軒を訪ねて行かっしゃるより、松坂へ行けばこの伊勢で聞え渡っている上手がおりますがな」
「誰か」
「神子上典膳というお人で」
「ははあ、神子上か」
武蔵は頷いた。その名は夙く知っていたように多くを問わない。黙々と馬の背に揺られながら脚下に近づいて来る四日市の宿場の屋根を眺め、やがて町に入ると屋台の端を借りて弁当をつかう。
——ふとその時、彼の片方の足を見ると、足の甲を布で縛っていた。歩むには少し跛行をひいている形である。
足の裏の傷が膿んでいるのだった。それゆえにきょうは馬の背を借りて歩いているものとみえる。
彼は今、自分の体というものに対して、日々、細心な劬わりを施していた。そうした注意を抱いていたに関わらず、鳴海港の混雑の中で、釘の立ッている荷箱の板を踏みつけてしまったのである。昨日から傷に熱を持って、足の甲は樽柿のように地腫れがしていた。

（これは、不可抗力な敵だろうか？）

武蔵は、釘に対しても、勝敗を考えるのだった。——釘といえども兵法者として、こういう不覚をうけたことを恥辱に思うのだった。

（釘は明らかに、上を向いて落ちていたのだ。それを踏みつけたのは、自分の眼が、虚であって、心が常に全身に行き届いていない証拠だ。——また、足の裏へ突きとおるまで踏んでしまったことは、五体に早速の自由を欠いていたからで、ほんとの無碍自在な体ならば、草鞋の裏に釘の先が触れた瞬間に、体は自らそれを察知しているはずである）

自問自答にこの結論を下して、

（こんなことでは）

と、自己の未熟が反省され、剣と体とがまだまだ一致しない——腕ばかりが伸びてほかの体や精神は合致しない——一種の不具を感じて忌々しくなるのだった。

だが、この年の晩春、あの大和柳生の庄を蕭しぐらに去ってから——今日までのおよそ半年の間を、決して、無駄には送っていなかったと、武蔵は光陰に対して恥なく思った。

あれから伊賀へ出、近江路へ下り、美濃、尾州と歩いてここへ来たのであるが、行く先々の城下や山沢に彼は剣の真理を血まなこで捜した。

（何が極意か？）

漸く彼もそこへ突き当って来たのである。しかし、

（これが剣の真理だ）

というようなものは、決して町にも山沢にも埋れていなかった。この半年、各地で出会った兵

法者は幾十人か知れなかったし、その中には、聞えた達人も幾名かあったが、要するにそれは皆、技の上手であり、刀づかいに巧者な大家ばかりだった。

三

会い難いものは人である。この世は人間が殖えすぎているくらいなものだが、ほんとの人らしい人には実に会い難い。

武蔵は世間を歩いて痛感するのだった。そういう嘆きをもつたびに、彼の胸には沢庵が思い出された。――あの人間らしい人間を。

(会い難い人におれはかつて出会っているのだ、めぐまれたる者といわなければならない、そして、その機縁を無にしてはならない)

彼のことを思うと、武蔵は今でも両手の腕くびから五体がずきずきと痛んで来る。ふしぎなこの痛みは、千年杉の梢に曝されたあの時の神経が、まだそのまま生理的な記憶の中に生きている証拠であった。

(今にみろ、おれが沢庵を千年杉に縛りあげて、地上から悟道を説いてくれるぞ)

彼はいつもそう思った。恨みではない、報復ではない、そんな感情の上からではなく、武蔵は、禅によって人生の最高へ住もうとする沢庵に対して、自分は剣によって、どこまで沢庵の上に到ることができるかということを、実にすばらしい宿望の一つとして胸の底に抱いているのだった。

もしああいう形はとらなくても、自分の道境がめざましい進歩を遂げて、沢庵をかりに千年杉

のこずえに縛って、地上から彼に向って、彼の蒙をひらいてやるような叱咤を与える日があったら、沢庵は梢の上から何というだろうか。

武蔵はそれを聞きたいと思う。

おそらく沢庵は、

（善哉！　満足満足）

と欣ぶにちがいない。

いや、あの男のことだから、そう素直にはいわないだろう。からからと打ち笑って、

（豎子！　やりおる）

というか。——何でもよい、武蔵は彼へ対する恩義として、どういう形でもよいから沢庵のあたまへ一度、ぐわんと自己の優越を示してみたい。

だがそれは他愛のない武蔵の空想だった。彼自身、今や一つの道へ入りかけているだけに、いかに人間があるところへ到達しようとする道の永遠で至難なものであるかを、事ごとに知り初めていたのである。——それだけに、

（沢庵ほどには）

と、空想の腰が折れる。

まして、遂に会わなかったけれど、柳生谷の剣宗石舟斎あたりの高さを思いくらべると、口惜しくても、悲しくても、自分などのまだ青ッぽいことが余りにもわかってくるのだった。兵法だの、道だのと、口にするのも気恥かしくなって、くだらない人間ばかりに見えた世間が、急に広くなり恐ろしくなり、そして遽に、

（今から小理窟は早い、剣は理窟じゃない、人生も論議じゃない、やることだ、実践だ）

驀しぐらに武蔵は山沢へ入りこむ。彼が山の中に籠ってどういう生活をやっているか、それは彼が山から里へ出て来るすがたを見るとほぼ察しがつく。

そんな時彼の面は鹿みたいに頬が削げている。五体のあらゆるところに、擂り傷だの打ち傷を作っていた。滝に打たれるので油けのなくなった髪はパサパサに縮れ、土の上に眠るので歯だけが不思議な白さを持っていた。そして人間の住む里へ向って、おそろしく傲岸な信念を燃やしながら、相手とするに足る者を捜しに降りて来るのだった。

――今がちょうど、桑名で聞き出したそういう一人の相手を、これから尋ねてゆく途中であった。聞き及ぶ鎖鎌の達人宍戸梅軒なる者が、この世で会い難いほうの人間か、それともざらにある米喰い虫か、まだ初春までには十日あまりの余日があるので、これから京都へ出向く旅のつれづれに、ひとつ試してみようという気持で。

四

武蔵が目的の地へ着いたのは、もう夜も深い時刻だった。

馬子の労を犒って、

「帰ってもよい」

駄賃を与えて去ろうとすると、馬子のいうには、今更こんな山奥から帰りようもない。朝がたまで、旦那がこれから訪ねてゆく家の軒下でも借りてやすみ、朝になってから鈴鹿峠を下って来る客を拾って帰ったほうが歩がいいし、それに又、なんともこう寒くてはもう一里も歩くのは辛

いという。
　そういわれてみればこの辺りは伊賀、鈴鹿、安濃の山々のふところで、どっちを向いても山ばかりだし、その山のいただきには、真っ白な雪がある。
「では拙者のさがす家をおまえも一緒に尋ねてくれるか」
「宍戸梅軒様のお家で」
「そうだ」
「さがしましょう」
　その梅軒というのは、この辺の百姓鍛冶ということであるから、昼間ならすぐ分ろうが、もうこの部落では起きている燈火一つ見あたらない。
　ただどこかで先程から、こーん、こーん、と凍っている夜空にひびく砧の音がある。それを的てに二人は歩いて、ようやく一つの明りを見た。
　更に欣しかったことには、その砧の音のしている家が、百姓鍛冶の梅軒の家だった。軒に古金がたくさん積んであるのでもわかったし、真っ黒にいぶっている廂は、どうあっても鍛冶屋の家でなければならない。
「訪れてくれ」
「へい」
　馬子が先に戸を開けて入って行った。中は広い土間であった。仕事はしていないが鞴の囲いには赤い火が燃えさかっていた。そして、一人の女房が焔に背を向けて夜業に布を打っているのだった。

「こん晩は、ごめんなすって。——アア火だ、これはたまらぬ」
見知らない男が入って来て、いきなり鞴のそばの火にしがみついたので、女房は砧の手を止め、
「どこの衆だえ、おめえは」
「へい、今話しますよ。……実はお内儀、おめえ様のうちの旦那を遠方から尋ねて来たお客を乗せて今着いたのじゃ。わしは桑名の馬子だがね」
「ヘエ？　……」
女房は武蔵のすがたを無愛想に見上げた。ちょっと、小うるさい眉をして見せたのは、ここへも屢〻やってくる武者修行が多いのだろう。そういう旅行者と厄介者をこの女房は扱い馴れているることが様子に見える。三十がらみでちょっと美麗な女であったが、どこか横柄に、武蔵へ向って、子供へものをいいつけるように、
「うしろをお閉め、寒い風がふきこむと、子どもが風邪をひくがな」
といった。
武蔵は頭を下げ、
「はい」
と素直にうしろの板戸を閉めた。そしてさて——鞴のそばの切株に腰かけて、この真っ黒な細工場と、そこからすぐ筵の敷いてある三間ほどなこの家の中を見まわしてみると、成程、壁の一端に、かねて噂に聞くところの鎖鎌という見つけない武器が、およそ十挺ほど、板に打ちつけてある角掛に懸けてある。

（あれだな？）

こういう武器と、こういう一種の武術に出あって置くことも、修行の一つと武蔵は考えて来たのであるから、それを見るとすぐ彼の眼の光は違っていたに相違ない。

砧の木槌を下へおくと女房はぷいと起って筵の上へあがった。茶でも沸かしてくれるのかと思うと、そこに敷いてある乳のみ児の蒲団の中へ手枕で横になって、児に乳ぶさをふくませながら、

「そこの若いお侍、おめえっちはまた、うちの良人にぶつかって、物ずきに、血へどを吐きにやって来なしたのかよ。だが生憎うちの良人は旅へ出ているので、生命びろいしたようなものだげな」

と、笑っていうのであった。

五

憤っとなる気持をどうしようもない。遙々この山里まで鍛冶屋の女房に笑われに来たようなものである。どこの女房も亭主の社会的位置というものはみな誤認しているらしいが、この女房の如きは、自分の持ち者ほど世に偉い人はないと極めているらしいから怖い。

喧嘩もできず、武蔵は、

「お留守か、それは残念な。旅へと仰っしゃったが、旅はどこまで？」

「荒木田様へ」

「荒木田様とは」

「伊勢へ来て荒木田様を知らねえでか。ホ、ホ、ホ、ホ」

とまた笑う。
乳ぶさを頬ばっていた嬰児がむずかると、女房は、土間の客などは打ち忘れたさまで、
　ねんねしょうとて
　ねる子はかわい
　起きてなく子は
　つらやな
　つらやな、母なかせ
訛りのある子守歌を節さえつけて謡っている。
ふいご場に火のあるのがせめて見つけものである。誰に頼まれて来たわけでもなし、諦めるほかはないのだが、
「御内儀、そこの壁にかけてあるのが、御使用の鎖鎌ですか」
それを一見しておくのも後学のためであると考えて、手に取って見てもさしつかえないかといいうと、女房はうつらうつら手枕の居眠りと子守歌のあいだに、ふム……といってあいまいに頷く。
「よろしいか」
武蔵は手をのばして、その一挺を壁の角掛から外し、手に取って仔細に見た。
「――成程、これが近頃だいぶ用いられている鎖鎌か」
ただ握ってみれば、腰にも差せる一尺四寸ほどの棒に過ぎない。棒の先の環から長い鎖が垂れていて、その鎖の端には、ぶんと振れば、人間の頭蓋骨を砕くに足る鉄の球がついている。

「ははあ、ここから鎌が出るのか」

棒の横にミゾが彫ってあって、中に潜んでいる鎌の背が光っている。爪をかけて引き出すと、鎌の刃は横に身を起して、これは優に人間の首を掻くことのできる刃渡りを備えているのだった。

「ム……こう使うのだな」

左に鎌を持ち、右の手にくさりのついた鉄球をつかんで、武蔵は仮の敵をそこに想像しながら、構えを作って、独り考えていた。

するとふと、手枕を外してこっちへ眼をくれた女房が、

「なんじゃあ、まあ、そのかたちは」

と、乳ぶさをしまいながら土間へ下りて来て、

「そんな形していたら、すぐ太刀を持った相手に斬られてしまう。鎖鎌というのはこう構えるのじゃ」

武蔵の手から引っ奪くると、そのつまらない百姓鍛冶屋の女房がひたと鎖鎌を持って、体の仕型を見せた。

「あっ……」

武蔵は思わず眼をみはった。

乳ぶさを出して寝そべっているところを見たのでは、牝牛のような女にしか見えなかったが、鎖鎌を持って構えると、立派で、端厳で、その姿は美でさえあった。

また、鯖の背のように青ぐろい鎌の刃渡りには、宍戸八重垣流と彫ってある文字もあざやかに

読まれるのだった。

六

あっ見事なと、武蔵が眼を吸いよせられた途端に、鍛冶の女房はもうすぐ仕型の構えを、体から消して、
「ま、こんなものじゃ」
鎖鎌をがらがらと一本の棒にまとめて、元の壁へかけてしまった。
武蔵は彼女のした型を、記憶する間がなかったのを、ひそかに遺憾にして、
(もういちど見たいが)
と思ったが、女房はさしたる顔もなく、砧を片づけたり、朝の炊ぎの仕掛をしたり、台所のほうでガチャガチャ水仕事に忙しない。
(あの女房ですら、あれほどな心得があるとすれば、亭主の宍戸梅軒という男の腕はどれほどか？)
武蔵は病気のように、急にその梅軒という男にあいたくなって来た。――だがあの女房のいうには、良人の梅軒は、伊勢の荒木田とかいう人の家へ行っていて留守だという。
伊勢へ来て、荒木田様を知らないのか、とさっきも笑われたことだが、恥をしのんで、馬子にそっと聞いてみると、
「大神宮さまのお守人じゃ」
と、馬子は、鞴のそばの壁へ倚りかかって、いいあんばいに温もりながら、もう半分眠ってい

ながらいう。
（伊勢神宮の神官か、そこへ行ったのならすぐ分る、よし……）
勿論その夜は、筵のうえにごろ寝である。それも、鍛冶の小僧が起きて、土間の戸をあけると
もう寝ていられない。
「馬子、ことのついでに、山田までのせてゆくか」
「山田へ」
馬子は眼をみはる。
だが、きのうの分の駄賃は無事にもらったので、その方の不安はない、行こうということにな
って今日もまた、武蔵を馬の背にのせて、松坂へ出、やがて伊勢大神宮への何里とつづく参道並
木を暮れ方に見た。
冬であるにしても、街道の茶屋はひどくさびれていた。並木の大木が、風雨に仆れたまま、幾
つも横たわっていた。旅客の影も馬の鈴も稀れである。
禰宜の荒木田家へ、武蔵は山田の旅籠から問いあわせてみた。——宍戸梅軒という者が逗留し
ているか否かを。
すると、荒木田家の執事からの返辞には、そういう者は泊っていない、何かの間ちがいであろ
う——とある。
武蔵は、失望と同時に、足の傷の痛みを思い出した。釘を踏んだ傷口はおとといころよりひど
く腫れている。
豆腐粕を搾った温湯で洗うとよいと教えられて、武蔵は翌る日、旅籠で一日それを繰り返して

いた。

（もう今年も師走の中旬）

そう考えると、武蔵は、豆腐くさい湯に焦々してきた。すでに吉岡家へ宛てての決戦状は、名古屋から飛脚に託して出してあるのだ。まさか、その期になって、足を傷めているからなどとは意地でもいえない。

その期日も、敵の都合まかせといってやってある。なお他の約束もあるし、正月の一日までには、どうでも五条の橋だもとまで行っていなければならない。

「伊勢路へまわらず一すじに行けばよかった」

軽い悔いを抱きながら、湯だらいに浸している足の甲を見ていると、足は豆腐のように膨れて来る気持がする。

七

こういう家伝の薬がありますとか、この油薬をつけて御ろうじませとか、旅籠の者はいろいろ療法を講じてくれるが、武蔵の足は、日の経つほど腫を増して、片足はまるで材木のような重さを感じ、夜具の下に入れると熱と激痛に耐えなくなる。

つくづく考えてみると――

彼はまだ物心ついてから、病気というもので三日と寝たことの覚えがない。幼少の時、頭の脳天に――ちょうど月代の辺に疔という腫物を患って、今でも痣のような黒い痕を残しているので、彼は常に月代を剃らないことにきめているが――そのほかに病気らしい病気はしたことがな

かった。
（病もまた人間にとっては強敵だ。こいつを調伏する剣は何か？）
彼の敵は、常に、彼の外にばかりはいなかった。四日ばかり仰向けに寝たままでいる瞑想の課題に、そんなことを考えたりしたが、
（あと幾日）
と、年暮に迫る暦を見、吉岡道場との約束に思い及ぼすと、
（こんなことはしていられない）
肋骨は、旺んな心臓を抑えるため、鎧のように張って来て、思わず、材木のように腫れている足で、がばと蒲団を刎ね退けてしまう。
（この敵にすら克てないで、吉岡一門に勝てるか）
病魔を組み敷くつもりで、無理に畏って坐ってみる。――痛い。気が絶え入るほど痛いのだ。
窓へ向って、武蔵は眼をつぶっている。かっかと赤くなった顔がやがて醒めてくる。彼の頑固な信念に、病魔も負けて、幾分か頭がすずやかになったらしい。
眼をひらくと、窓から真っ直に、外宮内宮の神林が展けている。その上に前山、すこし東に方って朝熊山が見え、それを繋ぐ山と山との肩の間から、群山を睥睨するように、突兀として、剣のような一峰が望まれた。
「鷲嶺だな」
武蔵は、その山と睨みあった。仰向けに寝ながら毎日見ていた鷲ケ岳である。彼は何となくこ

の山を見ると闘志を感じるのだった。征服慾を駆り立てられるのであった。四斗樽のように腫れた脚をかかえて寝ていると、なんとなく気に喰わない気がしてならない山の傲岸さである。

衆山を抜いて、白雲のうえに、超然としている鷲嶺の頭の尖を見ていると、武蔵は、柳生石舟斎のすがたが思い出されてならない。石舟斎という人物は、おそらくあんな感じの老人ではないかと思う。――いやいつのまにか彼は、鷲ケ岳という山が石舟斎そのもののような気がして来て、遙か雲表から、自分の意気地なさを、嘲り笑われているかのような気がするのだった。

「…………」

山と睨めッこしている間は忘れていたが、ふとわれに返ると、彼はまた鍛冶の鞴の中に突ッこんでいるような足を持てあまし、

「ウウム、痛い」

思わず膝の下から横へ投げ出して、自分の物でないような太くて丸い足くびに眉をしかめた。

「――おいっ、おいっ」

武蔵はその激痛を吐くような語勢で、旅籠の女中を、不意に呼び立てた。

なかなか来ないので、彼はまた拳固で二つ三つ畳をたたいた。

「おいっ、誰かいないか。……すぐ出立するから、勘定をして来てくれい。それと弁当、焼米、丈夫な草鞋三ぞくほど、支度をたのむぞ」